五錢斷髮代、三錢齒磨、三錢上草履、六錢筆二本、十錢日本紙、十五錢西洋紙、十錢インキ、ペン、鉛筆、十五錢沓直一度分、九錢沓下二枚、十錢郵便代、四錢畫用紙、十錢洗濯賃、五錢牛乳代、五錢新聞見料

博士より母堂へ（明治二十一年三月四日）

（前略）

當地の豪商大倉喜八郎氏の甥なる喜三郎氏とは無二の友達にて同氏の宅は勿論喜八郎氏の本宅各別莊等へも時々伴れ度々饗應に相成候喜三郎氏樣中々の耶蘇教信者にて道德堅固なる好壯士に御座候昨日は土曜にて駿河臺の市中へ同級諸氏と器械を擔ひ行き實測の研究を成し夫より大倉氏の宅に行き同氏新製の端舟を隅田川へ下し（喜三郎氏の父は歌の名人にして居を淺草駒形町卽隅田川邊に定め居候）大倉組の番頭なる由申候）同氏の父を初め家族を載せ私と喜三郎氏と交る檜を取り兩國橋を下り小溝より龜井戸に梅遊に出掛け船は天神橋の船宿へ置去り梅遊を終ひ人力車にて東京に歸り一同淺草觀音堂前牛店にて夜食し又同氏の宅へ歸り再び白酒の饗應を更申候本日愉快なりしは同氏宅にて數年振りにて節句（三月三日なり）の雛樣を見候事に御座候序に申候同氏は寄宿舍も同室にて常に世話に相成候昨夜同氏と歸校せしは十時過にて校門を開かしむる不能無據今川小路なる族人宿に宿泊致候入舍以來今に數年なれ共外泊は初めて致候關口氏は明日歸國の由申越被下候（下略）

三月四日

母上樣坐下

嘉一郎

博士より母堂へ（明治二十一年四月十五日）

前便を以て梅花の噂を申進め候處今は既に梅花滿開之御話を申上るの時節と相成（今日上野、明日は飛鳥の馬ぐるま花のたよりを載せぬ日もなし）と大倉氏の父大倉花守大人の吟の如く上野飛鳥山若くは向島の賑は格別の事に御座候其の格別な賑の眞最中弘々たる大流の墨田川をば我物の如く十數艘の洋艘を浮べ水上警察をして他の船舶の往來を禁ぜしめ意氣揚々として競漕の遊びをなし見物の目を驚かしたるは吾第一高等中學校生徒の競漕會にてありし、此の日天氣曇りしためあつからず寒からずして本會の招待に應じ見に來りたる朝野の貴紳貴女を墨田川岸に起てる會場の二階の上下に充滿し其の他の見物人は墨田の岸に沿ひて數十町の關黑雲の如く此

時本校より雇ひたる海軍の大尉三名少尉一名少佐一名は部下の水兵數十名を引率して小蒸氣一艘を引來り周旋をなし生徒の勝負の判定をなし水上警察署は小蒸氣一艘に十數名の巡査を引連れ小舟を下して始終水上を巡行し會場（見物の場所）の入口は二三名の巡査之を保護し猥に他人の入場を許さず樂隊も來りて奏樂をなし興を添へ風船を打上げ味を增し舟上には美麗なる旗を數多附たる舟を浮べ用意全く終りて舟三四艘（競漕船）を規則の場所に浮べ海軍士官の發砲する合圖に漕始め凡そ千メートル卽ち日本の九町餘の流を漕ぎ此處にて勝負を決する事なり本日は朝より始め十八度の勝負を終り午後五時過終會仕候生徒皆々讀書の餘暇體育に心掛け別して舟漕ぎの藝は尤も我々の遊びに適し且實際に於ても大に有益なる事なる故學校に於ても洋艘七八艘を雇ひ置き平生墨田川岸につなぎ置き番をつけ學校生徒の遊びに使ひたるなり左れば皆々平生の熟練も有之且別して此の競漕會の前などには勉强して稽古致し居候事故當日は中々目覺しき勝有之費用も中々筆紙に盡し難く候我々は只十五錢の入場料と養生の爲牛肉鷄卵の五十錢も飲食したる迄の費用に候へ共、教員諸君は百六十圓の寄附を致し且ビールなどを獻じたる事無く賞牌二箇を與へられ候凡そ二百人も勝負に出し內二ケの賞牌を得たるは實に稀の事に候先づは喜び被下度候當日は鈴木豐助君にも入場券を送りて私より招き候爲め同君も朝より見物に來り勝負の終迄遊び仕候同君は私も學業日進み身體日健康偏に御安慮被下度候御實體にも一日も早く健康の樂しみを得させ賜はん事祈願致し居候大倉氏の父は歌仲間に共に一ケ月間も滯留の見込にて十日頃前より遠く吉野山の櫻花見物に參り候隨分氣樂なる人に御座候かね、も日中少々暇には文章又は習字の業を勉强致され候樣願候猶珍聞れば後便を以て縷陳可仕候　不具

十五日午前

母上樣坐下

嘉一郎

博士より母堂へ（明治二十一年六月一日）

漸く單衣之好暑節と相成候處御送付の爲替は書狀と共に正に落手仕候愈々試驗も今月二十五日よりと相定まり昨今は繁忙最中に御座候歸省は多分今月末と存候

御患處は三四十日前より再發之由誠に心痛の至りに御座候又坐骨部は定めて床づれの爲め御なやみ被成候はんと千萬推察奉り候私迚も獨立渡世の者に候得ば如何なる手段を盡し一刻も早く賢體の苦痛を除去致す事を勉むべきに候得共何を申すも當今は只御手許の御送費に由り勉學致居候書生の身分に御座候得者夫も相成らず殘念の至りに御座候西洋の人は八十年なり九十年なり死す迄は其の職務を取り行ひ渡世致す事に候得共我が國に於ては少壯の頃より既に隱居とか何とか引込思案を構ふるを常とするにも拘らず賢體の如は既に六旬の上にも越され候に尙日々今日の御職を取り不肖ながら私如きものにも日本國第一の高等教育を與へられんと思召され數年來の病痾もある事なるに御自身を忘れて御養育被下候段思ひ出し感涙の外無之候只何事も國家の爲と御思考被遊度候私も卒業せば一身奮發柔弱ながら、國家の爲に功を立てん事は勿論身を盡して御恩の萬一に報酬せんと其の考は一刻も愚心を去らず及ぶ限り日夜刻苦勉學罷在候間乍憚御放念被下度候。

本校卒業の期は愈々本年の今月と相成候空氣枕一箇（四角蒲團形）早速相求め御送り申候間（五月三十一日）多分本月十日頃迄には無相違御請取の事と存候何卒御試被下度候

高橋林二郎氏は病氣全快の由先日報じ呉候先は後便の節に讓り申候　不節

嘉一郎

明治二十一年六月一日

母上樣　坐側

（註―封筒に東京一ツ橋第一高等中學校舍とあり）

博士より母堂へ（明治二十一年十月十三日）

初丈はかねにも御讀聞かせ被下度候

拜呈陳者今朝御出發の書狀只今拜見致し候處秋冷身に適し候此好時節にも不拘御手首並に肩の痛も差加はる關節の痙痛甚敷候上坐骨の痛は鎗先に坐する如く候よし委細承り私も一々自分の病氣の如く相覺え御苦痛の段は察するに餘りあり嗚呼天帝若し惻隱の心有らば願はくば其苦痛の半分なり共我が身に分ち取らしめよと獨り愚痴申居り候若し是病が人間ならば此身に取りては不俱戴天の親の讎何の猶豫用捨のあるべき事ならんや病理學も今日は大に開けたれどば亘萬の人々の難澁する痛風症の如きも施療手術又は藥品等千種

萬樣行れ居候當今の時世に生活致し居りながら多年の間親の苦痛を傍觀するも一般の藥をだに買來つて御進め申事も出來ず一人の醫者を迎來つて診察を乞ふ力もなく却て其親の身を割て他國に遊學する私の心の切なさをも御推察被下度候私も決していつまでも書生では居り不申一日暮せば一日暮しの丈の實は心の庫に貯蓄致行き候へばふつつかながら社會に尊敬せられる身分と相成立身出世の基も出來候得ば家邸を構ひ妻を娶る等を差置き先づ第一に母上の身體の看護保養手の屆く丈、力の及ぶ丈精神を込めて御手當をなし彼の憤怨胆に銘じて一刻も忘れざりし惡むべき病魔は勿論々々母上の百年の壽を保たん爲には微力を餘さず御看護申上げ譬ふべからざる御親愛を受けし御恩の萬分の一に報い多年積み來りし不孝の罪の億一を償ひ申さん事私の一日も忘れざる心願に御座候彼の人の爲にし國の爲にすると申す如きは大切の事なれども孝行が第一にて親に事ふる事等さへも出來ざる人が何迚國の爲人の爲に出來べき事やある不孝者のなれの果は亂臣賊子のみと私は存居候（中略）

羽は明後日買求め早速御送申候當時賣口大によろしく先注文致候とも容易に手に入不申候由、且只一軒しか存し不申候由今夕早速伯母方に參り相談仕候、私の友人なる醫師大學生某氏の申さるるは痛風は出來るだけ關節を動かさずにおく事よろしく候由元是は餘り用ひ過ぎたるにより起りたる者なりと申せり依而考ふるに御足首の痛も御肩の痛等皆是母上が四十五六年間御職務御勉勵の結果ぞと相悟申候孰れ名藥名手術等閒次第申上ぐべく候母上よ痛の大小は必ずしも病の重輕を表する者にあらざれば去迚御心痛なく今迚の如く勇ましき丈夫も及ばざる大膽を以て御暮し被遊食事も勉て御召上り被下度奉懇請候（下略）

二十一年十月十三日

嘉一郎

母上樣　坐右

（註―封筒に東京神田錦町一丁目十九番地增田方とあり）

（因に此の書簡と同封にてかね子さん宛書簡あり左に掲ぐ）

一筆申上候日に增し秋冷相催候處御前には御替りなく御壯健に御生長の由御目出度存じ候かねて夏中歸京の節は御使立而申候間ここに御禮申上候伯母樣と一所に御出者被成候事とぞんじ御待申上り候處御見合せに相成候よし御孝心の段難有感心仕候私も今少々にて一人前の人げんとも相成候間さすれば御前の親ともなり兄ともなりて力の限りは世話申候て今迄苦勞致させ申候御恩返しともいたし

又御前の御兩親即ち私の兄姉へ御恩返しにもと朝夕忘れ不申候私も今に家宅を東京にも一つ構へ申す積りに御座候間其の節は御前
東京見物などは心の儘にて何も今に急に致さずともよろしかるべし來年の四月には是非とも一寸御つれ申すべく尚御樂しみ被成べ
く候お前を東京へ出すも祖母樣の御心は實にお前の心の開けるやうおとならしくなるやうそのためにいだすつもりに候ゆゑ其心にて
常々もおめずおくせず他人とつきあひも致しをとならしくなられべく願候他人とつきあひ又は話しいたし候もはじめはぢかくやう
なこともぜん〳〵うまくなりてついには上手に話も出來るやうになれることゆゑ御心がけ專一に候御前もこの頃は二三年前と打て替
りだいぶ御となしくもなり孝心もいで人々のひやうばんもことのほかよろしく候ゆゑ私もうれしく存候なほおこたりなくよるひる祖
母樣のみとりのこといくへにもたのみ入り申候山崎一同も御前の孝行には感心いたしをり候先は要用のみ餘は後便にゆづるとせん

草々不一

嘉一郎

十月十三日夜

御かね殿

博士より母堂へ（明治二十二年三月二日）

先日御送被下候御書狀金叅共慥ニ拜掌仕候日々春光ニ相薦ヒ候得共御尊體ハ如何ノ御樣樣ニ御座候哉書窓之曉梅花之香ヘルヲ見ルモ
燈前之夕目ヲ萬卷ノ書ニ晒スノ時モ忘ルル暇ナク忘ルル能ハザル事ハ唯我天地萬物ニ替難キ尊體ノ安否如何ト將來如何ニシテ尊體ヲ
休養センカノ兩件ニ御座候兒不肖ナリト雖モ豪偉ナル御父上御母上之子ナルコトヲ存申候間ハ神ニ盟テ正々堂々ノ道ヲ踐ミ肉骨ヲ摧
折シテ他日ノ功業ヲ期シ御兩親ノ意ヲ滿足セシメン事ヲ思フ者ニ御座候間々々無禮ノ擧動ニ相及候事モ有之候得共是ハ物ニ頓著セメ青
年書生ノ一般ノ過失ト御容恕被下度赤キ眞心ハ一寸ノ蟲ニモ五分ノ地ヲ與ヘ申候況ンヤ高等ノ教育ヲ受ケタル五尺ノ男子ニ於テヲヤ
天落チ地碎ルモ君ヲ思ヒ親ヲ思フノ情ハ之ヲ忘レサル覺悟ニ御座候（中略）
今月末ハ試驗濟ニ候間歸省仕度母樣出京之如何ハ後便ニテ御申越被下度倉氏トハ益親密ノ交ヲ成シ往來致居先日憲法祭ノ夜ハ喜八郎氏本宅ニテ相幕申候常ニ母上ニモ宜敷申傳候母上ノ御風采ヲ慕ヒ是非拜
顏致度申居候

其他學藝日ニ深ク蘊奧ニ入リ親友ノ交日ヲ過テ相增候事小生等ニ取テ今日無上ノ愉快ニテ何人モ推測致難キ計リ是又尊體ノ賜ト感謝
仕候又一時有名ノ學士ニモ漸々御近キ申候實ニ今十數年ノ後ハ日本ノ天下ハ我同窓ノ諸友ト共ニ我等ノ左右スルコトニテ我輩ハ實ニ
責任ノ重キ貴重ナル身ト他日ノ空想ヲ禁スル能ハズ候
當下宿ハ僅月々三圓六十錢ヲ報酬トシテ出スノミニテ炭油ハ凡テ米田氏ノ自辨ニ御座候間小生ニハ甚都合ヨク且米田氏父子ハ才學ア
ル人々ニテ頗ル便益ヲ得候今夕ハ土曜日故一寸暇ヲ得早々筆ヲ運ビ候ヘバ字句ノ混雜中々他人ノ見物ニハ御座ナク候　恐惶愼言

嘉一郎

三月二日

御母上樣　御下

別ニ神山氏へハ一封差上申候也

（註―封筒に神田三崎町二丁目五番地米田喜十郎方とあり）

博士より母堂へ（明治二十二年四月十九日）

拜啓爲替金叅書狀等慥に落手致候今日又かね宛御書面も拜讀致仰の旨に就き本人等と熟談致候元來かね此度の出京は廣き處を見せ人
情を察知せしむる爲に御座候故山崎宅にのみ居りては田舍に居ると同樣故是非良家族の許に暫時同居を托し度候伯母も申し呉候處幸
に毛絲編物の事當時女子第一の手藝と相成猫も杓子も一生懸命稽古致し三ケ月卒業とか一ケ年卒業とか教授の看板市街に多く大概每
月五十錢とか一圓とか　月謝にて教授致す事に御座候然るに日本橋區カキガラ町二町目八番地絲屋中島彥二氏は山崎と親類の如く懇
意致し且同氏宅一同感心なる資體人の揃にて娘等は盛に毛絲編物をなし店に於て之を賣捌き中々繁昌致候是の如き處こそ手藝を覺え
ながら同居して東京家族の味をも知らしむるは實に嘉すべきのみならず山崎は昨日愈々猿樂町二十二番地新築の大家屋に引移るの大
取込にて朝夕之と同居するも何事も出來ず唯身が引けるのみにて面白かる間敷とて御廣が態々當人を連れ絲屋（日本橋）に至り事情
を話せしに元より親子如き間柄（神保町の絲屋とも大懇意なれども其とはことなり）なる故早速承引して何故出京早々御出になりて
六ケ敷物迄も多く覺えなさゝぬ樣申さるる位早速一昨日より日本橋の同絲屋へ同居致し小生よりも書狀を以て相願置候然る處かねも
今日小生宅へ尋ね來り當人より樣子を聞くに案の通り至極良き處にて編物も家族の者が一生懸命に仕込呉れ其の他眠食の世話等私慈

を離れて家族同様可愛がり呉候趣にて毛絲編物の自作に係るエリマキ、帽子、ヨダレカケ、キンチヤク等シツカリ出來て持來り候間家にても是非十日も居て色々覺え込み田舍土産には自作物こそ尤も宜しからんと申候成程是は女子供等には第一の土産と小生も存候昨日は同家族一同に伴はれ上野より向島と花見に行き歸路淺草の松田と云ふ料理屋にて晩食せし由かねも其是他人の有樣も見又廣き東京の人情をも多少解せし事故中々驚くばかり打開け入付もなか〳〵よろしく相成候是ばかりにても實に此の度出京の目的を達せし事に御座候折角よき口御座候間尙十日間も御猶豫被下候はば如何其內二三日ゟ同行せば東京中の名所博覽會、美術會、遊就館、動物園、植物園、王子飛鳥山、泉岳寺、大師河原等は充分小生引受け引連れ案內致し遺憾無之樣可申中澤音君も神山サワ君も其時々同行を相約し申候今十日間も居候共入費の點小生經濟をととのひ決して無駄費なきを期するは勿論此の度の六圓にて充分歸國差支無之樣可致候少女一人相侍し候耳にては不都合の儀は嘸々と推察罷在候得共一日たりとも無益の滯留は小生致させ不申候に就き今後十日程は猶豫被下候ては如何今日の御書面を見て本人も早速心配仕出し猶少し諸々を見物して早速歸らん樣申し候へ共何とも一應母上に御伺の上と存じ同人を勸し置申候中島氏よりも小生の願書狀に對し懇々の返書有之候同人家には食料日々十錢宛に差出のみ別に入費は無之山崎に居るも同樣に御座候又原料に用ゆる毛絲は少々價の高きものなれども是迚土產物を買ふ用意中よりと小遣中より支拂ふ時は左迄困難も無之又五十錢位は謝禮も出來申候前申す通り同人も中々打開け來候故小生時々の異見をたず長遊ひせし故歸國後は一生懸命御看護致し可申と申居候同人稽古中は近傍良家の娘と共々敎授せらるる事とて友達への愛想取成し等色々有益なる事覺え可申候に付毛絲編物は無用なり等一概には申されず候同人も出費を患ひ最早路にも熟せし故山崎より通はんか等相談致し候得共小生は前記の理由にて山崎に居るも出費等に變り無之故緩々中島方に同居致候樣御勸申候最早芝愛宕山招魂社、皇城外廓、上野淺草向島等は二度三度知り候唯是よりは智識を開くべき高尙なる場處へボツ〳〵と引伴しありく積に御座候同人も最早初めの如くはがみもせずずんずん一人にても他人の家等訪問する樣に相成候には感心仕候

山崎此度の新築は十七間もある大家屋にて當時未檢査中故多分來月一日頃より開業可致候神山女史は不相變勉强御安心被下度候新井圭作君は田舍に被居候由故下田澤村同人宛懇情を盡して詳細なる一書拜呈致置候間多分最早御一讀相成たるべく候山崎よりも懇々と宣敷の傳言有之候猶此書狀着次第御猶豫否やの御書狀奉願候

先は用事のみ

四月十九日

恐惶謹言

母上樣　玉褥下

嘉一郎

追付　絲毛編覺込など喋々申上候得共小生の趣意は只是非手藝を覺えさせんとのみの事には無之是非他人の中へ入り交り友人に對しての交り又は東京家族團欒の味又は言語等を改良せしめん處存に有之候間吳々も愚意を誤り賜はさらんことを希ふ

（註—封筒に東京神田三崎町二丁目五番地米田方とあり）

博士より母堂へ（明治二十二年六月一日）

兩度迄學費催促申上候段定て御うるさき御事と存候三十日御出發の金參並に御書狀慥に拜領仕候今度も矢張何かと御世話の上の御仕送りと存じ血涙を以て拜戴仕候然る處幸なる哉昨日警視廳より三圓五十錢講話三回分の報酬として使を以て送り來り候に付萬事好都合に有之候御書面の趣にて御尊體至極御衰弱の御事乘て御推察致居候得共今夏の如く思はれ心痛の至に御座候此の頃は御尊體の事共種々夢見など致し御尊體の不肖の幼少より不肖に與へ賜ひし海大無量の恩愛の御語、恩愛の御行等目前に夢見致す事などあり感涙にかき吳居申候不肖事も母上の無上の御恩愛を以て充分なる家庭敎育は勿論全國に於て最上等の敎育迄受るを得たれば不肖ながら國家に盡す道も知得致候以來不肖が國家の爲に如何なる功業を爲すも一も二も皆母上の功業同然母上御事は實に病床に苦痛を叫ぶ不幸なる有樣に御わし候得共一日一刻怠りなく國家の爲めに盡さるる同樣、實に母上の功績は我今泉家の系圖に載せて子孫代々修身の龜鑑として恥づる事なく直接其の子たる不肖の身に取て面目餘りあることに御座候（下略）

六月一日

嘉一郎

母上樣

（註—當時博士は本鄕區眞砂町二十五番地山崎武三氏方に在り）

博士より母堂へ（明治二十二年十月六日）

久々御音信不申候處如何御暮し被遊候哉御痛處多少御快方に相成候哉都合出來候得ば來十二日頃歸省仕度尤も一兩夜宿まる耳に候得

ば左して歸省と申程の事には無之候得共尊顔を拜し奉りて田澤邊の栗柿の御馳走にも預度存候御誂物等御座候得ば其前に御報知被下度候

小生學費は愈々古河市兵衛奬學貸費と決定致し申請候處去月中に大學より認可被相成契約證迄差出申候但九月分學費は今月の二十五日に渡り今月分は來月の五日に渡る都合に御座候右に就き少々歸省費に差支候間一圓乃至二圓も小爲替にて至急御送被下度是は後日卽來月には早く償却可申見込に御座候中澤君出京ならば御依頼に相成りても宜しく小爲替振出しは面倒故間違はぬ樣依頼人に御申付被下度候

町田氏は芝公園内に女學校設立の計畫中に御座候山崎貫作宅は頓と不交通猶兩三年は未通の積りに御座候警視廳へは不相變出席致候

先は大要耳不乙

十月六日

慈大人坐下

嘉一郎

（註―封筒に東京小石川區指ヶ谷八番地豊田方とあり）

博士より母堂へ（明治二十三年二月二十一日）

（前略）

町田先生は芝山内にて既に開校いたしあり生徒も四十名程有之猶益田孝氏の夫人其の他の贊助を得て大資本を投じ大なる女學校を計畫中

かねの依頼一件は先生も悦で承引何時成共差支なき樣申居候又同人の行狀其他の事に至りても注意を致して監督致呉候樣申居り候先日は出掛け一泊の上一夜話し暮し申候何時も乍ら同氏の正直の精神はたのもしく存候、私事今般の警視廳改革後一回も出席不致候爲や夜着總表替等にて當時財政困難に付二圓丈御送り被下間敷候哉證人なる岩谷工學博士地方巡回中に候得共今月末には歸京の筈故歸京次第古河資金增額を申込積に御座候今日より入舍差許され候得共下宿拂致兼候間來月五日學資金受取次第入舍仕候近日は學業多忙にて毫も他事を顧みるのいとま無之候

乍去身體すこぶる壯健御安神被下度猶末筆ながら時節柄御保養專一と奉祈候猶後便春陽を期し申候

嘉一郎

第二月二十一日

母上様

（註―封筒に東京小石川指ヶ谷町八番地若林方とあり尙これと同封にてかね子さん宛に左の手紙あり）

相變らず御孝心を以て御看病に御盡力被遊候事と奉恐察候先以て御壯康何寄と存候近來母上にも氣分殊之外相勝不申候由何卒平常に倍して御看病被成下度毎日毎夜其事のみ氣に掛り御前樣に御願申入候町田家一同へも御前樣より宣敷と申置候間御安心被下度候

先は用事のみ餘讓後便

嘉一郎

高草木かね樣

博士より母堂へ（明治二十二年十一月十日）

先日以來の御無音何共恐縮の外無之候時下寒暖非常にして風邪流行之際に有之候處御賢體日に增し御力强く爲罷成候由嬉敷相賀申上候小生事不相異就學罷在候學業は總而高尙なる專門の科のみにして面白き事此上なく只繁忙の爲困難致候勉强して警視廳へも出席致居候

九月十一日より以來は凡而奬學金を得て食料や月謝等には無差支毎月七圓五十錢宛受取居候間御安神被下度奉願上候九月分の資金も學校之都合に由り大延引となりて漸く十一月五日に相渡り候次第御附藥之儀至急を要する事とは十分存知致居候得共手本手薄なる爲に先月末に僅一箱御送り申上候儘今月迄遲延致居候段御海容被下度二三日前より色々買求め藥も三箱迄かねの依頼物も其他高草木重紋君への日本新聞等相纏め今日發送仕候多分來十五日頃には御落手可相成候昨夜少々進物を以て山崎伯母宅を訪ひ又神山孃をも訪へ申候處何れも壯健出精致居候

先は御伺迄早々不乙

明治二十二年十一月十日

母　上　様　玉手裡へ

（註―東京小石川區指ケ谷八番地豊田せい方とあり）

博士より母堂へ（明治二十三年五月二十二日）

寒暖度ヲ得體ヲ處スルニ輕快ノ候ト存候先以テ御機嫌能御消光被遊候段欣喜候如件無事安閲日月ヲ南窓一夢ノ間ニ笑過スルコト精神身體ノ樂ハ卽樂ニ可有之候得共水流レズシテ蟲之ニ出ヅルノ喩ヒ安閑トシテ日月ヲ逸ル如キ境遇トナレバ一方ニハ又隨分不愉快ヲモ生ズベク天帝ガ人間ヲ此世ニ降シタルハ汝ノ額ニ汗シテ汝ノ食ヲ作レトノ旨ナリトカ實ニ人間ハ一生懸命ニ其業ヲ勵ミ成ル可ク日月ヲ有益ノ事業ニ消費スルコソ望ムベケレ古昔ノ儒者又ハ風流人ノ如ク優悠怠樂ニ生涯ヲ塵埃同然ニ消費シ去ルコト恐クハ筋骨百官ヲ以テ吾人ノ身體ヲ裝ヒタル天帝其人ノ意旨ニアラザルベクト存候去レドモ苦アレバ樂アリ勞働ノ後ノ茶漬ハ格外ノ味アリト申セバ方正ノ道ヲ行キ勤精止マザル時ハ安樂愉快ノ時節招カズシテ至ルハ天運順環ノ原則ニ因リテ止ムベカラザルコトト存候閑話ヲ止メ今泉彦一氏ノ宿泊料及かね四日分宿料多過ギタレドモ一圓山崎ニ渡シ申候かねノ許ヘ四日目毎位ニ遊ヒニ行キ大勢ニテトランプナドノ遊ヲナシ歸リ候かねノ病原ハ先日帝國大學第一醫院ニテ醫學博士佐々木政吉氏ノ診察ヲ受サセ候處全ク尋常ノ胃患ニ御座候精々手當等勘メ居候爲替金ハ正ニ落手早速町田氏ヘモ無理ニ三圓丈食料一ケ月分ヲ渡シ申候歸省ハ來月二十四五日頃ニテ可成ハかね及町田細君同伴致スコトニ可相成候先ハ當方御心配無ク御病床ノ中ニ在ルモラク〳〵御安臥被下度候先ハ一報如此御座候

五月二十一日

母　上　様　下

嘉一郎

（註―封筒に帝國大學寄宿舍とあり）

博士より母堂へ（明治二十三年九月二十三日）

去る十九日一書差上候積に御座候處今日高草木君の書面拜見仕無音に付御立腹との御事に付不取敢一封郵呈仕候重々不孝の段肝に銘し慚悔仕候高草木君の御報知に依れば近來御勝れ不被遊候由誠に心痛此の事に御座候私儀去十七日無差着京直に寄宿に立歸り申候翌日は町田要快氏を相尋候處先生は又々都合により紅葉館前の女子手藝學校内に御移轉被成候に付麻布より同處に廻り佐渡の談話や先生の學校の未來に就て色々の相談など有之遂に一泊仕候大學校の儀は既に三日許り前より相（一字不明）あり候へ共今日に至りては最早取返申候日々の稽古一段面白く且は工科大學に於ての勉强も最早來年の六月頃迄の事にて其後は只自身の實驗や工事計畫等に意を傾け候はねばならぬ事なれば特更勉强も身に入り近頃は餘り外出も致さず唯机に向つて居るのみ多く有之申候其内にも母上の御病氣特に氣に掛り散歩等は少しも面白味無之候併し鬱散の爲めには時々洋酒店や門前の牛肉店等にて一杯を傾け候間身體は精神の心配あるにも不拘日々壯健に罷在候間乍恐御安慮之程奉祈候友人の内には今年九州にやられたるものと北海道に行きたるもの其他東海道山陽道五畿内又は奥羽地方等日本全國夫々の方角へ赴きたる事とて談柄殊の外多く面白き事に候今日美味なる滋養品澤山差立申候間遲くも來る二十八九日頃には御落掌の御事と存候かねへの水藥も充分御送申候又附藥も其内に有之申候（中略）

時節は漸々秋冷に相向ひ候得ば病床にても特に身をおくに都合よかるべく何卒萬事の御心配を打すてて御滋養專一に奉願上候然し御氣分等殊の外相勝れ不申候はば何時成共御一報次第卽刻馳向ひ申べく候旅費等も常々心掛居申候先は當座一報申上置候也　不備

二十三年九月二十三日

母　上　様　膝下

嘉一郎

（註―東京本郷區帝國工業寄宿舍とあり）

博士より母堂へ（明治二十四年二月十一日）

昨今は沍寒の風漸く荒々敷相成東京市民は尙三十日許りの間は枕を高くして眠ること成り難かるべく實に氣の毒の至りに御座候御地にても風の强き時はすわ分東京位の風も吹く事も有之候得ば夜分の御心痛もさこそと存候今日は石原氏及神山氏に向つて音信申上火の元の注意の事柄申上候神山氏は再び生家の御不幸御氣の毒の事と存候先日の御話にては私の指の疵に付殊の外御心痛の段承知仕候元々些々たる事にて尊き御心を惱すに足らざる事には候へ共差當り其の御心配も御尤千萬に御座候是疵の出來しは一は小生の大失策に有之畢竟私が私の身の廻りを愛撫せざるに基ける事にて此仕合と相成

候は平日大に悟り居申候唯以來は大に方略を改め今より愛情を盡して之を慰撫し遖く共小生卒業の曉迄は此班を全治致し申べく候間何卒差迄御心痛なく小生の方略を御覽被下度候

課業繁長文に暇なく候儘尙後便を期申候

明治二十四年二月十一日

母　上　様

嘉　一　郎

乍末御病氣の容子如何に御座候哉次回の御音信には御報知相願候

（註―封筒に東京本郷帝國大學寄宿舍とあり）

博士よりかね子さんへ（明治二十四年二月十一日）

いそがしく候儘一寸簡略に一筆進呈仕候久々御樣子も相伺不申候得共御母上並に其許の身體樣子如何と心痛罷在候間御暇の時に細々と御認御報知被下度又母上の召上り度と仰せらるる物など折々御知らせ下され候得ば充分とは及兼候得共心掛買求め御送申度存候此の書物は文部省出版の名高き好書に而華族女學校は更なり全國高等小學校にて皆用ひ居候者故買求候間寒中の御見舞として差上候また御承取被下度何とぞ其日より間がなすきがな御熱讀被下是非今月中には御讀了り候樣相願候若し御讀切候得ば御申越しだい早速第貳卷を送り可申又其次には第三卷第四卷第五卷と漸々に六ケ敷讀本に差掛り候樣御贈可申來年東京へ出る迄には好き令孃達の中へ交り候ても恥かしからぬ樣手前よりも御注意申べく候間御自身も其心掛にて一生懸命暇を見て母上にも敎へられて御勉强被成度候其許の讀む書物の代位は極く些細の事に候得ば何程成とても苦しからず御贈可申候間讀切り次第至急御報知被下度讀聲の知れぬ字や意味の分らぬ處細々と御認め御申越被成候得者御敎可申候是から私も一生懸命其許の爲めになるやう其許が來年出京の頃迄喃れ讀書の力も付く樣心掛可申候間其方も是非其御心掛被成べく候其代り私より其許に願と申すは母上を大切に看護なされ私が來年卒業の頃迄は是非何程か快氣に赴き候樣御心掛被成下度唯其事が私への報酬に御座候右の條々御忘れなく其中にも讀本の儀は今月末か來月初めの迄には是非〳〵御讀切可相成候乍末筆寒中の御自愛專一と存候

二月十一日

嘉　一　郎

かね　様

再伸

御序の節其許と町田細君との寫眞一枚御贈被下度候

讀本の儀は決して他人に與へざる樣其許の名を書して差上申候

かね子さん（姪）より博士へ（明治二十四年四月十五日）

此の程は意外の御無沙汰申譯御座なく候兄上には彌御健康に御消光被遊奉賀候當地にも別狀無之候先は御安神被下度候

偖度々御書物御送り下され有難存上候兄上此の度競漕會にて殊の外之御勝利を得誠に目出度御嬉敷存上候　祖母も大に歡び居申候何れ御閑暇の節委敷認め御通知被下度願上候　頓首

第四月十五日認め

兄　上　様

兼　より

再伸　春季故か祖母手の痛み再發致夫故乍存御無音に打過候併し昨夏程には御座無候御序の節石原氏へ御報知被下度候

かね子さん（姪）より博士へ（明治二十四年五月二十九日）

（前略）

扨祖母事病氣重り殊に身體つかれ昨今熱發し食事進まず困入候何時御沙汰致乎も計難く候兄上にも御身を御大切に御試業被成候樣念じ上候先は取急ぎ候　不備

二十四年五月二十九日

兄　上　様

兼　より

博士より母堂へ（明治二十四年六月九日）

先日御尊顏を拜し奉りしより已に一週間に相成候處御容體如何に御座候や歸省中の模樣等相話し候處松岡も特に心配致し是非御熱氣の爲の絕食など致し候樣に有之候而は不相成候段何故服藥の儀御勸め不申哉と咎められ申候平常之病理に反して已に發熱すると申か

らは是異狀を生じたる事故是非共御服藥不成候ては叶間敷候且醫師と雖も自身病氣の際は他醫師の診斷を乞ふは萬國普通の事に候得者內海氏なり小川氏なりに診察を依賴致され下熱被成候樣奉願候又咳の儀は佛國の烟草狀に作りたる藥葉ありて非常の效力あるのみならず他に聊も害毒を生ずる事無之者にて（一字不明）者を今回松岡より發賜可申上候間御試被下度候又寫藥には候得共下熱新藥と申藥を一包相求め御送り申上候間方書に從ひ御試被下度候

右外醫に診察依賴之儀は是非〳〵〳〵相願申上候

當今の御容體熱の高低、咳の多少、食物の進み方、夜分の具合等善惡に不拘兼に認めさせ葉書也大至急御送り被下度奉願候試驗は二十日迄には相終申候試驗の了る迄表面の處に假下宿仕候（野田と一緒）先は用事のみ匆々　不一

明治二十四年六月九日

嘉一郎

母上樣　膝下

（註—封筒に東京小石川區上富坂町二十三矢島方とあり）

榎本武揚子爵より博士へ（明治二十六年四月四日）

拜啓過日は芽出度御婚禮相濟大賀此事に御座候陳者兼て和田鑛山局長より依賴の北海道古武井產砂鐵三噸此程郵船會社汽船山城丸に積載せ函館出帆いたし候趣只々彼地より通信有之將た荷物送狀壹葉別紙之通送越候に付併而差出候右荷物は多分橫濱郵船會社倉庫に恰も揚荷の際たるべく存候間送狀裏書之手續を以て農商務省より速に郵船會社荷捌所へ御懸合有之度此段至急申進候也

四月初四日

武揚

今泉嘉一郎殿

尙々三日差進候古武井產砂鐵並に下歌臼內石炭は（二字不明）の結果（粉炭と共に局燒（せしやき）せし結果）有之候哉御序の節一寸承候

（註—當時博士は駒込西片町十番地イノ二號にあり）

榎本子より博士へ（明治二十六年五月十八日）

拜啓陳者過般和田局長の御依賴に應じ北海道古武井產砂鐵八百五拾貫目取寄せ既に農商務省に相屆き居候右採取並に運搬諸費此程函

館東濱町（和田惟一取寄方依賴人）より別紙之通申越候間差進候間額面の金圓同人方へ御拂入有之度候將又前月弊宅より貴下宛差上候古武井並に山越內產砂鐵併せて九拾四貫目は固より請取證書類は無之候に付別紙之割合に準じ計算致候へば金三圓三拾錢と相成候是は拙者所有品に付貴省に無代價差上候而宜敷品に御座候又同時に差上候は下歌臼內產石炭拾五俵は計算之根據無之に付尙更之儀に御座候偖前文砂鐵は試驗之期は今より其時日の御通知を期待いたし居候事に候也

二十六年五月十八日

武揚

今泉嘉一郎殿

博士より野呂先生へ（明治二十六年七月二十九日）

謹啓別紙の通り砂鐵代價請求致來り候間兼て御指命の如く本省へ請求致させ候處是亦高橋より別紙の如く通信有之候間大臣に關する方可然御處置被成度候王子機械製作所に於ける鐵部の器具未だ出來不申候に付製爐業を中止致させ置申候其間暇を以て明日出發富士登山に出掛申度往復三日間の豫定に御座候右御屆申上置候也當用而已　匆々敬具

七月二十九日

嘉一郎

野呂嚴師玉案下

榎本子より博士へ（明治二十六年九月八日）

拜啓陳者砂鐵御試驗實地拜見仕度候間何日頃罷越可然哉且其場所は老生會て一度參りたる鑄鐵所とは存候へ共其名を忘却致候間乍御手數併せて爲御知被下度候也

九月八日

武揚

今泉嘉一郎殿

榎本子より博士へ（明治二十六年十月二十四日）

急啓只今函館着同所東濱町二十一番地和田方へ止り候和田は例の砂鐵八百五十貫目農商務省へ拙者を經て相送たる者にて右代價は過日の御話に據ば（山際氏も座に在りし時）農商務省會計方より既に同人へ御送屆たる趣之所同人方へは未だ何たる沙汰も無之由實以

て拙者同人に對し氣の毒千萬に付至急確實に相屆き候樣御盡力有之度候也

十月二十四日　函館和田方にて　　武揚

今泉嘉一郎殿

（註―封筒の表に農商務省にて今泉嘉一郎殿函館榎本武揚とあり）

榎本子より博士へ（明治二十六年十一月二十日）

拜啓アメリカンブルーマリー御試驗は如何の結果に有之候哉且老生儀何日頃再度の御試驗拜見致被得哉乍御手數一寸爲御知被下度候

十一月二十日　　武揚

今泉嘉一郎殿

榎本子より博士へ（明治三十年五月十七日）

陳者至急御面會致度儀出來候に付乍御足勞明十八日午前八時半頃迄に御來宅被下度候也

五月十七日　　武揚

今泉嘉一郎殿

榎本子より博士へ（明治三十年五月三十日）

拜復貴翰並に封入之杉山なる人の書も併閱致候抑も貴君には如何なる條件を杉山氏へは申入に相成たるや本人之書狀に據は拙者にお

いて何か心替にてもせし如く相見候拙者之申入は全山を手離すや否やを一應聞合せた迄にて其前とてもカプリツク如く買入れんと申

せしに御座無く候

右は貴下よりの寄書一覽後不快之念相起候儘申述事に候

偖過日御差出し之契約書は一友に相頼み變化を加候間明日午後又は明後日午前乍御足勞御訪問被下候て差上前方之意見を問合せ其上

にて速に契約相整候樣可致候

五月三十日　　武揚

今泉嘉一郎殿

（註―當時博士は本郷區西片町十番地にあり榎本子は向島須崎町にあり）

榎本子より博士へ（明治三十一年二月十六日）

拜啓爾後　外の御疎音に打過（一字不明）心之至御諒恕可被下候過日御申越の書籍 Asbestas は見出し候間不日貴地へ郵送可仕候米

國鑛山雜誌も紛失之憂は無之候間今姑く見出候迄は御猶豫有之度候鑛山（日下部）一件は先以つて差當り見込無之に付約束の金圓（壹

百圓）は昨冬再踏査後日下部氏へ遣しきりに致し採掘特許券も書換の運びに相成居候尤も該鑛山は官有と相成候はば見込も可有之に

付其邊之は處日下部並に山際氏とも談合致置候間左樣御含被下置度候也

二月十六日　　武揚

今泉嘉一郎殿

（註―當時博士は福岡縣遠賀郡八幡村製鐵所にあり）

榎本より博士へ（明治三十三年三月二十八日）

拜復御發見のクローム鐵鑛之件に付縷々御申越之段閱讀誠に慶賀之至に候貴示に據は該鑛區六鑛區（三百五十餘萬坪）ば既に試掘願

濟に相成たる樣被存此外に貴君が人民と御約束相成たる五十萬坪の鑛區に付出願人の名義者不適當に付拙者名義に御變更相成度との

意味に了解致候果にて然らば更に不苦候に付御依頼に應じ可申候但し前文六鑛區の名義人には不都合無く候哉其邊頗る不分明に被存

候如何

就ては拙者に於ては五十萬坪の名義人と成るも前の六鑛區の名義人となるも何れにても差支無之候間此段得貴意置候間何れ成とも御

申越可有之候尤も貴示之眞水工學士歸京の上は參候はば此邊も判然相分可申候へ共至急の場合可有之も難計候に付先以て前文之段及

復音候也

三月二十八日　　武揚

今泉嘉一郎殿

（註—當時博士は八幡にあり）

榎本子より博士へ（三月四日年不明）

拝啓陳者過日は御出産の由拝承御祝賀申上候此品は甚些少には候得共御祝の印までに進呈仕候也

三　月　四　日　　榎本武揚

今泉嘉一郎殿

（註—之は幸便によりたるもの）

榎本子より博士へ（六月一日年不明）

拝啓兼而御相談之礦山一件に付乙よりの原案（墨）に對し甲卽ち拙者の修正（朱）相添差進候間日下部氏へ御轉啓被下同氏承諾被致候て至急御通知と下度左候て清書其外表向之手續可致候也

六月初一日午下　　榎本武揚

今泉嘉一郎殿

（註—封筒の表に「要書在中特使」とあり）

榎本子より博士へ（六月七日—年不明）

拝啓作日は御訪問被下候處折惡敷不在中遺憾此事に候其節は持參之契約書其他正に落手候然る處右書類中一二御面談申度事有之候に付午御足勞明八日午前御入被下度只今御不在中に付要件のみ認置候也

六月七日午前十時　　貴邸にて　武揚

今泉嘉一郎殿

（註—封筒の表に至急親展とあり）

榎本子より博士へ（二十三日—年月不明）

拝啓陳者至急御面會致度事有之候間明二十四日午前中可成丈早朝當宅へ御出被下度此段得貴意候也

二十三日

今泉嘉一郎殿

（註—向島須崎町より本郷駒込曙町十三番地へ）

野呂景義博士より博士へ（明治二十四年七月六日）

前略貴書之趣委細了承仕候然るに御申越之事情實に已むを得ざるに出て如何とも致方無之場合御憂慮之段吳々も奉察候尙々御加養專一に奉念候附ては貴下身上之義は老母病氣危篤難見放に付云々の事實申述一紙之出張延期願を至急工科大學長宛にて願小生へ向け御送付相成度候先は不取敢右要用迄如此候　草々不一

七　月　六　日　　武揚

今泉嘉一郎様

野呂景義

（註—封筒に工科大學野呂景義とあり）

松岡常吉氏より博士へ（明治二十四年八月十六日）

返書落掌致候家事多端之由大暑中御苦勞の程御察申上候生は今年休暇には卿の出遊は到底出來ざる事と存居候處過日お兼殿より卿出遊の意あるを聞き卿の學事に熱心なる靑山を見て朝夕他人の跋涉を羨み又忌中外出せずは人の口の端も如何ならんかと彼是の物思ひ心中さこそと推量し達而必要なれば五七日を經すとも遠遊致されても生は乞れに付き異議を述べずとの意を通せんと欲し過日の書面を送りし次第にて決して議論と云ふに非ず又決して遠遊を勸めしと云ふにも非ず曾て聞きしには卒業論文には四國に何やらを起す可き事を論せんとか夫れなど　つきても研究必要なきかと案じ過ぎたる迄にて生は素より事情を明知せざれば前書末段に「輕重の比例次第なれば取捨は賢慮なり」と云ひ置きしかと存候喪を守るは孝也家政を整理するは賢也要之何ぞ亂りに議論せん、遠遊今日の急務に非されば縱令急務なるも後日取り返しが付く事なれば心靜に家事を整理せられよ道路遠くして相見るを得ず相計るに暇なし情到而文到らざる處多し幸に察恕あれ

八月十六日　　松岡常吉

嘉一郎殿

大倉喜三郎氏より博士へ（明治二十二年一月五日）

（前略）愛する兄よ小生が兄を愛するの愛は實に偶然にあらずされども其の元根をただせば全く兄の心靈に固有せる愛心あるが故なり、我等が未來の行路は實にかたし今年歳を得しを見れば已に一歳の不潔なる路を歩みしなり大兄願くは相携へて煩々たる四眼をよく善く其境遇に注ぎ互に其あやまちのなきやうに注意補助し相共に幸福なる道を歩まん

明治二十二年一月五日

my dear 今泉君

大倉喜三郎

（註—大倉氏の書簡については第一編參照）

博士の令姪高草木かね子さん——博士の生涯中最も記憶さるべき人である。博士の令姉遺愛の人で、令姉が早逝された後、博士の家庭に引取られたのであるが、家庭愛の人博士が兄の如く、親の如くいたはつたのはこの人である。一方又母堂の病中而して博士の東都遊學中、家族の一員として祖母の看護を一手に引受け、博士をして後顧の憂を輕減せしめたことはどんなであつたか、母堂と博士と令姪とは相互扶助の我が家族的國家の眞髓を發揮し、やがて博士の國家的活動へと一歩を進めたものであるが、日本女性として母堂と共にその功績の沒すべからざる女性である。

博士はその家道精進を德とし、令姪に對し親も及ばぬやうな懇切丁寧な心遣をしてゐることは書簡にも明かなところであるが、令姪は長じて高草木又吉郎氏と結婚、十人の子福者となり幸福な家庭を營まれた。五十九歳を一期として今から十三年程前に亡くなられたが、當時お子さん方はそれ〴〵成人、孫も多勢で後顧の憂なく永眠された。その生前死後を通し博士の溫き手が差伸べられ家道益々彌榮の一途を辿つてゐるとは芽出度きことである。因に夫君又吉郎氏は老來益々健康で目下高崎市に住んでゐる。

第三章　帝大第五回競漕大會（明治二十四年）

法科と大接戰を演じ工科優勝す

第五回競漕大會は明治二十四年四月十一日午前九時から隅田川上流の艇庫前で擧行された此の日は花曇りで終日日光を仰ぐを得なかつたけれども、花見にも競漕見物にも絶好の日和だつたので、朝來人出夥しく堤上到る處人山を築いた。

競漕は前後十五番あつたが、此の大會開始以來呼び物の一つとなつてゐた一高高商の對抗競漕は、兩校應援團が熱狂の餘り、萬一不祥事が勃發しては云ふ懸念から遂に本年から中止することとなつた。然し當時に於ける最高の競技會である此の帝大競漕會が、之が爲め俄に寂寥を感じると云ふ程には到らなかつたけれども、觀衆に何か物足りなさを覺えさせたことは事實である。之は各新聞の論調でもそれとなく知る事が出來るが、我が國スポーツ小說の魁として、レース當日から讀賣新聞紙上に連載された江見水蔭氏の「新宇治川」は、此の不滿を癒やす爲めのきはもの小說として當時好評を博したものである。

本年の漕手中にも相變らず名士が多かつたが、若槻禮次郎氏、鈴木喜三郎氏、內田嘉吉氏、秋山定輔氏、小川平吉氏、柴野（中村）是公氏等の政界の知名士を初め、堀啓次郎氏、仁井田益太郎氏、仁保龜松氏、芳賀矢一氏、藤代禎輔氏、織田萬氏、寺野精一氏　門野重九郎氏、小金井良精氏、青木周一氏、中澤岩太氏、白石元治郎氏、吾妻勝剛氏　木下正中氏、今泉嘉一郎氏等の學界實業界刀圭界の錚々だる人物の名も多數に見えてゐる。當日の役員は左の如くである。

役員

會長　加藤總長

名譽委員　富井敎授、大澤敎授、古市敎授、外山敎授、山川敎授、ベルツ敎師、ウエスト敎師、ノツト敎師、チヂン敎師

名譽書記　和田垣書記官、主事清水舍監

審判及號令者　(長)磯野海軍少佐、江口少尉、眞崎大尉、山口少尉、佐伯大尉

幹　事　(長)菊池教授、中澤教授、山田鐵藏氏、藤代禎輔氏、白石元次郎氏

競漕番組と經過

第一番競漕　綠組勝つ

第二番競漕　紫勝つ

第三番競漕　高橋辰次郎氏組勝つ

第四番競漕　清水彦五郎氏組勝つ

第五番競漕　若槻禮次郎氏組勝つ

第六番競漕　工科勝つ（括弧内は貫目）

(綠)法科　仁井田益太郎(一四・〇)　石丸助三郎(一六・九)　仁保龜松(一四・五)　一山直祐(一五・五)　高橋雄一郎(一五・〇)

手島兵次郎(一四・五)　竹内平吉(一四・六)　伊藤彌之次(一三・八)　梅原惇(一五・〇)　中西龜太郎(一五・五)　熊

(赤)醫科　木下正中(一五・三)　安藤慶次郎(一四・五)　伊藤彌之次(一三・八)　梅原惇(一五・〇)　中西龜太郎(一五・五)　熊

野周次(一四・七)　三角恂(一二・三)

(白)工科　山下啓二郎(一四・〇)　加藤知道(一五・一)　今泉嘉一郎(一五・一)　比田孝一(一三・七)　遠藤藤吉(一三・四)　名

倉兼三郎(一二・八)　田中富士太郎(一五・〇)

現役選手各三名づつを漕手に加へた法醫工の三科競漕である。法科のコックス一山氏、工科のコックス田中氏が、四番と艇軸を漕いであるのも面白い。コースは法一、工二、醫三で白最も有利、スタート三艇とも優劣なく、白少しくリードしたがオールを流した爲め忽ち遲る。赤機に乘じて先頭となつたが白よく頑張つて抜き返へし、決勝點近くでは三艇並んで勝敗いづれとも解らず觀衆手に汗を握つたが、白僅に勝つ（タイム六分二十二秒）午前の競漕は之で終る。

第七番競漕　寺野精一氏組勝つ

第八番競漕　鈴木喜三郎氏組優勢

第九番競漕　特別會員、白組（工科）勝つ

第十番競漕　工科勝つ

(綠)法科　不破彦曆(一三・〇)　柴野是公(一五・一)　白石元治郎(一四・八)　木村平三郎(一六・七)　石川一(一五・二)　淺見

倫太郎(一六・〇)　香坂悌藏(一五・三)

(赤)醫科　河合清(一四・五)　吾妻勝剛(一三・三)　枝國安太郎(一三・三)　金森辰二郎(一五・二)　馬島和內(一四・五)　多田

寛(一六・〇)　青木周一(一二・〇)

(白)工科　高橋辰二郎(一三・三)　安田不二丸(一四・九)　安藤光太郎(一四・二)　作間綱太郎(一五・〇)　日向庄作(一三・二)

服部漸(一三・〇)　目良恒(一四・三)

第六番競漕と同じ現役三人混合の對科レースである。赤は初めから遲れ、白綠競り合つて一進一退、双方よく戰つたが白僅かに勝つ（タイム五分四十一秒八）。

第拾一番競漕　來賓東京高等商業混合レース

第十二番競漕　髭を賭けた學士競艇

第十三番競漕　工科勝つ

第十四番競漕　來賓一高混合レース

第十五番　分科大學選手競漕　工科優勝す

(綠)法科　一山直祐(一五・五)　柴野是松(一五・一)　白石元泉郎(一四・八)　石丸助三郎(一六・九)　仁保龜松(一四・五)　木

村平次郎(一六・七)　竹内平吉(一四・六)

(赤)醫科　木下正中(一三　八)　安藤慶次郎(一四・〇)　伊藤彌之次(一三・八)　金森辰次郎(一五・二)　中西龜太郎(一五・五)

吾妻勝剛(一三・三)　枝岡安太郎(一三・三)

（白）工科　田中富士太郎（一三・二）　安田不二丸（一四・九）　今泉嘉一郎（一五・〇）　加藤知道（一五・一）　安藤光太郎（一四・一）

（二）　作間綱太郎（一五・〇）　遠藤藤吉（一三・四）

愈呼びものの分科大學選手競漕となつたが、此の時既に暮色は四邊を罩めて悲壯の氣が河上に漲る。本日の對科レースは凡て白の連戰連勝に終り、綠はよく迫つたがいづれも今一息と云ふところで敗れ、赤は甚だ振はないと雖も選手競漕は又別であるから、各選手はいづれも必勝を胸に祕して艇に上る。樓上樓下、堤上堤下に湧く歡聲に觀衆も息を凝らして此一戰に見入る。河上には小艇を連ね綠布を飜へして長蛇の陣を張る法科の應援隊、小蒸氣を堤下の櫻の花蔭に浮べて工と朱書した應援旗を打ち振る工科大學生、誰も彼も狂人の如く怒鳴り立てゐる。やがて三隻の競艇はスタートに着いたがコースは法科一、工科二、醫科三で工科最も有利である。號砲一發スタートを切るや三艇並進、白綠やや接近してオール入り亂れあわやファウルと思はれたが、舵手巧みに舵を引いて離れ、白綠相先後して進むその頃から白と呼び綠と叫ぶ聲援は耳を聾するばかりで、渡場を過ぎてより綠白の競り合ひ愈猛烈となり、勝敗は全くいづれとも決し難いので、判定も白綠の兩旗を手にして立つてゐたが、號砲と共に白旗飜るに及び工科萬歳の聲が四方から起つた。（タイム四分三十秒）かくて榮ある優勝旗は滿場の拍手喝采裡に外山會長代理より工科大學選手に授與され、又皇太子殿下より下賜の賞品並に法二軒の收入にかゝる賞品も贈られた。

閉會午後五時四十分。

勝者の中に若槻禮次郎氏

〔東京日日新聞　明治二十四年四月十二日第五千八百三十九號〕　帝國大學春季短艇競漕會は豫期の通り昨日午前八時過より、墨田川上流に於て催せしが、花見を兼ねての來觀者頗る多く、堤上はさながら人の山を築き、一時は往來ならざる程なりき。來賓は福岡樓及び艇庫樓上に招じ、艇庫の下には例の法二軒の茶店もあり。巡て八時半頃となれば第一競艇なる紫、綠、白、赤の四艘は、朗らかに聞こゆる海軍軍樂隊の響き共に、小蒸汽船に曳かれ、舳艫相銜んで流れを下り、相圖の砲聲と共に漕ぎ出でしが、終に綠舵手堤喜代吉氏の勝となり、第二番も四艘にて紫舵手松永武吉、第三番も同じく四艘にて綠（舵手高橋辰次郎）氏、第四番四艘にて（紫舵手清水彦五

郎氏）、第五番四艘にて綠（舵手若槻禮次郎氏）、第六番は三艘（法科綠、醫科赤、工科（白）にて白（舵手山下啓次郎氏）の勝となり、是にて午餐を喫し、午後の第七番は綠、赤、紫、白の四艘にて、紫（舵手清水文之輔氏）の勝となり、第八番（法科第三年綠、赤、白三艘）は事故ありて中止し、第九番は特別會員赤醫科教授）、白（工科教授）二艘なりしが、白（舵手松尾鶴太郎氏）の勝となり、第十番は分科競漕綠（法）、赤（醫）、白（工）の三艘にて、白（舵手高橋辰二郎氏）の勝、第十一番來賓（高等商業學校）競漕四艘にて、紫（舵手赤羽克己氏）の勝、第十二番は分科學士競漕にて綠（法）、白（工）、赤（醫）の三艘なりしが、綠（舵手曾我祐保氏）の勝、第十三番は綠（法）、白（工）の二艇、白（舵手中原岩三郎氏）の勝にて、一々會長外山博士（加藤會長不在の爲め）より賞牌を授與し、第十四番來賓（第一高等中學校）競漕は事故ありて之を中止し、第十五番は醫科（赤）、法科（綠）、工科（白）の各選手競漕なれば兩岸喝采の聲崩るゝが如く、中頃は綠の勢頗る宜しかりしが、終に白（舵手田中富士太氏）の勝となり、喝采歡呼の中に外山會長は短簡なる祝詞を述べ、チヤンピオン・フラツグ及び皇太子殿下より贈與の賞品、並びに法二軒の收入に係る賞品等を授與して、閉會せしは午後五時過なりき。

梅、富井、穗積三博士の舵手

〔時事新報　明治廿四年四月十二日第二千九百八十七號〕　前號の紙上に記せし如く帝國大學運動會にては、昨十一日第五回春期競漕會を墨水の上流に於て執行せり。會長は加藤總長なれども地方出張中に付外山教授之を代理し、幹事長は菊池教授なるが中澤教授代理せり。例の如く艇庫續きの臺上に天幕を張りて來賓の席に充て、猶言問團子の裏より艇庫間の樓上を棧敷に代へ、其前面の堤緣へ假小屋を設けて奏樂所と爲し、臺上の正面水の中央より少しく西手へ、彩旗もて裝ひたる一艘の舟を繫ぎて勝負判定の號砲を發せしむ。此の日の審判及號令者は長、磯野海軍少佐、眞崎、佐伯同兩大尉、江口、山口兩少尉にて、何れも小蒸汽船に乘り吾妻橋を少しく北に離れし水上にて、競漕船の整列を認れば號砲を放ちて發艇の號令を下し、競漕船より少し後れて共に運轉を始め、各船の衝突或は妨害等を爲さしめざる樣に始終審査に油斷なかりし、當日の競漕は都合十五番にて、午前八時三十分より三十分間毎に執行せり。第一番より第五番までは何れも紫綠白赤の四組にして、第六番は法科（綠）、醫科（赤）、工科（白）の三組とす。又七番は紫綠白赤の四組なり、これ

にて會員一同午餐を喫して暫く休憩する內、午後一時より招待券を贈られたる內外の貴顯諸學士等夫人令孃を伴へるもあり、その數千餘名なりし。偖午前の競漕は見ざるを以て其勝負を知らざれど、第八番は來賓の大概集ひ畢れるを待ち、午後一時三十分頃より始めたり。この競漕者は法科第三年生にして、綠赤白の三組に分ち、梶手は綠梅謙次郎氏、(赤)富井政章氏(白)穗積陳重氏にて、赤は眞先に進み綠少しく後れ、白は餘程後れたりしが、赤綠相競うて言問團子下まで進み、奏樂の聲嚠喨として起りし頃は干潮に際して西岸は漸次に干潟を生じ、固より規則の正しければ前に進みし赤が、綠を嬲りて水先きを妨げたるにはあらざらんなれど、綠の艫先きを塞ぎて綠が之を避ける樣に見えしが、二艘共に淺瀨に膠して自由ならず。この狀を見たる白は全力を皷して稍間近く進み來りし時、綠は早くも深水へ漕ぎ出し、赤も焦つて漕ぎ出せしも、この時は綠の艫先赤より一間ばかり乘り越し、號砲の響きたる時は舟一艘分の上進みて綠の勝と爲りしは面白かりし、九番は特別會員醫科(赤)、工科(白)の二組にて白の勝、十番法科(綠)、醫科(赤)、工科(白)の三組も白の勝ち、十一番高等學校四組とも、紫白手綱染の服一對の打扮なれば、船首の旗色にて區別し紫の勝ち、十二番分科學士法科(綠)醫科(赤)、工科(白)の三組は綠の勝ち、十三番法科(綠)、醫科(赤)、工科白の三組は白の勝ちにて、午後の勝負ば工科の大勝利、其技畢りて式場へ進み賞品を受けるや、現在の同科學生は更なり、同科の卒業生まで或は法科萬歲とか、工科大勝利とか大呼して之を祝する聲中々勇ましく覺えたり。十四番は第一高等中學校四組、第十五番は分科大學選手競漕三組にて、此の最終の技は當日第一の觀ものなれども、早や晩景近く用向きありて見殘したれば、勝負何れに歸したるを知らず。

第四章　漕艇斷片錄

(ボート選手としての博士は何といつてもその生涯の華かなりし一と時であつた當時の環境を偲ぶために帝大漕艇五十年史より摘記させて頂くことゝした。)

○

「外來スポーツの魁として漕艇競技が辿り來つた六十年の歷史は、正に我が國運動競技史上の輝かしい卷頭を飾るもので、殊に鎖國日本に漸くにして開かれた水の世界へ、それを征服すべきボート競技が眞先に受け容られた事は、明治維新に於ける當時の青年の抱負と氣概とを示すものとして、單なるスポーツ以外に大きい意義を認めざるを得ないのである。

その六十年の歲月は夢の如く流れて、世界と日本とに慌しい幾變轉の跡が繰返へされたが、單純なボートの形態にもカツターからギグ、シエルと進步の幾段階が踏み越えられて來た。そして今、傳統と歷史を誇る我が帝大クルーが、日本代表として國際オリシピツクの檜舞臺へ、世界制覆の花々しい門出をなさんとしてゐることは、帝大艇漕史上に一エポツクを劃するものとして、我等の最も光榮とし又誇りとするところである」

○

「とまれボートが日本に傳來してから六十年、それは短いやうで長い歲月であつた。年々歲々花相似たるべき向島の櫻もすつかり代かはりとなつて昔の面影を失つた今日、當時全盛の紅顏子が、今や憐むべき半死の白頭翁と化した事も亦當然の事である。それにつけても春はボートに乘つて、花と水とに明け行く隅田川をウンス〳〵と艇ぎまくり、都鳥の浮き寢の夢を驚かし、或は墨堤の岸邊の櫻に艇をもやつて、櫻餅と言問團子で放歌高吟を恣にした者を思ひ出すと、向島こそ我等の第二の故鄕であり、そして人生の若さと花やかさとを思ひ切り發散させた思ひ出の地でもある。そこに演じられた競艇の數々、それを彩る涙と汗の記憶は永久に我等の心から拭ひ去れぬであらう。かくてボートの回想は靑春の追憶となつて、絕えず我等の胸に生きて行くことに、我等は絕大の喜びを感ずるのである。今帝大ボートの六十年の過去を振返つて、我等は老ボートマンに對し一層深い愛着と尊敬の念を禁じ得ないのである」

「大學のボートの創立と云つたやうな事は、正確な年月は記憶しないが、明治十二、三年頃砂川雄峻氏（大阪で辯護士をしてゐたんで先年亡くなられた）の主張で、學生の間から醵金し合つて飛鳥丸と云ふボートを一隻造つたことがあるが、これがボートの初めではないかと思ふ。そのボートは四挺立で、よくお茶の水附近迄漕いで來たものであつた。今日のボートとは大分趣の異つたもので、先端が尖つてゐず全體が丸味のあるものであつた。（高田早苗博士談）」

○

「私は工部大學の出身ですが、明治十四、五年頃、一つ橋にあつた法理文三學部にボートが一隻あつたのを憶えてゐる。初めは一隻であつたが、間もなく石川島造船所で新に二隻造つて、みんな元氣に漕いでゐた。當時神田川は今日と違つて、萬世橋からお茶の水、水道橋に至るまで樹木が鬱蒼と茂つてゐて、絶好の遊樂地であり、從つて學生で隅田川からボートで漕ぎ上り、お茶の水附近にボートを止めて散策する者が多かつた。（丹羽鋤彦談）」

○

「十五年頃當時虎の門にあつた工部大學には外人教師ウエスト氏がボートを四、五挺所有してをり、神田一つ橋の三學部には二隻あつた。私達はよくお茶の水附近を漕ぎ廻つたもので、附近にあつた高等師範の學生達がボートの操縦を知らず困つてゐるのをふさけたものだ。（山口鋭之助談）」

○

「當時ボートマンの服裝としては一定したものがなく、多く不斷着のまゝであつたが、MBCでは他のクラブとの差別を明かにする爲め、綠色のフランネルで頭巾形にしたものの頂に、白の毛糸束を附けた漕艇帽を考案した。之が最初の漕艇帽であるが、後には一般に普及して選手は必ず之を被ることゝなつた。又此等のクラブで菱形の帽子を作つて被つだが、之が後に帝大の制帽となつて、今日の角帽の起源をなしたと云ふことである。」

○

「明治十七年の秋、全學生の待望の新艇三隻は見事に竣成した。偶々同年八日、當時神田一つ橋にあつた法理文三學部の中、法文二學

部の本郷移轉があつたので、十七年十月十七日の吉辰をトして、本邦最初の學生ボートレースを擧行することになつだ。教授の寄贈にかゝる海軍軍樂隊の賑かな奏樂裡に、十伺番かの競漕が盛大に行はれ、勝者には先輩學士の寄附の銀製メダルが授與された。最後に最も熱心で優秀な人々によつて二つのクルーが編成され、ストレンジとノツトの兩教師がその舵手となつて、英國流の模範競漕を行つたと云ふ事である」

○

「續つて當時の學外の漕艇界を見るに、海軍の各軍艇、海軍兵學校、商船學校等がそれ〳〵多數のボートを所有し、時にレースを行つて觀衆の目を喜ばしたが、特に海軍の端舟競漕會は盛んで、明治十六年六月三日の同會には　明治天皇は枕橋の水戸邸まで行幸あつて親しく競漕を御覽遊ばされたと云ふことである」

○

「『古市六三氏迷子となる』第二回競漕大會の時は工科は一コースで潮が惡く、初めはドンドン拔かれた。所が洗場邊へ來ると潮が良くなつて逆にグングン出て行つた。艇庫の樓上で見てゐた古市公威先生は之を見て「勝つた、勝つた」と云つて、連れてゐた六三さんを誰かの手に渡したまゝ飛び下りて來られた。あとで六三さんを探すのに大いに骨が折れたさうだ。（六三氏は工科選手）

終つてから古市さんが植半で皆にシヤンペンを拔いて祝盃を擧げられた。何しろ當時の學生でシヤツペンなんて勿論始めてだ。何だラムネか、イヤに酸つぱいラムネだな、などと云ひながら、飲んだら、あとでシヤンペンだと聞かされて、音に聞くシヤンペンとは之かと顏を見合せたものだつた。この優勝を祝してあとで工科の教授學生が金を出し合つて、ネクタイピンを作り選手に記念に呉れた。（第二回レースの思ひ出、丹羽鋤彦氏談）」（當主古市六三男爵にとつては、微苦笑を禁じ得ない然かも昔なつかしい思ひ出であらう。）

○

「明治二十年は東京帝國大學漕艇部のみならず、日本漕艇界にとつて記念すべき年であつた。まづ日本としなは空前の大艇庫の竣成と共に、漕艇部として最初の競漕大會が擧行され、學生スポーツの魁として滿都の人氣を沸騰させたからである。之までのボートは同好者の集團を基礎とする倶樂部組織の域を出ないのであつたが、玆に初めて統一ある組織と設備の下に、各分科が覇權を爭ふこととなり

之がボール界の發展に拍車をかけ、今日の漕艇部の基礎を築くに至つたのである」

○

「この艇庫の完成と同時にかねて平野造船所で建造中であつた四隻の新艇も竣工した。この艇は從來のカツター艇に一新機軸を出すべく、横濱のアマチユア・ローイングク・ラブのアルパツロス號に模して工學生白戸氏が設計したものと傳へられてゐるが、その頃隅田川に於ける最新式の艇として、その堅牢と快速とを謳はれたものである。建造費は一隻約百圓程度であつたさうだが、此の四隻に我が國の名瀑の名をとつて那智、華嚴、布引、養老と名附けたが、此の艇名は今日迄踏襲されてゐる。當時の批評によると「法科理文科は學生風の漕ぎ方にして、醫科工科は海軍風と稱するものなり」とあるところを見ても、その艇は猶カツターに近きものであつた事が想像される、なほ選手は一月に選抜されると共に直に練習に入つたが、交通機關の不備な當時であつたので、往復とも向島まで徒歩であつたことは勿論である」

第五章　鐵生活五十年の想出

——製鐵から鋼管まで——（今泉嘉一郎談）

（一）

此の心一決すれば、鐵の如く堅し、自分だけはさうであつても獨りでは何も出來ない。……私は白石君と云ふ友人の力に絆つて、一緒に日本鋼管を始めて以來、足かけ二十九年になる。白石君と私とは歳が同年だが——正確にいへば私の方が二十五日だけ先に生れてゐるから、それだけ兄に當るわけだが、それは年だけのことだ。考へて見れば私の鐵鋼人としての生活五十年長いやうではあるが八幡製鐵所と云ふ官業と日本鋼管と云ふ民業とが我國で初めて生れたその產前產後の世話から、成年に仕上げるために力一ぱい手傳つたに過ぎない。その間、外國の長所も見殘すまいと、留學に見學に、七回もの歐米旅行に五年の歳月を費し見學した工場の數も三百餘ケ所に上つてゐるが、それも鐵關係のものばかりである。こんな風にわき眼もふらず忙しくやつて來ても、所謂五十年の鐵生活は夢のやうに過ぎた。昨年、私ははからずもドイツから貴い勳章を贈られたので、そのお禮のためにドイツ大使館にオツト一大使を御訪ねして御禮を言上した。その時、大使が「貴方がドイツへ留學された最初の年はいつ頃です」とたづねられたから、私は「一八九四年でした」と答へると、大使はホウといつて、「一八九四年ならまだ私が三歳の時です」といはれたで私も自分ながら感慨深いものがあつた。

私は明治二十五年大學を出ると、二年間今の日本製鐵、即ちその頃の八幡製鐵所の創立事務に當ることになつたが、それからドイツに留學した。ドイツ留學中に製鐵所技師に任ぜられて、日本に歸つたのは明治二十九年の暮である。それで直ちに農商務省内に事務所をおいて、山内長官を助けて八幡の土木工事を始め、請負者を定めたり、技師を選任したり、まづ何よりも人間と材料を集めることが大變だつた。製鐵所の建設工事は三年ばかりで大部分落成したから、明治三十四年から作業を開始した。私が製鐵所をやめたのは明治四十三年で、つまり十五年間、現場作業の役人生活をしたわけである。最初は大島博士のやうな先輩が居られたが、後半は勅任の首席

技師といつても、まだ三十臺の若年の自分が指圖して行かなければならぬことが殖えて來た。それでいつの間にか十五年の御奉公も終つてしまつた。

（二）

八幡を退いてから私が鋼管製造を計畫するまでの經路を語るには八幡製鐵所の始めからのことに及ばなければならぬ。

鐵鋼自給、これは明治維新以來久しい我國朝野の希望だつた。

官立製鐵所創立當初の作業計畫としては、熔鑛爐をもつて銑鐵を造り、これを原料として平爐及び轉爐をもつて鋼塊を造り、更に壓延ロール機をもつて鋼塊を處理し、最後の製品たる棒鋼、形鋼、軌鋼、鋼板等を造ることであつた。その頃の我國鋼管の需要といふものはまだ少くて、大工場の作業計畫の問題にはならなかつた。

その後英米その他から輸入される鍛接鋼管が、年々その量を增加する傾向こそあつたが、前述の諸鋼材と並べて主要鋼材の取扱ひを受くべき程度には至らなかつた。殊に八幡製鐵所創立以來年と共に激しくなる技術上及び經營上の多忙と苦心とは、鋼管のやうな普通鋼材とは生產方法の多分に相違するものを、作業計畫中に取込むべき餘裕を與へなかつた。

前に述べた如く、明治三十四年には製鐵所創立工事も主要部分だけは大體完成したので既成部分について試驗的に漸次作業を始めることにし、職工の習練と機械の整頓を兼ねつつ各種鋼材の製造にまで取りかゝつた。

ところが、その時代に於ける我國一般の工業狀態は今日に比べて御話にならぬ幼稚さで、耐火煉瓦、機械油は勿論、セメントまでも歐米から輸入しなければならぬ。一番大切なコークスなども、日本の石炭だけでは出來ない。重要消耗品は何一つ滿足のものが供給されない。製鐵、製鋼の作業に當る外國技師も、匙を投げるばかりだ。斯うして二年三年を急忙の間に經過した時、幸か不幸か勃發したのが日露戰爭である。明治三十七年二月のことだ。當時尙ほ未熟な狀態ではあつたが——兎も角わが國唯一の鋼材製造所であつた八幡製鐵所の繁忙は、形容できぬ位で、當事者一同も辛勞の多い非常時二ケ年を過したわけである。が、この戰爭は技術の上に、經營の上に著しい進歩と貴重な經驗となつた。最も痛切に感ぜしめられた經驗は、次の事柄だつた。

一、官民兩方面の需要者から日日輻輳する註文は驚くべき多數の口數に上るが、其內容をみれば註文品の品質も形狀も極めて多種多樣に亘りながら、箇々の量が甚だ少い。一性類一形狀に揃つた大量のものはすべて外國註文に向けられ、いはゆるハンパ物ばかりが、この自國用品軍用品その他、外註困難な製造屋泣かせる特殊品などの註文ばかりが多い。

一、斯樣な註文でもこれを拒絕すれば、製造屋の仕事がなくなるかも知れぬ。殊に非常時であるから、作業の經濟を犧牲として、需要の滿足に全力を盡さなければならなかつた。處が、その事が、偶然の幸にも、少からず時局に貢獻したものとして世の稱讃を博し、一般國民をして自國に製鐵所を持つことの重要性を深刻に認識せしめる效果があつた。

一、しかし如何せん、製鐵所作業經濟の上から見ると、生產品種の多いばかりで、迺數は昇らず、作業費は多くかゝり、迺當りの生產費は高くなる、結局仕事の忙がしかつた割合に利潤を見ることは出來なかつた。

一、これは要するに、作業經濟の歡迎する良い注文は外國にとられ外國でも斷るやうな注文のみが製鐵所に向けられたのである。この傾向は作業開始の當初から既に感知したことではあるが、戰時にのぞんで極端に實現したのである。

一、かゝる趨勢は戰後の將來といへども、このまゝに放任したら容易にはなほるまい、ではどんな處置をとつてこれを改善すべきか。一部の（世論井上老侯などもそれであつたと思ふ）としては、製鐵所は元來、民間に於ける自然的の發生をまつ遑なくして、止むなく政府自ら手を下したものにすぎず、故に今日の場合、損益に屈託すべきではない。國民の需要する以上できるだけ多種多樣の鋼材製造　手をつけ技術を習練し、その技術が手に入つたところで他の希望者があればこれを民間にその技術を移殖し、民業として各種鋼材に就て、思ふ儘に製造事業を經營せしむることにすれば、民業としての鋼材事業も容易に發展し、結局國家の生產も增加することになる。故にその方針で行くべきである……といふ議論である。

一、ところが他の一部、殊に議會及び政府部內の多數の人々は、製鐵所各年の損益決算等のみをみて、事業の消長を誤斷し、甚だしきは未だ仕事もしない作業開始當年度の損勘定さへ問題にせんとし、製鐵所は損をしてはならぬといふのが後の人々のモットーであつた。これ等の論者は數年引續いた損勘定を見るに及んで、周章狼狽、遂には事業發展のためにする當局者の苦心研究の結果たる擴張

案は勿論、差迫つた重要なる改良費の要求さへ、放蕩兒の浪費と同一視する情勢であつた。かゝる人々の觀念は純然たる、最も低級なる營利會社經營者、それと毫も異るところはない。しかも實業に經驗なきため、徒らに無用の心配にかられて、却つて事を害する結果となる。不幸にしてかういふ議論家は有力なる政治機關に屬する人に多かつた。

一、かやうに相反した二つの議論があつた。前の議論は、製鐵所本來の目的からみても、又國家終局の利益から考へても正論であるに相違ないが、如何せん、年々議會の協賛を得た豫算で仕事する製鐵所である以上、後の議論に從つて行く外はないといふことが、現實の事情であつた。

一、殊に製鐵所は兎に角官業であるから、營利を本意とせざるまでも、損失勘定を出して政府の一般財政に累を及ぼすことだけは何としても根絶を努めなければなるまい。それがためには、需要の少く、製造の困難なるものを徒らに生產計畫中に取込むことは出來る限りこれを避け、主要なる鋼材の幾種類かに力を專らにし、生產費を減ずることにしなくては、外國品と競爭はできない。唯一の保護は輸入關稅であるが、それも明治初年以來、屈辱的協定稅率に束縛されて、形鋼一噸に四圓三十錢、鋼鈑一噸に四圓九十錢といふにすぎない少額であるから、何の力にもならぬ。その改正さへもできない今日、何としても自力で行く外はない、幸ひ是等主要鋼材の製造は、是迄既に一通りの練習は積んでゐる、唯工場が斬新の大量生產に適してゐないから、この場合大いに工場の改良擴張を計り、大量生產廉價生產に努めなければならぬ。

（三）

以上の諸感は中村長官も悉く共鳴せられたことであつたから我々は將來製鐵所の採るべき方針を定めることができた。

然るに創立當時計畫された諸工場の門には尙ほ未成の儘で戰爭期に入つたものが少くない。これ等は非常時の多忙を極めてゐる今日でもこれが完成を勉めなければならなかつた。

それぱかりではく、戰爭中、突然、軍事費をもつて新設に着手した工場（豫算四百六十萬圓）もあり、又戰爭中、新に必要を感じた結果、豫算（一千八十萬圓）を組んで提案し、遂に協賛を得ることになつた新工場もあつて、兎も角新規に造ることになつた工場は、

鋼彈、厚板、外輪、波板平鋼、線材、鍛鋼、坩堝鋼、第二小形、第二方塊、第三高爐、耐火煉瓦、鑛滓煉瓦、各種副產物等の諸工場である。如何にも生產品の種類が多くなり、今更中止することも出來ない事情であつた。そこで戰爭はすんでも休息の遑もなく是等工場の完成は、日常の生產作業以外の餘分の仕事として、四年間の努力を要した。

これは後日になつて、いはゆる製鐵所第一斯擴張工事と稱する仕事である。この擴張によつて製鐵所建設のため費した投資額は、最初より合計しても三千五百萬圓すにぎないが、其の設備の內容は隨分複雜のものとなり、前に述べた理想の針に鑑みて、遺憾とする所もあつたが後年歐洲大戰の時に及んで、八幡製鐵所が三年間（大正五年乃至七年）に一億三千萬の作業利益をあげたのも、その大部分はこの擴張を含んだ舊設諸工場の働きであつた。しかもこれ等舊工場はその後も尙ほ多年に亘り相當に活動してゐるのは事實である。

要するに、かゝる大きな利潤を生じたと云ふのも、それは早く出來てゐて非常時に際會したといふ偶然の倖と、技術の發達と、各々當時における當局者の苦心の結果たるにすぎないのである。若しも創立當初から政府が現地當局者の言を容れて擴張計畫を速進したら、日露及び歐洲の二大戰時に於ける製鐵所の效果は、一層偉大のものがあつたのであらう。

これを要するに、日露戰爭の後に、私達の考へたことは、この着手中の第一斯擴張がすんだら、次に來るべき擴張としては、現想通り生產品の種類を製限し、最貴鋼材のみの大量生產工場を新設したいものだといふことであつた。

以ひは、八幡製鐵所創立以來十二　三年間、鋼管の製造などを計畫する遑もなく、又其動機も曾て發生したことのなかつた事情を示したのである。古來、わが國の鋼管は全く輸入によつてのみ需要を充たされたが、年々の輸入數量は判然しない。明治二十九年の管類（鑄鐵管及それ等の附屬品）の輸入年額は約九十萬圓で、四十一年にはそれが三百三十萬圓に上つたことは、大藏省の貿易表で示されたが、この中に鋼管が何ほど含まれてゐるかは不明である。大體この大體この數字の三分の一位ではないかと思ふ。兎も角他の主要鋼材（棒鋼形鋼鋼板等）に比して、數量が少く、その製造法も一種特別の裝置や技術を要する關係から、民間は勿論製鐵所においても鋼管製造を考へたことはなかつたわけである。

（四）

ではどうして、私が鋼管製造を計畫するに至つたか、その動機はといへば、それには、大倉喜八郎氏を語らねばならない。鋼管製造を先づ考へたのは實に翁が最初であつた。

明治四十一年五月頃であつた。大倉氏から製鐵所に向つて一つの問合せが來た。それは鍛接鋼管製造用の原料である帶鐵（スケルプ）を、八幡製鐵所で供給できるかどうかといふのである。

これより先き、大倉氏は英國第一の鋼管製造者たるスコットランドのスチュワード・ロイド會社と、日本に一つの鋼管製造會社を共同でつくるため交渉を進めたやうであつた。その內容をきくと、ス社よりは機械一式を提供し、技師、職工派遣して仕事に當らしめること、機械以外の資金は大倉氏その他、日本側の出資とすること、生産額は鍛接鋼管年産一萬八百噸（最少の場合）、工場建設費は地所を除き合計七萬五千ポンドと見積られた等である。

その原料のスケルプは費用の關係上、ぜひ求めたい卽ち製鐵所で造つて貰ひたいといふわけであつた。

私は製鐵所の立場として早速調べてみたが、製鐵所はスケルプ製造用のロール工場をもたないから、その製造を引受けられないと斷るより外なかつた。

ではそのロール工場を新設できぬかとのことで、長官とも相談してみたが、財政その他の都合上、これも斷る外なかつた。その內に當時藏相であつた坂谷男爵もその話をきかれ、出來ることなら何とかしてその事業を助成してやりたいものだとの意向であるときいた。製鐵所としても、さういふ製管事業が將來確かな工業になり、從つてスケルプの需要が確かなものになるといふなら、特にロール工場を新設すべく考へて見てもよいといふことになつた。

かれこれする間に、明治四十二年になつたが、大倉氏との交渉は相變らず續けられた。その間製鐵所としては、私の理想にも近い新擴張（第二期擴張）を計畫してはゐたが、何分にも一千萬圓からの豫算を要する大計畫を持出すことになるから、政府の都合も甚だ心配された。しかし何れにしても將來ぜひやるべきことゝ思ふから、計畫だけでも拵へておかうといふことになつた。

當時鋼材部長兼工務部長だつた私は、最近の洋行（明治三十六年）以來五ケ年の作業經驗によつて必要を感じた海外調査の用件も少くなつたから、この擴張計畫立案を兼ねて歐州出張を命ぜられることになつた。これは丁度よい機會であるから、大倉氏の提携せんとする其社の事業を始めとし、歐洲における最近の鋼管事業やスケルプ工場をも視察して今後執るべき製鐵所の方針を決定するの資となすべきを命ぜられた。

私のこの行には布目、三好の兩製鐵所技師の外に大阪の岸本吉左衞門の隨行をも容れて、獨、英、白、瑞、墺諸國に亙り多數の工場を見學し、諸問題の調査にかゝつた。

主たる問題たる製鐵所新擴張案に就ては、主として獨逸のデマツク會社の計畫部に依頼し、私の希望に基いて略々成案を得た。次の問題たる製鋼事業に就ては先づ第一にスコツトランドのス社に就て取調べたが、同社も誠意をもつて、一切を解放し、工場の隅々まで詳細に說明し、當方の申出に應じて參考資料を提供してくれた。

しかし同社の鋼管製造法はヤハリ舊來歐米一般に行はれてゐた鍛接鋼管の方法で、たゞ規模の大なる點から英國の製管業界に第一位を占め、その製品は海外諸國に向つて盛んに輸出された。しかし原料帶鋼、つまりスケルプは英國產では間に合はず、白耳義から盛んに輸入されてゐるのを見た。そこで私は更に白耳義に渡り、その製造元、殊にウーグレー會社のスケルプ製造工場を仔細に見學した。

獨逸にきてみれば流石は新興工業國、マンネスマン鋼管製造法が既に旺盛の域に達し、鍛接鋼管などを造る工場は、最早や影がうすくなつてしまつた。マンネスマンにはどんな特長があるかといへば、繼目のない鋼管を安く造るといふ方法である。元來、繼目のないといふことは、管として理想的であることといふ迄もない。

たゞそれが從來は高價（鍛接管の二倍以上）であつたため、鍛接鋼管の活躍する餘地があつたのだが、今日ではマンネスマンのためにそれが安くできて、用途によつては、鍛接鋼管と十分競爭ができるといふことになり、製鋼技術の歷史上エポツクを劃する發明として現はれたのである。

元來鋼管製造技術の歷史的沿革は、相當長いもので、今こゝで述べる遑はないが、要するに人間が鋼管を使ふことを知つたのは、古い小銃の銃身を管として用ひたに始まつたといはれ、それから段々に進歩して水壓機や、牽引機などで立派な鋼管ができるやうになつた。しかもそれ等は皆繼目無鋼管であつた（第一期時代）が、何としても生產費がかゝるので値が高い。そこで帶鐵を圓くまげてその端を鍛接すること、いはゆる鍛接鋼管製造法が發明され、大概の用途には繼目なしの鋼管に代用できる品物が繼目無鋼管の半價でできる

るやうになつた。唯高壓を要する汽罐用管や、水壓管などの如く、重要な用途にのみ繼目無鋼管を使つてゐたのである。（第二期時代）ところが今マンネスマン法によつて繼目無鋼管が安くできるといふことになつたのは、從來の繼目無鋼管製造法にも、鍛接鋼管法にも共に一大脅威となつたのである。（第三期時代）

元來この大發明たるマンネスマン法はマンネスマン一家の親子四人の研究になつたものである。その第一回の發明は、鋼塊穿孔機で一八八六年に特許が下ると、それが歐洲諸國の工業界を驚かし、遂に一八九〇年、獨墺マンネスマン鋼管會社が三千六百萬マークの資本で創立され、マンネスマンの特許權は資本の半額、つまり一千八百萬マークに評價されて發明者の出資となつた。これは特許權の値段として殆ど空前の記錄であらう。しかし穿孔機だけで造つた鋼管は高價を免れないので、マンネスマンは一八九〇年乃至一八九五年に亙つて更にピルガーロール機を發明し、これによつて穿孔した鋼塊を壓延することに大成したのである。これが後に今日のマンネスマン鋼管株式會社となり、獨逸は勿論、世界にも比類ない、極めて盛んな製管事業を營んでゐる。

昭和元年獨逸合同製鋼會社が創立された時も、事業の性質が違ふ個人的會社であるため、これには參加せず、獨逸製鋼界における一方の雄として、クルップ會社等と同樣局外に立つた。

こんなわけで、理想的鋼管を安く造る極めて良い方法ではあるが、唯不便なのはピルガーロール機の特許權がまだ期限滿了しないので、他人が用ふるとすれば、相當高い分權料を支拂はねばならぬ。それでも尙ほ獨逸の諸工場はこれを支拂つて、その製管法を採用し始めてゐた。

今回の旅行は自分としては、第三回の歐洲出張ではあるが、忙しい用事が多かつたため鋼管問題については大要をつかむにすぎないが、先づ一通りの考へを決めることができた。

そこで、往路と同じサイベリヤを經由し、八幡の官舍についたのが明治四十三年一月八日であつた。

（五）

私はその足ですぐ上京して、在京の長官に歸朝の挨拶をした。製鐵所の事項に關しては、在歐中にも隨時書面をもつて報告してゐたから、今は唯簡單な要領の報告にとめた。

最後に鋼管問題に就ては、私は大倉氏の計畫されてゐる鍛接鋼管では今日の我國の狀態に於て、輸入品と對抗できないからダメであるといふことを答申した。それには次のやうな理由があるからだ。

第一に鍛接鋼管ではその原料として、特殊の帶鐵即ちスケルプがなくてはならぬ。そのスケルプを造るにはスケルプ製造工場を特設しなければならぬ。それだけでも鍛接工場そのもの以上に金がかゝる。更にスケルプ原料の鋼塊を造るにも製鋼工場をもたねばならぬ。是にもその位の金がかゝる。それだけ金をかけて、年に僅か一萬噸ばかりの鍛接鋼管を造つたのではコストが高くて問題にならない。ではスケルプを他から買ふことにしたらどうかといつても、白耳義が英國自身の工場で造つたものより安くスコツトランドまで供給するやうに、良い供給者があればよいが、日本のやうな遠國に對してはそんなものはない。

假に製鐵所が供給するといふことにしたらどうかといふと、製鐵所にもスケルプ工場はない。普通の棒鋼を造る中形工場、小形工場で強ひて造れば造れぬことはないが、造り難いからコスト高くなり、又、品質、形狀も似て非なるものができる程度で鍛接工場から苦情が出るやうな物しかできまい。では製鐵所で新にスケルプ工場を建設したらどうかといへば、年產五、六萬瓲の壓延を經濟單位としたら、スケルプ工場で僅かに一萬瓲、大倉氏の計畫は當分鋼管五、六千噸の年產ばかりで、造つたのは是亦餘程高いものになるから買つても引き合ふまい。また製鐵所としても民業援助の主旨で特に工場を造るといふ一時的投資だけならまだしも、平日の作業にも常に損害を甘んずるといふことはできない。

また斯かる工場を新に增設することも、作業方針の上から容易に歡迎し難い仕事であることは、前に述べた通りである。

かういふ事情であるから、製鐵所では一般の主要鋼材は造つても、帶鐵やスケルプのやうな比較的需要の少いものには手がつかず、從つてこれまで誰も日本で鋼管製造といふ仕事を始め得なかつた理由はそこにある。

第二は、ぜひ鋼管を造るのであつたら、鍛接鋼管法よりマンネスマン法の全部または一部を利用して繼目無鋼管を造る方がよい。それは繼目のあるものより無いものゝ方が管として理想的であり、從つて一層有望なる將來をもつことである。殊に汽罐用管、油井用管高壓瓦斯輸送管、水道管といふやうなものになると、太さの關係からも、壓力の關係からも、鍛接鋼管は問題にならない。また同じ繼

目無鋼管でも從來のエーヤハルド法などではそんな太いものは出來ない。第一價格の點で問題にならない。

第三には生産費の關係である。獨逸では普通の瓦斯管や導水管などの範圍には、まだ少々高いマンネスマン管より、安い鍛接管の方を使用する場合もあるが、しかも今日のマンネスマン製造法は今後益々進歩して安く造る見込がある。殊にマンネスマンの要所だけを採用し、これに他の方法をつけ加へるといふことにすれば、必ず、もつと安くできる見込みがある。（後に日本鋼管會社のとつた方法の如きはそれである）かりに獨逸で今やつてゐるやうに、マンネスマン方法の全部をそのまゝ採用するとしても、日本である限り鍛接鋼管よりも安くできる。それは次の理由である。

第四にマンネスマン法ならスケルプが要らない。鋼塊からその儘で管ができる。故に製管工場に製鋼工場だけを附加すれば、全然獨立的のものとなる。スケルプを如何にして供給すべきやなどの心配は全然無用となる。若しかりに鍛接鋼管のためにスケルプを製鐵所から買ふとも、自分で造るとも、又思ひ切つて輸入するとも（こんな物を輸入するといふことは當時は不便が多かつた）これを手に入れた時の價格を勘定してみれば、隨分高價となつて、マンネスマン法とは到底競爭できないことになるであらう。

こんなわけで、大倉氏とス社との間に折角計畫された共同事業も、自分としては御勸めできない。ぜひとも鋼管製造を始められんとするならば、マンネスマン法を基礎とすべく忠告するゝといふことを述べたのである。

この報告の結果であらう。數日の後、長官より大倉氏の希望なるものを告げられた。それによると、元來ス社は共同事業を望んでは居つたが、事業の將來を確保するためには、日本現行の輸入稅率では不十分だ。鋼管の輸入稅を適當に引上げることを政府當局に保證して貰ひたいといふので、早速阪谷男（藏相）の意向を伺つたが、大臣としては事業助成の好意は十分持つが、左樣の保證を與ふる如きは何としても出來ない事柄であると、當然の御話があつて、若し君が協力してくれるならば、どんな方法でもよい、ス社の關係なくとも、自分獨力でもやつてみたいといふ事であつた。

これは大倉氏としても相當堅い決心のやうであるが、君は一つやつてみる氣があるかといふのが長官の話であつた。

（六）

製管問題がこんな風にして、私の一身上の交渉にまで逼つてきたことはいさゝか意外であつた。この交渉は多年製鐵民業論を理想論とした私の心曲の琴線にふれたやうな感じがしないではなかつたが、併し不敏ながらも長い間精勤した八幡製鐵所を見すてゝ、突然違つた境遇に移るといふことは、閑人が友人の別莊に遊ぶやうに氣輕にはできない。猶豫を乞ふてしばらく考へた。

大倉氏が果して鋼管事業を始められゝことになれば、それは我國のため未知の一產業を開發するばかりでなく、民間鋼材事業の先驅として大いに一般の刺戟となる壯擧である。

不敏乍らその事業に協力することになれば、私としても不本意ではないが、相當困難が伴ふ仕事である。現に國家の力をもつて、しかも大きな抱負と理想で計畫された筈の八幡製鐵所の例はどうか、一般機械工業の發達しない當時の日本に於て、交通不便の九州の一漁村に未曾有の大工業を强行し、一萬有餘の從業員を習練しつゝ作業を經營し、石炭、鐵鑛、その他、何れも初めての原料を使つて種類の違つた多數の鋼材を製造し、關稅の保護皆無に等しい當時に於て外國品と競爭した結果、會計係の帳簿で創業以來十年間全通算して一千萬圓の損勘定を出したと云ふが、裏面に蓄積された無形の利益から見てこんな損勘定などは問題ではない筈である。

ところがその損勘定さへ一部の人には失望の念を生ぜしめ、作業の進行に幾多の障碍を惹起したではないか。今もし營利本位の民業で損をするといふ日になると、定めて苦情の出ることであらう。殊に日本で既に基礎のできた仕事であるならこれを眞似てもよい。また、その仕事を繼承して改良擴張することも容易の業である。現に日本の大實業家といはれてとく〳〵たる人々の中にも、實は他人の成功を見て初めて手を出した者が多いのである。偶々自ら困難を嘗めて新事業を開始せんとする者があれば、無謀家を以て見られた。私等が製鐵所の施設の上に少しく斬新の計畫をたてゝさへも、往々にしてそんな風にみられた。阪谷男が一夕私に戲言された語にも「大島と今泉とでは何をやり出すかわからんと、大藏省でも評判がよくなかつたよ」といはれたことがある位だ。

今もし民間に製管事業を始めるとすれば、製鐵所と大小難易の差はあつても、兎も角、日本における一新工業であるから、思ひがけぬ困難にも遭遇するであらう。大倉男の如き一般の風潮に超越した人が、國家のために發意されたことであるから、力强い感はあるが兎も角心配はある。

次に現在奉職中の製鐵所について考へてみた。回顧すれば明治二十五年以來、榎本子爵、野呂博士、和田先生の指揮と援助の下に、

政府のため製鐵所官設の豫備工作として海内及び海外の調査研究に四ケ年を費した。その製鐵所も二十九年には創立が決定され、私も關係して今日に及び、それさへ既に十四ケ年となつた。製鐵所が人間なら幾多の小兒病にも首尾よく耐へ得て、今年からは中學生となるのである。かく誕生の前後を通じて十八ケ年も世話した子供が、かくまで成人したのであるから、尚しばらくつきそつてその前途を見守りたいといふのが人情である。

更に又製鐵所の現狀はどうかといふに、さきに日露戰爭中の貢獻によつてしばらく世人の認識を新にした結果、比較的容易に擴張案もパスし、それも今日では工事を完成した。今後來るべきものとしては、かねて理想の大量生産の斬新施設に着手することで、それがためにこそ、今回の歐洲出張でも計畫案を問題にしたやうなわけである。それが何年の後に實現するかわからぬにしても遠くないことであらう。

こんな場合に臨んで居り乍ら、今、俄かに他に走ることは如何にも輕卒のやうで、責任上においても幾分の氣がかりである。ではどうするかについて更に反省した。

思へば明治三十六年先輩大島博士の退官以來、自分はまだ三十五六才の青二歳であつたが、兎も角、長官を除いた多數所員の最古參者であり、首席者であつた關係上、技術は勿論、經營上に最も重要なる責任を持たされた儘、明治四十三年まで八年に亙り、而かもその間には日露戰爭と云ふ大事件勃發し、製鐵所としては非常の多忙を極めたが、これがために次官とか、技監とか云ふものを置く必要もないと云ふことで、及ばずながら、自分だけが長官を助けて切り抜けて來た譯である。日露戰爭の二ケ年に亙る期間中、製鐵所の多忙と勞苦とは殆んど軍部の工廠にも劣らざるものと認められ、戰後の行賞に於ても自分等は皆、從軍記章その他優渥なる恩賞に沐し恐懼に堪へなかつた。

八幡には長い間在勤して自分でも苦勞したが、一面には、巨額の國費をもつて仕事の稽古をさしてもらつたことにもなるから、更に長く奉公して報恩の義務を果すべきではあるが、今、道を後進に讓り自分は處をかへて國家につくすも報恩の義に反することはあるまい。たゞ今日の場合、民業として鋼管事業を營むとも、容易にその成功は期し難いものとして一般から見られて居るが、自分だけには聊か自信がある。幸に人一倍健康の體力にもめぐまれ、年齡とてもまだ四十三歳にみたぬ自分として、前途に横はる多少の困難の如き

敢て恐るゝところではない。されば僅かながらこれ迄に得た經驗と學識とを資本として民業を育てることが、むしろ今日の自分としてとるべき報國の道であるかもしれぬ。これが最後の決心となつて、こゝにその旨を中村長官に答へ、その同意を得て退官し、大倉男の懇命に應ずることになつた。

註——之は雜誌記者の求めに應じ語られた半生の回顧錄である。既記の記錄等に基いて話を運ばれたものゝやうであるが、よく纏つてゐるので事業家としての博士の半生を知るに便である。依つて玆に揭げることゝした次第である。

第六章　製鐵所設立の沿革

我が製鐵所設立の沿革に關する伯爵金子堅太郎氏の談話なりとして八幡製鐵所時代の長官だつた中井勵作氏の述ぶるところを、次に揭げさせて頂きたい。之を精讀すれば、創立當時からの關係者今泉博士が退官される頃までの環境の概要を知ることが出來る。

「我が日本は古來製鐵の設備十分ならず、僅に釜石製鐵所と廣島縣に於て砂鐵を以て製鐵するのみなり。併し釜石製鐵所は明治十九年の大改革にて民間に拂下たり。依つて陸海軍にて需要する兵器又は鐵道造船、器械等の原料は、專ら海外より輸入し來りたり。然るに明治二十七年日淸戰爭の際は、外國より鐵の原料を輸入して兵器を製造したるが爲に、痛く製鐵の必要を感じ、平和克服後政府に於て製鐵所創立の議も起りたり。此の時に當り實業家は鐵道、造船、水道、器械工業の經營上製鐵所創立の緊要を政府に進言したり。於是政府は明治二十八年平和克復後閣議を以て製鐵所創立を決定したり。

此の時閣議に於ては官設民設の二說ありたり。然れども官設論は戰後兵器、軍艦等復舊の爲に多額の經費を必要とするが故に成立せず、終に民設論に決定したり。依つて政府は三井三菱の當事者を招き、兩家合同して製鐵事業を經營せば多少の保護金を支給すべしとて勸誘したれども、兩家は共に事業の經驗なく、又其の至難なるを以て謝絕したり。故に政府は農商務省に於て創立することに決定したり。

於是農商務大臣榎本武揚は製鐵調査委員會を設け、農商務次官金子堅太郎を委員長とし、農商務技師野呂景義、同高山甚太郎、海軍大技監原田宗助（橫須賀海軍工廠）、陸軍砲兵大佐中村雄次郎（小石川砲兵工廠）、鐵道局長松本莊一郎、長谷川芳之助、和田維四郎等を委員とし製鐵所創立の調査をなさしめ、又鐵類輸入の實況及其の統計並に外國製鐵所の組織實況等を取調せしむ。

偖て榎本大臣の製鐵所に關する意見は當初は製鐵試驗の見込を以て、先づ經驗ある外國技師二三名を雇聘し、之に計畫設置せしめ、其の配下に日本の技師を附屬せしめて練習せしむ。又外國より熟練したる職工二三名を雇入れ之に日本の職工を附屬せしめ、其の技

術を傳習せしめて製鐵の職工の養成を謀るにあり。其の雇聘契約の年限は三年とし、其の期間に練習せしめ、將來日本の技師及び職工に於て自ら經營するに足ることを認めたる時は外國人を解雇す。併し其の期限間に於て猶不足なることを認めたる時には更に三ケ年間其の契約を延長す。此の方針を以て製鐵所の構成を決定する。

次に鐵鑛の存在調査に着手し、技師を北海道、奧羽、北陸、山陰、山陽及び九州に派遣して實地の調査をなさしめたるも、多少の鐵鑛脈はありたれども大規模の製鐵所に供給するに足るものなし。又古來日本には山間、河川、海岸等に砂鐵あれども小規模の製鐵には供給することを得るも、今回設立する大規模の製鐵所の需要に應ずること能はず。

於是朝鮮支那の調査を命じたり。然るに彼の二國には處々に鐵鑛あれども張之洞が經營する『ハンヤピン』製鐵所の鐵脈の廣大有望なるに如かざれば、政府は張之洞に契約し、每年金三十萬圓を交附し其の鑛石を購入することに決定したり。

敷地の選定

次は製鐵所設立地選定問題なりき。此の件に就ては各府縣知事、貴衆兩院議員より頻りに其の希望地を選定して農商務省に陳情したり而して當時政府に於ては設立の豫定地を北海道、釜石、東京、大阪、廣島、八幡（福岡縣）長崎に指定し、此等の地方に技師を派遣し、又地方長官に命じ、製鐵所に必要なる資格條件を調査せしめたり。其の必要條件は鐵鑛區域、鑛石及び其の運搬又製鐵品の運送、賣捌きの便否、石炭の供給、用水の良否及び職工勞働者募集等なりき。然るに右等の豫定地は各々一得一失ありて、終に製鐵調査委員會は福岡縣八幡に決定したり。此の時に當り全國の商業會議所は其の總會を明治二十九年四月福岡市に開催するに決定し、當局官吏の臨席を農商務省に請求し來りたり。依つて榎本大臣は金子農商務次官に此の會議に參列することを命じ、歸京の途次八幡の實況を視察せしめ、其の報告に依り彌々八幡と確定せられたり。

於是榎本大臣は製鐵所豫算金額を六百萬圓と定む。（當時二十九年度政府總豫算金額は歲入金九千萬圓餘にして歲出金八千五百萬圓餘なりき。）此の豫算は明治二十九年の冬期議會に提出せらる。各地の運動員は政府決定の八幡を自箇の選定地に變更せしめんと盛んに活動す。其の內廣島縣選出の衆議院議員井上角五郎は自己の選出地廣島に設立するの目的ならんか、議場に於て頻りに農商務

省豫定地八幡の不十分なるを攻撃し、地勢、用水の不適當なるを指摘したるに依り、金子次官は其の指摘したる條件は農商務省に於て精密なる調査をなし、毫も差支なき旨を事實に依り說明したれば反撃すること能はず、卓を打つて『金子次官馬鹿』と放言して議院を退場したり。依つて衆議院は原案を通過し、貴族院も亦異議なく可決したり。

於是農商務省は八幡を中心とし、洞の海の海岸を埋立て敷地を海面に築出し、繫船の便を計り、又其の附近の田畑原野十五萬坪の買上を必要とし、一坪金五十錢を以て買收したり。然るに榎本大臣は將來發展の見込を以て更に十五萬坪の買收を希望し、其の旨を同地選出の衆議院議員平岡浩太郎に交涉せられたり。併し平岡は曩に田畑原野を買收するに當り、所有者の苦情あるに拘らず、百方說諭して承諾せしめたることなれば、今又十五萬坪の增加買上げは到底承諾の見込みなしと拒絶したるに依り、種々政府樂觀の內容及政府の歲入の關係等を說明し、平岡をして再び村民を說諭し泣く泣く承諾せしめたり。

以上陳述するが如くにして製鐵所の確定を見たれば、政府は製鐵所官制を發布し、長官に山內提雲を任命し、和田維四郎、野呂景義等を技師に任命して製鐵所設立の事業に着手したり。然るに明治三十年議會閉會後榎本大臣辭職し、金子次官も亦辭職し、大隈外務大臣農商務大臣を兼任し、大石正巳を次官に任命し、長官山內提雲を罷めて和田維四郎を後任とせられたり。

製鐵所の合併

此の時に當り雇聘したる獨逸製鐵技師職工等は着任し、設立の計畫据附等に着手したり。然れども日本技師と獨逸技師との間に圓滿を缺き製鐵事業の進捗意の如くならず、和田長官、技師等は屢々海外に赴き諸機械等を購入して經營したれども、溶鑛爐を始め製鋼の製造十分ならず、改正に改正を加へて屢々豫算の增加をなしたれども當初の目的を達せざりき。此の時に當り獨逸技師職工等は滿期に達し、解雇せられて歸國したり。而して其の經營は每年損失を重ぬるのみにて製鐵所の事業は一時蹉跌の窮境に陷りたり。

明治三十九年桂內閣辭職し、西園寺內閣成立するや、松岡康毅農商務大臣となり、陸軍中將中村雄次郎を以て長官に任命し、製鐵所內の積弊を一掃したるが爲に、明治四十五年に至り鐵道用のレール軍需品其他工業用の鐵材を供給し、初めて金五萬圓の利益を見

るに至りたりと言ふ。其後歐洲大戰爭起り歐米の製鐵は彼國の需要に應すること能はず、製鐵所の事業は益々發展したり。

此の時に當り支那のハンヤピン製鐵所に於ても銑鐵を製造し始めたれば、我が日本に鐵鑛を賣るにつき銑鐵の購入を條件として交涉し來り、製鐵所の當局者を惱ましたり。然るに幸なるかな、京都人石原廣一郎もマレー半島のヂョホールにて鐵山を發見し、其の採掘權を得て製鐵所に交涉したるに依り、製鐵所は日常の製鐵用の原料たる鐵鑛の外戰時貯蓄用として、多量の鑛石を供給することを契約したり。然るに近來に至り、更にヅングン、比律賓其の他南洋諸島にて多量の鐵鑛供給を確保したりと言ふ。今般政府は八幡製鐵所を中心とし、各地の製鐵所を合併して一大會社を創設し半官半民とし、政府は其の株金の半額以上を所有して經營せしむることに決定したり。而して此の新設會社の資本金は金三億六千萬圓餘にして、其の所有地は八幡丈にても百二十萬坪餘と言ふ。明治二十九年金六百萬圓を以て設立し、又買收したる民有地は三十萬坪（一坪五十錢なりしが、自今は工場地一坪四十圓內外なりと言ふ）を以て經營したるものが今日の如き盛況を呈し、政府は每年其の持株より生ずる利益は金約二千萬圓と言ふ。實に我が國製鐵所は種々なる積弊困難ありたるに拘はらず、今日の如く發達したるは慶賀に堪へざるなり。

事業初期の困難

其の當時に在りて製鐵事業の必要は既に痛感せられて居りたるが、何分にも國內にまだ洋式製鐵の技術あるにあらず、又建設資金にしても當時としては莫大なる國費の支出を要するので朝議も容易に決せなかつた由であるが、榎本子爵、金子伯爵の我が國の將來を達觀しての非常なる骨折に加ふるに、松方侯爵の熱心なる支援があつて、爰に八幡の製鐵所は今より四十三年前に生れ出で、越えて五年明治三十四年より　愈々其の作業が開始されたのである。阪谷男爵は其の當時大藏省の局長として製鐵所の創設に盡力になり、其の後大藏大臣になられるまで絕えず直接に製鐵所の發展に非常な支援をなされた關係上、引續き今日尙金子伯爵と共に本邦の製鐵業に多大の關心を持つて戴いて居るのである。此の偉大なる御二人の大恩人が、益々要路として國事に盡されて居らるゝのは、本邦の製鐵業にとりどんなに心強き極みであらう。

前陳の如き難產によつて生れ出た製鐵事業の始めは、經營、技術共に非常に困難であつたさうである。大學にも鐵冶金の先生があ

るでなし、實は日本に鐵や鋼を造り得る自信を持つた人は一人もなかつたと言つてよからう。無論日本には隨分古くから山陰道や奥州で刀劍、農具、鐵瓶等の原料となる鐵や、鋼が相當に造られて居つた事は周知の通りであるが、此の舊式の小規模な方法では到底國の必要は充し得なかつたのである。そこで勢ひ先進國に學ばなければならなかつた。かくて獨逸に學校卒業生や若い職工を留學せしめ、又獨逸の技師職工に來て貰つて苦心して一應の設備は出來たが、併し當時我が國として未だ總ての工業が幼稚であつたし、日本と獨逸とは原料氣候、其の他の條件も違ふので、中々うまく行かなかつた。其の頃の先輩諸氏は今聞いても全く涙ぐましいやうな苦心と奮闘を續けて今日の基礎を造られたのである。近年の企業にも容易ならざる苦心を要するのは言ふまでも無いが、到底同日の論ではなかつたと思ふ。

兎に角三十四年の二月作業は開始されたのであるが、其の後幾何もなくして技術上にも經濟上にも非常なる困難に遭遇し、所期の成績を擧ぐる能はざるのみならず、豫算は不足を生じて操業に渋滯を來し、一時熔鑛爐作業を中止するの餘儀なき事態にまで立ち至つた。こゝに於てか世論は八釜敷くなり、議會でも製鐵事業は果して本邦に成立し得るものなりや否やの問題が起つたので政府は明治三十五年製鐵事業調査委員會を設けて根本的に其の成否を檢討することとなつた。

創立當時より關係せられ、且準備時代に斡旋せられた古市公威博士を委員長とし、各方面の權威者を委員として熱心に討議せられた結果、

製鐵事業將來の成功については、今後必要の經營を爲さば懸念すべき點を有せず、而して其の必要の經營は敢て至難の業にあらず又經濟上決して見込みなきにあらざるなり。然れども製鐵所を官營組織のまゝ繼續せんとするは頗る不便不經濟を免かれず、斷然之を會社組織に改め作業上の敏活を計るを必要なりとす。（此の時の會社の名が日本製鐵株式會社で定款の草案迄起草されてゐる）といふ調査報告書の提出があつたので、政府は此の意見書に基き萬難を排して、八幡の製鐵事業遂行の方針を執り、再び熔鑛爐の煙を見るに至つたのである。會社組織になす事は實現しなかつたが、其の當時年産九萬瓲の規模は日露戰爭後に十八萬瓲に、更に明治の末年に三十萬瓲に擴張せられて大正の時代を迎へた。

附記

以上八幡製鐵所の沿革の記事中に今泉博士の名が特に出てゐないのは物足りない氣もするが、凡そ政界の表面に立つ人々や第一線の將軍の名は花々しく出るが、その蔭には鐵血鐵腕の無名の英雄のあることを知らねばならぬ。沿革の概要を記した筋書には逸脫することも時にあらうが、この沿革史の底を掘れば掘る程、今泉博士の苦心努力が泉のやうにあとから〳〵表面に現はれ出ることは知る人ぞ知る。技術方面の大立物はどこまでも「華を去り實に就く」といふ歩み方で徹底するが如くである。

石原廣一郎氏の話

別項製鐵所設立の沿革の中に石原氏のことが出てゐるが、ちやうどその石原氏の「南方の地下資源鐵鑛石」と「屑鐵」に關する講演の記事があつたから、玆にそれを載せさせて頂いて、鐵に關する理解を少しでも深めたいと思ふ。今泉博士の傳記を通して、さう心掛けることがやがて博士の遺志にも副うたことと信ずるから。因に石原氏は石原産業海運株式會社會長で、大正十年から八幡製鐵所に原鐵石の供給を開始、引續き同製鐵所使用原鐵石を多量に供給、その功により昭和六年勳六等に叙せられた人である。以下同氏の話。

一、南方の鐵鑛石に就いて

私は大正十年以來、マレー半島から此の製鐵原料を日本に二十數年に亙つて供給して居ります。其の後、增產に增產を重ね、これは私ばかりの仕事ではありません。フイリツピン、マレー半島の二、三ケ所に鐵山が開發され、支那事變直前に於て我が國で使つて居る製鐵原料の〇割迄がマレー半島とフイリツピンから供給されて居つた。支那と朝鮮から僅かに〇割しか來て居らなかつたのであります。

ところで此の度の大東亞戰が起り若しフイリツピンやマレー半島から鑛石が入つて來なくなつたら、これは大變なことになる。何とかその時の用意をして置かなければならぬと吾々常々考へて居つだのであります。ところが矢張り天の惠みであつたのでありませう。昭和十三年、我が南支派遣軍の手に依つて彼の海南島を占據することになりまして、海南島には立派な鐵山がある。彼の〇〇鐵山、〇〇鐵山、〇億以上の埋藏量を有つた大鐵山が發見されることになり、私は昭和十三年の四月に、飛行機で飛んで參りまして、海南島を調査致しました。これが今の〇〇、〇〇鐵山であつた。そこで直ちに私は一朝事があつた時の用意に、一日も早く、此の鐵山から日本に鑛石を入れるやうにしなければならぬと考へ、其の戰爭の中に於て〇〇の協力を得てすつかり設備を致しまして、〇年の〇月からどんどん鐵鑛が入つて來るやうになつて、昨今ではもうマレー半島から一塊の鐵鑛が入らなくても日本の製鐵に不自由せぬだけ入つて來るやうになつて來たのであります。ところが大東亞戰は簡單にマレー半島、フイリツピン、關領印度を易々と解決して呉れたものだから、それまではマレー半島の仕事は休んで居つたが、

もう今度は南洋の鐵鑛も採掘が出來るやうになつた。海南島から出るといふことになると、今度は日本の鐵鑛が餘つて來る。それでマレー半島を占據致しまして以來、マレー半島の鐵の採掘を始めたところでもう使ひ途がないのだから、それぢや當分休んで置からぢやないかといふので、マレー半島の鐵山は、當分休業しなければならぬといふ姿になつて來たのであります。

併しながらこゝで一言御注意して置きますが、これだけ鐵鑛が餘つて來て、使ひ途が無いのだから、もう日本は鐵に不自由しないといふので、昨年も本年も隣組や何かで古鐵回收運動だ、街の鐵鎖採掘だと盛んにやつて戴きました古鐵回收運動を、さうか、そんなに鐵があるならもう出さなくてもいゝだらうとお思ひになるかも知れない。ところがこれは飛んでもないことであります。

二、古鐵（屑鐵）に就て

鐵を造りますには、どうしても古鐵がなければならぬのであります。鐵鑛だけでは良い鐵が出來ないのです。あの鐵鑛石に古鐵を混ぜて造りますといふと、何となしに言ふに言はれぬ立派な鋼が出來るのであります。成るほど鐵鋼だけでも鋼は出來ますが、其の鋼は何時か曲つて來る何處かゞ狂つて來るのであります、だから日本の機械は悪いアメリカやドイツの機械はよいとされて居つた。船來は良いのだとされて居つたが、これは何が良かつたか、或は技術の相違もあつたかも知れぬ。然しながら、機械を造る所の地金其のものが良かつたのである。卽ち アメリカは鐵鑛五割、古鐵五割、ドイツに行きますと、古鐵六割に鐵鑛四割で鐵を造る。扨て日本はどうかといふと、日本は古鐵がないから、餘り入れない。多い年で漸く鐵鑛八割に古鐵二割、甚だしい時は古鐵一割しか入れない。地金其のものが悪いから困るのです。それだから如何に鐵鑛が出るからと云つて、もう古鐵回收はしないと云つたら大變で、今は戰爭の眞最中だ、良い兵器を造らなければならぬのであります。此の戰爭の續く限り、どん〳〵ある古鐵を出して貰はないと困るのであります。これから先どん〳〵出して下さい。今迄通り出して戴きたい。然し古鐵はもう減少して、これ以上ないと言はれる向があるかも知れませんが、然し兎に角、未だ〳〵殘されて居る筈ですから、どうしても今迄通り出して戴かなければならぬのであります。幸我が皇軍の手に依つて、あの太平洋、否支那海に於て、珊瑚海に於て、敵の軍艦、商船を思ふ存分海に打沈めまして、もうぼつ〳〵引揚げ工事が始まつたのでありますから、これが古鐵となつて代つて參りますれば、其の必要も少くなるかも知れませんが、それまではどうぞよろしくお願ひ致します。（昭和十七年週報に依る）

附記

今泉博士の著書に「鐵屑集」といふ上下二册千頁から成る大著がある。製鐵には屑鐵がなければならぬやうに、博士のこの「鐵屑集」は製鐵に關する限り貴重なる文獻といふべきであらう。

第七章　日本鋼管株式會社創立趣意書

瓦斯、水道、電燈、鐵道ノ如キ事業ガ文明人類ノ生活ニ向ツテ其必要缺ク可ラザル事敢テ言ヲ俟タズ。而シテ電氣ノ傳達ニ電線ヲ要シ、貨車ノ往來ニ鐵道ヲ要スルヲ知ルモノハ、瓦斯體、液體ノ配給ニ鋼管ヲ要スル事モ亦之ヲ知了スベシ。若シ世界鋼管ノ製産今日ノ隆盛ヲ來サザルニ於テハ、瓦斯及水道事業今日ノ發達ハ到底之ヲ想像スル事能ハザルベシ。其他製罐、製油、機械、造船ハ勿論一般ノ建築土木ニ於テモ鋼管ノ需要頗ル大ナルモノアリ。之ヲ以テ艪近歐米諸國ニ於ケル鋼管ノ製造事業ハ頗ル隆盛ニシテ、其産出額ハ各種鐵鋼製品ノ內ニ在リテ最モ主要ナル位置ヲ占ムルニ至レリ。米國ノ如キハナシヨナル製管會社ノミニテモ壹箇年優ニ壹百萬噸以上ノ鋼管ヲ製出シ、獨逸ニ於テハマンネスマン、ドイチエル・カイゼル、フエニツクス、デユツセルドルフ・レノレンワルツウエルク、ハーン、フルヂンスキー、ラウラ、ビスマルクノ如キ著名ナル製管工場アリテ、各其盛大ヲ競ヒ、又英國ニ於テハ彼ノ有名ナルスチユワード・ロイド、ウキルソン、ユニオンノ如キ大會社アリ、瑞典ノ如キモ猶フアーゲルスター、サンドウイーケン等アリ、而シテ塡國ニ至リテハ彼ノ巨大ナルウイツトコウキツツ製管工場ヲ有シ、製鐵事業ノ最モ幼稚ナル露國スラ今回ペートルスブルグ近郊コルピノニ於テ一大製管工場ヲ創設スルニ至レリ。

然ルニ本邦ノ如キハ既ニ久シク相當多量ノ鋼管ヲ需要シ來レルニ拘ラズ、此種製造工場ナキヲ以テ全部ノ需要ヲ輸入ニ仰グノ外ナク現ニ昨四十四年ノ如キハ無慮四百萬圓ノ輸入ヲ見ルニ至レリ。蓋シ本邦ニ於テモ瓦斯、水道ノ如キ文明設備ヲ初メ機械其他ノ製造工業亦著シク發達セル當然ノ結果トシテ、斯ノ如キ需要增進ヲ來セルモノナルベシ。試ニ瓦斯ノ一事業ニ就テ之ヲ見ルモ、目下既設及計畫中ノモノヲ合シテ八十餘會社ヲ算シ、而シテ是等諸會社ハ其事業ノ擴張ト共ニ年々其瓦斯供給ノ枝線延長ヲ實行シ、殆ンド底止スル處ナキヲ想像セバ、又以テ將來ニ於ケル需要增進ノ程度ヲ察知スルニ難カラザルベシ。需要ノ盛ナルコト斯ノ如クナルニ拘ハヲズ、本邦ニ於テ今日尙ホ未ダ一ノ鋼管製造所ナキハ、畢竟製鋼事業ニ關スル一般知識ノ幼稚ナルニ基クモノナルベシト雖モ、是レ實ニ我工業界

ニ於ケル一大缺陥ト云ハザル可カラズ。斯ノ如キハ荷クモ世ノ產業ヲ論ズルモノ、徒ラニ看過スル能ハザル所ニシテ、今ヤ事業創立ノ好機實ニ到來セルモノト云フベシ。

予輩聊カ是ニ見ル處アリ、數年間調査ヲ重ネ、尙最近歐洲各國ニ於ケル製管技術ノ實況ニ就キ綴密ノ研究ヲ遂ゲ、營利事業トシテ十分成功ノ基礎アルモノト認メタルヲ以テ、玆ニ壹箇年約壹萬噸ノ鋼管ヲ製造スルニ足ル可キ一製造所ヲ創立シ、同時ニ原料タル鋼塊ヲ製造シ、以テ事業ノ根柢ヲ固メント欲ス。而シテ鋼管ノ製造ハ當初先ヅ壹萬噸ノ程度ニ於テ豫定ノ成績ヲ擧ゲタル後、漸次機宜ニ應ジタル擴張ヲ遂ゲ、一ハ以テ關係諸事業ノ發達ニ資シ、一ハ以テ輸入防遏ノ功ヲ奏シ、之ニ依ツテ此本邦工業ノ一大缺陥ヲ補足セントス。是レ亦報國ノ一事業タルヲ失ハザルヲ信ズ。

今左ニ過去五年間我國ニ輸入セラレタル鋼管ノ數量及價格ヲ列擧シテ參考ニ資ス。

年次	數量	價格
三十九年	一〇、二四〇噸	一、五四七、一九八圓
四十年	二〇、二五六噸	二、九七二、三〇七圓
四十一年	一五、二二九噸	二、四三七、四九八圓
四十二年	一八、五五一噸	二、三〇五、六三〇圓
四十三年	二六、〇四〇噸	三、〇九七、六二六圓
五箇年總計	九〇、三一六噸	一二、三六〇、二五九圓
五箇年平均	一八、〇六三噸	二、四七二、〇五三圓

但シ表中ノ價格ハ輸入稅、金利、陸揚費等ヲ含マザルモノナリ又汽罐、船舶其他既製品ノ一部トシテ輸入セラレタル鋼管類ハ凡テ之ヲ含マズ。

尙其後ニ於ケル鋼管ノ需要益々增加シ、現ニ昨年四十四年度ノ如キ一月ヨリ十一月迄ノ累計參百八拾七萬參千七百拾六圓ニ達シ、

一昨年度ノ同累計ニ比シ壹百萬圓以上ノ增加ヲ示セリ。サレバ此種鋼材ハ實ニ本邦輸入品中ニ於テ侮ル可カラザル位置ニ達シタルモノト云フ可シ。

本事業ノ技術擔當者タルベキ今泉嘉一郎氏ハ明治二十五年工科大學ヲ卒業シ、直ニ農商務省技師ヲ奉職シテ、當時創設セラレタル製鐵事業調査會ノ事務ニ從事シ、二十七年獨逸フライベルヒ鑛山大學ニ入學シ製鐵學ヲ修メ、同二十八年更ニ實地練習ノ爲同國ヘールデー製鐵所ニ於テ技師ヲ奉職シ、二十九年同地ニ於テ日本官立製鐵所ノ技師ニ任命セラレ、更ニ伯林鑛山大學ニ入學シ、爾後歐米諸製鐵所ヲ視察シ、三十年歸朝爾來八幡製鐵所ノ建設ニ從事シ、遂ニ勅任技師長トシテ工務部長、鋼材部長兼職ノ下ニ、四十三年四月ニ至ル迄滿十四年間官立製鐵所ノ實地ニ從事シ、其間歐米ヲ視察スルコト前後三回ニ及ビ、一般製鐵事業ト共ニ具サニ歐米ニ於ケル製管技術ヲ研究シタルガ、將來民業ニ從事スルノ志願ヲ以テ本職ヲ辭シタルモ、今尙休職技師トシテ製鐵事業調査ノ囑託ヲ受ケ、且ツ在官ノ儘民間ニ於ケル鋼管製造事業ニ從事スルノ公許ヲ得タルモノナリ。

一、起業說明書

（一）鋼管事業ノ近狀　鋼管ニ二種アリ。一ハ鋼塊ヨリ一旦長キ平板ヲ製シ、之ヲ曲ゲテ管形トナシ、繼目ヲ燒付ケタルニ依リ管ノ全長ニ亘リ此繼目ヲ存スルモノニシテ、繼目管（英 Buttwelded tubes, Lap welded tubes.）ト稱シ、一ハ鋼塊ヨリ直ニ引延バシテ管トナシタルニ依リ、管ノ全體一ノ繼目ナク完全ニ實質ヲ存スルモノニシテ、引拔管又ハ繼目無管（英 Solid drawn tubes, Seamless tubes）ト稱ス。前者ハ舊式ノ方法ニシテ、後者ハ新式ノ發明ナリトス。一般ニ鋼鐵ノ性質トシテ如何ニ巧妙ニ燒付クトモ、燒付ケザル部分ニ比シテ十分ノ七ノ强サヲ有スルニ過ギズ。實地ノ使用ニ際シ高壓ノ瓦斯、蒸汽又ハ水ヲ通ズル時ハ、繼目ヨリ爆發スルノ危險少カラズ。又屈曲、變形等ノ加工ヲナス時ハ繼目ハ自然ニ分離スルコトアリ。之ニ反シ引拔管ハ周璧盡ク健全ナル同一實質ヨリ成ルヲ以テ、管トシテ眞ニ理想的ノ性質ヲ備フルモノト云フ可シ。又之ガ製造ニ就テモ繼目管ハ極メテ軟質ノ鋼鐵ヲ撰バザル可カラズ。又其管內ノ厚サハ原料タル平板ノ厚サニ從ツテ定ムルノ外ナケレドモ、引拔管ハ殆ド硬軟如何ニ論ナク、各種ノ鋼鐵ヲ用ユルコトヲ得可クアリ、引拔管製造便法ノ發明者マンネスマン氏兄弟ノ專賣權ガ西曆千八百其管肉ノ如キハ製造ノ瞬間ニ於テ厚薄自在ニ之ヲ造リ得ルノ便アリ、

百九十年獨貨壹千六百萬マークヲ以テ賣却セラレ、之ニ基キ資本金參千六百萬マークヲ以テ獨逸、墺地利マンネスマン製管會社ノ設立ヲ見タルガ如キハ、如何ニ世人ガ引抜管ヲ尊重スルヤノ程度ヲ察知スルニ足ル可シ。

抑モ引抜管ハ其用途極メテ廣ク、從ツテ世間ノ需要最モ多キモノナレドモ、當初尚其代價ノ高價ナリシガタメ、未ダ充分ニ世ノ需要者ヲ滿足セシムルコト能ハザリシト雖モ、晩近ニ於ケル機械ノ發明改良ニ依リ、製造費モ亦著シク低廉トナリタルヲ以テ、原料ノ市價如何ニ依リテハ却ツテ繼目管ヨリ廉價ニ製造セラルヽコトトナリタルガ故ニ、歐米市場ニ於テ繼目管ノ全ク驅逐セラルヽヲ見ルコト決シテ遠キ將來ニアラザルベキハ、識者ノ旣ニ認識スル處ナリトス。我日本ノ如キハ則チ今日已ニ其情況ヲ具ヘタルモノナリ。日本ニテ繼目管ノ原料タル平鋼板ハ目下凡テ輸入ニ仰グヲ以テ、其代價一噸ニ付八拾五圓ヲ要ス。他日日本ニ於テ製造スルモノアリトスルモ七拾五圓ヲ下ルコトナカルベシ。之ニ反シ引抜管ノ原料タル鋼塊ハ輸入スルモ一噸六拾圓、自ラ之ヲ製造スルニ於テハ四拾六圓ニ過ギズシテ、引抜管ノ方却ツテ廉價ニ製造スルヲ得ルコトトナル。

前揭ノ事情ニ因リ本社ハ專ラ引抜管ヲ製造シテ一般ノ需要ニ應ゼントス。目下日本ニ於ケル繼目管ノ市價壹噸百貳拾五圓內外、引抜管壹噸百五拾圓內外ナレドモ、本社ハ其製品一噸ノ販賣代價ヲ凡テ百拾五圓トシテ豫算ヲ立テタリ。日本ノ輸入稅ガ繼目管壹噸ニ付キ拾八圓四拾錢、引抜管壹噸ニ付參拾八圓六拾四錢ナルコトハ、益々以テ本事業ヲ利スルモノアルヲ知ル可シ。

(二) 引抜鋼管ノ特長　今繼目管ニ比シテ引抜管ノ優レル點ヲ指摘スレバ大略左ノ如シ。

(イ) 高壓蒸汽又ハ高壓瓦斯ニ適スルコト

(ロ) 水壓管ニ使用シ得ルコトハボイラーチューブ又ハロコモチーブ・チューブニ適スルコト

(ハ) 同一壓力ニ對シテ重量ノ小ナルコト

(ニ) 屈曲其他ノ加工ニ適スルコト

(ホ) 螺旋部曲ノ完全ナルタメ繼手ヨリ漏洩ナキコト

(ヘ) 管端ノ收縮、擴張等ヲナシ得ルコト

(ト) 內面ニ凸起ヲ生ゼザルコト、從ツテ瓦斯體、液體ノ流通ニ摩擦少キコト

(リ) 管肉ノ著シク厚キモノ又ハ薄キモノヲ自在ニ造リ得ルコト

(ヌ) 自轉車其他精功品ノ製造ニ適スルコト

(ル) 製造技術ニ於テ鍛接ノ困難ナキコト

(ラ) 鋼質ハ硬軟何レニテモ用ヒ得ルコト

(ワ) 管ノ寸法異ルル毎ニ原料鋼板ノ寸法ヲ異ニスルガ如キ不便ナク、同一ノ鋼塊ヲ用ヒテ製造ノ際長短、厚薄ヲ殆ンド隨意ニ定メ得ルコト

(三) 鋼塊ノ製造　鋼塊ハ外國ヨリ輸入スルトキハ一噸ニ付六拾圓內外ナレドモ、自ラ之ヲ製造スルトキハ實費四拾五圓內外ニシテ金利、償却等ヲ加算スルモ尙輸入ニ比シ著シキ利益アルヲ以テ、本社ハ鋼管製造ノ外ニ之レガ原料タル鋼塊ヲモ製造スルコトセリ。

(四) 工場建設ノ位置　工場敷地ハ橫濱港ニ接近セル沿岸ニ於テ海陸輸送ノ便利ナル位置ヲ撰定シ、他日擴張ニ應ズル餘地ヲ備フルモノトス。

(五) 建物ノ築造　工場本館ハ凡テ鐵骨ヲ以テ永久的堅牢ヲ主トシ、事務所、雜建物ノ如キハ出來得ル限リノ節約ヲ主トス。

(六) 諸機械及各種爐ノ選定　諸機械及各種爐ニ就テハ歐米ニ於ケル最新式ノモノヲ撰定シ、同時ニ本邦特殊ノ情況ニ應ズルコトヲ主眼トス。

製造スベキ鋼管ノ太サハ目下瓦斯、水道、石油事業其他最モ盛ナル需要ニ應ズルタメ、徑六吋以下、二分ノ一吋ト定メタルモ、晩近電柱其他ニ用ユルタメ六吋以上十吋迄ノ需要モ亦漸々增加スルノ傾向アルヲ以テ、本社ハ他日漸次事業ヲ擴張シテ是等ヲモ併セ製造セン事ヲ期ス。機械ノ全製造力ハ職工熟練ノ場合ニ於テ一箇年壹萬參千噸ヲ製造シ得ル樣設備スルモ、豫算ニ於テハ單ニ壹萬噸ヲ製造スルモノトシテ計算セリ。

機械据付及各種爐製造結了シタルトキハ、二箇月間各部ノ試運轉、調整及鋼管ノ試製ヲ行ハントス。

(七) 機械ノ原動力　機械ノ動力トシテハ本社ノ如キ事業ニ對シテ電氣ノ最モ經濟的ナルコトハ專門家ノ知了スル所スルト共ニ、水力電氣事業ノ興隆ニヨリ將來京濱地方ニ於ケル電氣ノ供給頗ル便利ナルモノアルベキヲ豫想シ、凡テ電力ニ依ルコトトセリ。之ガ爲本

社ハ高價ナル原動力工場設備ヲ全ク要セザルト共ニ、作業上大ニ動力ノ經濟ヲ期シ得ル見込ミナリ。

（八）　外國技師及職工長ノ雇聘　本社ハ事業創立ノ最初ヨリ成ルベク技術ノ安全ヲ期スルタメ當初三箇年間ハ經驗アル外國技師一名職工長二名ヲ雇聘スルモノトシテ、之ガ俸給及社宅料年額壹萬七千九百圓ヲ支出豫算中ニ編入シタリ、サレバ一旦日本職工熟練ノ域ニ達シ、全能力ヲ發揮シテ一箇年產額壹萬三千噸ヲ得、同時ニ外國人ヲ要セザルニ至レバ、本社ノ純益ハ更ニ多大ノ增加ヲナスモノナリトス。

（九）　起業及營業開始ノ豫定時期

明治四十五年四月中　創立

同　五月中　機械註文ノ爲當事者海外派遣

同　七月　機械註文

明治四十六年三月中　機械到着

同　六月中　機械据付結了

同　七月及八月　試運轉

同　九月ヨリ　本就業

（十）　資本金拂込ノ豫定　資本金貳百萬圓ノ內當初先ヅ百貳拾萬圓ヲ以テ起業ス。其拂込時期ノ豫定左ノ如シ

第一回拂込　創立ノ際五拾萬圓一株ニ付拾貳圓五拾錢

第二回拂込　第一回拂込後約八箇月後ノ豫定參拾萬圓同七圓五拾錢

第三回拂込　第二回拂込後約三箇月後ノ豫定四拾萬圓同拾圓

（十一）　流通資本金　流通資本金ハ資本金ノ內ヨリ拾壹萬圓ヲ振當テ、其他ハ必要ニ應ジ借入金ヲ以テ處辨ス。之ガタメ收支豫算中ニ若干ノ利子ヲ見込ミタリ。

（十二）　收支豫算ノ算出

（イ）　鋼製塊造費ハ職工熟練ノ場合ニ於テ一噸ニ付四拾五圓五拾四錢ナルベキ豫定ナレドモ、就業第一期ハ六拾圓、第二期ハ五拾圓、第三期ハ四拾七圓、第四期ニ至リテ始メテ豫定ニ達スルモノトナシタリ。

（ロ）　鋼塊ヨリ製品ノ產出歩止リハ歐米ニ在リテハ熟練セル場合ニハ八割五歩ナレドモ、本社ハ當初四期間八割ニ止ルモノトシテ豫算セリ。

（ハ）　鋼管製造力ハ職工熟練ノ場合ニ一箇年壹萬參千噸ヲ製造スルヲ得レドモ、豫算ニハ第一期（三箇月）ニ於テ壹千貳百噸（第二期）六箇月ニ四千噸、第三期ニ四千五百噸、第四期及第五期ニ五千噸トシテ計算セリ。

一、起業費豫算

一	地所買收費及土工費	一五〇、〇〇〇圓
一	建物建設費	一三九、〇〇〇圓
一	諸機械費	四三一、七五七圓
一	同上据付費	六三、四五八圓
一	各種爐築造費共	二〇二、五〇〇圓
一	試運轉費	一一、二六〇圓
一	總掛費	四二、〇二五圓
一	豫備費	五〇、〇〇〇圓
一	流通資金	一一〇、〇〇〇圓
合計		一、二〇〇、〇〇〇圓

第八章　鋼管創業二十年回顧錄（昭和八年十二月五日發行）

自序

日本鋼管株式會社は、明治四十五年六月を以て創立を告げ、工場建設に一年十ケ月を費した後、大正三年四月より作業を開始した。即ち今年今月は創立以來の二十一年三ケ月作業開始以來の十九年六ケ月に相當する譯である。予は當社に對し最も深き關係を有する一人として、斯く當社創業二十年を告げんとする今日に遭遇し、今昔の感想も亦た最も深き者である。偶々同僚諸氏の依囑もあつたので玆に本書を編し、當社創立當時の事情及其後今日迄の經過を述べ、聊か當社の今日を記念したのである。固より予の記憶を辿つて概要を述べたに過ぎない。

回顧すれば明治四十三年春であつた。予は自己の不敏を省みず、當社の如きものを創設し、之に基いて鋼材製造事業の民間移植を指導せんと企て、多年奉職せる八幡製鐵所を退き、先づ大倉喜八郎氏及岸本吉右衛門氏等の協力の下に其實現に努めた。然るに夫は、八幡の既成規模に比して微々たる一小企業で始めんとしたのであるが、當時の民業としては一の冒險的計畫と見られ、內容の如何に拘らず時機未だ熟せざるの感があつた。

偶々明治四十四年六月、舊友白石元治郎氏に邂逅し、其計畫を陳べて協力を望んだが、交涉約半ケ年にして氏は遂に予の說を容るゝに至つた。爾來氏と共に專ら同志の糾合に努め、奔走亦た半ケ年、遂に當社の創立を見るに至つた。此創立に就ては、主として白石氏個人の熱烈なる努力と澁澤子爵、淺野總一郎氏、大橋新太郎氏、大川平三郎氏、岸本吉右衛門氏等の後援とに謝すべき事頗る大なるものがあつた。

爾來白石氏は社長として事業經營の中心となり、予は氏を佐けて作業を指導し、氏と共に具さに創業の苦辛を嘗めた。斯くして三年歐洲大戰の勃發となり、事業の急激なる發展を來した。然るに戰後に襲來したる一般財界の恐慌は、數年に亙りて容易に回復せず、事

業經營上極めて愼重を要する場合となり、大正十年、財界並に實業界に於て多年の經驗と信望とを有する大川氏を社長に推薦し、白石氏自ら副社長として、兩氏協力經營の衝に當る事となつた。斯くして十二ケ年、今日に及んだのである。

思へば此過去二十年の歲月は、實に世界一般を通じ、異常なる財界の波瀾重疊時代であつた。當社は創業早々より此間に浮沈し、以て今日に至つたが、幸にも、凡ゆる困難に打勝ち、假令一時の消長はあつても、大體上、年と共に社運の進展を見ることを得た。要するに八幡鐵製所の創立に後るゝこと十五年、歐洲大戰に先立つこと三年にして、當社は呱々の聲を揚げた譯であるが、當時我國の一般狀態を見れば、資本、原料、技術、勞働、販路に至る迄、工業の要素何一つ滿足なるものなく、現代的工業計畫者の眼を以て見れば、實に貧弱なる未開の環境であつた。例へばその資本金とても、今日の事とすれば、物の數でもないと見らるゝ少額であるが、當時としては夫が相當の大金であつた。而かも企業觀念の乏しく、殊に重工業などに經驗少き當時の世態に於て、假令少額の資金なりとも、鋼管事業などに投ずる事は、容易ならぬ考慮と決心とを要した事であつた。

斯くして成立した日本鋼管株式會社は、前述の通り、作業開始後久しからずして、早くも歐洲大戰の勃發に遭ひ、日夜奮勵の結果として、俄然飛躍的發展を來し、爾來一難を經る毎に反撥も亦た顯著にして、漸次其根柢を固め今日に及んだのである。大戰當時の好影響のみを以てすれば、一見僥倖兒の觀はあるが假令此大戰が無かつたとしても、我が國勢の自働的隆興に伴つて、必然的に發展すべしとした計畫當初の觀察は、蓋し錯覺では無かつたと思ふ。兎も角彼の時代に於て、民間鋼材製造事業の前驅として出現し、時局の影響とは云へ、大戰中に於て、早くも一般の驚異となつた如き發展をなしたことは、少くとも「民業と雖も亦た成立し得べし」と云ふ一例證を示し、我國に於ける民營鐵鋼業の勃興に拍車を加へた事は、衡も當時の狀態を知る者の、認めざるを得ない所であらう。

翻つて今日までの社業の成績を見れば、創立の當初は年產額一萬餘噸を目標としたが其生產額は年と共に增大し、常に民間鐵鋼會社中の首位を占めた。而して今日に於ける各種製品合計年產額は、殆んど三十萬噸に達せんとし、其販賣價格も今や年間四千萬圓に上るに至つた。

斯く觀じ來れば、當社の事業は大體に於て順調に發達したものである。而して事の玆に至つた原因の主なるものとしては、何としても、歷代重役の苦辛、從業各員の努力、更に之に加へて株主諸氏の忍耐に歸するの外はない。併しながら玆に順調の發達と云ふは、た

だ過去二十年間の財界の大波瀾を凌ぎながら、漸次事業の基礎を固めて來た事と、其間相當多量の生産を擧げて、聊か國家に貢獻した事とを指したに過ぎず、當社の事業はまだ成功を誇るに値しないと思ふ。殊に今や非常時に際會し、而かも財界の安定は容易に望めぬ事であらふ。斯かる場合に於て、當社の取るべき途としては、今日迄の經驗に鑑ちず、若くは夫以上に、人事のベストを盡して、國家の爲、社業の爲、邁進するの外無しと信ずる。

若し夫れ目下問題となつて居る製鐵合同に就ては、徒らに株主の犧牲を餘儀無くするが如き事なくして、當社の合同參加が實現され之に依つて事業將來の安固と、其健實なる發達が保證され、同時に經濟國策にも貢獻する事を得ば、蓋し何人も本懷とする所であらうと思ふ。

予は今此記念の機會に臨んで、粗雜ながら記憶の儘に、茲に回想錄を編し、聊か我國の鋼材事業史に一片の資料を添ゆると共に、我日本鋼管株式會社に協力する人々に對し、今日迄の苦辛、努力、忍耐に敬意を表し、其洋々たる將來を祝福する。思ふに自己の微力を省みず、斯かる事業を計畫して、何等準備的用意を持たれざりし白石氏を初め、幾多の友人先輩を煩はし、多數の株主を勸誘して今日に至つた、其元來の發頭人である予としては、何としても責任の甚だ輕からざるもの有るを感ぜざるを得ない。思うて茲に至る時、社運將來の向上を祈るの念、蓋し何人にも讓らざるものがある聊か私情を陳べて序となす。

昭和八年九月

著者識

當社と「人」（之は第十四章の題目であるが、ここにはその初の部分のみ掲げる）

予は此回顧錄の序言に於て、當社の今日を成したる最大原因は、歷代重役の苦辛、從業員の努力、株主の忍耐に歸すべきであると述べた。要するに人の仕事であつた。我國に初めての仕事を而かも民業として手を着けて以來、政治上、經濟上、波瀾重疊を極め、內外の支障に滿たされた二十年の歲月を凌ぎながら、兎も角事業今日の基礎を築き上げるに至つた事は、何としても關係各人の苦辛、努力、忍耐に他ならぬ。

〔一〕創立を由來した重要の「人」

予は今「當社の人」に就て回想する場合に、當社創立以後に於ける義務に關係の有無に拘らず、其創立を由來した最も重要なる人々の事を先づ想起した。夫は左の諸氏であつた。

一、我國に於て初めて鋼管製造事業を思ひ立たれた　男爵　大倉喜八郎氏
一、鋼管製造事業の民間成立を幫助された　男爵　中村雄次郎氏
一、最後迄予の計畫に援助を與へて呉れた　岸本吉右衞門氏
一、予の計畫を容れて日本鋼管株式會社を創立した　白石元治郎氏
一、當社の創立運動に直接最大の援助を與へられた　大川平三郎氏
一、當社の創立委員長として創立を遂行された　大橋新太郎氏
一、本事業の成立に贊同し親しく各方面の慫慂に勉められた　子爵　澁澤榮一氏

右諸氏の外、創立運動に對し、多大の後援を與へられたる人に淺野總一郎氏と植村澄三郎氏とがある。

是等諸氏の內白石、大川、大橋の三氏は、創立以來今日に至るも尙當社の爲盡力されて居る。夫以外の諸氏は植村氏を除き、皆既に他界せられた事は、今玆に當時を回想するに當つて感慨無量である。

第九章　創業滿三十周年に際して

白石元治郎

（一）

私は越後榊原藩の極く微祿な士族の家に生れ、幼い時から武士氣質を以て養育されて、嘯傲りなぞといふことは、決して口にしてはならないものと、強く教へ込まれた。

そこで、私は十三、四歳の頃から、子供心にも、一體自分は將來何になつたら宜いかといふことを考へて、丁度世は明治新政のもとに、ますます文明開化を學び富國強兵を進めなければならない時勢に向いてゐたので、今後日本はどうしても海外貿易、海外關係が深くなるべきであるし、又それを押し進めなければならない筈であるから、一つ自分は實業家になつて大いに日本の產業を興し海外發展を計つてやらうと、斯ういふ心持を當時ひそかに抱いたのである。

さうして、十四歳の時に東京へ出て慶應義塾に入り、其の後、大學豫備門に轉じ法科を專攻することになつたのであるが、しかし、法律家にならうの考へば少しもなく、やはり三つ子の魂で、必らず實業家として身を立てようといふ志は變へなかつた。

さて、愈々大學を卒業する頃になり、卒業後の身の振り方について、穗積陳重先生に御相談申し上げたところ、「君が商賣の勉强をしたいと云ふのならば、淺野總一郎さんのもとで働くことが出來れば、あの人は學問はないけれども非常に勉强家で大いに前途のある人だから、丁度好いと思ふが、一つ澁澤さんに紹介してやるから相談して見ろ」といふわけで、穗積先生の御紹介で澁澤榮一さんに御目にかゝり色々と教へを受けたのであるが、私は、自分の實業家に成りたいと云ふ志を述べ、「要するに、正直、眞面目なやり方で仕事をして行きたい、それでもつて自分の働きがなく伸びなければ伸びないでよい、けれども、正直で伸びる途があれば、それで進んで行きたいと思ひます」と斯う申し上げると、「それは結構だ、その心掛けを以て大いに勉强してやり給へ」といふので、澁澤さんか

ら、先代淺野總一郎氏に御紹介を頂き、こゝに淺野商店に入ることゝなつたのである。これが、明治二十五年のことである。

當時、淺野商店のやつてゐた仕事の重なるものは、深川のセメント、淺野廻漕部、石炭部、鑛山部の四つであつた。入社した當座は私も船舶とか鑛山とか淺野のやつてゐる仕事は皆食ひ噛りながら手傳つてゐたのであるが、その頃、淺野の本店は元の永代橋の際に、日本銀行と隣り合はせに在つたもので、私もそこへ通つたわけである。小網町に支店があり、廻漕部と言つて昔風の店である。私は貧乏だから、食費だけ拂つてこゝに泊めて貰ふことになり、月三圓づゝ拂つて二階に泊つてゐた。丁度本店から二、三丁の距離である。その時代に、淺野から鍛へられたことは相當なもので、今でも想ひ出すが、私は入店前に淺野に會ひ、「この度は入店させて頂いて有難うございます。大いに勉强してみる積りですから」と御禮を述べ、實は、大學の卒業試驗に、三年かゝつて習つた全科目を一度にされたので、可成り頑强に鍛へ上げた身體のつもりですが大分疲れてをりますから、一週間ほど逗子にでも出かけて靜養し、英氣を取り戻してからお店へ出たいと思ひます。しかし、御用があれば何時でも參ります」と言つた。淺野は、默つて厭な顏をして聞いてゐたが、逗子へ着いた翌朝、早速電報で呼びつけられたのには、いさゝか驚いた。一日に二十時間も働いて來た淺野のことだから、若い盛りの青年で而かも初入店の者が、暢氣に保養するなどとは以ての外のことゝ考へたのに相違ない。萬事この調子だから、朝は七時までに店に出てをらねばならぬ。用事が濟めば何時歸つてもいゝとは言つたが、その用事が仲々濟まないので、友人などと迂濶に會合の約束などをしようものなら、えらい事になるかも知れない。しかも、日曜も祭日もないのである。淺野は當時四十六の働き盛りだつたが、私から見ると餘程老成してゐたやうに見えた。そこで、こんな爺さんに負けてなるものかと、運動できたへ上げた身體で一生懸命に初志貫徹に努めた。かうして、一年は瞬く間に過きたのである。

（二）

明治二十六年に、淺野は横濱のサミュル・サミュル商會が油槽船で運ぶロシアの石油即ち露油の關東一手販賣を引受けた。この仕事は、西洋人相手で英語を喋る人間が必要なので、私が專ら其の方をやることになり、その時はじめて支配人として石油の方を擔任したのである。淺野は人を使ふのに良いと思ふと、ウンと力を入れて信用するが、その反對に悪いと思ひ出したら絶對に信用しなかつた。

幸ひにして私は、いくらか役に立つものと認められたのか、二十六、七、八、九と四年間石油の支配人兼淺野の祕書役をやらされた。

淺野は、外國から石油の輸入をやつたので石油に對して興味が湧き、越後の石油を開發してみようとか、日本に於て石油を掘つてみようとかいふやうなことを考へ、それで私も、其の方面の用向きに飛び廻つた。

これより先き、入つて一、二年經つた頃かと思ふが、私は淺野に斯ういふことを申した。「私は、あなたのお蔭で商賣を覺えさせて頂く、けれども私は一生涯あなたの仕事ばかりに犬馬の勞を取るといふやうなやり方はして居たくない、私は私で何か仕事をして見たいのです。その時はお許しを願ひたい。さればと言つて、今三年や五年で飛び出さうといふ譯ではありません。一廉の商賣を覺えたら自分で何かやつてみたいといふ心持で居りますから、どうか其のお積りで願ひ度い」と言ふと、「それはよろしい、若い者はそれ位の元氣を持つてゐなければならぬ、しかし、何をやるにしても、十年位は苦しんでみなければ駄目だ」との答、「勿論その覺悟はして居ます。何時か機會があつたら、許して戴きたいと思ひます」斯ういふわけで、何時かは獨立の覺悟を抱いてゐた。

丁度明治二十九年、芳川顯正氏の遞信大臣時代であるが、それまで日本に出入りする貨物は、大部分外國船に依つてゐたもので、芳川氏は、ひとつ日本海運の發達の爲め航海奬勵法、造船奬勵法を制定して、當時年額二千五、六百萬圓も外國船に支拂つてゐる運賃を日本の船に取らせるようにしなければならない、其の爲めには、航海奬勵、造船奬勵金として、將來益々伸びる可能性のある日本の海運界に、一千萬圓まで 給與しても良いといふ肚を決められた。そして、此の年の帝國議會で此兩案は可決され、海外定期航路の船舶に保護金を與へることが決定したので、淺野はこの機會に積極的に海運界に乘り出さうと考へたのだ。斯うして、此の保護金に依り太平洋の航路を開くべく、淺野が中心となつて、東洋汽船會社といふ新會社が設立されたのである。

さうして、此の新會社の事業開始と共に、私は其支配人を命ぜられ、明治二十九年から四十三年まで專ら其の方を擔當した。

明治三十一年には、船舶業研究の爲め英吉利に洋行し、この時は、約半歲ほど滯在して三十二年の春、一先づ歸朝したが、やがて桑港支店長に任命され、三十二、三、四、五年と足掛け四年間は桑港を中心に滯在した。

其の後、或は南米に、或は歐羅巴に數度往復し、北米の如きは私の東洋汽船十五年間の在任中に十數回も往復したものである。斯うして、約八、九年の間は內地にゐることが三分の一、あとの三分の二は海外を歩いてばかりゐたわけである。その間、勿論外國航路の

仕事も研究したのであるが、もう一つ石油のことを調べさせられた。淺野は「日本には石油が出ない、石炭が高い、外國に較べると、亞米利加あたりでは其の當時一噸二弗位で買へる石炭が、日本は非常に高い、こんなことでは日本の工業は發達しないから、之を救ふにはどうしても原油を外國から輸入して內地で精製し、精製したものをランプ油、ガソリン等として用ひ、殘つた重油は船なり工場なりに使ふ、これは國家的にも重要な仕事だから、此の仕事を始めよう」とて、遠大な考へを以て、世界中の石油に關することを調査させられたわけである。

そんな關係から海外を歩いてゐる中に、外國の造船所とか、鐵工場とか、大工場に出入りす 機會が多かつた。もともと學校教育は法律を學んだので、さういふ仕事のことには何の智識もないのだが、偖て彼方此方歩いて見ると、英吉利でも佛蘭西でも獨逸でも亞米利加でも、隆々として榮えてゐる國は、みな機械工業、造船工業、軍需工業が盛んであり、それにはどうしても鐵鋼業の發展が源を成してゐるのだ、と斯ういふ點に氣付いたわけである。日本にも、何とかさういふ重工業の方面を最も伸びるやうにしなければならないが、偖て、自分には何も其の方面の知識は無いし、唯だ其の發達を希求するといふ一種のインプレッションを起した丈けであつた。

（三）

其の中、明治四十四年に矢張り東洋汽船の用務を帶びて印度へ行つた。どうしても船會社は一線ではいかぬ、少くとも二つ三つの航路を持つことが事業上有利であるから、その新航路をどうすればよいかといふことを研究に印度へ行つた譯である。ところが偶然にもビナンからカルカツタまでの船に乘つたところが丁度印度のベンゴール、アイヨンアニド、スチール、カンパニーといふ鐵會社のマネーデヤーと同船したのだ。

その人と色々な話をしてゐる中に、「俺の所でヅク（銑鐵）が餘るが日本で使へ いだらうか」と言ふ。ヅクで鋼を造るといふことは知つてゐるが、どんな經路をとつて造るのか知らない、然し、これ 將來日印間の船の荷物にはなるし、又一方私の今述べたやうな心持が頭にあるものだから、「兎に角、見本を貰はう、値段は幾らで渡して呉れるかといふので、先方は見本と値段を敎へて呉れたわけである。

印度視察を終つて大阪に歸り、私の同期で工科を出た今泉嘉一郎君が丁度八幡製鐵所を辭めて遊んでゐるから、今泉君に聞いたらば解るだらうと思つて、明治四十四年六月十二日のこと、思ふが、當時大倉組の手傳ひをして居つた同君を、大倉組の大阪支店に訪ね、例のヅクの見本を見せた。

「斯んなものが出來るさうだが、これは何か役に立たないだらうか」と言ふと、「これは立派なものだ、日本では英吉利から輸入してゐるんだが、高くもあるし距離も遠い。君の聽いて來た値段ならば値段も安いし、距離も近い。これは至極結構だ、一體君はどうする積りかと言ふ。「どうする積りかと言つて、何も考へがあるわけぢやない。これが商賣になれば結構だ」と思ふのだと答へると、それぢや僕の知つてゐる人で大阪の岸本吉右衞門（現在の岸本吉左衞門氏の嚴父）といふ人があるが、この人はヅクも自ら輸入してやつてゐる。この人に一つ商賣させてみたらどうか」「それがよろしい」といふわけでこの方は岸本商店の手を以て輸入することになつた。

さて、今泉君とそんな話を交してゐる間に、同君が言ふには、「既に君も知つてゐるだらうけれど、日本の鐵鋼業はモツと民間でも興るやうにしなければならぬのだから、君が一つやつてみて呉れてはどうか」といふわけで、其の後も時々飯を一緒に食つたりした折に、頻りと鐵鋼の話しを私に聞かせてくれた。私も、特別に深いインタレストは持たなかつたが、商賣上の關係もあり、至る處でそれこそ辛抱強く聽いて居つたので、幾らか朧氣な智識が吹き込まれて參つたのである。その後も、今泉君から鋼管製造の計畫を示され、「やれやれ」と頻りに言つて迫つて來る。ところが、私には、興味は湧いてゐたが未だ事業の見當が一向付かなかつた。

所で東洋汽船の方は、私が明治二十九年からズツと預つてやつて來て、隨分その間波瀾はあつたけれども、其の頃になつて漸く事業も落着き、一かどの仕事になつて來たのである。

それで、豫て考へて居たことであるし、一つ鐵鋼業でもやつてみたらどうか、お國の爲めにもなるだらう、さう思つて淺野に相談してみた。「斯ういふ話しがあるので、やつてみようと思ふのですが、どうでせうか」と言ふと、淺野は「鐵鋼は結構な仕事で、自分も二十年も前から研究し、釜石の拂下げを受けてみようとか、何をやつてみようとか色々な企てを立てゝみたが、しかし、鐵鋼は仲々むづかしい、骨の折れる仕事だ。八幡などは、投資に對して金利も要らないし、配當もせず、稅金も拂はないで濟むといふ氣樂なものであるに拘らず、毎年莫大な損ばかりして議會の問題になつてゐる。隨分金の要る仕事だ。それなのに、君が少しばかりの金を以てやるのは實にむづかしい仕事である。まあ、澁澤が何と言ふか、澁澤の所へ相談に行つて見給へと斯う言ふ。

それから、澁澤さんの所へ相談に行つたら、實は、私も日本で鐵鋼業をモツと發達させなければならぬと考へてゐるので、多少その道を調べてみたが仲々むづかしい。隨分私は色々な仕事をやつてゐるが、自ら衝に當つてさういふ事をしたことはない。專門家の人達が事業を起す際には、世話役として色々手傳つてやる。君が鐵鋼業をやつて呉れるのは、お國の爲めには結構だけれども、巧く行くかね斯う言つて仲々賛成されない。その賛成されないといふのは、私の身を心配して呉れてのことで、やるのは結構だが失敗させては可哀想だとの思ひやりから、澁澤さんも淺野も賛成して呉れなかつた。

そこで、今泉君と色々話して、私の友人で懇意にしてゐた大川平三郎君、此の人は製紙技師で王子製紙會社の技師長をやつたこともあり機械の事もよく知つて居るので同君の所へ行つて相談をした。大川君も鐵鋼の事は餘り知つてゐなかつたが、しかし私からみれば餘程たしかな知識を持つてゐる。「まあ、誰れもやらなければ、何時まで經つても異りはしないのだから君にやる氣があつたらやつてみてはどうか。僕も手傳ふから君やつてみろと大川君は賛成して呉れた。

私は算盤を何遍も彈いて見た結果、どうにか行きさうな見込がついたので、それから色々案を練つた上で澁澤さんと淺野の所に改めて訪問し、自分の決心を述べて「先達てのお言葉もあるが、一つやつてみる積りです。私は家族が飯を食ふだけの途は付いてゐるので假りに此の事業に失敗しても、妻子が路頭に迷ふ心配はないのですからやつてみます。私がたとへやり損つたところで、誰れか後繼者が出て來るでせう。世の中の樣子を見ると、新らしい事業は一代では巧く行かぬ、二代も三代も經營する人が代つた後に、始めて基礎が出來、巧く行くといふ例が澤山あるのですから、私は失敗しても構はない、誰れか私の後繼者がつゞけて呉れるでせう。私は、犧牲者になる積りでやつてみます」とキツパリ言つた。お二人とも、「それ丈けの心持があるなら、やつてみるがよいだらう」と賛成はして呉れたが、しかし淺野は、「それについて君に斷つて置くが、君は日頃獨立で仕事をやつてみたいと言つて居つたから、そこで僕は此の仕事については少し位の株は持つてやるが、手傳ひはしないよ、僕が多額の金を出したり餘り深入りしたりすると、世間からあれは淺野がやつて居るのだといふ風に見られるだらうが、それでは君もやりにくからうし、又いやだと思ふだらう。それに僕が仕事に口を利いたりすれば君の仕事にならないから、援助はしないよ」と斯うキツパリ斷られた。淺野に澤山株を持つて關係して貰へれば、直

ぐ出來たのだが、さう言はれると、嘗て獨立して仕事をやり度いと言つた手前もあり、今更ら女々しい事も言へなかつたわけである。

（四）

そこで、四萬株二百萬圓の會社を作ることにして、愈々株式の募集にかゝつた。所で色々なやり方もあつたであらうが、新聞廣告だとか宣傳的なことなどをやつて、怪しい仕事のやうに思はれるのも本意ではないから、明治二十五年から四十五年まで二十年間、私が淺野で色々と働いてゐた間に知り合ひとなつた友達とか又は先輩とかいふ人達に、株を持つて貰ひたいと言つて、一々趣意書と豫算書とを持つて說明しながら賴んで歩いたものである。

けれども、當時の人は鋼管などゝいふものは何になるのか、又どう使はれるものか知識を持つてゐるものは殆んどゐない。當時既に錚々たる實業界の人達でも、鐵鋼のことについては深い知識がなかつた。

唯だ、私が餘りに熱心に賴むものだから、まあ良いことだからやつてみるのもよからう、といふのでお交際に株を持つて呉れるやうなわけだつた。

それで、資本金二百萬圓、四萬の株が東京では三萬株ばかりしかまとまらない。大川君が、それぢや名古屋には製紙業の關係もあり澁澤さんの第一銀行も在るしするから澁澤さんの第一銀行といふバツクと僕の知り合ひを賴りにして、名古屋と靜岡とへ行つて株を募らうぢやないか、と言ふ。そこで、二人で出掛けて行つて賴んでみたのだが名古屋では僅かに二千株しか出來ない、靜岡でも千株位しかまとまらなかつた。

結局、そんな具合で、まとまつたのが三萬五、六千株、あとは誰れも持ち手がない。これは、淺野に賴みに行つて持つて呉れと言へば、持つて呉れるだらうけれども、どうも男の意地で、獨立してやつて見たいと言つてゐるのだし、俺は千五百株は持つがそれ以上は持たぬと言はれてゐるのだから、今更ら殘りを持つて呉れと賴みに行くことも出來ない。仕方がないから、私が借金をして三千株ばかりを背負ひ込み漸く二百萬圓の會社にまとめたのである。

かうして、明治四十五年六月八日、日本橋俱樂部に於て創立總會を開き、日本鋼管株式會社は玆に呱々の聲をあげたわけである。

（五）

もともと、私が此の仕事を始めたについては、これが儲かるか、儲からないかといふことは實は餘り見當がつかなかつた。唯だ、日本で鐵鋼業が發達すれば、國家の發展の爲めになるだらう、斯ういふ考から始めたのであつて、兎も角、その當時今泉君は鐵鋼技術家として第一流の人であり、この人が一生懸命にやらう、やらうといふものだから、國の爲めになることだし、一つやつて見ようといふ氣になつたのである。

最初から、大金を儲けようなどといふ心持は少しもなく、唯だ仕事が成り立つて行けば、それで結構と思つて始めたのであるが、最初は仲々巧く行かなかつた。出來た製品も、中には良い物も多少あつたが、お客樣から叱言を言はれる物が多いのみならず、需要も餘り澤山出なかつた。心中ひそかに心配しながら、操業を續けてゐたのである。

ところが、其の中に第一次歐洲大戰が起つて、そのお蔭で品物は多少出來が悪くともどん〳〵賣れて行くし、値段もぐん〳〵騰つて行くといふ譯でえらい景氣になつた。儲けも大分出て來る。そこで、此の儲けをどう使つたら良いか、勢ひに乘じて增資をするとか擴張をするとか、やれば出來るのだが、こゝで愼重に考へた。

嘗つて、澁澤さんも最初私に注意して言つたことがある。「事業といふものは、餘り調子に乘るといかぬよ、私は東京瓦斯を長年引受けて居つたが隨分苦しんだ。時勢に隨ひ實情に沿うて進んで行かんで行かないで、徒らに理論にばかり走り無茶苦茶をやるとえらい失敗をするものだ。君も、此の事業をやるについては、好いからといつて餘り增長してやつてはいけない。さればと言つて、成績不良になると萎縮して了つて何もやらないでもいけない。そこの所を餘程加減按排してやつて行かねばならない」と。

そんなわけで、大正四、五年頃から、景氣がどん〳〵好くなるものだから、內部では今泉君など「やれやれ」と色々の新案を出す、新案の出る度に、私は丸素人だから朧氣な知識しか頭に入らぬが、しかし、結局日本の鐵鋼業といふものはもつと基礎を固めなければならぬ、だから此の戰爭の間に、儲けのある間に、科學的に立派に會社の基礎を固めて置かなければならない、製品も鋼管一本ではいかぬ、と斯ういふことを考へたのである。

どうせ、五割も六割も配當出來るやうな時勢が、さう何時までもつゞくものではないのだから、その間に會社の基礎を固めて了はう今の中に固めて置かないと、戰爭は何時止むものか分らないのだからとも相談して、二、三新らしい工場の建設に進んだのである。

ところが、不幸にしてやりかけた工事が仲々豫定通りに出來ないで、休戰間際になり漸く工場が完成して動き出すといふ始末になつた。新湊の電氣製鐵所なぞも、その時やり始めたものであるが、最初品物はろくな物が出來ない。勿論、斯ういふ事業は二年か三年苦しんで後始めてものになるのであるが、戰爭中なら需要も多いし、値段も高いから巧く行く、しかるに其の戰爭が止んで了つたのだから、品物は出來ても良くない、コストばかり高く付くといふことになつて、こゝに鋼管會社は非常な困難に陷つたわけである。その結果、遂に減資しなければならないやうな狀態になつて來た。そこで、社長も大川君に誓く代つて貰ひ、私は表面上第一線を退いたけれども、大川君も好んでなつたのではなく、私を助ける積りで引受けたので、實際の仕事はその後も私が副社長としてつゞけてやつてゐた。

要するに、私はこの仕事で金を儲けようといふ心持は最初から無かつた。大戰中には、會社の株が一時三百五、六十圓位に迄騰つたので、この際株を賣つて金を殘すが良いと友達などから頻りに勸められ、女房なども少し金を拵えて貰はなければ困るだらうと言つたものであるが、私は始めから無いものと思つてをればいゝだらう、戰爭が止むと株は暴落するし、會社の事業が惡くなるのは判り切つてゐる。それを、今自分が株を賣ると、世間から白石は金儲けの爲に此の事業をやつたと思はれるにちがひない。しかも、いづれは株を持つて貰つた人々に損害をかけることになるのだから、景氣が惡くなるだらうからといつて、自分だけが逃げるわけには行かないさう言つて株は一株も賣らないで了つた。

其の後、不況は隨分永い間つゞき、あまつさへ、關東大震災、濱口內閣の緊縮政策等により度々の大打擊を受けたのであるが、能く此の苦難を耐え凌いで今日の隆盛に至つたのは、勿論根本は近年に於けるわが皇國發展の大勢がもたらしたものとは言へ、又先輩友人諸氏の援助と、從業員諸君の血のにじむやうな努力奮鬪の賜であると感謝に堪へないのである。

（六）

しかし、周知の通り、世界の狀勢は其の後實に容易ならざる動向を示し、わが國重工業界も、これに對應して雄大なる建設計畫を遂行することになつた。

滿洲事變以來、我國の鐵鋼生產も飛躍的に增大して、世界に於ける位置も、可なり上昇して來た。しかし、私の理想から見れば、現狀ではまだまだ決して滿足すべきものではなく、今後いよいよ全力を傾けてさらに新たなる大建設を進めなければならない時期であると確信してゐる。

世界に於ける、日本の位地は進んだとは言ひながら、まだ銑鐵に於ても鋼鐵に於ても第五位程度のものであつて、一流重工業國と比べれば餘程大きな開きがある。特に我國が大東亞の指導國として、國防の充實及び產業の大發展をとげる爲めには、どう內輪に見積つても近き將來に現有能力の數倍位の大きさに迄大擴張をする必要がある。この事は單に國內の軍需用及び生產擴充用に應じる爲めだけでなく、大陸の開發、東亞各市場に於ける歐米品の驅逐、進んでは、世界到る處への積極的進出等實に前途多忙の將來を持つものと考へられるのである。

私は、種々の生產條件から考へて、わが鐵鋼業は世界的に最も惠まれたものであると信じてゐるから、此の一大雄圖も必ず實現出來るものと思ふ。

しかし、それには先づ大きな國家的組織を以て大陸や南洋の未開資源をどしどし開發し鐵鋼業者に原料缺乏の不安を抱かせないやうにする必要がある。又、國內同業者の整理統合も斷行して、有力な大企業中心に地域的、資本的にブロック合同體を作つて進む必要がある。もちろん、機械的に總ても一大トラストに編成することは、無理であり、能率的でないと思ふが、兎も角、相當思ひ切つた統合をなし、有能な企業家の經營に任せてドシドシ仕事を進めさせて行くことは必要缺くべからざる點であると確信してゐる。

吾が社も、幸に時運に惠まれて、現在の如き尨大な規模のものになり、同僚諸君の健闘によつて内容の合理化も着々進んでゐることは、誠に欣快に堪えざる所であるが、今日創立滿三十年の記念日を迎へて、既往を顧み將來を想見し感慨無量のものがある。

一體我が社が三十年間にかゝる大發展をなし得た所以のものを考へてみるに、これといつて、吾が社が特に他に拔きん出て秀でたものがあるやうにも思へないのである、何と言つても國家の興隆そのものが、わが經濟界の目ざましき發達を促したのであるから、吾が社が此の時勢の變化と共に、つねに國家の要求に順應してやつて來たといふことが、今日の隆盛をかちえたる最大の原因と言はねばならない。

第二には、特にそれが原因として擧げ得るものとすれば、不肖私が、三十年間終始一貫してわが社を統率して苦闘の歷史を經ながら事業と運命を共にして來たことであらう。事業が人に依りて動くものとすれば、私の及ばざる力ながらも、わが社の今日の發展に多少の影響を與へて來たといふことは言ひ得るであらう。

私は、特に鐵鋼に關して專門的な深い知識を持つてゐた譯でもなかつたのであるが、幸ひにも今泉君の如き斯道の第一人者を友人に持ち、其の熱烈なる助言を受けて、こゝに三十年の歷史を築いて來たのである。

其の間、私が最も心して參つたことは、とりわけ誠實、眞面目、親切の三つであり、此の心がけを以てわが社の經營を終始一貫した積りである。卽ち、事業の經營は飽く迄誠實を以つて當り、又、取引にはどこまでも眞面目に、そして、誰れに對しても親切にといふ心がけを以つて貫いて來たのである。

幸ひに、從業員諸君も、私の此の態度を認識して呉れ、永い歷史の間には隨分悲境に陷つたこともあるが、よく其の間忍耐して獻身的な努力をつゞけてくれたことは誠に感謝に堪えないところである。

屢々私は、吾が社に最も貢獻した人は誰れであるかといふことを訊ねられるが、今日回顧して、特に此の人と言つて誰れ彼れを名指すやうなことはできない。吾が社に從事せられたる殆んど總ての人が功勞者と云ふが至當と思ふ。もちろん、今泉君の熱烈なる勸誘なかりせば吾が社も與らなかつたらうし、又、トーマス爐の如き我國情に最も適合せる貴重なる設備を獨り吾が社のみが之を有するのも同氏の熱心なる研究と進言に因るもので、これらは實に大きい貢獻である。

其他、錚々たる人材は多々數へ得るが、中で誰れがこれぞと云つて特に他に秀でて天才的な才能を持つてゐる者があるとは思へないと皆んなが、私の統率のもとに、能く夫々の持場で眞劍に誠實に協力して呉れたこと、此の點こそ、又、吾が社の特色であり誇りであるとも言へるのである。

創立以來、私は勿論のこと、幹部諸君のすべてが、從業員諸君に對しては飽く迄懇切に指導して行くといふ心がけを固く守つて來たので、その爲めに、幸ひにも、三十年間嘗つて一度も勞働爭議の如きものに見舞はれた經驗がないのである。社會主義運動の盛んであつた時代には、吾が社は其の攻擊の目標となり、左翼の勞働運動者から執拗に狙はれたこともあるが、遂に私共は、光榮ある勞資協調一體の歷史を汚がさずして今日に至つたのも、實に此の懇切なる態度が與つて最も大きいものであつたと思ふ。

不況の時代には、私以下職員一同、率先して減給に甘んじ賞與を辭退して働いたものであるが、工員諸君も私共の此の氣持を能く酌みとつて、喜んで減給を承知したばかりか益々勉强して働いてくれたのである。

私の統率振りに一つの特徵を擧げ得るとすれば、それは、常に從業員の何か良い事があればドシドシ表彰し、反對に過失があつた場合には出來るだけ溫情主義によつて自覺させ改めさせるやうに指導して來たことであらう。

此の心掛けは、商取引に於ても堅く守つて來て、どこ迄も眞面目に且つ親切に慮して參つたから、從つて、取引相手から怨まれたやうなことは一度もなく、取引上の訴訟事件なぞは嘗つて起つたことがないのである。

これら總てのことは、旣に述べたやうに、私の事業經營の根本方針が金儲け主義でなかつたからこそ、初めて爲し得たところであると、今にして私かな矜持を感ずるものである。公明正大、飽く迄事業を立派に盛りたてゝ、以て國恩に報ずるといふことが、一貫して變らざる私の信念であつたことは、敢て公言して憚からないところである。

從業員の中には、創立當初より苦樂を共にして、今日重役の列に連つてゐる人々も多々あるが、どうか、重役と云はず、幹部と云はず、すべてのわが社員は、叙上の私の信念と事業經營の根本方針を能く身に體して、今後永く吾が社の魂として傳承し、盛り立てゝ頂きたいといふことを衷心よりお願ひする次第である。

（八）

今日、私の最も寂寥に堪へないのは熱心誠實な同僚諸君の中、不幸長逝されて、共に社業の發展を語り得ない方々の想出である。特に最初から私を鞭撻して奮起させて呉れ、更に創立以來わが社發展の爲め不斷の協力を與へられた、盟友今泉嘉一郎君が先般長逝され今日の記念日に參加されないことは、獨り私のみでなく、社員一同深く遺憾とするところである。

同君は、日本鋼管の爲めのみならず、廣く日本鐵鋼業全體の發展に對し、實に偉大なる先驅者的な貢獻を爲し遂げた人であつて、同君のやうな立派なエキスパートを吾が社が包擁し得たことは、特に誇りとするところである。私共は斯業發展の爲めに層一層の力を盡すことこそ、眞に同君の冥福を祈る所以であると信ずるのである。

又、今泉君と並んで忘れることの出來ないのは故伊藤幸次郎氏である。同君も吾社の創立に際しては、取締役兼支配人として入社され、爾來昭和三年十月に逝去される迄二十年間終始一貫して、私の女房役として熱意誠心に事業の經營に當られた。

伊藤君は京都の人で、頭腦明敏、明治二十九年に東大法科を卒業し、直ちに東洋汽船會社に入社して以來、十數年間、私の同僚として働かれ、つゞいて吾が社の創立に參加されたのである。同君は大學卒業後間もなくキリスト教の信仰に入られてゐたゞけに人格も立派で、經營上の感化も大きく、私の所見と一致する點も甚だ多かつた。殘念ながら、君の在職中は社業が今日の如き隆昌を示す迄に到らなかつたが、君の在天の靈も吾が社の今日の繁榮をみて必ずや莞爾とされてゐることであらう。

尙ほ想ひ出す人々は少くないが、こゝに特に同僚諸君と共に謹んで御冥福を祈り、併せて、現に戰線で活躍されてゐる同僚諸君の御武運長久を祈念して止まない。

來既に滿五ケ年、今や畏くも大東亞戰爭の大詔が渙發され、吾が社の同僚諸君の中からも多數の名譽ある出征者を送り出し、散華された勇士達も少くない。

私は、こゝに社員諸君と共にこれらの方々の御冥福を心から祈り、

それにつけても、此の未曾有の大非常時に際會し、われわれ重工業關係者の重責のいよいよ大なるを痛感する次第である。幸ひにして三十年來鍛へに鍛へ抜いてきた此の腕前を、今こそ十二分に發揚して、皇國の隆昌のために、粉骨碎身の御奉公をつくし度いと誓ふものである。（日本鋼管株式會社三十年史より）

第十章　伊藤幸次郎氏を偲ぶ博士の追悼文

會社創立當時を中心に（今泉嘉一郎）――伊藤君とは一つ橋の大學豫備門時代の同窓で、明治十七年から二十二年頃迄、五年の間、同じ學校内にゐたので、屢々逢つて懇意の間柄であつた。尤も私は獨逸語の方で入門したのであるが、君は英語の方で、水野錬太郎、白石元治郎等の諸君と同一クラスであつて、嚢中の錐として早くから級の首席を占められたので、他級の私共までも相當敬意を拂つてゐたものであつた。

以來、大學も違ひ、また卒業後も關係事業を異にしてゐたので、約二十二年ばかりの間殆んど交渉をもたなかつた。然るに明治四十四年、白石君に依て再會を遂げ、次で日本鋼管會社を創立するに方り、圖らずも君と苦樂を共にすることになつたのである。

是よりさき、私は大阪に於て、大倉喜八郎氏を中心に鋼管會社設立の計畫を樹てゝゐたのであるが、大倉氏は英國の會社と提携して事を成さんとし、英國の會社は又、日本政府が將來鋼管の關稅を確保せんことを要求し、その條件が容れられなかつたので、遂に大倉氏も手を引き、この計畫は不成立に終つたのである。しかし自分は飽くまでこの事業の將來あることを確信し、豫て昵懇の間柄である白石君に話したところ、白石君も考慮を約し、その後數次折衝を重ねた結果いよいよ同君も決心されて計畫を具體化するに至つたのである。是が明治四十四年十二月のことであつた。その時白石君が、當分は會社創立の準備に、又將來は支配人として法律の知識ある者が必要と思ふが、御互の舊友である伊藤君なら技倆經歷とも申分ないし、幸ひ今遊んでゐるから、伊藤君を仲間に入れてはどうかといふ話であつた。私も喜んで共鳴し、たうとう伊藤君も承諾することになつたのである。

是より先き約半年、卽ち四十四年六月の頃であつたが、白石君が歐洲視察の歸途印度に立ち寄り、同國産の銑鐵が頗る低廉に生産されつゝある事を探知し、歸朝早々私を大阪に訪はれ、其利用法を懇談された。其時私は將來の計畫事業の原料として、是非之を確保して置きたいと考へた。幸ひ、當時の内地市價に比し値段も頗る安く、商品として當分或る期間の輸入契約を印度の製鐵會社と締結する

可能性もあることを認めた結果、白石君と相談の上、鐵商として隨一の機能を有する岸本吉右衞門に謀り、遂に三人共力して印度銑鐵の輸入を開始することになつた。そこで愈々人を印度に派して彼地の會社と交渉を開き、出來ることなら直ちに契約を結ぶことに議を決した。然るに先方は英國人の經營する會社（ベンガル製鐵會社）であり、交渉や契約にも種々國際的通商上の知識を要することで、派遣者の選擇にちよつと困つた。此時白石君は直ちに伊藤君のことを思ひ出し私に相談された。私に取つても伊藤君は豫備門時代の舊知であり、且つ其學生時代に既に英語學校の教師などに雇はれて居た位の英語の素養もあり、大學卒業後には東洋汽船の桑港支店次長となり、最後には後藤伯のために滿洲日々新聞の社長をしたなど、多年の實地を踐まれて居るから、申分ない適任者であつた。左樣な譯で私も二つ返事で贊同した。其結果三人で會合することになつたので、私は直ちに上京して白石君の麻布の廣尾町の邸に集つた。そこで舊知ではあるが二十餘年の久方振りで伊藤君に再會した譯である。伊藤君も印度行を直ちに快諾したから、交渉や契約の方針に付て充分打合せ、次で白石君より晩餐の御馳走になり、十時過ぎまでも色々過去將來を語り合ひ、歡興の盡るを覺えなかつた。是はまことに愉快にして幸福なる一夕であつた。

此幸福に醉つた結果であらうか、我々は玆に頗る滑稽なる一揷話を遺すことになつた。其次第は斯うである。此日は八月の廿日前後で日中なか〳〵暑かつた。私は新橋の旅宿から、伊藤君は目白の自宅から、何れも雇ひ人力車でやつて來たのである。三時間も車を待たせた後、白石君に送られて、伊藤君も私も歡喜に興奮しつゝ、玄關に出て見ると、外は知らぬ間に天候も早變りで、土しや降り雨、風もかなり加つて居る。銘々幌の内に潜り込んで車中の人となつた。が、尙何か感想に耽つて居つた。凡そ三十分もたつたかと感じた頃、私はもう大概銀座の灯りが見えてもいゝ頃だと思つて、幌のすき間から外をすかし見たが、眞暗で人通りもない寂しい處だ。併し此風雨では仕方がないと、あきらめて居つたが、何としても變なので、又幌のすき間から覗いて見ると、やつとぽつ〳〵人家の門燈が見えて來た。で、こゝは何處だと訊くと、もうぢきに目白ですと云ふ何だ目白だ。僕は新橋じやないかと云ふと、車夫も驚いたが、私も驚いた。車が、伊藤君のと間違つたのである。兎も角こんな處で降りても仕方がないから、新宿の通りまで行くことにしよう、あすこなら電車もまだあるだらうと思つて、疲れた車夫を勵まして新宿まで送らせ、電車の停留所邊で降り、車は返してやつた。併しまだ雨が降つて居るのに、傘もない。仕方が無いから、人家の軒の下

で半身だけは助けた。生憎にも其日は殊更薄い單衣を着込み、絽の羽織に白足袋だ。日中の暑さに反して氣候も變り、且つ風雨の中では、かなりの寒さをさへ感じて來た。おまけに夜も相當に更けたから電車は中々やつて來ない。やうやくの事で終電車にあり付いて旅宿に歸つて見れば、もう湯風呂もおしまひとなつて居た。一方伊藤君はどうしたかと思つて、翌日聞いて見ると、是はまた、日比谷當りまで行つて初めて車の間違ひに氣が付き、車を止めたが、降りる拍子に、眼鏡を落してめちや〳〵にした。極度の近眼家たる同君としては、只だ茫然として暗闇に立つたが、幸ひ通り車があつて目白まで歸つたと云ふ。二人とも實に滑稽極まる失策を演じたものであつた。其後私は戲れに「一體此の失策は誰の責任だらう。君か、僕か、又は玄關まで送られた主人公白石君の責任か」と申したら、伊藤君は「かうなれば三人共同責任ですよ」と一同呵々大笑したことであつた。

兎も角是で伊藤君との久方振の會見が終り、愈々印度に行くことに準備して貰つた。そこで伊藤君は九月二日神戸を出帆した。

印度到着後幾度かの電報往復もあつたが、當初の希望通り契約を締結して、十一月十三日に神戸に歸着した。是の結果が印度銑鐵の日本輸入開始であつて、日本の製鋼事業を非常に促進することになつた。又當時郵船會社がカルカッタ航路を開くには開いたが、返り荷がなく困つてゐた場合であつたから、恰かも此銑鐵輸入の開始のため、初航から赤い船腹を出して歸る醜態を、演ずることなしに濟んだと、同社でも喜んだのである。

そこで話は前に戻つて、印度から歸つた伊藤君を、今度は鋼管會社の創立に盡力さるゝやう、白石君から勸めたが、同君は是をも快諾された。時恰かも私が大阪で引受けて居つた岸本製釘所も完成し、十二月に試運轉も濟んだので、愈々大正元年一月から上京して新橋の花家族館に泊り、私の部屋を鋼管會社創立事務所として、伊藤君も毎日そこに來て、白石君の指揮の下に活動を始めた。斯くして數ケ月間三人で一生懸命努力した結果、六月に至つて會社はやうやく成立した。その間の伊藤君の奮闘も實にめざましいものであつた。創立準備中には屢々朝野の名士を帝國ホテルなどに招待して、事業の內容を說明し、兼ねて諒解を求むるところがあつたが、さういふ時にマンネスマン製管法の機械作業の說明などに當つた私の云ふことが、中々素人には分り悪い場合などに、伊藤君の素人分りのする受け次ぎ說明や、外交的接待振りは冴えたものであつた。かうして伊藤君は鋼管會社にとつては無くてならぬ、重要な三本柱の一本となつたのである。それは會社が成立すると、白石君が取締役社長で、私が取締役技師長、伊藤君は取締役支配人で、仕事をしたわけで

ある。

かうして諸般の準備が整ふや私は製鋼部や機械類の計畫、買入れ、技師、職工長の雇入れ等のために、白石君と同道で歐洲へ渡つた。そして一ケ月ばかり獨逸に滯在し、全國著名の製造者から見積書を取寄せるやら、技術者の銓衡やらに忙殺されたが、何よりもまづ機械類を陸上げする海岸起重機を日本に送らねばならなかつた。その間に伊藤君は本國に止まつて、工場敷地の地均しや、海岸陸揚場の設備を初め、事務所や社宅の建築、其の他工場創設に關する諸般の仕事に從事した。是まで東洋汽船の支配人もし、新聞社の社長も勸めたとはいへ、伊藤君もかういふ工業會社は初めての仕事ゆゑ、定めし苦勞されたことであらうと想像される。

そして私達が機械の買入れを終つて歸つたのが大正元年の暮で、二年の初めから每日會社に顏を出すことゝなつた。それから早速工場の建築に着手し、二年の中頃から漸次到着する機械を片端から据付けて、三年からは一部の運轉を開始することが出來るまでになつた。

さういふ所謂草創の際であるから、私も伊藤君も、一週に二度位家に歸るだけで、大正二年から五年にかけて丸三年といふもの、二人とも工場內の宿舍に泊りきりで日夜工事を督勵した。二人が泊ると同時に他の主なる役員も歸宅しない。從つて當に十數人の人達が宿舍を本據としてゐたものである。

大正三年の末には歐洲戰爭が始まつた。註文も漸次殺到して來て、遂には應じきれないほどになつた。斯うなると一生懸命に工事を急いだのが戰爭を豫知したやうだつた。兎も角もその繁忙さは非常なもので、私は日露戰爭當時八幡製鐵所で經驗したやうな事を、又此處で經驗しなければならなかつた。斯かる非常時の場合には、生產增加、工場の擴張、職工の雇入や練習と云ふ事がきまり切つて一緒になつて來るので、當局技術者側の努力は非常なものであるが、之に關聯して原料及製品、又は一般庶務等に關する本務者側の努力も亦非常だ。大正四年から同十年頃までの間に當初計畫の十倍以上の資本となり、當初の從事員數は二百人內外のものが、一時は分工場や附屬鑛山を合して四千人以上を算するに至つた。大正七年の下半期には會社の純益約五百萬圓に達する旺盛を極めた譯で、事務的の衝に當る伊藤君としては隨分多忙を極めたものであるが、今度は九年以後の財界不況切抜けの爲にする經營上の苦辛が容易ならず、伊藤君も私と日夜苦闘を續けて呉れた。

要するに伊藤君は入社以來實に元氣がよく、あの精力的な併し落付いた態度で苦境にも樂境にも能く善處した。其渾然たる氣分で社内外の人と折衝する姿は實に颯爽たるものであつた。それに几帳面な性格も手傳つて、カタログの作製から重要な往復書類に至るまで一々目を通し、また自分で書いてゐた。例へばカタログを作るにしても、各種鋼管の分類から其販賣價格の計算などは隨分面倒なものであるが、私が專門的に草案したものでも、伊藤君は自分の腑におちるまで一生懸命勉强して立派に整理した。さういふやうに、仕事には實に熱心で、全く仕事に一身を打込んでゐたやうに思はれる。

さうしてゐるうちに、或日突然、私に葡萄酒のやうな赤い尿が出たと云つた。見ると事實さうなので、私は驚いて早速順天堂病院に行くことを勸め、診察すると、左の腎臟からの出血だといふことが明かに覗かれた。で、それを切開手術する事になり、私もその手術に立會つたが、剔出された腎臟をたち割つて見ると、その内部はまるでさゝらのやうに荒れてゐた。手術はうまく行つたが、その後暫くすると、こんどは口から赤黑い血のやうなものを吐いたので驚いたが、何事もなく、夫人は勿論自分でも注意して療養に努めた結果經過極めて順調で間もなく全快することが出來た。

それから次に來たのが、死病といはれる腦溢血で、大正十四年に大阪へ行く途中、汽車の中で發病したのであつた。是には私共も落膽した。以來專心療養につとめ、大分輕快に赴いて、會社に出勤するやうになつたが、大正十五年の暮頃からまた再發し、可なり苦しさうに見えた。無論、會社の方は既に基礎も固まり、事務は惰性でも運ぶやうになつてゐたのだから、心おきなく治療するやうにと皆で勸つたが、それでも心配になるものと見えて、時折會社に顏を出してゐた。けれども昭和二年頃からは完全に出られなくなつたやうである。そして昭和三年十月三十一日、遂にこの宿痾のために中延の自邸に於て極めて平安に永眠された。斯くして十五年間も苦樂を共にしたる親友を失つた我等には、眞に愛惜の情禁じ得ざるものがあつた。

今少しく餘白を藉りて、伊藤君のプロフイールを覗くならば、君の後半生は前半生に比し、全く別人の感があつた。無論、後半生の君は一滴の酒、一服の煙草も口にしなかつた。營業會社の支配人だから、客を招待して酒席を取持つことも屢々であつたが、君は一杯の酒も口にせずに、よく客を接待した。知らぬ人は全くそれに氣付かぬほどで、その應酬は實にうまいものであつた。それは嘗ての體驗が、君をそこまで鍛へあげたのかも知れない。が、他面には性來座談に長じてゐたことを理由の一つに擧げねばならないであらう。

實際、君の洒落のうまいことは有名なものであつた。いつか西洋人を招待したときであつたが、いざ食事が始まるといふ時になつて、

「何もありませんが、どうぞ次の部屋へ」といふ所を、

"There is nothing to eat, but eat next room."

とやつたものだ。これは今の帝國大學が開成學校といつた時代に、校長が卒業式に多くの外國人を招いて、茶菓を饗應した時に、大眞面目でやつた失策なさうだが、眞面目な外人客も其由來を聞いて一同どつと吹出してしまつた。また何處かの社長を招んだ時の洒落など、白石君は「あれは伊藤君一生一代の洒落だ」と折紙をつけるやうな、一生一代のが幾つでも當意卽妙に出る始末で、全く手に入つたものであつた。

が、半面に、晩年の伊藤君は病氣のせいであらうが、幾分感情的になつた。人を見るのにはつきり、善人と惡人と、二つに分けてみる嫌ひがあつた。從つて好きとなると飽く迄擁護するが、嫌ひとなると見るのも厭だといふ風であつた。又酒を飮む人は部下に入れることを好まぬと云ふやうなことを云つた。が、一體に友達に對しては情誼に厚く、優しい溫情の人であつたことは昔から變つた處がない。時には又、顏を紅潮させて、議論に熱中することもあつたが、諒解も早かつた。

もう一つ、伊藤君の性格の著しい特徵を擧げれば、それは總てに几帳面であつたといふ點である。金錢上では勿論、事務上でも非常に几帳面で、その點では實に信賴出來る女房役であつた。手紙をやれば必ず折返し返事をくれるし、約束の時間には必ずちやんと待つてゐた。その代り、他人にもそれを期待し、いつ返事するといへば、その時必ず返事を貰はねば承知しないといふ風であつた。從つて書類などに一度判を捺せば、その人はそれで承諾したものと認めて、後から異議など申立てゝも全然取上げなかつた。つまり異論があれば、印を捺す前に申すべしといふ遣り方であつた。それが親しい我々の間ですらさうなのである。思ふに外國仕込みの執務法なのでもあらうが、その爲に事務は頗る敏速に運んだ。

また社員などからの報告書でも、いゝ加減な報告などすると、どん〳〵突込むので、うつかりしたことは書けなかつたやうだ。從つてさういふ夫子自身の報告書は頗る要領を得たもので、細かい字で几帳面に書いてあつた。それが單に公文書のみならず、私交上の手紙でもさうであつた。而もいつくれる手紙でもむらがなく、一流の草書の明筆で綺麗に認めてあつた。

日本文の手紙は勿論だが、英文の手紙も實にうまかつた。機械の術語など分らないことがあれば私に訊いて、英文の手紙は殆んど一手に引受けてゐた。日本に會社多しと雖も、伊藤君ほど會話も達者、手紙も自由自在といふ支配人を持つてゐる會社はさう多くあるまいと思ふ。殊に外國との交渉の少くなかつた我が日本鋼管の如き營業會社が、伊藤君の如き英文に堪能な支配人をもつたといふことは非常な便利でもあつた。

兎も角眞面目な几帳面な人であつたから、萬事に綴密で、子供の將來などについても行屆いた注意を怠らなかつたからである。晩年病を得て湯河原に靜養中、二人の子供を呼び寄せて、「おまへ達に對しては金――圓を學資として用意する外何物も遺すものは無いが之を以て我死後に處すべしと云つたら、子供も快諾して呉れた」と云ふことを私に話されたことがあつた。

それについて憶ひ出すのは伊藤君が郊外の中延に新たに廣い地所を買入れ、建築を初めた頃のことで、君は私に向つてよく「僕自身は何も贅澤したいわけではない。皆君等の遊び場を造らうと思ふので、例へば君が自動車をドライブしてやつて來た時など、此門を這入つて、かういふ風に曲つて來て、こゝへかう着けるだらう、そしてこゝで茶を飲んでから、庭へ出てこゝでテニスをするんだ、それから……」などと云つて、私にも設計圖面の批評をさせつゝ、たうとう今の中延の邸宅を造り上げた。當時私は單なる辯解にすぎぬと思つてゐたが、今にして顧へば、あの宏壯な邸宅は子孫に讓るためのものではなく、その頃から既に公共の使用に供する君の深い考があつたものである。事實、此邸宅以外伊藤君の生活は實に質素なものであつた。

またよく書畫骨董の類を蒐めてゐたが、それも生前に親しい友人知己の間に頒ち與へてゐた。私も君の愛好したものゝ內から文晁の畫幅や北條時賴の書幅など色々貰つた。現世の名利には實に恬淡な人であつたやうに思ふ。また漢學の力が相當にあり、自分でも漢詩など作る位で、賴山陽の著書など好んで集めてゐたが、私は欲しいと云ふと直に與へて呉れたこともあつた。伊藤君の集め方は、市場價値や人の評判などに頓着なく、自分の氣に合つたものだけを集めてゐた。そこに伊藤君の伊藤君たるところがあるやうに考へられる。

最後に君の友情の厚かつたこと、注意の深かつたことで、私が今日でも思出して感激の涙なくては居られぬ一事がある。夫は君が大正十二年二月に認められた遺書で、例の通り美しい書風で次の如く書かれてあつた。

拜啓益々御清榮欣賀之至りに奉存候陳者永年の御厚誼に對し何等酬ゆる所無く洵に汗顏の至りに奉存候左記は嘗て白石氏より惠贈せられたるものにて幸に貴兄に於て小生の記念として御受納被下候得者本懷の至りに候終りに臨み神の御惠永遠に貴下及御一同の上に豐ならんこと祈入候　敬具

大正十二年二月三日

今泉嘉一郎樣侍史

伊藤幸次郎拜

目錄

銀製紅茶器　一組　盆共

此遺書は右の通り大正十二年、卽ち昭和三年十月の逝去に先だつこと三年八ケ月に既に私に認められたことは後に分つた。夫が逝去の後君の義弟木村齊雄氏に依つて、目錄品と共に私の宅に携へ來られた時は、私は此逝ける親友の崇高なる遺志の前に、深き敬虔の情を捧げた。遺書の文面はちよつと普通の手紙のやうにも見えるが、私には明かに遺言の書と見える。伊藤君は、大手術後、其方は全癒して、唯腎臟を一つ失はれただけであつたが、從來より血壓も相當高く、夫にはかなり心配されたやうであるから、萬一の場合を考へられて、早くから此遺書を認めたのであらう。又私に對する遺贈品は、伊藤君も私も永年敬愛の眞情を捧げた白石君、殊に鋼管事業を創めてからも十數年間、二人の先頭に立つて苦樂を共にして呉れた白石君から、何時の頃か、心をこめて伊藤君に贈られたのではないかと察せられた。兎に角此品は、私に取つて、伊藤君の記念たるは勿論、白石君に對しても、又た鋼管事業に對しても、最好の記念であるから、永く珍重せんとする次第である。（終り）

第十一章　今泉博士祝賀會

次記案内狀に基き開催された案内狀（全文）

拜啓　時下愈々御清適奉慶賀候、陳者今回工學博士今泉嘉一郎氏は多年各般の事績に於て日獨親善に貢獻せられたる廉により去る十二月二十三日獨逸國ヒツトラー總統よりフエルドイーンストクロイツ・エルステル・シユツーフエ・アードレル勳章を贈與せられ候博士は御案内の通り明治二十五年製鐵業に身を投ぜらるゝや一意斯界のために獻身的の努力を致さるゝこと今日迄實に四十有七年に及び候、其間内外の賞勳を受くること數回の多きに達し今日亦斯の如き鐵鋼製造の先進國たる獨逸國より榮譽を受けらるゝに到りたるは誠に博士個人のみならず我國製鐵界の名譽に有之延ては防共盟邦との親交を深められたる功績少なからずと存じ候、且又博士は既に古稀を過ぐること三歲と承り候も猶ほ矍鑠として壯者を凌ぐ御健康に有之候のみならず年來の宿望として研究を重ねられたるトーマス鋼製造は昨年博士の關係せらるゝ日本鋼管株式會社に其操業を實現せられ爾來着々として優良なる成績を擧げつゝあることは國家のため重ね重ね慶賀に堪へざる次第に御座候、就ては下記の通り一夕小宴を設け博士に對する祝賀と感謝の意を表し度候間御賛同の上御繰合せ御出席賜はり度此段御案内申上候　敬具

追て乍御手數御來否の程來る一月十八日迄に御通知被下度願上候

昭和十四年一月十五日　發起人（イロハ順）

井上匡四郎
服部漸
桂辨三
俵國一
齋藤大吉

日　時　昭和十四年一月二十日（金）午後五時三十分

會　場　神田區一ツ橋學士會館

會　費　金五圓（當日會場に御持參被下度候）

出席者（イロハ順）

今泉嘉一郎君、井上禧之助君、岩瀨德藏君、一色虎兒君、今井喜代志君、池田正二君、池田正二君、西尾銈次郎君、西村小次郎君、戸村理順君、尾形次郎君　小野崎五助君、若林彌一郎君、渡邊三郎君、河村曉君、俵國一君、田中清治君、中本英彦君、村上武次郎君、黒田泰造君、日下部義太郎君、山縣愷介君、山根新次君、山下元美君、松方幸次郎君、松下長久君、牧田環君、小島甚太郎君、青山秀三郎君荒木宏君、佐野秀之助君、齋藤大吉君、齋藤彌平君、水谷叔彦君、斯波孝四郎君、白石元治郎君、島安次郎君、廣瀨政治君

今泉博士祝賀會卓上演說速記

昭和十四年一月二十日（土曜）午後六時十分開會於學士會館

○齋藤大吉君　それでは甚だ僭越でございますけれども私からちよつと御挨拶を申上げたいと存じます、實は本夕は今泉博士祝賀晩餐會と致しまして御祝の言葉を申上げますに就きましては、今泉博士の同窓であり、同時に又莫逆の友であられる服部博士に御願ひ致す積りでございまして、前以て同博士の御承諾を得て居りましたのでありますが、折悪しく御風邪の爲に殘念ながら今晩御出席が出來兼ねるといふことでございますので、僭越ながら私から發起人一同竝に本夕御來會の諸君を代表致しまして、今泉博士に御祝の言葉を申上げる御許しを得たいと思ひます、今泉博士は御案内狀で申上げました通り、明治二十五年大學御卒業以來永年に亙り獨逸に範を採つて本邦の製鐵業に盡瘁せられ、殊に友邦獨逸には多數の有力なる友人知己もあらせらるゝ關係上彼此相扶けて日獨親善の爲に非常な御盡力になられました功績により、昨年の十二月二十三日特に獨逸のヒツトラー總統より「Verdiensfkreuz des Oerdens von Deutshen Adler derersten Stufe」之を日本語に譯して見ますれば獨逸鷲有功十字第一級勳章とも謂ふべきものを贈與致されましたのでありま す。此の事は單に今泉博士御自身の御名譽であるのみならず、同時に又我が鐵鋼界に於ける大なる榮譽であると信ずるのであります。

就きましては私共數名の者が發起致しまして、今晩今泉博士の榮譽に對する祝賀會を催しますることに致しまして皆さんに御案内狀を差上げた次第であります、實は私共は今少しく廣い範圍に亙りまして、此の喜を頒つの祝賀會を開きたいと存じて居たのでありますが今泉博士は成るべく狹い範圍に於て催して呉れろといふ御註文がありました關係上、比較的小數の方々だけに御案内狀を差出したやうなわけでございます。然るに此の酷寒の折柄にも拘りませず斯くも多數御參會下さいましたことは私共の非常に光榮とするところで御座います。既に申上げました通り、今泉博士は明治二十五年以來今日に至るまで實に四十七年間の長きに亙り終始一貫、我が製鐵界の爲に御盡力下さいましたのでございます、即ち八幡製鐵所の建設に、又日本鋼管株式會社の創立に、又其等の經營に非常なる御盡力を下さったのでございます。又我が鐵鋼協會の爲にも理事として將た會長として鐵鋼に關する學術及技術の進歩發達に色々御指導御鞭撻を下さいましたことは周知の事實であります。其の結果我が製鐵業が先づ今日の如き隆昌を來すに至りましたことは苟も鐵鋼界にある私共と致しましては洵に感謝感激に堪へざることであります。而して此の度は前申上げましたやうな極めて榮譽ある勳章を獨逸國の總統より贈與せられたのであります。殊に鐵鋼に關する學術竝に技術に於て長く我が國をして指導啓發するところが多かつた世界無二の盟邦獨逸國より受けられましたことは特に慶賀すべき次第であると存するのであります。此の點に就きまして私共は衷心より今泉博士の爲に祝賀の意を表したいと存するのであります、尙博士は御承知の通りの御高齡にも拘りませず、極めて御壯健に矍鑠として壯者を凌ぐの御元氣を持たれ、猶ほ盛んに御活動になつて居られますことは是又慶賀すべき次第であるのであります。尙昨年は今泉博士が多年御調査御研究になられましたトーマス製鋼法を御關係になつて居りますところの日本鋼管株式會社に御始めになりまして、爾來着々良好の成績を擧げて居られますことは、是又國家の爲に、我が製鐵業の爲に慶賀に堪へない次第であるのであります。玆に重ね重ね御祝を申上げる次第であります。尙私一個人のことを申上げますると甚だ恐縮でありまするが、私は明治二十九年東京工科大學に在學致して居りまする際に、其の當時新しく御歸朝になりました今泉博士から製鐵學の講義を教はりましたのであります。其の當時の學生と致しましては桂博士を首め尙數名の者が本夕此席に參列致して居るやうな次第でありますが、其の當時の今泉博士が如何なる元氣潑剌さを持つて私共に製鐵學の講義を爲されたかといふことは諸君の御想像に委すと致しまして、當時の最新知識を私共に注入して下さいましたことに就きましての感銘は猶ほ今日に於ても新たなるものがあるのであります、其の後私は同じ製鐵業の途を辿りました後輩として或は八幡製鐵所に於て或は其の他の場合に於て、常に御指導御鞭撻を頂きまして今日に至りましたのでありまするが、其の點に就きましては私共は日常感謝の念を禁じ得ないのであります。尙弟子である私は御寵の通り隨分白くなりましたに拘らず、今泉博士は極めて御壯健で一體どちらが先生であるか、弟子であるか分らないやうなことになつて居りますことを考へまして、（笑聲起る）私は自分として洵に慚愧に堪へない次第であるのであります。それで私と致しましても、或は私の先輩であるところの齋藤實盛の例に倣つて今後大いに若返らなくちやならぬ（笑聲起る）といふやうなことも考へて居る次第であります。大變餘談に亙りまして恐縮に存じましたが、本日は折角今泉博士の御貴臨を頂きましたが、御寵の通り設備萬端頗る不行屆でありまして恐縮に存じまするが、どうか私共の微衷を御掬取り下さいまして、一夕の御歡談を盡されむことを私から特に御願ひ致して置きます。尙發起人を代表致しまして、本夕御參會下さいました皆さんに一言御禮を申上げます。本日は此の喜びを共にする爲に、御多忙中殊に酷寒の折柄にも拘らず斯く多數御參列下さいましたことは私共の非常に喜びとするところであります。此の點は發起人一同に代りまして厚く御禮を申し上げます。之をもちまして私の御挨拶と致します。（拍手）

○今泉嘉一郎君　此の度駐日獨逸大使の手を經て獨逸政府から私に勳章を贈られましたことを御聞き及びになつて、皆さんが斯様な盛んな御集りを以て御祝ひ下さるといふことは洵に望外の至りで感謝に堪へませぬ。實は勳記の上のヒツトラーの署名は昨年の九月二十日附で勳章の到着致しましたのは昨年の暮でありましたが、賞勳局に受領及佩用の手續を致しましたのは數日前のことであります。そこで此の勳章はどういふものであるかといふ御尋ねがございまして、獨逸は歐洲大戰以來勳章の制度を總て廢止し、それ以來勳章といふものを外國人にも出して居りませんでした。其の間唯獨逸の赤十字社の總裁が大統領（後には總統の許可を得）赤十字社の徽章を外國人に對する一つの好意の表はしではありますが、兎も角赤十字の徽章だけでは國際上充分に好意を表することが出來ないと云ふ關係からヒツトラーは一昨年即ち一九三七年五月一日に新たに獨逸勳章定規を制定したのであります。之に依りますと、外國人に對する勳章は五種で、其次に幾つかの賞牌が規定されてあるのであります。今度の戴きましたのは「Verdienst kreuz des Ordens von Deutschen Adler erser Stufe」と申しまして、我が賞勳局ではフエルデイーント・クロイツ・エルステル・ジユツーフエ・フードラー勳章と譯定されたものでありま

す。是は日本の勲三等に同じく、首から綬を以て掛けることになつて居ります、そこで私が斯やうな勲章を貰ふことになつた理由は「多年日獨の親善に盡した爲」と云ふだけのことを獨逸から申されて居るのであります。私と致しましては獨逸と日本との間の親善に貢獻する爲として、格段に骨を折つたといふやうな記憶はありませんが、私は早くから獨逸の書物を勉強し、又多くの獨逸人と交際して其善い處が解つて來て、獨逸に對する崇敬の念が年と共に深まりましたことは、自分でも感じ居る次第であります。其の自然の結果として、何等かの貢獻を日獨親善の上に致した事はあり得ることであります。古いことを申上げて相濟みませんが、考へて見ますと私は、獨逸と餘程緣があるのであります。私が鄕里から東京に出たのは明治十五年一月のことでありまして、丁度十六歲の春でありました、東京へ來るや否や獨逸語を始めたのであります、夫は本鄕菊坂の獨逸語學校、夫から一年ばかり經つて出來ました獨逸協會に入り其の翌年に、一ツ橋の大學豫備門に入學したのであります、豫備門の初めの三箇年間は、あの時代のことでありますから、外國語を以て敎授を受けることが多く、私は獨逸語の部に入りましたから、專ら獨逸語でやられました。四年目から豫備門本科（後高等中學校と改名）の工科に入るといふことになりましたので、今度は獨逸語でなしに英語が主になつたのでありますが、夫でも私は參考書に多く獨逸書を使つて居たものであります、その方が神保先生（地質學）などには寧ろ受けがよかつたのでありました。まあそんなやうな調子で、英語の方は洵に困るのでありますが、大學へ入りましてからは、英語も相當に使はなければならず、卒業論文も英語で書き、二〇〇何頁といふものをイングリツシユで書き上げたのでありますが、流石の渡邊先生も論文の檢閱に當り、今泉の英語には閉口したやうな次第でありました、併し私が自分の專門としたいと定めました鐵冶金學の講座は、丁度其の時代に出來ましたものですが、其受持の先生は當時獨逸留學から御歸朝になつた野呂先生でありましたから色色都合がよくなりました。明治二十五年に大學を出ましてから直ぐ農商務省に入りまして、製鐵所官設問題の調査工作に、野呂先生の指導の下に約二ケ年働きました後、榎本大臣の御世話で獨逸へ留學することになりました、夫は明治二十七年のことで、大臣は來年の議會で是非製鐵所案を議會で通過させるから夫まで勉强して來いと云ふのでありました、獨逸ではフライベルグ大學で、レーデブーア先生の講義を一期間、又伯林大學でもウエツデイング先生の講義を一期間聽きまして、其餘は見學と實地修業に多くの時日を費しました。獨逸は勿論世界各國に御弟子を持つて居られた兩先生の紹介によりまして、獨逸で四十一ケ所、歐米各國を合せて八十六ケ所を

見學することが出來たのでありました。著名な製鐵所などには少くとも三日か四日、長いのは二箇月も居りました。一番長いのは西獨逸のヘールデー製鐵所で十箇月ばかり實習に就きました、さう云ふやうな自由の見學は當時だから出來たのであります、斯樣にして居ります內に、曩に出發の際榎本大臣が私に豫言された通り、明治二十八年の暮の議會で製鐵所の創立案が通過致しまして、二十九年の六月に全官制が制定せられたのでありますが、私は政府からの電報を以て製鐵所技師を拜命し、尙ほ引續き獨逸に滯在し製鐵所の設備及技師職工の雇傭に關する種々の調査をなすべく命令されたのであります。二十九年十二月に大島技監の御一行と入れ替りになつて歸朝致しまして、八幡製鐵所大島工務部長代理として建設工事に着手し三十三年から製鋼部長として作業を初めたのでありました、是が私の第一回の獨逸留學でありました。其後明治三十五年大島技監が退役されましたが、製鐵所の設備は益々擴張を要する事になりまして明治三十六年、更に同四十二年にも歐米各國に出張を命ぜられましたのであります、其後私は退官致しましたが、今度は今晩此處に居られる白石君の御協力を頂きまして、民間の日本鋼管株式會社を創立致しましたが、其機械購入、技師雇聘等の要務の爲に、白石君同道獨逸へ參りましたのであります。其の後更に大正五年、大正十一年、それから大正十五年といふやうに歐米出張を重ねたのでありますが、最も重要な用件は常に獨逸で果すことでありました。さういふ次第で私の參りました國の中で、一番長く時日を費し、一番重要の仕事をしたのは獨逸でありまして、獨逸の事情は相當善く認識して居る積りであります。私が前後七回の洋行で見學致しました製鐵關係の工場は、各國の分を併せて約三百箇所の中で一番多く見ましたのは獨逸と英吉利の工場であります。勿論米國其他の分も相當あります。そこで公平に比較して見ましても獨逸と云ふ國は製鐵の學術に於て最も優秀であるばかりでなく、製鐵の技術の上に於ても最も善く發達してゐる國であるといふ風に見たのであります、殊に獨逸の製鐵事業に使つて居る總ての機械設備が我が日本に對しては最も適初なる模範となるものでありまして、世界廣しと雖も苟も製鐵の學術及び技術に關する限り、先づ獨逸に學ぶのが我國としては一番有效である、と斯ういふ觀念を私は深く致したのであります。幸に私の上役であつた大島技監も全く私と同じ意見でありましたので八幡製鐵所の建設は全然獨逸を手本と致して造り上げたのであります、何と申すも其當時（明治三十年）のことですから我國には鐵材も無ければ鐵工業も起らず、機械工業や耐火煉瓦工業に至ても極めて幼稚で、製鐵所建築の役に立たないのでありますから、一切の機械類は勿論鐵骨建築より煉瓦やセメントに至るまで殆んど皆獨逸から取寄せました、夫が單に初めの建設ばか

りで無く、年々歳々工場を擴張したのでありますから毎年相變らず獨逸からの供給を仰がなければならぬのでありました。其の後明治四三年に至りまして私は鋼管會社を造る目的で八幡から退きましたが獨逸を手本とするといふ方針は八幡に於ても相變らず繼續され、仕事の上には御手本以上の成績を擧げて、今日の大をなされたのであります。私は白石君の贊成を得て、愈々鋼管を造ると云ふことになつたのでありますが、其の時にも各國の現狀を比較研究して見ますと、矢張り獨逸の製管機械といふものが一番進歩した良いものだといふことを認めまして、設備の大半を獨逸で調達させ、又技師までも獨逸人を連れて歸つたわけであります。其後山本条太郎氏が滿鐵總裁として鞍山製鐵所を計畫された時には、私にも御相談がありましたが、此時は已に幾つも前例があるのでありますから、氏は容易に獨逸の機械設備を採用すると云ふことになつたのであります。斯う云ふやうに大きな製鐵所が率先して、獨逸の方式を採用し、夫で好成績を擧げて行くやうになりましたために、大正時代以來勃興した製鐵所が皆之に倣ふことになり、又夫が誘因となつてか、製鐵以外の各種の事業にも旺んに獨逸の方式が採用されて來た。大體我國の工業教育は英米人を教授とした工部大學校で初まりましたことでもあり、又工業としては造船事業が最初に開けたと云ふ關係もありましたから、明治時代の大半は、機械と云へば英吉利なり亞米利加なりの物が主として用ひられたものであつた。明治初年に釜石の製鐵所が英國の方式英國の機械で始まつたのは元より當然でありますす。夫が八幡製鐵所創立以來段々に變つて來て、獨逸からの機械の輸入が英米を凌ぐやうになつて來たことは、我國の外國貿易表に依つて見ても明かであります。さういふやうな變化が起りましたことは、要するに獨逸の學術や技術が優秀であるといふことに基因することで、つまり當然のことではありますが、此の獨逸の優秀點が認識されて、我國に製鐵事業が勃興したと云ふことが最大の動機となつたのであらうと思ひます。そしてそれが我國と獨逸との親善に相當の貢獻をなすに至つたのは當然の結果であります。次に私個人として致しましては、何しろ先程申上げましたやうに、度々獨逸に出入りして居たのでありますから、獨逸には知人が相當に多かつたのであります、初の間は年末にクリスマス・カードを送るのが百枚位もあつたのでありますが、最近では甚だ少くなりました。是は以前の知人が皆年をとつて、段々不沙汰になり又立派な人になつても死んでしまつた人も多いからでありまして、餘儀ないことであります。此の間も獨逸大使に御眼に掛つた時に、大使は、あなたは度々獨逸へ御出でになつたのだが、一番最初に御出でになつた時はいつ頃でしたかと言はれたので、一八九四年でしたと申したら、さうですか、それぢや私が三つの時ですねと申されました。さういふことから考

へて見ましても、古い知人などが段々無くなつて行くのは已むを得ぬ次第だと思つて居ります、さやうな譯で、私も何となく人生の寂寞を感じさせられて居ります際、此度ヒツトラー總統より叙勳を受けましたことは、私として喜んで居る次第でありますが、事の理由としての日獨の親善に貢獻したと云ふことは、前に申した通り我國の製鐵事業に關するもの以外にはないのでありますから、既に故人となられた野呂先生や大島義鑑などは勿論のこと、今夕御列席の諸君の内にも同樣に貢獻された方が少くないことと思ひますと、唯私だけが廻り合せが善かつたのに過ぎないのであると思はれます。夫にも拘らず今夕斯く多數御集り下されまして、御丁寧なる祝賀の宴に親厚なる御友情を御示し下さいましたことは、洵にありがたく、玆に重ねて厚く御禮を申上げる次第であります。尚ほ今晩此の御催を御世話下さいました齋藤博士、俵博士、河村博士其の他の方々に深く感謝の意を表します。（拍手）午後六時五十分。

晩餐　午後七時四十分開始

（晩餐の席上名士交々立つて話されたのであるが紙面の都合上割愛する——昭和十四年三月「鐵と鋼」所載）

第十二章　今泉先生と日刊工業

元日刊工業新聞編輯局長　小畠祐之進記

今泉先生と日刊工業新聞社との關係は實に先生がドイツより歸朝後の半生を通じて纏綿芳醇の宿緣であつた。その滔々として迸る靈能、滾々として盡きざる懇情は常に社内全般へ滲透し、先生の春風駘蕩たる風格を仰ぎ、秋霜烈日の氣魄に觸れたるもの懦夫もまた立つべく、未だ親しく馨咳に接せざる者と雖も其の高風を傳承して敬慕せざるはなかつたのである。卽ち日刊工業新聞が『大阪古鐵日報』なる題號にて創刊された大正四年十一月より『鐵世界』と改題した大正五年十月の交、既に先生から一方ならぬ指導を受けてゐたのである。左に鐵世界改題號の卷頭に揭載された先生に關係ある記事の一節を抄錄して當時を追憶したい。

大正五年十月二十三日發行　第十二號第一面所載

見よ改題記念號の前景氣

（前略）鐵世界と改題、記念號發行を機とし今後の大擴張に任ずべく本社近藤主幹は第一着手として過般來東京横濱方面へ旅行中にありしが、内外知名の紳士實業家より夥しき聲援を受け滿腔の喜色を浮べて二十二日歸阪せり（中略）其一二を摘錄して讀者と共に歡喜を分たん。

前内閣總理大臣　大隈侯爵閣下

記者は東上の序を以て牛込早稻田の本邸に侯爵大隈重信閣下を訪ふ、會談五分の約なりしも侯は快く記者を大應接室に迎へ、約半時間に亙りて縱横の快氣焰を聽けり、終つて記者を食堂に導き晝餐を饗せらる、其れより庭園の拜觀を許され尙ほ最近の寫眞一葉を寄與せられたり（中略）

國民黨總理　犬養毅先生

鐵無き國は亡ぶ鐵は一國の興敗を支配すべきものなりとの持論を抱懷せらるゝ吾が犬養先生は、特に本社の事業を翼贊せられ記念號發行を祝せられ特に鐵に關する一詩を賦し墨根龍の如き名筆を寄せられたり（中略）

鋼管會社專務　工學博士　今泉嘉一郎先生

日本著名の鐵學者にして而も事業家たる博士は鐵世界と改題を祝せられ多忙の一刻を割いて主幹を引見せられ一眸千里の同社應接室に於て鐵に關する先生の蘊蓄を披瀝せられ數時間に亙りて懸河の辯を振はれたり尙ほ記者の遠路來訪を喜ばれ破格の優待を蒙りたる外本社基本金の一部に加へよと金壹封を寄贈せられたり（下略）

註　一、誤植のまゝ原本の通り轉載す。

二、今泉先生との會見を叙するに大隈重信侯、犬養國民黨總理の兩者に比し、著しく親密味の溢れてゐることが紙面に躍如としてゐる。

思ふに先生はドイツの留學を了へて歐米各國を巡歷され歸朝後、全生涯を皇國の鐵鋼國策確立に致さんとする固き決意を持たれ、之れを鐵鋼の生産に依つて具現し、他日わが國に仇なす國あらば擊てし止まむの戰力增强に貢獻すべく期せられ、之れと日刊工業新聞の創立者故近藤義太郎氏が鐵世界より出發して工業報國に邁進せんとした憂國の丹心とが靈犀相通じ期せずして一體となり溫釀醱酵されて年を迎へ歲を送り其の連續せる交誼は遂に膠漆の關係を生ずるに至つたものと推斷して差支へなからう。

春風秋雨幾星霜、雜誌型の鐵世界は新聞型の工業新聞となり先生を煩して名譽社長に就任を仰ぎ、堅實なる步調を以て躍進に躍進の一途を辿り、遂に大正十一年六月二十四日を以て『日刊工業新聞』と改題し、日本最初の業界日刊紙として年中無休の大旆を翳し全工業界にまみゆるに至つたのである。當時の所謂業界紙なるものは月刊または旬刊にて週刊のものさへ稀であつたのである、從つて今泉社長および近藤主幹（社主）統率の下に擧社一致の奮鬪努力によつて日刊紙として江湖に工業の重要性を呼びかけることが出來たのである、吾國の工業界もまた此時代に於て長足の進步を見せたが、更に一大發展をなさゞる可からざる時代の要望澎湃として起りつゝあつた爲め自然、工業專門紙必要の叫びは全國的に漲るの情勢となつたのである。

かくて昭和四年に入り創刊十五周年を迎へたが、新會計年度を期し社内機構の擴充強化を圖るに及び、工業報國を指標とする社是に共鳴して入社する精鋭の社員が續々增加したので、陽春四月某日（三日？）櫻花爛漫の古都奈良公園菊水樓に於て創立十五周年を自祝する小宴が開催された、此の時今泉社長は鋼管會社の劇務に多忙を極めつゝありしに拘らず、遠く帝都より萬障を排し列席されて莊重なる訓辭を述べられ、永年勤續の優秀社員十數氏に表彰狀ならびに賞品を授與された（寫眞參照）續いて宴に移るや杯盤の裡よく幹部社員および全社員に隔意なき態度を以て應酬の情を盡され、宴まさに酣なる頃、烈帛の吟聲と共に劍光一閃、勇壯なる劍舞を展開、萬雷の如き拍手喝采を博された。かゝる機に應じ席に臨みて社員間の親密度を濃厚ならしむる先生の心遣ひこそは全社員の心を深く打つ

賀祝年周五十立創年四和昭
辭訓の士博る於に場式

故近藤主幹、博士、小西編輯長

日刊工業十五周年祝宴

博士劍舞の勇姿

たのであつた。

續いて同年五月には北區中之島の本社編輯局に在阪の全社員を招集され工業報國の社是遂行について社員の堅持すべき信念および平素の勤務に對する心構へを訓示されたが、社長の溢るゝが如き温容に一同多大の親しみを覺えた反面、何ものをも約き盡くさんとする熱辯を以て本邦の工業能力を早急に且つ加速度的に增進せしむることの喫緊なる所以を微に入り細を穿ち約二時間に亙り獅子吼され、

勤續優秀社員表彰

獅子吼する博士

博士ぶら連を辭訓て於に會賀祝年周五十業工刊日

昭和四年五月本社に於て社是確立方策を說かれたる夜の社長歡迎會

新聞人として之れが推進の重責を全ふすべき方途を說き來り說き去り全社員を感銘の坩堝に投げ込まれたのであつた。斯の如くして當時の日刊工業新聞は東亞唯一の工業專門日刊紙として日本の操觚界に特異の地歩を占め、社運の進展は旭日昇天の勢を示した。かくも短日月の間に驚異的發展を遂げたのは、近藤社主の慈父の如き德望、玲瓏玉の如き人格、非凡なる經營手腕によるところ大であるが、他面今泉先生が陰に陽に撓まざる指導と力强き激勵の鞭を揮はれた結晶に外ならないのである、從つて全社員は先生の垂示された精神

を拳々服膺して渝らず、益々社運の興隆に挺身し、日刊工業の光輝を彌か上に昂揚せしむべく勇往邁進したのである。

昭和九年一月二十日近藤社主は悲しくも不歸の客となつた、前年末より假そめの病魔に犯され入院中のところ容體急變し遂に再び起たず、會社は豫期せざりし突然の不祥事とて悲痛の底に沈淪したのである、この哀愁に閉ざされたときに際し先生には鋼管の社務極めて多端なるを顧みず寸暇を割きて屢々下阪され憂ひに暮るゝ全社員を慰藉されると共に鼓舞激勵をなし、社礎に微動だも生ぜざらしむるやう渾身の努力を傾倒されたのであつた。

昭和十年一月二十日故近藤社主の遺業を繼ぎ益々これを恢弘せんがため株式會社組織に改むるや、先生は依然最高顧問として樞機に參劃し取締役會長近藤君枝刀自（故社主の未亡人）の又なき顧問役として重きに任ぜられた。

昭和十三年日刊工業新聞創刊二十五周年に際會し、多年絶大なる支援を寄せられたる軍官民有力者に謝意を表し、併せて非常時局に對處すべき社としての覺悟を披瀝すべく東京および大阪に於て創刊二十五周年記念披露會を擧行したが、先生には種々の注意と助力とを賜はり、披露會の當日には東京大阪二回とも主人側として立ち、斡旋接待の勞を執られたのであつた。翌十四年一月、皇軍の赫々たる戰捷の新春を迎へ、東京銀座の東京支社に於て新年社員總會開催に際し、先生は老軀を挺して列席せられ、戰時に順應すべき方針に

昭和十四年一月日刊工業東京支社に於て新年社員總會開催當日の博士

博士の撰文に成る故近藤社主の建碑式

つき約一時間、懇篤なる談話を試みられ新秩序建設の前途に豐富なる示唆を與へられたが、老來ます〳〵矍鑠たる先生の風姿を仰ぎ畏敬の念さらに切なるものがあつた。

昭和十四年十月、豫て故近藤社主建碑に伴ふ碑文の撰を今泉先生に煩はしありしもの脱稿淨書の完成を見たるにより工に附し、翌昭和十五年三月竣工、五月近藤社主の鄕里香川縣三豐郡本山村の菩提寺『本山寺』境内に建立の諸工程完了を告げ、近親、社員、鄕里の有力者等參列の下に除幕式を擧行した。先生の撰文は漢文の普遍形を採用せられず、何人も讀み得る平易なる假名交り文を以て書かれ故人の生涯を短文中に網羅し而も其の風格を遺憾なく表現されてある、左に之れを揭記する。（全文）

近藤義太郎先生は香川縣に生る資性聰慧穩健夙に早稻田大學に學び尋いて普通文官試驗に及第し大阪砲兵工廠に奉職す時恰も日露戰爭に際し具さに軍國の危機を直視して工業立國の信念に奮起し空拳報國の道を操觚に索めんと決心し明治四十四年鐵工造船新聞の發刊を以て其初歩を試み漸次機構を完備し大正二年歐洲大戰を迎へ鐵世界の刊行を創め拮据經營大正十二年に及び遂に日刊工業新聞の發刊を決行し素望を達す爾來全力を盡して大いに機能を整備し我國一般工業の進運に呼應して使命に邁進する十二春秋昭和九年遂に病に罹り歸幽せらる享年五十有二然も其遺業は依然として繁榮を繼續し機能活動の狀態毫も生前に劣らす顧ふに工業のみを對象とする日刊新聞にして而も其内容の豐富發行の大量なる我日刊工業新聞の如きは一の奇逸的存在と言ふべし尙其經營の振作此の如きは畢竟先生が計畫組織力行の偉人たるを證するものなり

茲に後進同志胥議り碑を立て永く先生の偉蹟を偲ばんとし碑文を余に乞ふ余亦先生の舊知なり敢て不敏を顧みず喜んで貴需に應じたる者也

昭和十四年十月二十日

日刊工業新聞元社長
從四位勳三等工學博士　今泉嘉一郎撰

近藤惟敬書

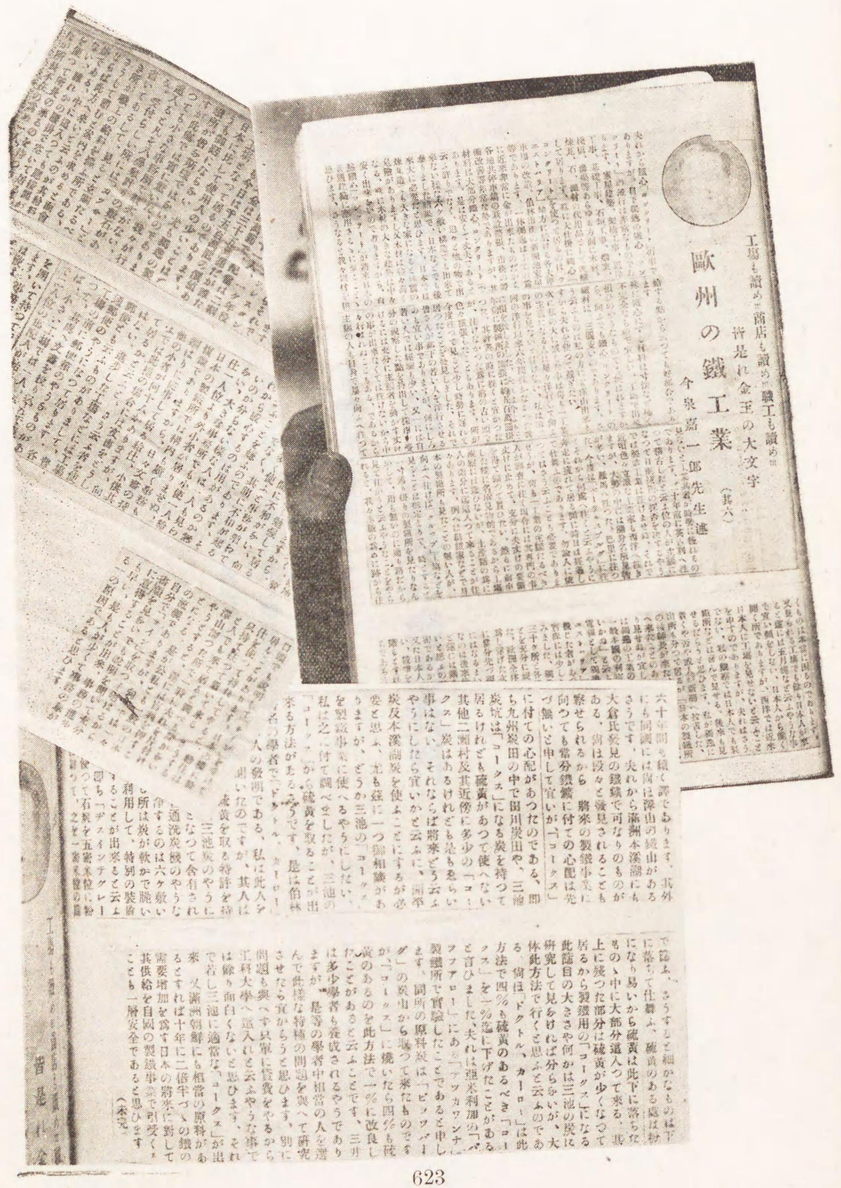
既にして先生病ひ篤しの報傳はりたるに際し（逝去の一ヶ月程前）近藤會長は大阪より上京今泉家へ御見舞のため參候したが、先生には醫師よりの面會謝絶を意とせず、近藤會長を病床に引見され新聞統合に關する冷徹なる所信を吐露され故近藤社主との懷舊談などを語られたのであつた。斯くも日刊工業新聞について心痛されてゐる惻々の情誼に、會長いたく感激かつ感泣して辭去したとのことである。

いよ〳〵病革り遂に溘焉として永眠せらるゝや、葬儀當日に於ける日刊工業新聞紙には其の第一面の大半を割きて先生が生前に本邦の鐵鋼界に貽された偉大の功績を記述し、吾社との關係夤緣をも附記し、二段抜き丈の寫眞を掲出して、全讀者と共に先生の俤を偲ぶよすがとした、在京の日刊工業重役は靈前に供花を捧げ哀悼の微意を表し、幹部社員を伴ひ一同打揃つて葬儀に參列し冥福を祈念したのであつた。

今や先生逝かれて二年、日刊工業新聞社は國策に殉じて中外商業新報社と合併し、『日本産業經濟』の題號によつて新生の途に就いたが、舊日刊工業新聞より新社に引繼がれたる同人諸氏は依然心中深く先生の遺訓を奉じて、生産增强の一線に筆陣を展開し、米英擊滅に筆力を傾注しつゝある、斯の如きは一たび日刊工業の社員たりし者は社の先輩より先生の高風を相繼ぎ相傳へられ工業報國の赤心は先生の垂示せられたる所に遵ひ不滅の憲章として日刊工業の傳統精神となり、この重大危局に華と咲出でたものであると云ひ得るであらう。身を挺して君國に報ずる熱烈なる思念は永久に日本産業經濟新聞の紙上に脈々として躍動して窮りないことを信じて疑はぬのである。

這回今泉先生の傳記編纂さるゝに當り日刊工業新聞社元取締役會長近藤君枝、同專務取締役豐成光文兩氏より依囑あり、菲才を顧みず、犇々と迫る先生追憶の感概に禿筆を呵してその遺德を追慕し、玆に拙文を草して卷末を汚した。

終りに今泉先生が本邦の鐵鋼界を啓發すべく玉稿を寄せられ、之れを紙上に掲載し讀者に奮起を促がしたる思出深き紙面を、左に寫眞版として掲記し先生の靈に手向くる次第である。（昭和一八・三・一〇）



第四編　逝去當時の參考資料

註――逝去當時葬儀委員の手に依つて
「恒德院殿嘉道慶猷居士葬儀記錄」
なる二百六十三枚から成る謄寫刷が出來てゐる。
今その要所を拔萃して玆に揭げることゝする。

第一章　勳章・年金・記章等

勳章・年金・記章又ハ褒章ノ種類等級	勳記・功記・年金證書・記章・褒章・證狀番號	授賜年月日	授賜當時ノ官職	授賜當時ノ所屬廳又ハ部隊	授賜當時ノ氏名
勳三等旭日中綬章及年金	勳記第一一六三四番年金證書第一番	明治三十九年四月一日	製鐵所技師	農商務省	右ト同ジ
從軍記章	同	同	同	同	〃
金杯壹組		大正七年十月十四日	—	—	〃
銀杯壹組		大正九年十一月一日	—	—	〃
金杯壹組		大正十三年五月三十一日	—	—	〃
ルクセンブルグ「コンマーダー・クーロンヌ・ド・シエーン」勳章		昭和九年八月三十日	—	—	〃
獨逸國「ヲエデルイーンストロクロイツエルステルシユツーフエ・アードラ」勳章		昭和十四年一月二十日	—	—	〃

第二章　御通夜・本葬儀・法語

御靈骨安置御通夜

七月一日午後六時半景中大曉師は桑原錄三、柴田漢道の兩師を伴ひ來邸同七時景中大曉師導師となり桑山、柴田兩師は各侍者、侍香の役につき御通夜回向をなす。讀經終了後景中大曉師より御戒名の字義解釋に就き左記の通り御說明あり。

記

故今泉嘉一郎氏御戒名

恒德院殿嘉道慶猷居士の字義略解

恒德とは申す迄もなく恒常の德性であります、この德と云ふことは人格の最高完成を意味します。世間に於て智者學者と云はれるよりも寧ろ德者と云はれる方が其人格をより以上に價値づけることは、更に言を俟たない所であります。

宗教に於て佛陀と稱するも畢竟人格の最高完成を云ふのでありまして即ち其の人格其の德性は何に由てか贏ち得らるるかと云ひますと所謂佛道の履踐であります。我大祖常濟大師が未だ御青年時代に熱烈なる求道の願力に燃えて御參究になりましたのも平常心是れ道の公案でありました。

吾人日常の生活態度が道と融合するかせざるかが大なる問題であります。倫理も道德も宗教も之の問題より外はありません。古人も「道は須由も離るべからず離るべきは道に非ず」と云つてをります。長安の大道直きこと弦の如しとか、此の如き大道を蠢直進前する所に於て恒德の確立もあり宗教の安心立命もあり禪門の見性解脫もあるのであります。

是の如き意義を有しますのが恒德院殿嘉道慶猷居士の御戒名を贏ち得ました所以であります。

更に御通夜に入り午後九時前記三師にて御通夜回向をなす。

以上

御本葬式

七月二日午前十時三十分築地本願寺より御靈骨御迎として笠金謙道師は小山鐵雄、關水憲一の兩師を伴ひ參邸し同十一時三十分笠金謙道師導師となり小山、關水兩師各侍者、侍香の役につき御迎經を奉る、喪主を初め御親族の御燒香終了後直ちに僧侶車を先導とし左記の通り御位牌、御寫眞、御靈骨、勳章の奉侍者並に御親族之に扈從し同十一時四十五分御出發御葬列肅々と順路築地本願寺に向ひ滯りなく齋場に到着す。

記

御位牌　今泉嘉秋殿

御寫眞　同　常正殿

御遺骨　同　益正殿

內國勳章　同　嘉正殿

外國勳章　同　季正殿

同　後藤大策殿

記　補佐役　高月力也殿

章伴　定幸殿

御乘物は左記順序にて御本邸出發築地本願寺に向ふ。

1　笠金謙道師　小山鐵雄師　關水憲一師

2　今泉嘉秋御夫妻殿　同　マリ子殿　同　常正殿

3　今泉益正殿　同　愛子殿　同　義正殿

4　同　昭子殿　同　季正殿　齋藤靜殿

5 千田御夫妻殿　清瀬御夫妻殿　千田繁子殿
6 伴御夫妻殿　千田京子殿　伴醇子殿　伴定幸殿
7 高草木喬殿　古賀御夫妻殿　古賀千代子殿　今泉芳雄殿
8 松島御夫妻殿　松下長久殿
9 今泉貫治殿　村岡正夫御夫妻殿
10 宮原御夫妻殿　北澤永成殿　松浦善助殿
11 清瀬次郎殿　佐藤御夫妻殿
12 樽林篤夫殿
13 土田富三殿　河田重殿
14 御僧侶
15 笠金謙道師以下六名
16 香田五郎殿　堀田正都殿
17 高松誠殿　吉井吉康殿　藤原唯義殿
18 係員
19 寺院係外御僧侶一名

齋場御模様

本堂の正面には祭壇を設け御飾付、御供物等は既に式場係に於て萬端の用意を整へたり。
尚院外には階段上より下迄天幕を張り廻らし中央には携帯品置臺左側には受付臺を並べたり。
正面門を入れば境内右側は一般自動車置場とし南門を通用門出口となす。

門を入りたる右側に警官詰所、天幕を設け又境内左側には御親族自動車置場、供待席を設置し各係員は夫々所定の位置に配置したり。

御本葬式場御供花

御本葬式場の御供花は左記の通り竹筒入立花並に榊を交互に御供へ申上げたり。

喪主（御名札をつけず）	一	對
千田武彦殿、伴義定殿、清瀬次郎殿	一	基
千田芳子殿伴富子殿、清瀬鐵子殿	一	基
佐藤達次郎殿、同操子殿	一	對
御親族一同	一	對
日本鋼管株式會社	一	對
日本鋼管株式會社々長白石元次郎殿	一	對
日本鋼管株式會社重役一同	一	對
日本鋼管株式會社從業員一同	一	對

午後零時十分御靈骨を迎へ直ちに正面壇上に安置し奉り銘旗、御遺影及び勳章を掲ぐ喪主、御遺族、御親族、關係者一同着席し終れば零時四十五分監院孤峰智璨師、副監院鏡島宗純師、單頭淺野哲禪師以下役僧拾貳名を隨へて入場し恭しく御靈前に一禮して葬儀の讀經を開始し引導の儀を終了す。

法語

佛性由來恒德全ㇱ

大本山總持寺　監院　弧峰智璨師

太觀生死體如然
眞人別有嘉猷志
踏破迷雲上覺天

從四位勳三等工學博士故今泉嘉一郎閣下

法諱　恒德院殿嘉道慶猷居士　靈位

守志有養　修德無偏
剛毅純眞　能住忠孝大道
誠信篤敬　豈滯眞俗攀棬
捧至誠於國家　衆尙其節
傾信念於佛教　世稱其賢
受生上毛　夙學鄕校天才愈譽貴
修學帝大　又遊獨逸學德益深淵
起業帝都　韋司鋼管縱妙技
盡力國政　丕護憲法振威權
治生產業行持　以製鐵終始
櫛風沐雨活計　以國利貫穿
覺性圓滿　高踰幽明封域
靈體寥廓　迥脫惑業相纏

上來者是恒德院殿七十五年活三昧也卽今生死岸頭一着如何陳辨
忽地掀飜生死窟

通身坐斷紫金蓮

奠湯法語

副監院　鏡島宗純師

這箇醍醐微妙湯
卽今拈出供靈床
淡中法味信君喫
一飽能堪洗鐵腸

恭惟
恒德院殿嘉道慶猷居士
恭々功業錚々名望
博識高猷　轉報國願輪於未來際
大機妙用　期利生行持於無盡藏
言行自合佛心　靈光內耀
擧措常念聖業　德澤外彰
正當恁麼時未後一盞作麼生承當
一陣薰風生殿閣
光雲影裏轉淸京

恒德院殿奠茶法語

單頭　淺野哲禪師

七十五年只一誠　千般事業出眞情

閻王廟上好談笑　鋼管芳名天丁轟

恭惟

新歸元　恒德院殿嘉道慶猷居士　靈位

守志純一　當事專精

身起上州　清廉潔白操持　其德致厚

智普世界　勤險自勵志氣　其功自成

即今

涅槃門頭　忽爾跳出九聖

菩提園裏　驀然超越死生

正當恁麼時

趙州一味　滿籌來　薦居士

來儀一着　如何詮揚

咄

白雲深處全龍躍　碧波心裏玉兎驚

昭和十六年七月二日

夫れより讀經裡に喪主御夫婦、マリ子未亡人日本鋼管株式會社社長白石元治郎氏は上段の祭壇前に並べたる燒香臺にて御親族並びに日本鋼管株式會社副社長淺野良三氏以下參列員の御燒香を終り續いて左記日本鋼管株式會社々長白石元治郎氏、鐵鋼統制會々長小日山直登氏、日本鐵鋼協會長渡邊三郎氏、日本金屬學會長本多光太郎氏、五五會名井九介氏の弔辭朗讀あり香華烟る中に滯りなく終了外に社團法人日本工業俱樂部、日本工業會、社團法人日本工政會、學士會、東京地學協會、株式會社

日刊工業新聞社、社團法人相模カンツリー倶樂部、日本度量衡協會、日本學術振興會、社團法人燃料協會、東京科學博物館、財團法人科學博物館後援會、帝國水難救濟會、日本赤十字並に上毛金曜會より弔辭捧呈ありしも弔電と共に一括之が朗讀を省略する旨報告す。

更に午後二時より一般告別式開始のため笠金謙道師外六師は御供花前の兩側に各三名宛別座し御親族は右側に委員は左側に各二列宛侍立し一般會葬者の御厚情に答ふ。

この日燒香者蜿蜒として堂外に引續き一千五百餘名を算し鐵道大臣小川鄉太郎氏、遞信大臣村田省藏氏、水野錬太郎氏、後藤文雄氏藤原銀次郎氏、原嘉道氏、田中穗積氏、高木百合子氏、膳桂之助氏、田中館愛橘氏、大倉喜七郎氏　本多光太郎氏　俵孫一氏、米山梅吉氏、平生釟三郎氏、澁澤正雄氏、森村市左衞門氏、八田嘉明氏、淺野總一郎氏、中井勵作氏、ベルヘルム・ランドグラフクルト・マイスナー氏、中川健藏氏、牛塚虎太郎、兒玉謙吉氏、長岡半太郎氏、井坂孝氏等故人の遺德を追慕する諸名士多數會葬せられ稀にみる盛儀を極めたり。

午後三時告別式終了後親族代表より參列員及各委員に對し鄭重なる謝辭を述べられここに全く滯りなく御式を閉づ。

第三章　弔辭

弔辭

維時昭和十六年七月二日故從四位勳三等工學博士當社取締役今泉嘉一郎君の葬儀に當り謹みて告ぐ君は慶應三年六月二十七日群馬縣花輪村に生れ明治二十五年東京帝國大學工科大學を卒業し獨逸に留學し歸朝後十數年の永きに亘り官立八幡製鐵所に奉職、製鋼部長各部長を歴任勅任技師長として長官を補佐し盡瘁せらる此の間明治三十九年日露戰爭の功に依り勳三等旭日章を賜はる。

明治四十三年退官せらるゝや直ちに民業に志し當時專ら外國品に依存し居りたる鋼管の製造に着目せられ之を予等に圖らるゝや熱意を極めたり。

當時本邦の一般事情は未だ頗る幼稚にして之か起業に幾多障碍ありしも君は不撓不屈予等と協力し遂に我が日本鋼管株式會社の創立に成功す。

之より君は自ら取締役兼技師長に任じ蘊蓄を傾けて吾社の作業を指導せられ幾多の波瀾に際會せるも斷乎邁進して寧日なし幸にして社業次第に安固を加へ遂に今日の盛況を見るに至れるは君の奮闘に負ふ所蓋し大なり而して此の間三十年君が功績は擧げて數ふべからざると雖も近年吾社が採用せるトーマス式轉爐製鋼法は實に君が十數年來の持論に係り之が實現は燃料不足屑鐵飢饉の現狀に鑑み最も時宜に適したるものとして斯界注目の的たるに至れるは正に君が時代の先覺たるの賜と謂ふべし。

而て今や君の抱負着々實行せられ事業の擴張日を逐うて進歩しつゝあるに際し昊天君に壽を藉さず六月二十九日溘然として長逝せらる、哀悼措く能はず而も時局下人材の要愈々切なる時邦家の爲め洵に痛惜に堪へざるなり。

君は生前吾社を始め幾多製鐵諸會社の創立及經營に參畫し我國鐵鋼界に貢獻せられたる所甚大なるのみならず或は衆議院議員となり或は政府設置の各種委員會の委員に任命せられ公事に盡瘁せらるゝ事枚擧に遑なし。

此の間實地調査の爲め外遊せらるること數次大正四年工學博士の學位を授與せられ更に大正十年以來ルクセンブルグ大公國名譽總領事として國際的にも盡力せらる斯くて昭和九年にはルクセンブルク大公國よりコンマンデール勳章を賜與せられ又昭和十三年には獨逸國ヒットラー總統よりアドレル勳章を贈與せられたるの榮譽あり。

君出でゝは國家社會の爲め精力を傾倒し入りては鄕黨の爲め心身を勞せられ曩に鄕里育英の資に多額の私財を寄せらるゝの事あり後進晉君が恩德を仰慕す。

嗚乎君の剛毅潤達なる風貌尚眼前に髣髴たり、君が一生に於ける不撓不屈の精神は永く生きて我等を發奮せしむるものと謂ふべし。

茲みて弔意を表す。

昭和十六年七月二日

日本鋼管株式會社取締役社長　白石元治郎

弔詞

日本鋼管株式會社取締役從四位勳三等工學博士今泉嘉一郎君豫而宿痾療之處藥石效無く溘焉として逝かる、時に六月二十九日午後零時三分、嗚乎悲しい哉。

今泉君は、その七十有五年に亘る全生涯を我國製鐵事業の育成發展に捧げられたる業界の第一人なり、同君は今を去る五十年卽ち東京帝國大學在學中より製鐵を專攻し明治二十五年其の業を卒ふるや、直に農省務省技師として製鐵所創立に先立つ準備事務に從事し、次で獨逸に留學、在歐三年實地の研究を遂げ、製鐵所官制發布と共に在歐中旣に八幡製鐵所技師に命ぜられ歸朝後直ちに工場創設の重任に當り、爾來十三年間具さに創業の辛苦を嘗め八幡製鐵所の基礎漸く成るや明治四十三年官を辭し同四十五年日本鋼管株式會社の創立に從事し爾來三十年民間に在りて、終始製鐵事業の發展に獻身せられたり、而して今泉君の我が鐵鋼業界に殘されたる足跡の大なるは玆に冗言の要なく亦其の功績を表せんとして惜辭に苦しむ所なり。

顧るに我國は今正に國際難局の超非常時に際會し國防産業の基幹たる製鐵事業に期待せられる所また頗る大なるものあり。

斯る秋に業界の大先達たる今泉君を喪ふ。

業界の損失痛惜之に過ぐるものなし。

嗚呼悲しい哉。

然れども君が心血を注ぎ依つて以て育成發展せしめたる我が鐵鋼業は邦家未曾有の非常時に當り決然として立ち東亞共榮圈内に於ける自主確立を期し邁進しつゝあり。

在天の英靈以て冥せよ。

茲に謹んで弔詞を捧ぐ。

昭和十六年七月二日

鐵鋼統制會會長　平生釟三郎

弔辭

本會前會長名譽會員從三位勳三等工學博士今泉嘉一郎君昭和十六年六月二十九日溘焉として卒去せらる享年七十有五知友みな哀悼す

君は慶應三年六月二十七日群馬縣今泉家の嫡男として生れ夙に學序を經て明治二十五年東京帝國大學工科大學採鑛冶金科を卒業し直ちに職を農商務省に奉し官立製鐵所創立の準備に從事す同二十七年獨逸國に留學しフライベルグ及伯林兩大學に學ひ同二十九年製鐵所技師に任せられ同三十年歸朝して八幡製鐵所建設起工の任に膺り同三十四年製鋼部長同三十六年鋼材部長に任せられ次て工務部長を兼任し同三十九年勅任技師に陞敍せられ同四十三年退官す爾後民間製鐵事業の開發に志し明治四十五年白石元治郎氏と協力して日本鋼管株式會社を創立し取締役技師長として同社の技術を總攬指導し爾來三十年幾多の困難を突破して設備の擴張と經營の合理化に努め特に日本式鹽基性轉爐の操業を創始して本邦製鋼法に一新紀元を劃したる其功績洵に顯著なりとす而も明治二十七年以來本邦製鐵事業近代的設備の創設に際し之か參考資料を求むる爲歐米各國に出張すること前後六回に及ぶ曩に明治三十七八年日露戰役の功に依り勳三等旭日中綬章を授けられ又ルクセンブルグ公國竝に獨逸國より各々名譽勳章を贈與せられたる洵に所以ありと謂ふべし氏は亦曩に大正九年より四ケ年に亘り群馬縣より推されて衆議院議員として活躍し其間擁國維納に開催せられたる第十九回萬國衆議員總會日本代表として參列せる外帝國經濟會議、臨時財政經濟調査會、度量衡改正委員會、工業品規格統一調査會等の各委員を命せられ特に本會に對しては大正四年以來創立者の一人として第二次會長として將又前會長として常に本會の發展に盡力して今日に至れり要するに君の業歷は頗る多

岐に亘ると雖も終始一貫本邦製鐵事業の樹立發展に畢生の努力を傾注し其の斯界に貢獻せられたる處實に至大なりとす。惟ふに近時本邦製鐵鋼業は著大なる躍進を遂げたりと雖も前途尚幾多の難關を豫想せられ特に現時非常時に際し鐵鋼業者の責務重且大なるものあるに際し君の如き聲望識見を兼備せる重鎭を失ひたるは邦家の爲洵に痛惜に堪へさる處なり茲に君の偉績を回顧すると共に聊か微衷を披瀝し以て弔辭となす。

昭和十六年七月二日

社團法人日本鐵鋼協會會長　工學博士　渡邊三郎

弔詞

社團法人日本金屬學會評議員今泉嘉一郎博士の御永眠は金屬工業界は勿論全學界全工業界の爲め洵に痛惜に堪へない所であります。

今泉博士は本邦鐵鋼界の長老で且偉大なる經營者であつたのであります、博士の豐富なる御經驗と卓越せる御識見とにより本邦製鋼事業の發達に貢獻された所は實に測り知るべからざるものであります。

昭和十二年日本金屬學會の創立に當りましては博士は發起人として大に盡力せられたのみならず本會の進むべき方向を極めて適切に指示せられたのであります爾來本會が屢々たる進歩を遂げつゝあるのは實に博士に負ふ所極めて大でありますので常々敬服し且つ感謝致して居たのであります。

しかるに博士は今や光輝ある御生涯を終へられ靜に永遠の眠に就かれました眞に哀悼の極であります。

茲に本會は謹で博士の御冥福を祈つて止まない次第であります。

昭和十六年七月二日

社團法人日本金屬學會　會長　本多光太郎

弔辭

梅雨陰晴定らず心氣倦怠の時吾が同窓の友工學博士今泉嘉一郎君遂焉逝世せらる洵に哀悼の念に堪へざるなり。

君明治二十五年帝國大學の業を卒へ幾何もなく職を八幡製鐵所に奉じ創業開發の業に當り專心經營其に艱苦を嘗め精勵刻苦克く今日

の大成を見るに至らしめたり當時我國不適の事業と稱せられたる製鐵事業をして後年の美果を收めしもの一に君の豐富なる學識と不屈の努力に依るもの多きに居る尋で官を辭し日本鋼管會社を創立し又能く數次の難局に處し方案其宜しきを得同社今日の盛運を來すに至り民間製鐵事業の發展を促進せる僉君の素志を貫徹せるものにして實に我國製鐵事業自給自足の基礎を確立せるものと謂ふべし後代議士に擧げられ學會に干與し又諸種の調査事業に參畫する等毎に其蘊蓄を傾け侃々諤々能く所信を披瀝し我國の工業一般殊に君の專門とする製鐵事業の進歩發達に寄與し其功績の顯著なる眞に我國技術界稀に見る偉材と謂ふべく吾等同窓の均しく誇とせし所なり。

而して我國製鐵事業の基礎玆に確立し今次の事變に際し能く外國依存の舊習を脫し國策に對應して遺憾なきを得しもの一に君等製鐵界權威の先見の明と努力の賜と謂ふべく君を識るものの與に感謝する所なり。

今や鐵生産擴充の要益々急にして更に君の抱負經綸を俟つもの多きを思ふの時遽に斯人を失ふは國家の一大損失にして洵に痛惜に堪へざるなり然りと雖も幸に我が技術界君等先輩の指導育成せる後進練達の濟々たる多士あり能く其遺業を繼承して進歩せる技術と周到なる經營とに依りて斯業の發展進歩を圖り能く此難局に膺り國家の要求に應じて寸毫の遺憾なきを得るは信じて疑はざる所にして君亦以て瞑すべきなり。

君資性剛毅才識超邁容易に屈せず俊敏熱誠事に當り精力亦旺盛にして畢生の事業君の體力の强健に待つもの多し吾等同窓の朋に君の長壽を期せしも亦玆に在り然るも死生命あり天壽限あり君齡古稀を超え事業結實功を奏し所謂功成り名遂げて斯世を去る君に於て遺憾なかるべきを信ず唯感む吾等同窓頻年急に其數を減じ二十五人の中存するもの僅に六人桑楡の暮景轉た秋風落寞の感に堪へず殊に君の唯一の嗜好たる圍碁會上永遠に君の謦咳に接し舊時を談ずるの機會を失するは餘生の老境にある吾等の一層寂寥の感を深くする所なり玆に君の靈前に佇ちて萬感交々至り多の云ふ所を知らず聊か君が功績の一端を陳べ併せて君が吾等同窓に對する多年の厚誼を思ひ深厚の謝忱と弔意を表せんとす。

昭和十六年七月二日

五々會代表　名井九介

第四章　各社新聞記事

七月一日　日日

今泉嘉一郎氏　日本鋼管株式會社取締役工學博士今泉嘉一郎氏は澁谷區穩田一の四の自邸で宿痾療養中廿九日午後零時三分死去した享年七十五、告別式は二日午後二時から三時まで會社葬をもつて築地本願寺で行ふ。

七月一日　讀賣

今泉嘉一郎氏　日本鋼管株式會社取締役從四位勳三等工學博士今泉嘉一郎氏は右側腎盂炎のため廿九日午後零時三分澁谷區穩田一の四の自宅で死亡した、享年七十五、告別式は同社々葬により二日午後二時から築地本願寺で營まれる　氏は明治二十五年東大工科卒業後ベルリン大學に學び同二十九年製鐵所技師となり、同四十五年退官し日本鋼管會社を創立、その間歐米視察行七回に及び大正四年工學博士、また同九年衆議院議員となつた。

七月二日　朝日

今泉嘉一郎氏（日本鋼管取締役、工博）腎盂炎のため去月廿九日午後零時三分東京澁谷區穩田一の四の自宅で死去した、享年七十五二日午後二時から三時まで築地本願寺において日本鋼管社葬を執行する。

氏は群馬縣の出身、さきに衆議院議員に當選、第十九回萬國議員總會の帝國議會代表議員團長として出席した。

七月一日　中外

今泉嘉一郎氏　日本鋼管株式會社取締役顧問今泉嘉一郎氏は腎臟病を病み療養中のところ廿九日午後零時三分澁谷區穩田一の四の自宅において死去した　享年七十五、葬儀は七月二日午後一時から築地本願寺で日本鋼管社葬を以て告別式は同二時から執行する。

七月三日　日刊工業

今泉博士告別式

きのふ築地本願寺の盛儀

元本社社長ならびに顧問の工學博士日本鋼管株式會社取締役顧問故今泉嘉一郎氏の葬儀は二日午後一時より東京築地本願寺において佛式により執行された。

會葬者は小川鐵相、村田遞相のほか多數の名士をはじめ各方面の人士約二千名におよび、なかには外國人の姿も相當見えたことは故人の廣汎多面な活動を物語るもので、本社も近藤取締役會長、豐成專務以下社員多數參列、特に弔詞を送つて哀悼の意を表した。

葬儀は定刻喪主嘉秋氏まり子夫人ほか親族など參列者一同着席、まづ導師總持寺鑑院弧峰智璨師の燒香に次で日本鋼管社長白石元治郎、鐵鋼統制會長平生釟三郎、鐵鋼協會長渡邊三郎、日本金屬學會本多光太郎、五五會長名井九介各氏の弔詞朗讀があつたがいづれも故人の鐵鋼界その他における不滅の功績を讃へ、切々哀情は會衆一同の胸をうつた。

このほか日本赤十字社、工政會、東京地質學會、日本工業倶樂部、學士會、日本學術振興會、帝國水難救濟會、エル・レイボルト商會、上毛金曜會、工學院、日本鑛業會などよりも弔辭、在鄕軍人會長ほか多數から弔電があつた。

午後二時よりの告別式には陸續多數名士、關係者などが燒香、同三時盛儀裡に葬儀を終了、同三時十五分菩提寺鶴見總持寺に向つた、當日の主なる參列者は左のごとし。

鐵道大臣小川鄕太郎、遞信大臣村田省藏、水野錬太郎、後藤文雄、藤原銀次郎、原嘉道、田中穗積、高木百合子、膳桂之助、田中館愛橘、大倉喜七郎、本多光太郎、俵孫一、米山梅吉、平生釟三郎、澁澤正雄、森村市左衞門、八田嘉明、淺野總一郎、中井勵作、ベルヘルム・ランドグラフ、クルト・マイスナー、中川健藏、牛塚虎太郎、兒玉謙吉、長岡半太郎、井坂孝

七月一日　日刊工業

本社顧問今泉博士逝く

本邦製鐵界の開祖

元本社々長、現顧問從四位勳三等工學博士、日本鋼管株式會社取締役顧問今泉嘉一郎氏は昨年七月以來、腎盂炎のための健康勝れず加療中のところ、このほど尿毒症を併發、病勢俄に惡化して一昨二十九日午後三時三分東京澁谷區穩田一ノ四の自邸において逝去した。

享年七十五、遺骸は一日午後二時桐ヶ谷火葬場において荼毘に附し二日午後一時築地本願寺において日本鋼管株式會社葬をもつて葬儀を執行、同二時より三時まで同所において告別式を行ひ四時鶴見總持寺に納骨の豫定である。

氏は慶應三年六月群馬縣に生れ明治二十五年東大工科卒、直ちに農商務省技師試補に任ぜられ官立製鐵所（現八幡製鐵）の創立準備に從事した、ついで同二十七年獨逸に留學、フライベルク、ベルリン鑛山大學に學び、三十年歸朝するか製鐵の建設起工を指導、三十四年製鋼部長、三十六年鋼材部長となり、同所の中心的技術指導者として奮闘したが四十三年退官、ついで四十五年學友白石元治郎氏と協力して日本鋼管を創立爾來三十年幾多の苦難を經て今日の大を築いた功勞は尠くない。

わが製鐵界に殘した功績

この間歐米に出張すること前後七回、その足跡は英、米、獨、墺、白、露、瑞、印度等九ケ國三百四十餘ケ所におよび、各國の製鐵事業を調査見學、大正四年二月には工學博士の學位を得るに至つた、かくの如く氏と製鐵界とは切つても切れない深い關係がある。他面氏は國際人として活躍、長くルクセンブルグ國の名譽總領事として大正九年同國よりコンマンデール・ドラ・クロンヌド・シエーン勳章を同十三年にはヒツトラー總統よりフエルデイーンツト・クロイツ・エルステルシュツーフュ・アードラ勳章を授與されたことは大正九年から十三年まで群馬縣より衆議員に當選したことに共に氏の華やかな反面の大を物語るものである。尙故人は夫人との間に五男五女あり、羨望される子福者であつた。

本社との關係

博士は本紙創刊當時より本社の故近藤社長（當時の主幹）と交遊極めて厚かつたので常に本紙の育成に意を注がれ大正十三年三月本社の熱望をいれて社長に就任、日本鋼管の社務多忙なるに拘らず寸暇を割きてあるひは奈良に開催した全社員の春季運動會にあるひは東京における一月の社員總會等に臨席、親しく所懷を披瀝され、わが社の進むべき途社員の守るべき職責について指導に努められた、昭和七年末すでに本社の基礎ますます鞏固なるに及び退任を申出られその後は引續き最高顧問として近年には近藤現取締役會長以下に力强き支援を與へられてゐたのであつた。いま博士の訃を耳にして社內その馨咳に接せるもの嗚咽涕泣肅然として哀悼の意を表せざるはない。

松下鋼管常務談

日本鋼管會社常務松下長久氏は逝ける今泉博士を追憶して三十日つぎのごとく語つた。

今泉博士は鐵が日本の勢力を發展させるうへに如何に重要缺くべからざる物質であるかといふことを誰よりも早く認識唱導せられ、日本の製鐵の基礎の確立と鐵の增産といふことに生涯變らぬ熱意をもつて努力せられて來た鐵鋼界の先覺者である、博士はその信念のもとに日鐵の前身である官營八幡製鐵所の建設に當つては當時優秀性を誇つた獨逸に赴かれ、彼の國の實情を熟心に研究されて製鐵所の創設には極めて有用な役割を果された第一次大戰後たまたま白石社長と今の日本鋼管を創設されたがその目的は鐵材中最も困難とされた鋼管の國産化にあり、幾多の苦心の末に立派に成功せられたことは人のよく知る通りである、さらに最近における博士の大きな足跡として特筆大書に値下するのはトーマス製鋼法の具體化である、この製鋼法式のごとき十年以上も前から博士はこれをわが國に紹介して來られたものであつて他の總ての會社がその企業化に躊躇して顧みなかつたにも拘らず、博士はつひにこれを日本鋼管で試みて大成功を收められた。このやうに博士は身をもつて常に最新の技術と實踐とをもつて日本製鐵業の躍進のために困難な荊棘の道を驀進されたのであつて、若しも今日の日本鋼業が他民間會社に比して何等かの勝る點ありとすれば白石社長の偉さもあるが、今泉博士の指導よろしきを得た賜に外ならないと思ふ。これは要する博士は今を去る四十年前において既に鐵鋼の國策的重要性を指摘强調せられ、鐵の生産增强に獻身的努力を續けられた鐵鋼界の大先覺者であり、複雜困難な技術を實踐化された製鐵技術の第一人者たりし人であつた、殊に最後の病床においてもなほかつわが製鐵業の今後にいろいろ心配せられてゐたのを思ふと全く頭を下げざるを得ない。

景山常務談

日本製鐵常務（技術擔當）景山齊氏に今泉博士逝去の報を齎せば氏は嘗て八幡製鐵所創建當時博士の指揮下に活動した往時を顧みて次のごとく語つた。

僕は明治四十年八幡にはいつたとき今泉さんは鋼材部長として製鋼、壓延の方を主宰されてゐたが、技監格の地位にあつて所長に次ぐ勢力を持たれ元氣もあつて製鐵所全體を牛耳つてをられた。その後工務課長を兼務して第二次擴張計畫を指揮せられたが、たしか四十三年であつたか製鐵所を退かれた、何しろわが國製鐵業の基礎を築いた官營八幡の開祖であつて創設當時の御苦心御苦勞のほどは大變なものであつた、八幡が作業をはじめた當座二、三の外國技術者、職工長は來てゐたが場所は違ふし原料は違ふ、職工は全然熟練してゐない、今泉さん以下首腦部としては二、三年の間外國で研究してきてゐるとはいふものの他が全部素人であるのでその苦心は非常なものがあつた、當時突破的事故は矢繼早に近い、それがまた驚くべき大事故ばかりであつて、それらの體驗を次々に積まれて克服、軌道に乘せ製鐵業を今日の隆昌の礎を築かれた、今日の今泉さんの功績は大なるものがあると思ふ、非常に仕事熱心な人で當時の部下の僕達には隨分無理なことを平氣で命令されて閉口したが、御蔭で今日はそれが非常に參考になつてゐる。八幡をやめられてからの今泉さんは鋼管會社をつくられ、パイプ製造の難事業を達成し、さらに近頃はトーマス鋼の製造に成功せられ何れも沒すべからざる功績であるが、何といつても今泉さんの一番大きな功績は日本の鐵鋼業をして今日あらしめたる種をまかれたといふことであつて、其意味からいへば今泉さんはわが現代製鐵業の開祖と云ふべきであらう。

第五章　今泉博士追悼會記錄

八月十六日（帝國ホテルに於て）

本日は恒德院殿嘉道慶猷居士の七七忌に相當致しまするので、生前御昵懇を御願ひ致しました皆樣方に於かれましては、時節柄御多忙の際にも拘りませず、又殘暑嚴しい折柄斯く多數の方々の御出でを頂きましたことは遺族の者一同の深く光榮とするところでございます。偖て今夕は萬事不慣れの點もございまして、洵に總ての點に行屆きませず、又色々設備の不行屆もあつて失禮致したことゝ思ひまするけれども、何卒御宥しの程を御願ひ致します。時節がら洵に疎宴にて失禮仕りましたが、何卒御寬恕の程御願ひ申上げます。洵に、簡單ではありますが、一言以て御挨拶に代へます。（拍手）

今泉博士の御遺族並に御列席の諸君、今泉博士が御隱れになりましてから、愛惜の涙未だ乾く暇もなき內に月日の廻りますことは、早や七七の御忌日に相成りましたのであります。御遺族の御案內を頂きまして、玆に御集りの方々から私は最も古き年寄であると云ふので、御一同の口開きを仰せ付かりましたのでございます。

今泉博士は優れた人格と深き學識とを以て學界に、工業界に、將又一般社會の人文に對し多大の貢獻を遺された事は私が申す迄もありませぬ御集りの各方面の方々からそれ〴〵思ひ出の御言葉があらうと存じます。唯此の全くの非常時に當りまして、國民一同が力と仰いで居りました博士を失ひましたことは、惜しみても限りなき次第であります。天命已むを得ぬと致しましても、我々は故博士の遺されたる尊き志を繼ぎまして、之が實行に全力を盡しまして、博士在天の靈を御慰め申すことは我々の義務と思ひます。之を以て御挨拶と致します。（拍手）

今泉　嘉秋氏

田中館愛橘氏

今日は今泉博士が逝かれまして早か七七忌と相成り誠に感慨無量のものがありますが、昔から親交を忝くして居りましたので、友人の立場より玆に腹藏なく博士を偲んで見たいと存じます。先づ

第一　君の一生を通じての概觀

でありますが、君は只今田中館博士も申された通り、一生中、學界に官界に民業に其他各方面に於て非常の努力を致し、斃れて後已むの一大信念を以て邁進され、又之が效果をも收められたのであります。而してその中心點は實に製鐵そのものであつて、製鐵卽ち今泉であつたのであります。併し君は專門病に囚はれぬ樣に常に專門外の各方面にも留意し綜合と云ふことにも着眼されて居つた樣であります。

又君は製鐵の事を盛にするのには、政治家の力も必要であり、且つ國民に之を諒解せしむることが緊要であると思はれたので、大正九年には群馬縣選出の衆議院議員となり第四十四議會では製鐵上の國策に付具體的所論を發表されたこともあります。

それから君の一生中忘れてはならぬことは、大學及その後の研究時代と製鐵所の奉仕時代と日本鋼管會社時代の三であつて、それは互に相關聯して三者は君の全生活を通じ三位一體のものであつたのであります。

斯くて君は逝去前迄は製鐵業界の各方面に於て、或は內地に或は滿洲に或は南洋等荀も斯界に關する限り種々の會社學界等に於て大に貢獻されたものであります。

君は又日露戰爭では功勞に依りて勳三等を賜はり、又公益事業としては永くルクセンブルグの名譽領事として赤十字の第十五回國際會議に列する等、勳功に依りて其の國の勳章は勿論、近くは又昭和十三年には獨逸のヒトラー總統より第一級の功勞勳章エルステー・スツーフエー・フエルヂーンストクロイツをも拜受されたのであります。而してそれは定めし製鐵界に對する功勞の爲めと存じます。其の他君が廣く工業の學界や、實業界の爲め、又は鄕土等の爲め等公益事業に盡された事は多々あらうと信じます。次に申し上げたい

松井　茂氏

ことは

第二　第一高等學校入學前後及其の後の學生時代

の事でありますが、君は明治十六七年頃かと記憶致しますが、當時君は私共と一緒に麹町區一番町邊の獨逸協會學校に就學したる後明治十七年には共に大學豫備門（後の第一高等中學校）に入學しましたが、當時私は麹町區富士見町六丁目の父母の宅に居住し、君は神田區三崎町練兵場の附近麹町區飯田町一丁目邊に下宿して居つたので互によく往復し私も度々君を訪うて橋芋の馳走になり、君も又度度我宅に來り盛に體操を練習したものであります。

當時の君は萬事に熱心で、卒直で、淡白で且つ研究心に富み、數學の方面にも通じボートレースなどの運動競技にも熱心であつた。それに又君は中々の孝行者で、明治二十四年の夏に母堂を失ひし時、態々大分縣に滯在中の私に孝養の必要を警告し來り且つ八月十七日左の長句を送り來つたものであります。

回レ首辜負十餘年　勿レ怪風光幾變遷
大畠山頭雲慫レ惑　祥禪寺畔夜如レ煙
行人絶レ跡花輪宿　流水難レ停渡瀨川
唯有二西風知一我恨一　梧桐聲靜墓碑邊

此の長句は餘程私の頭を動かしたもので、私も八月十七日直に之に和して君を慰めたことであつた。

與レ君水魚十餘年　歲華匆々夢裡遷
不レ計今逢二君凶事一　人間萬事歸二雲煙一
樹欲レ靜今風不レ已　孝子哭送渡瀨川
接レ報慰レ君關山遠　同情頻發故山邊

私は此の場合に於て君が第一高等中學校の工科二年生當時、明治二十二年五月以來一ケ年有餘に亘り、警視廳消防研究會の依頼に應じ、獨逸消防學大家デーリングの原著を參考として講述されたことを思ひ出さざるを得ないものがあります。而して君は皆樣も御承知の如くに、鐵屑集の冒頭に消防學の講義を掲げ且つ其の由來を述ぶるに當り「消防の事は予の最も古い親友である法學博士松井茂君が終生の事業として指導されつつある警察事務の一要務なるを思へば、之を廢棄するに忍びないので、遂に鐵屑に採集することとした云云」と語つて居らるるが、此處にも又君の友情の濃かなる一端が明かに窺はれて感謝の外はありませぬ。

而して此の誠意ある友情は獨り學生時代ばかりではなく、君の一生を通じて克くその光輝を放ち來りしことは定めて皆樣に於ても御同感の事と存じますが、私は特に此の場合に於て玆に悲哀の事を白狀致しますが、實は友情に厚き君は私が第一高等學校時代に平素克く日記を綴り、時には又往々獨逸文を以て之を認めて居つた事を記憶して居られたので、先般の病中にも之を思ひ出したものと見え、今春の初めに於て態々立派なる獨逸製の今年の日記帳を送り來り、且つ之に書翰を添へて「君に此の不用の物を贈るのは誠に失禮であるが云々」と云ひつゝ更にその書翰中には「君は非常に多忙ではあらうが通りがゝりの時は立寄つて呉れよ。」とのことであつた。そこで私は早速「何よりの品誠に難有く落掌、いつも乍らの友情感謝の外はない、早速喜んで使用すべく、又是非ともその中御伺ひ致したし云々」との意味を以て返書を送つたが、其の後或日の事、その日は一寸でも是非立寄る積りで家を出たが、遂に何分にもその機を得ざることとなりたる故、その中ゆる〳〵更に伺ひたいと大に氣に懸りつゝ荏苒經過して居りたる所、遂に俄然訃音に接し驚愕措く所を知らず、しかも私は其の時には所勞引籠中で醫師よりも外出を禁ぜられて居つたので、私は深く斷腸の念に驅られ、痛嘆之を久うしたのは餘りに當然過ることであつた。畢竟私が不注意にも病とは知りつゝもまさか君が亡くなられる樣なことはあるまいと確信して居りたる故、斗らずも此の怠慢の大失策を見るに至つたことは乍今更返すゝ〳〵も殘念千萬の至りにて、玆に私は卒直にその經過を告白して心から亡き君に深く御詫する次第であります。

偖只今申し上げましたる彼の思出多き日記帳とは此の品で、こんな立派の物であります。之はデーマーク會社より君に送つたもので、私は現に之を愛用して居りますが、それが今偶々君の昔を忘れぬ友情の籠れる形見となりしことは私の少しも想像せざりし所にして、それが又今日の此の席上では別けて私の涙の種となつたのであります。

そこで今夜の此の御催の御會合に對する私の直感を申し上ぐれば

くろがねの心持ちたる我が友を
偲ぶ今日こそ涙なりけり

次に申し上げて見たいことは

第三　門外漢より見たる君の製鐵界に於ける事績

でありますが、君が之が研究の爲め初めて洋行されたのは明治二十七年である、當時の警察法研究の爲めの法科大學研究生でもあり且つ警視廳試補時代でもあつたが、喜の餘り、四月十九日付を以つて左の送別文を贈つたことであつた。

今之世喃々唱二政議一、碌々斡二旋世路一、詭辯爲レ達者皆是也、如レ此而已乎、邦家前途可レ知也、今也我國政論時期既去、殖產之機正熟、蓋謂二文明一、稱二強兵一、生產實爲二之基一、國富而強兵從レ之、兵強而文明又從レ之、（中略）以レ是見レ之從レ學者不可不レ擇二其所一也、今泉君嘉一郎群馬人、與レ余有レ舊、夙入二工科大學一、修二製鐵之學一、今也又遠遊二獨逸一、將二益究一斯學蘊奥一、何其壯哉、我邦製鐵之業未レ開、其有レ用二於國家一、不レ待二智者一而可レ知也、如二今泉君一者、可謂下善擇二其所レ學一者上矣、獨逸之爲レ地、夙以二製鐵一鳴、鐵鑛之山、學理之野、可三以展二君驥足一、（中略）仰則觀二孤留弗之砲禦一、伏則接二碩學偉士一、服二其博識卓逸一、觀者莫レ不二一而新一君耳目一者上、今若他日齎二此學與一此術一而歸之日接レ君乎、則知今日之君非二後年之君一也、學識富贍、眼界超絶、以可レ施二之於實地一、於レ是始我國生產可レ期、强兵又可レ稱也、雖レ然其致レ之、有二今日之也君一、只以二此心一爲レ心、則余又無レ所レ望レ君焉、臨レ別流涕非二我事一也、聊呈二鄙辭一壯二君行一云爾。

以上の如く私の言葉は頗る氣焰を吐いたものであつたが、併し明治二十七年の今泉君は、昭和十六年逝去當時の同一の今泉君である以上、私の此の送別の豫言が偶然にもよくも將來の君を語り當てたことは、自分から君の知己を以て任ずる私の頗る誇とする所であります。

其の後君は度々彼地に行かれ、私の承つて居る丈けでも前後七回に及んで居る。而して君の專門事業に就ては何れこれから他の方々から御話もあることと存じますが、只私共の如き門外漢より見ても、君が度々洋行してその豐富なる體驗と學識とに基き、大に斯界の爲めに努力されたことは國家の爲め誠に感謝の外はありませぬ。併し君が始めて斯の道に志され當時の我國情は何分にも時代が時代

なりし故、定めて君も隨分惡戰苦鬪されたことと思ひます。殊に明治四十三年に製鐵所を退かれてより以來民間の人となられたる後は、白石元治郎君と相謀り共に日本鋼管會社を創設せられたが、その設立前後の御苦心は實に容易の業ではなかつたことと信じます。然るに今やその勞空しからず、社運は隆々として益々盛大に赴き、大に國家の爲めに貢獻されつゝあることは誠に欣快に堪へざる所であります。

而して今や未曾有の非常時局に當り、殊に國防國家の盛に叫ばれつゝあるの現時に於て、製鐵事業の愈々緊要なる重工業たることは今更喋々する迄もありませぬが、此の時に當り偶々君の如き國寶的人物を失ひたることは、國家の爲め誠に痛嘆措く能はざる所であります。此の意味に於て君の存在は折角此れからの時代に於てこそ益々その國寶的價値が認められつゝあつたので、從つて又惜別の情も一層痛切のものがある。そこで私の此の點に對する君への直覺的感想を述ぶれば、

くろがねの心持ちたる我が友は
此の世にこそは實なりしに

第四　君の一生を通じたる人格

に就て申し述べて見たいと存じますが、それは私が昭和五年四月鐵屑集の序文中にも述べたるが如くに、私が君に敬服せる點は「君の剛健にして率直玉の如き美質である。君の初志に對して終始撓まざる勇猛心である、君の至孝親を忘れざるの誠意である。君の鄕土の爲めに貢獻せる美德である。君の熱誠溢るるが如き友情である。」而してそれに又君は明敏の頭腦を有し、殊に又規律心と研究心とが大に發達した樣である、規律力の一例は君の熱心に集輯されたる寫眞を極めて秩序的に整備せることである。之は一些事の樣であるが中中出來ることではない。又穗田の現住宅の扉の警戒的裝置の如きも一には熱心なる研究心の結果にも依るが、又規律的精神の發露と云へやう。要するに此の規律的精神と研究心の旺盛なる二點は獨逸に負ふ所が少くないと思ふが、定めし專門の製鐵界の方面では特に研究と云ふ點には最も重きを置かれたことと信じます。從つて又君自からの多年の斯界に對する體驗と研究の結果に就ても必ず立派なる成績の見るべきものが殘されてあることと信じます。それは鐵屑集でもその一端が窺はれるのであります。

又君の趣味に就ては私の知る限りに於ても昔から運動の事は勿論又實は日本畫の揮毫に就ては少しも知らざりしが、先年その達筆を見て大に驚いたことであります。

更に又家庭に就ては先にも述べたる如く親孝行は言ふ迄もありませぬが、鐵屑集の如きも「わが母のため」とある所を見てもその床しさは敬服の外はありませぬ。又夫婦が克く相和して居られたることも公知の事實であつて、先夫人は勿論今日此の席に御列席の令夫人の内助の功の顯著なりしことは、君の事業の經營上如何に與りて力ありしかは今更申し上る迄もありまぜぬ、又先刻御挨拶になりました御嗣子長男嘉秋君を始め御一族に於ても定めて克く一致して居らるゝことゝ信じます。

大分話が永くなりまして、恐縮ですが、玆に君の面影の一端を述べさして頂きたいことは、曾て愛女の芳子さんが千田（武彦）工學士に嫁せられた時、確か舊家族會館で婚姻の披露があつて私も御招を受けたが、淡白なる君は突然私に向ひ「今日は來賓總代として樺山（愛輔）伯に挨拶を願ひ置きたる所差支への爲早く歸らるる故君に願ひたい」とのことで全く藪から棒の依頼には私も少々躊躇したが、終に承諾はしたものゝ、全く腹案もなく且つ考へる寸暇もなく直に宴席につくと、隣席には君が座席を占め、愉快さうに話かけてゐる、先づ私は「今泉承諾はしたが此の突然の挨拶には少々困つたな――」と述べると君は余に向ひ「松井、婚姻の挨拶は六敷いものでなあ、曾て原敬さんも僕に向ひ自分も演說は度々やつたが婚姻の挨拶程六敷きものはないと云はれたことがあるよ」と例の卒直振りを發揮するので、さうなくても既に折角の御馳走も演說引受けの爲め少々心配なので消化不良になりつゝある所へ、又々君が此の言をなしたので消化は益々不良になつたことゝ思ふが、それはどうでもよいとして愈々私の挨拶すべき順番が到來したので、私も卽席的に斯樣なことを申し述べたことであつた。卽ち「私は廣島縣の出身であるが、新郎の父君は有名な千田（貞曉）廣島縣知事の御次男である、而してその千田男爵は私財を拋つて宇品港を大成し軍事上にも貢獻されたる大人格者であります、新郎はその血を受けて居らるゝ故私は新郎は存じませぬが、必ず立派の新郎に違ひない。又新婦は私の親友今泉嘉一郎君の長女であるが、今泉君は若い時より非常に立派なる人格者でして、帝國大學卒業後は我國の製鐵界に貢獻される等私の最も敬服せる方であります。新婦はその血を受けて居らるる故、私は新婦は存じませぬが必ず御立派の新婦に違ひない云々」と盛に千田男爵や今泉博士の事を吹聽したので孝行奬勵會と婚姻披露會とを混線したる處もないでもなかつたが、兎に角不完全乍ら私は一應責任を果し得たので、君も頗る滿足の表情を以て迎へられ私

も一先づ安心したことであつたが、之も故人を偲ぶ一奇談として御笑草迄に一言したる次第であります。又御次女の富子さんは愛知縣一宮市の伴（義定）工學士に嫁せられ、私もその披露宴に招かれ出席いたしましたが、偶々私は新郎の父君とも懇意の間柄であつたので、君も「不思議な緣だな」と云うて大に喜んで居つた事を記憶して居りますが、何れにしても君の家庭關係の圓滿なることは、君の美德の力も大に影響のあることゝ存じます。

又君の友情の濃かなりしことは先刻來度々申し上げましたが、更に玆に一言附け加へさせて頂きたいことは、今から一年有餘年前かと記憶するが、或夜のこと私は今夜此の席に御列席の伊東（忠太）博士と服部（漸）故博士と共に三人して友情溢るゝが如き君の家庭的招待に接し、しかも相變らず令夫人の溫かき御手料理の下に愉快なる一夕の閑談を試みたことがありましたので、折角先刻も伊東博士と共に其の當時の事を語り合ひ、互に無限の感に打たれたことでありました。

要するに君の事業の成功も結局は君の崇高なる人格が與りて力ありしことと信じますが、就中君の淡白なる美質が基礎となり之に依りて旺盛なる研究心も又君の濃厚なる人間もよく君を大成せしめたものである、從つて又君は技術上に就ては人一倍に熱心であつたが斷じて技藝の形式的末節に囚はれざりし所に、君の淡白なる性質の妙用が存在して居つたのであるまいかと門外漢乍らも私は斯くの如き感想を抱いて居るのであります。

第五　結　び

以上私の今夜の話は如何に親友の間柄であつたとしても、專門が違ふ故、私の觀察が謬つてゐるかも保し難く、且つ話の內容も君の一生としてはほんの一部に過ぎませぬから、その點は皆樣に於ても宜しく御諒解あらんことを御願ひ致して置きます。

更に玆に繰返して申し上げますが、私は深く君の病狀を研究せざりし爲めでもありませうが、卒直に私の心情を告白せば先にも申し上る如くに、私は確かに君は急に此の世を去る者ではないと確信して居つたのであります。殊にあの鐵の如き剛健なる氣象の持主、あの鐵の如き身體の持主、たとひ病氣であるとは聞きましたがそれは必ず恢復されるものと獨斷して居つたので、一朝訃音に接したる時の衝動的感覺は又想像以上のものがあつたのも當然であります。而してそれは私一人ではありますまい。そんな次第で私はその當時は

勿論、今でも何となく君は生きて居らるゝが如き氣持に打たれてゐるのであります。そこで私の直覺的感想は、

くろがねの心持ちたる我が友は
生けるが如く雲隱れけり

而して君は結極は決して此の世を去らずして、末永く靈に生きて居らるるのであります。吉田松陰先生も死の間際に於て「勅を奉じて死せる者は生ける者なり、勅に背きて生ける者は死せる者なり」と言はれたと云ふことであるが、君の如きは克くも教育勅語の綱目を一々如實に實行して死せる者故、謂ゆる此の世に生ける者である。況や、君の殘されたる偉業は君の多年訓育し來れる有爲の方々に依りて現に永遠に繼承されて居り、且つ博士としての君の斯界に對する旺盛なる研究心は、是れ又幾久しく君の後繼者に依つて永遠に持續されてある以上、君の靈は永く地下に安んじて居らるゝことと信じます。

以上今夕の私の話は餘りに永くなりまして、誠に恐縮千萬でありますが、故人が鐵屑中の序文中にも、私を以て「中學程度の少年時代」よりの最も古き親友と認めてゐる樣に、私の君に對する憧も又同樣なることを思ふ時、圖らずも今夕の追懷談が長きに失したることに付幾重にも皆樣の御諒察と御宥恕の程を御願ひ致す次第であります。

最後に私は重ねて今泉家の萬福を祈ると共に、君の爲めに特に社葬禮を以て君を送りたる君の一生の遺業たる日本鋼管會社が此の非常時局に當り、益々社運の隆昌に赴かんことを心から念願して、折角君の在天の靈を慰めたいとの希望を申し添へまして、私の今夕の不束なる追悼の辭を終へようと存じます。（拍手）

俵國一氏

私は一言今泉さんのことに付きまして、追憶を申し上げます。只今松井さんから思ひ出の御話がありまして、私も感慨に耽ける御言葉を拜聽致したのであります、今泉さんは全く其の通りで、少しく今泉さんの世の中に遺しなすつた仕事に付きまして、今泉さん私などの學んで居りまする專門の方から申上げたいと思ふのであります。

本日は其の方の專門の方も大勢御出でありますが、又さうでない方、現に松井さんも左樣に仰つしやいました、左樣な方も大勢御

出でであります、博士はドイツから最初御歸りになりましてから、其の當時大學は一校のみありましたので、東京大學でありますが、其の東京大學の講師を御勤めになりました。製鐵の講義を爲すつたのであります、此處にいらつしやいます桂さんなどは講義を御聽きになりました、私は丁度卒業する前で講義は伺ひませんでしたが、私の卒業論文を御審査下すつて色々御指導、御支援に預かつた次第であります、それから只今仰せの通りに八幡製鐵所に御赴任になり、製鋼部長を御勤めになり、物事を新しく造りまする時の困難、此の難事業でありまする製鐵事業を日本に御興し爲すつた其の御苦心は嘸ぞ非常なものであつたらうと想像出來るのであります。其の當時に於きまして、屢々私共は八幡に參りまして、始終御指導を受け、又は家庭へ始終御招きを受けて大いに師弟愛を蒙つたのでありまします。それから明治四十三年に官を御罷めになつて、あの活氣のある、何か事をしなければならぬと云ふ性格の方でありますから、民間に於て種々事業を爲すつて遂に鋼管會社を白石さんと共に御始めになつて、會社を今日の隆盛なものに爲すつたのであります。新しく物を造り、新しく會社を造る、其の御苦心、御經營の困難に打ち勝たれたることは勿論でありますが、私の最も感じ、必ず世の中に之を此の御功績を遺さなくてはならぬと思ふ點は皆樣御承知の去る昭和十三年に御始めになつたトーマス製鋼法であります。稍々製鋼專門の事になりまするが、此の方法はドイツに於て最も盛なものでありますが、ドイツではそれに向くやうな鐵鑛石が澤山にあるのであります、日本で此の鐵鋼法を致しますことは、今泉博士を以て始めて考へ付き、或はそれを成功さすだけの力を盡し得るのではなからうかと私は深く信じて居る者であります。と申しまするのは、日本にはドイツの如く此の方法に向く鑛石が無いのであります、從つて他から鐵鑛でなくても或は燐を含んでゐる燐鑛石、それを輸入して製鐵をする。それに付ての今泉博士の御苦心は私は影ながら承知して居るのでありますが、先づ學界で日本で此のトーマス法をやつて良し、やらなくてはならぬと云ふことを發表されて、自由に討議をさせられたのであります、それから出ます所の燐酸肥料などの利用價値等に付きましても、十分の御研究をなすつたやうに拜聽し又讀んで居るのであります、此の結果と致しまして、去る昭和十三年六月二十五日卽ち今泉博士の誕生日を以て日本鋼管株式會社でトーマス法を始められたのであります、是は白石社長始め幹部、今泉博士も同樣日本では此の方法を用ひなくてはならぬと云ふ御決心が着いて出來たことでありまするが、恐らく十數年前から此のトーマス法を日本で用ひなくてはならぬと云ふことに付て苦戰惡鬪と申しては或は言ひ過ぎるかも知れませぬが、非常な御決心を以て之を始められた次第であります。無論成功されるのは決つて居りませうが、豫期通

り十分成功されて、今日ではアメリカが昨年屑鐵を日本に持つて來ることを禁じまして以來、日本の製鐵界に於きましては、朝野擧つて、此の今泉博士のトーマス法をやらうではないか、やつて見ようと云ふからな計畫をされてゐると云ふことを聞いてゐるのであります。若し今泉博士が三年前にやられなかつたならば、何處にそれを習ふか、幸ひにして今日はドイツ人が十分其の方法を教へて歸つて居りますから、十分堪能な技術者が日本に出て居りますから、其處から教はれば、やらうと思へば出來ぬことはないのであります、松井さんが申されましたヒトラー總統の今泉博士に勳章を與へたのは故ある哉であります。眞に今泉博士を追憶しまするとと、智慧の人、腕の人、情の人、其の三つで自分の仕事をどん〳〵實行なすつて、今泉さんの一生を通じて殆ど休むことがなく進んで仕事をし、仕事を研究し、それを實行して御國に盡されたことと承知致して居ります、只今御話を承り洵に感じ入りましたが、此の重大な時に際しまして、今泉さんを要すること益々大であります、其の時に亡くなられましたことは、洵に悲しむべきことと思ふので、私達專門家に於きましては、皆承知してゐる事でありまするが、此の今泉さんの大きな事業の一端を想ひ起しまして、今日今泉さんを追憶致しまする言葉と致します。（拍手）

松下長久氏

既に時刻も大分遲くなりましたが、一言申述べさせて頂きます、只今御同窓の松井さんから故今泉博士の御性格其の他に付て色々御話がありんした、又鐵鋼界の權威者であられる俵博士からも御話がございましたので、最早や私から何も申上げることがないのでありますが、私が鋼管會社に勤めて居ります事と學校關係から申しますと、故博士が御教へになつた俵先生と御一緒に御卒業になりました齋藤博士に薫陶を受けた者でありますからして、故博士から御覽になると、孫に當る次第であります、明治四十五年六月に鋼管會社が創立されました時は私は同社に勤めさせて頂いたのでありますが、只今松井博士から同博士の大學時代に於ける色々な御話がございましたが、若し今晩私共の方の社長白石さんが此所に御出席になつてをられましたならば、白石社長は法科を、故博士は工科を同年に御卒業になつてをられ、永年御懇意の中でありましたし、又鋼管會社も全く同博士と白石さんの御協力で創立されたものでありまして、其の後約三十年間仕事の上で又御友達として御一緒に御經營になつたのでありますからして、白石社長が御出席でありますれば其の方

の觀點からも色々な思ひ出話が多分に出たことと存ずるのでありますが、今夕社長は先般御家庭に御不幸がございましたのと、最近少しく御健康を害されたので、此の夏は御靜養中でありますので私が今泉博士の孫弟子として、又會社の社員の一人と致しまして、聊か思ひ出の一端を申上げたいと思ひまして、立つた次第であります。

只今俵博士からも御話がありましたやうに、鋼管會社は明治四十五年に白石さんと今泉さんが御相談の結果創められたのでありまして、日本に於てどうしても鋼管を造らなければならぬ、そして當時我國は皆外國の鋼材を使つて居つたのでありますが、將來は外國から國家に必要な鐵鋼を仰いで居るやうではいけぬと云ふので、其の御考から創立されたやうに聞いて居ります、四十五年の六月に創立になりましてから、大正二年一つばいに建設に掛かり、大正三年四月から事業開始になつたのでありますが、當時の日本の鐵鋼界は甚だ幼稚なものでありまして、關東に於ては、只今は多數の製鐵會社がありますが、當時は全くありませぬで、鐵とはどう云ふ物であるかと云ふことすら餘り知られて居らない。今次の事變になりましてから、鐵の非常に大事であると云ふことが世の中に知られるやうになつたのでありますが、それで製鐵の仕事をやりますには、職工始め我々技術者も非常に苦しんだのであります、八幡製鐵所から二三の技師が來たのでありますが、其の他の新たに採用された者は全く製鐵事業とは何んであるかを知らないのでありますから、仕事を始めましても、故障百出製品は不完全と云ふ始末で實際私共は文字通り心血を注いで從事したのであります、然るに是が成功致しましたのは、只今諸先輩方から御話がありましたやうに、全く故博士の御研究と御熱心の賜であると思ひます、段々と會社の仕事も順調になりまして、勿論其の間には波瀾重疊、色々の苦しい場面がありましたが、昭和十一年に漸く熔鑛爐を造ることが出來ましてから、完全なる製鐵製鋼會社になつたのであります、其の機會を以ちまして、只今俵博士から御話がありました通り、トーマス製鋼法をやることに御計畫を御進めになつたのであります、其の計畫は既に十數年前にはじめられたのでありまして、鐵鋼協會の研究部會に同博士主催の下に日本に於てトーマス製鋼の採用可能なりやと云ふ問題を研究されたのであります、ドイツ、フランス、ベルギー等に於ては盛に行はれて居る方法でありますが、日本に於ては此の方法に適する鑛石がない爲之れが實行は非常に困難視されて居つたのであります。それが幸ひに成功致しましたのは、全く同博士の御苦心と長い間の御研究の賜であります、只今俵博士から御話がありましたやうに、トーマス製鋼と共に其の副産物として產出する燐酸肥料の御調査も出來て居ると云ふやうな次第でありまして、唯簡單に思ひ付きだけ

でトーマス製鋼法をやられたのでないと云ふことは之を以ても御分りになると思ふのであります、即ち鐵鋼界の仕事は今後益々重要でありますし現在の如き高度國防に邁進せねばならぬ時に當りまして、博士の如き御方が御亡くなりになりましたことは、私共非常に殘念に堪へないのでありますけれども、是亦致し方のないことで天命の然らしむる所と存ずる次第であります。私達は博士の御遺志を繼いで今後益々國家の爲に盡し、博士の遺されたる仕事を完成しようと云ふ考へを有つて毎日從事しつつある次第であります、故博士を追憶して一言御挨拶を申上げた次第であります。（拍手）

昭和十六年八月二十三日

東京市澁谷區代々木富ケ谷町一、五二六

河村曉氏

今泉嘉秋樣

拜呈　過日恒德院樣七七忌に際しては御鄭重なる御招待に預り難有奉拜謝候其節時間の餘裕も有之候はゞ申述度と存じ用意致候原稿玆許同封拜送仕候間御一覽被下候はゞ幸甚之至りに御座候右御禮旁得貴意度如此に御座候　敬具

河村曉

故今泉嘉一郎博士を憶ふ

今泉博士は明治二十五年に大學を御卒業になり、私は明治三十五年に卒業致しましたので、丁度十年も違ふ大先輩でありまして、私が明治三十四年に學生として、八幡製鐵所に見學に罷出ました時には、已に博士は三十五歲の若さで、同所製鋼部長の榮職に就かれて居たのでありまして、其當時の博士の澄澈たる御元氣、颯爽たる英姿は、今尙ほ眼前に髣髴たるものがあります。博士がかくも年若くして八幡創業の重職に就かれました事は、其當時已に鐵鋼に關する充分なる修養を積まれた權威者であつた事に由るものでありまして博士は夙に獨逸協會に於て獨逸語を修學せられ、大學御卒業後は永らく獨逸國に留學して、フライベルヒ及ベルリン兩大學に於て專門學科を御研鑽になり、又同國の製鐵工場で操業上の訓練を經て御歸朝せられましたので、其の根元の誠に深いものがあつたからであります。其後私が今泉博士に特に御近付になりましたのは、社團法人日本鐵鋼協會創立以來の事で、爾來今年に至る迄二十有六年に亘り御親交を辱ふ致しました。又其間大正十四年頃より數年間、今日の鐵鋼統制會の前々身とも云ふ可き、鐵鋼協議會時代に、今泉博士、

香村博士並に不肖私が技術員として、屢々交涉致した事がありまして、之の鐵鋼協議會時代は、恰も本邦製鐵鋼業の最も不振を極めた時代、如何にして之の難況を克服し、本邦製鐵國策の樹立に邁進す可きかが大問題でありましたので、各々出立場の相違もあり議論も自ら異つて參ります事は當然でありまして、隨分過激なる議論も交換された事がありますが、博士は如何に激論が交はされても、あとは大風一過、誠に光風霽月の趣きがありました。之は博士の御性格の特徵とも申す可きもので、一方に於ては非常に御元氣で時には過激なる御性格の表はれます事もありますが、又一面誠にさつぱりとした、誠に掬す可き優しさを具へて御出になりました事は、今日に於て思出の種となつて、誠に感慨無量なるものがあります。一方日本鐵鋼協會の事業は、自ら其趣を異にし、主として學術技術の振興機關でありますので、常に圓滿に且つ十分なる協調が保たれたのは勿論の事で、博士は何時も先輩たるの襟度を以て、私共後輩のものを懇切に指導し、鞭撻し、又充分なる御後援を與へられました事は、私の終生忘るゝ事の出來ない印象でありまして、特に其一端を此際附け加へて申して見ますと、去る昭和十三年六月頃の事でありました、或る朝今泉博士より拙宅へ御電話がありまして、少し相談したい事があつて御宅へ御伺ひしたいが、何時頃行つたらよいかとの事でありましたので、それは甚だ恐縮である、御用がありますなら私の方から御伺ひするのが順序でもあり又道順でもあるから、出勤前これから御伺ひすると申しまして穩田の御宅へ出ますと、博士の申さるゝには、今回日本鋼管會社より日本鐵鋼協會事業後援の爲め相當額の金員を寄贈する積りであるが、どう云ふ事に之を使ふか、之に關する案を作つて見て呉れとの事でありましたので、其御厚意に感激し早速私案を作つて再び御宅へ御伺ひ致しました處、幸に其儘御了承下さいまして、金三十萬圓と云ふ學會としては殆んど前例のない多額の金員の御寄附を得まして、日本鐵鋼協會內に日本鋼管株式會社寄贈資金取扱規則を制定致しまして、之の資金より生ずる利子を以て、年々鐵鋼各部門に關する技術上の調査、研究會の開催並に研究事項の印刷物の調製、頒布等に要する費用に充當し、今日多大の效果を收めてゐるのでありまして、之は素より日本鋼管會社の白石社長、其他重役各位の御好意にもよる事は勿論でありますが、特に今泉博士の多大の御厚意と御盡力に依るものとして、鐵鋼協會の歷史上永く記念す可き事と考へまして、玆に特に英靈に對し深厚なる敬意を表する次第であります、尙ほ博士の鐵鋼技術に關する輝しき御業歷御貢獻等に關しましては、已に告別式當時の各位の御弔詞や、日本鐵鋼協會會誌七月號卷頭に揭載の博士の小傳等にも明示されて居りますので、此等の點は省略致しまして、最後に附け加へて申述べたい事は今泉博士の御同窓には博士の外に、故香村博士、故

第五編　博士の講演及論文の一部

服部博士がありまして、御三方とも揃ひも揃つて何れも我製鐵界の權威者で、吾々後輩の者共の畏敬する方々でありますが、去る昭和十三年春香村博士は七十三歳で逝去せられ、又昨昭和十五年夏には服部博士が七十六歳でなくなりになり、今又今泉博士を失つた事は我が鐵鋼界の非常なる損失でありますが、私が今泉博士の御病室に御見舞致した際、博士の申さるゝには、もう自分もあと一週間で退院する事になつた、これで厄落しをして將來八十八歳迄生き延びる積であるとの事でありました。又前年服部博士を御病床に御見舞致しました際服部博士の申さるゝには、人間は體質により各々先天的に六十型、七十型、八十型と其素質が極つてゐる、香村君ももうなくなつたが自分も八十迄は生きられぬ、今泉君は平素から至極健康で元氣であるから、八十型で、長生きをするであらうとの事でありました、かくの如く今泉博士は自他共に御長壽と信ぜられてゐたのでありますのに、天之の人に壽をかさず、終に七十五歳を以て御長逝せられました事は、有爲轉變のことわりとは申しながら、誠に返す〳〵も遺憾の至りであります、尚ほ今泉君の御遺族御一同の將來の御安泰と御繁榮とを御祈り致し、別ても御二男常正君は本年春學習院高等科を最も優秀の成績で御卒業になり直ちに東京帝大の採鑛冶金科に御入學になりましたさうで、どうか御父上の素志を繼がれまして、御國の爲め御家の爲めの御奮勵あらん事を切に囑望致す次第であります。

第一章　鐵屑集序

余壯年官仕大藏省に入るや、時の大藏卿松方公常に余を戒めて曰く、製鐵業の我邦に起らざる限り、日本は決して世界强國の位列に入るを得ずと。屈指すれば殆んど五十年前の事に屬す。余深く公の言に感ず。爾來必ず公の志を達成せんことを期す。而して今や我邦製鐵工業大に起り、兵器、軍艦、船舶、諸機械、鐵軌類を初めとし、百般の鐵製品我邦に於て産出せざるものなく、國勢大に進み終に世界大國の一に列するに至れり。公の如きは實に明達の眼識を有する政治家と云ふべきなり。

五十年前には縱に刀劍、鍋釜、鋤鍬、鎌、庖丁の類の如き簡易なる鐵製品を産するに止り、且鐵鑛石に缺乏せる我邦が、如何にして非常の長足を以て一大製鐵工業國となり得たるやは、實に世界工業史上に於て驚嘆すべき事なりとす。是れ蓋し一方に於て政治家が鞏固不撓の決心を以て事業家を奬勵せると、一方に於て專門の技術家が之亦不撓不屈、所謂萬難を排し寢食を忘れて事に當りたると、兩兩相一致して此結果を見るに至りたるものなり。

既往五十年間我邦製鐵工業の發達に就て、政策上余が議論を上下し屢々接觸したる人物にして、余の記憶に存するものを擧ぐれば公爵松方正義、公爵山縣有朋、公爵桂太郎、伯爵兒玉源太郎、子爵平田東助、伯爵珍田捨己、和田彦次郎、男爵中村雄次郎、子爵齋藤實男爵近藤基樹、島川文八郎、松本荘一郎、男爵古市公威、野呂景義、大島道太郎、堀田瑞太郎、渡邊渡、長谷川芳之助、今泉嘉一郎、服部漸等の諸氏なり。而して今や既に故人となり、存するもの僅々數名に過ぎず嗚呼余の老も亦知るべきなり。

頃日余の鐵友中最舊知の一人たる今泉嘉一郎君、其多年研究筆記せる製鐵に關する記事論文を編纂し一大卷冊をなす。名付けて「鐵屑集」と云ふ。序言の囑あり。君は明治二十九年に着手せる福岡縣枝光製鐵所の創業者にして、我邦製鐵工業上最功勞者の一人なり。而して此書載する所は將來我國製鐵工業上の學理及歷史の參考材料として最も價値あるものなり。名づけて鐵屑と云ふは甚だ當を得ざるが如し。然りと雖も君も余も老齡にして、意氣は未だ毫も衰へずと雖も、筋肉の活動は亦壯者の如くなる能ず。果して然らば、君も余も既に人屑の部類にあらざるなきを得んや。既に人にして人屑なれば、其文を鐵屑と名付くるも亦一理なきにあらず。相見て呵々一

笑す。嗚呼此屑の稱や人も文も老熟の意を表す。諸者誤つて尋常無用の屑と爲す勿れ。之を序と爲す。

昭和五年四月

六十七翁　芳水　阪谷芳郎　識

序

我國製鐵業の起源は遙き古に在れども、近代式大工業としては明治二十九年に政府が八幡に設置したる製鐵所を以て嚆矢とす。當時我國の鐵鋼の需用は僅に二十萬噸に過ぎざりしも、殆んど悉く輸入に俟つものなりし。故に政府は日清戰後の經驗に徵し、主として國防上の必要より此創設を決定したるものなり。今泉君は東京帝國大學在學中より製鐵を專攻し、明治二十五年其業を卒ふるや直に農商務省技師として、製鐵所創立に先立つ準備事務に從事し、次で獨逸に留學し、在歐三年實地の研究を遂げ、明治二十九年歸朝せられたり。製鐵所官制發布と共に在歐中既に八幡製鐵所技師を命ぜられ、歸朝後直ちに工場創設の重任に當り、爾來十三年間具さに創業の苦辛を嘗められたり。特に明治三十五年以來所員の筆頭として長官を補佐し、技術の訓練、設備の改良、經營改善の爲に全力を盡されたるが、明治四十三年官を辭し、同四十五年日本鋼管株式會社の創立に從事し、爾來民間に在りて終始製鐵事業を以て生命とせられつゝあり。製鐵所在官當時及日本鋼管會社重役として、歐米諸國の製鐵事業を視察せられしこと前後七回に及べり。同君は如上の閲歷を有せらるゝのみならず、資性恪勤、頭腦明晰其事に當るや非凡の熱あり、隨て其蘊蓄の豐富なる斯界の一人者たりと云ふも過言にあらず。余は君と高等學校以來の同窓なりしを以て、君の卒業後、製鐵業に關する君の話を聞きたる事一再ならざりしも、深く之に注意を拂はざりしが、余が明治二十九年以來十數年間專ら從事せる東洋汽船株式會社の用向にて屢々歐米を旅行し、始めて鐵鋼事業が各種工業の基礎工業なることゝ、國防上絶對必要なるものなる事とを痛切に感知し、夫以來我國に於ても此事業を是非共完成せざるべからずと考ふるに至れり。是等の事が動機となり、明治四十五年君と共に日本鋼管株式會社を創立し、終に今日に及べり。同社の設計は專ら同君の計劃に據るものにして、爾來十有九年間同社は好況にも悲況にも遭遇し、幾多の變遷を經て、其間計劃の成功もあり、齟齬もありしが、今日に於ては兎も角も年額約貳拾萬噸の製品を産出し得るに至れり。

斯の如く同君は製鐵業の學理研究者たるのみならず、鐵鋼業の經營者として、又技術家として、具に辛酸を嘗めたる人なり。今回同君は其

多年の論文等を編輯して「鐵屑集」と命名し、余に序文を求められたり。余は未だ其全斑を通讀するに遑なきも、其内容には予の講演又は熟讀したる論文も尠なからず、君は謙遜して鐵屑なりと云はるれども既に精煉したる鋼鐵もあり金玉もあり、實に君が過去四十年間に、心血を濺ぎたる斯業振興に關する努力を窺ふに足ると同時に、或意味に於ては此四十年間に於ける歐米諸國及我國製鐵業の重要なる一史料とも謂ふべきものなり。後學の士此記錄を研究せられなば必ずや得る所尠なからざるべし。

最後に加へたき一言あり。そは君未だ老いたりと云ふべからず。加之身極めて健全に在らるゝを以て、怠らず自重せられ、我鐵鋼事業を完全の域に進むる爲御奮進あらんことを切望す。以上思ひ出づる儘を記して序文に代ふ。

昭和五年四月

白石元治郎

序

工學博士今泉嘉一郎君は、余の莫逆の友である。余の始めて東都に學びたる時四方の人士と交を結んだ者の數は尠くないが、併し休戚を共にし、昆弟管ならざる者は、眞に晨星の如く稀である。而して君は實にその心友の一人にして、吉凶相慶する者は君である。起居を共にしたる者は君である。殊に余の君に敬服措かざるの點は、君の剛健にして卒直玉の如きの美質である。君の初志に對し終始撓まざるの勇猛心である。君の至孝親を忘れざるの誠意である。君の鄕土のために貢獻せる美德である。余は曾て明治二十七年四月、君の始めて獨逸に遊びたる時、一の行を送りて云ふには、『今之世喃々唱二政議一碌々戚二施世路一詭辨爲達者皆是也、如レ此而已乎、邦家前途可知也。（中略）今夫嘉一郎群馬人、與レ餘有レ舊夙入二工科大學一修二製鐵之學一。今也遠遊二獨逸一將三益究二斯學蘊奥一、何其壯哉。我邦之製鐵之業未レ開、其有レ用レ於二國家一不下待二智者一而後知上也。如二今泉君一者可レ謂下善擇二其所一學者上矣。（中略）今夫齋二此學與一此術一而歸之日接レ君乎、則知今日之君非二後年之君一也。學識富贍、眼界超絶、以可レ施之實地一。於レ是始我國生産可レ期也。況兵又可レ禦也云々』と。果せる哉、君は前後七回も歐米の地に航し、或は斯道の學界に、實業界に、殆んど貢獻至らざるなく、眞に我國製鐵界の重鎭として、よく今日あるを致せるは、決して偶然でない。頃日、君はその多年學術界、實業界、政治界等の席上に於て述べ來れる所見を編纂し、題して「鐵屑集」と名付けられた。これを閲するに、何れも皆金玉の文にして一として國家、

社會に裨益を與へざるものはない。殊に玆に編纂せる論旨の大部分は、何れも皆既に其實行上に資したるものである。されば、本著の如きは眞に國民教育上より見たる我國製鐵界の指南車なりと稱するも、敢て誣言ではあるまい。君は謙讓の德を發揮し、題して鐵屑と稱するも、余は寧ろ君の終始變らざる、一生を貫徹せる鐵の如き精神の結晶、卽ち鐵魂と唱へたい。殊に又君は卷頭に掲げられたる如くに、往年警視廳の消防職員に對し、初めて歐洲消防の事に就て講述を試みて居らるゝが如きは、余の終始斯界のために微力を致しつゝあるの事實に照し、因緣の頗る淺からざるものあるは、亦奇遇と稱すべきである。偶々この時に當り、君は特に本著に對し余の一言を需められたので、余は敍上の關係上誼に於て辭すべからざるものがある故、玆に喜んで平素の所感を述べ、聊か親友盡裏の誠を致したる次第である。

昭和五年四月

序

日本の文化の發達が明治の初年以來急速であつたと同時に、日本の製鐵事業の發達は、之を回顧すれば實に驚異の感に堪へないのである　明治時代の先覺者の間に於ても、產業中の最も困難なるものと考へられて居つた製鐵事業を、日本に於て計畫するが如きは、實に無謀の空想と考へて居つた人が多數であつたのである。或はその中に少數の日本に於ける製鐵事業の發達の必要を力說せる先輩も、是は全く國防計畫の上より出發したる考であつて、此困難なる產業が經濟的に日本に發達し得る事は夢想だもなし得なかつたのである殊に國防計畫より出發せる日本最初の製鐵企業として、明治十三年釜石製鐵所を計畫して、これが見事失敗に終りたる後に於ては、一層此感を深からしめたのである。

明治に於ける第二の計畫は實に明治二十九年に於ける八幡製鐵所であつた。是は今日之を考へれば、當時の政治家に、誰も確信の無き計畫であつたと思ふ。又將來幸に製鐵所で鋼が出來る樣になつたとしても、誰が將來此事業が經濟的に成功すると考へた人があつたであらうか、疑はざるを得ないのである。

この當時の計畫は豫算四百九萬圓を以て、所謂銑鋼一貫作業を爲すことであつて、主として獨逸のグーテ・ホフヌングス・ヒュッテ

に依囑して、大體の設計を立てたのである。

今泉博士は丁度此日本製鐵史の第二期時代に生ひ立つたのであつた。博士はその當初から深く日本に於ける製鐵事業の發達の必要を痛感せられ、明治廿五年大學卒業當時の論文（南海中央製銅及製鐵所計畫論）もその當時已に日本の鐵鑛石の存在が危ぶまれて居つたから、別子銅山其他瀨戶內海沿岸の諸銅山に着眼せられ、是等各地の含銅硫化鐵鑛を蒐集し、銅分を滲出し、その殘滓を利用して製鐵原料に供する計畫を起てられたのである。

博士は前記の如く明治廿五年大學を卒業せられ、直ちに製鐵研究の目的を以て獨逸に留學せられ（彼地に於て既に官立製鐵所技師の任命を受けられ）ヘールデー製鐵所に於て主として、製鋼に關する技術を修得せられ、明治三十年歸朝後は、製鐵所工務部長及製鋼部長として製鐵所の建設に經營にその少壯明敏なる頭腦を傾倒せられたのである。而して同博士在職十五年間に於て今日の製鐵所の基礎を全く確立せられたのである。

斯の如くして官立製鐵所の創立以來幾多の變遷を經た。その長官も其責任技術者も屢々更つた。又此間には屢々困難なる時代をも經過した。然しながら今日これを回顧すれば、是等は最も旺盛なる歷史中に於ける小波瀾であつて創立以來大體の基礎計畫に於ては、一つの錯誤も無く困難の中に常に發達の經路を昂進し、最初九萬噸の計畫は三十三年後の今日は實に一百萬噸の鋼を產出し、尙其間官立製鐵所の指導に依つて勃興したる民業の生產額を加算する時は、我國の鋼材年生產額は二百萬噸に達して、本邦に於ける鐵鋼の輸入の大部分を阻止する事を得たるは、此計畫の責任者たる今泉博士自身も恐らく豫想せざりし處であつて實に今昔の感に堪へざると同時に、博士の我製鐵界に於ける功績は、國民の永く忘れてはならぬ處であると思ふ。

製鐵界に於ける博士の功績はこれに止らないのである。明治四十五年製鐵所退官後は、民間に於て製鐵業者から最も困難と考へられて居つた鋼管の製造會社を創設し、これ亦幾多の技術上及經濟上の困難を突破し、日本鋼管會社をして今日の地盤を確立せしめ、日本に於ける鋼管需要の大部分を供給する事に成功せられたのである。

大正九年には又一步を進められ自ら議政壇上の人となり、政治上より製鐵事業の進步發達を促進せられたのである。博士が當時第四十四議會に於ける演說中「製鐵製鋼の保護及奬勵策」の如きは、日本の議院が多く空理空論に沒頭せるかの觀ある間に、その論旨の具

體的なる今日群鶏一鶴の感を深からしめるものである。又今日の政府の重要政策の一たる産業合理化の如きは博士の戰後獨逸視察後本邦に齎らせる最近のニュースであつたのである。

「鐵屑集」は博士の此永き奮闘的生活中時々の回顧に對し、學術方面と云はず、政治方面と云はず、博士の　快なる頭腦に反映したる所論を闡達なる文章に依つて題されたる感想錄と稱すべきであつて其數實に七十餘篇に達してゐる。故に之を通讀すれば日本製鐵史の眞髓を窺知し得るの感があるのである　この意味に於て「鐵屑集」は本邦製鐵史上最も貴重なる文獻の一つたる事を疑はないのである吾々が博士の許しを得て之を刊行し永く將來に傳へんと欲する所以は實に此點に存するのである。

昭和五年五月

井上匡四郎

序

明治三十四、五年の頃であつたと思ふ。私が大學を出る少し前の修學旅行に枝光の製鐵所へ出掛けた時、製鋼部の事務所で今泉博士に御目に掛つたのが初めである。さうして其時博士から裝甲鈑の製造の御話を承はつた事は、今でもあり〳〵と記憶に殘つて居る。これが博士を知り博士を先輩として師事した始めである。私が今泉博士に就いて敬服して居る事は、技術者型を脫却して常に高處から世間を視て居られる點にある。元から博士の議論は技術味よりも經世味に富んで居る。世間一般の技術者と全く趣きを異にして居る處は爰處にある。

一體吾々技術者と云ふ者は、驚く許　偏狹な、そして保守的のものである。自分の專門の狹い狹い地域に閉ぢ籠つて、障壁を高くして他人の侵入を何よりも恐れて居る學術に國境なしなど謂ふ事は　自然科學者には謂へやうが、技術者間には思ひも寄らない。そうして新しい事は決して卒先して實施して見ようなどいふ勇氣は藥にしたくもない。併し外國の發明、發見或は改良であると、無條件で而も多額の特許料を拂つて、良否を判らずに採用して居る　新しい事を容易に試みて見ない點は英國技術者も同樣であるが、自分は英國の工業が獨米のそれに壓せられて、今日衰退しつゝある第一の原因であると常に思つて居る。そして日本の技術者が今日のやうに保守的になつたのは、以前の工科大學や專門學校の教育が、全く其範を英吉利に採つたゝめではあるまいか。

今泉博士は此工科大學に學びながら、全然其型から脫却して保守とは反對の突進的であり、計畫的であり、創造的である。大學を出て獨逸に學ばれたから、獨逸風の技術者になつたと謂ふ譯でなく、是は全く博士元來の所謂持ち味であると思ふ。此博士が種々の場合と境遇に臨んで講演された記錄や論文を蒐集して出版されるのであるから、世を益する事決して尠からずと思ふ。そして此樣な論文集は一寸他人に眞似の出來ない處だと思ふ、自ら題して「鐵屑集」と名付けられるが、普通の屑とは意味が違ふ。鋼の生產費を引下げるには、銑鐵よりも鐵屑に重きを置かなければならぬ。獨逸の大製鐵所の如き製鋼原料の七十プロセントは鐵屑であるのを見ても、製鋼の基礎は反つて鐵屑に置かれてゐる事を窺ひ得るのである。屑を多く使へば使ふ程鋼の生產費は低減される。從つて今日我國製鋼作業の苦しみつゝある點は、如何にして此鐵屑を多量に得んかにある。是が爲米國の太平洋沿岸より、南より、亞細亞大陸より、我國に集り來る鐵屑は近來少なからぬ數量に達したのであるが、夫でも尙且足りないのである。此時に當つて博士自ら論文集に題して鐵屑集と謂はれたのは、偶然とは思はれない　蓋し之によつて我製鐵事業の基礎が形作られ、之によつて製鋼界が其今日の窮乏より救はれん事を私かに祈る者である。

昭和五年四月

大河内正敏

自序

歐米の製鐵國が數百年の苦辛と經驗とを積んで築き上げた現代的製鋼業を、一朝英斷を以て我國に移植を敢行した。其明治二十九年頃は我國の製鋼能力なるものが工業的に見て殆んど零であつた時代である。爾來僅に三十餘年に過ぎざる今日に於て、年間二百萬噸の資產額を擧ぐるに至つた事は、愉快にも今昔の感がある。其間に於ける官民當事者の苦辛は元より容易ならぬものであつたが、其苦辛の一半は確かに酬ひられたと云ふべきである。然しながら問題は尙將來に在る。之が解決には過去に於ける苦辛の經過と經驗の敎訓とを愼重に留意して、違算なき新方針の下に今後の新活動に向はなければならぬ。

この過去幾年かの間に於ける學術、實業、政治などの集まりの爲に、演べたり書いたりした余の報告や論文などの內には、將來のため自他の參考になるものもある樣に思はれた。偶々友人よりの忠告もあつたので、手許に在る夫等の記錄の一部を集綴したのが此「鐵

屑集」である。其内容に付ては、餘り專門的のものは暫く別として、一般鐵經濟に關するものを主とした。元來淺學菲才の余の報告や論文などには大した價値も無いことであるが、唯余自身としては、當時自分の述べた事を今から考へて見ても、尙幾分世人の參考と成り得ることもあると信ずるのみならず、自分が古くから述べて居たことが後日の世論に於て物新しく繰返され、又は忠告したことが實現し、豫言した事が的中した事などを見ることも少くないので、聊か興味を感ずる。同時に又一面には或事柄に付て、世間の一部に多少反對意見を聞くが如きものもあるから、之に對しては所謂「時の裁判」が如何に之を判決するかを待つ事が、余としても最も大なる興味を持つことである。是等が鐵屑集として舊記保存の考を生じた主因である。併し尙大方の諸賢に向つては、內容の誤謬に付て敎示を仰ぐと同時に、後學の秀才に對しては、斯かる鐵屑と雖も巧に之を利用して、優良なる鋼製の資料とされ度き希望もある。要するに「鐵」の文字ある紙屑たるに過ぎない此「鐵屑集」にも、是だけの抱負と希望とが含まれて居る。

本書の編輯成るに及んで、多年余に對して知交を賜たる人々の內、殊に余の微力を捧げたる官立製鐵所の創立前後十數年を通じ、國家財政の當局として其創立及經營上最大の支援を與へられたる阪谷男爵、余と共に日本鋼管會社を創立し、爾來經營の中心に立たれ、民業開拓に全力を盡されつゝある畏友白石元治郎氏、中學程度の少年時代より、兄の如き指導と友情を與へられたる松井博士、國家鐵經濟の研究に關し、余の常に敎を受くる大河內子爵、余の同專門の學友にして殊に政治界に於ける我等技術者の代表的權威たる井上子爵の如き、本書の內容に最も緣故深き方々が、其序文を添へられたことは、余として洵に光榮たるばかりで無く、此場合缺く可らざる或物を充たし得たるの感ある事で、玆に厚く感謝の意を表する次第である。

昭和五年五月　　今泉嘉一郎

第二章　鐵屑集目次大要（註―細目は之を略せり）

上卷

講演及論文錄

（一）消防學講義（明治二十二年警視廳管內消防研究會に於ける學術講話）……原書頁　一
（二）伊豫鑛山論（明治二十四年修學旅行感想）……七六
（三）別子に於ける濕式收銅法試驗に就て（明治二十五年）……八二
（四）製鐵所を論じ其位置に及ぶ（明治二十八年）……一一〇
（五）ヘールデー製鐵所略記（明治二十八年）……一一八
（六）第一回留學と其感想（明治三十年）……一三〇
（七）歐米に於ける最近の甲鐵製造法（明治三十年）……一四八
（八）廉價なる原料を使用するシーメンス・マルチン製鋼法の一例（明治三十一年）……一七四
（九）製鐵所創設工事概況（明治三十二年）……一九二
（十）土佐鐵鑛に關する卑見（明治三十二年）……二一六
（十一）我製鐵所の事業に就て（明治三十八年）……二三八
（十二）八幡製鐵所大烟突の設計並に施工（明治三十九年）……二四五
（十三）鋼材の理學的性質測定に關する研究（明治四十二年）……二四七
（十四）鋼材仕樣書中寸法及重量の寬宥率に就て（明治四十年）……二五〇

（十五）製鐵事業と外國貿易（明治四十一年）……原書頁　二六三
（十六）歐洲土産話（明治四十三年）……二七六
（十七）製鐵所處分案（明治末年）……二九四
（十八）所謂實業家の當世氣質と製鐵事業（明治四十四年）……三一〇
（十九）再び製鐵事業と外國貿易との關係を述べ斯業の振興策に及ぶ（大正四年）……三一七
（二十）石油タンクの破裂に就いて（大正四年）……三二八
（二十一）製鐵所當初十二年の苦心に就て（大正五年）……三三六
（二十二）製鐵所第三期擴張案に對する意見書（大正四年）……三四〇
（二十三）日本銑鐵改良論（大正五年）……三四七
（二十四）鐵鋼の獨立自給に對する討議（大正五年）……三六四
（二十五）鋼片問題に就て（大正七年）……三七〇
（二十六）鐵の話（大正六年）……三七六
（二十七）日本製鐵事業の將來に於ける二大問題（大正七年）……三九六
（二十八）日本鋼管會社に於ける新製鐵計畫に就て（大正七年）……四一九
（二十九）製鐵事業と保護關稅との關係（大正八年）……四三三
（三　十）我鐵事業は關稅の保護を必要とし又之を受くべき資格ある理由（大正八年）……四五一
（三十一）衆議院立候補宣言（大正九年）……四六六
（三十二）鋼管製造の話（大正九年）……四八一
（三十三）米國鐵鋼コーポレーションの組織及其成立史（大正九年）……四九〇
（三十四）戰後の歐洲製鐵事業視察談（大正十一年）……五一六

（三十五）國際國會議員會議に臨みて（大正十一年）……原書頁　六四四
（三十六）印度視察談（大正十二年）……六六八

下　卷

講演及論文錄續

（三十七）戰後獨逸の一瞥（大正十二年）……六八一
（三十八）戰後獨逸製鐵業（大正十一年）……六八六
（三十九）戰後獨逸の新產業組織利害協約に就て（大正十三年）……七〇四
（四　十）產業殊に工業の組織に就て（大正十三年）……七二八
（四十一）帝國の經濟と鐵との關係（大正十三年）……七三八
（四十二）國際經濟戰爭を通じて見たる我國產業の發達を阻害する時弊九ケ條（大正十四年）……七七一
（四十三）國產使用奬勵に就て（大正十四年）……七九九
（四十四）歐洲鐵鋼業調查報告（昭和二年）……八〇九
（四十五）獨逸製鐵業經濟眞相（昭和二年）……八五九
（四十六）最近獨逸經濟狀態並に其鐵商賣に就て（昭和二年）……九〇三
（四十七）獨逸產業復興の動機並に最新工業整理策ラチヨナリジールングに就て（昭和二年）……九三二
（四十八）獨逸製鐵事業の復興事情（昭和二年）……九四四
（四十九）獨逸產業の合理化狀態（昭和二年）……九五八
（五　十）我國製鋼業の合理的刷新と肥料政策（昭和二年）……九六四
（五十一）鐵鋼關稅問題に就て（昭和三年）……九七六

（五十二）製鐵事業の現狀並に將來に就て（昭和三年）……原書頁　一〇九四
（五十三）獨逸工業の死活問題（昭和三年）……一一〇五
（五十四）獨逸の産業合理化運動に就て（昭和三年）……一一三一
（五十五）我日本國と製鐵事業（昭和四年）……一一三七
（五十六）産業合理化の實行に就て（昭和四年）……一一四三
（五十七）燃料資源の合理的利用に就て（昭和四年）……一一五一
（五十八）トーマス製鋼法の採用を可とする意見（昭和四年）……一一五七
（五十九）我國の將來に於ける鐵と石炭との關係に就て（昭和四年）……一一六三
（六　十）産業總動員の提唱（昭和五年）……一一八四

議　事　錄

（六十一）第四十四議會に於ける製鐵鋼業の保護及奬勵政策審議（大正九年）……一二〇七
（六十二）第四十四議會に於けるメートル系度量衡採用に關する審議（大正九年）……一二〇二
（六十三）第四十五議會に於ける銅鑛業保護政策に關する審議（大正十年）……一二一七

談　片　錄

（六十四）製鐵根本策論（大正四年）……一二二五
（六十五）鐵業に就て（大正五年）……一二三五
（六十六）製鐵事業振興策（大正六年）……一二四五
（六十七）禁鐵應急策と根本策（大正五年）……一二五三
（六十八）本邦製鐵業根本政策（大正九年）……一二六九
（六十九）軍備制限の我が製鐵業に及ぼす影響と今後の對策（大正十年）……一二七五

（七　十）官民製鐵業の合同に就て（大正十三年）……原書頁　一二八七
（七十一）世界に於ける澎湃たる産業合理化の實際（昭和二年）……一二九四
（七十二）金解禁に直面して（昭和三年）……一三一三

「ルクセンブルグ大公國の製鐵事業」（博士の話）

ルクセンブルグは從來ドイツと關稅同盟を結んで居りました爲に、ドイツの鐵の産額の中に、いつもルクセンブルグの分も含めて報告されて居つた。それ故、ルクセンブルグといふと、何かドイツの屬國のやうに人は考へて居りますが、全く獨立の國であります。此の國の今日の經濟狀態はヨーロッパ各國中最も良いのであります。何となれば大國の間に挾まつた獨立自由國であまりまして、戰爭の爲に何等喪ふ所が無かつた。寧ろ益するところがあつた。勿論ドイツの兵隊に自分の領地を無理やりに通過されましたけれども、併し何等損害を受けて居りませぬ。女子供に對しましても一時は何か亂暴でもするかと思つてヒヤ〳〵したが、何等損害を加へずに通過したといふことで、さうして彼處の代議士等に聽いて見ても、彼等は代議士であるだけに、隨分ドイツ軍隊に出入して盛に斡旋し、どうか亂暴はしないでくれろといふ事を頼んで歩いたさうですが、實際何等損害を加へて居らぬ。而して後の時期には英佛軍が來て護つてくれたりした。

元來此の國は餘り軍備を必要としないのでありますから、兵隊が三百人、警察官が八百人で安寧を守ることが出來、隨つて國費も少ない。國民は二十五萬人限りで、其の餘分の人口は皆アメリカへ移住して居り既に二十五萬人も移住した。而かも國内には大きな製鐵所が幾つもあります。其の大きな製鐵所は元ドツ人が拵へたものでありますが、それを取上げるやうに廉く買ひ取つてさうして自國の經營で不足な資本をフランスから注入してフランスの資本とルクセンブルグの資本と合同でやつてゐるやうな大工場が澤山ある。失業者などは出さぬところか、人が足らぬので、今日でも五千人のイタリー人と三千人のドイツ人等を使つて事業をしてゐる。それで原料鐵石はルクセンブルグそれ自身にも澤山あります又アルサスローレンスにも近いから鐵石を廉く使ふことが出來る。それから石炭はドイツの國内には自家所有の山が澤山ある上に、フランス人の取つたドイツの石炭を便宜買ひ受けるのであります。フランスではケルンとトリエール間にある一つのステーションを石炭並にコークスの配給中心にして居りますが、これがルクセンブルグに極近いので、誠に割安に此の石炭及びコークスを使ふことが出來ます。それから輸出するところのものはアントワープまで出して各國に送ります。今度はドイツの代りにベルギーと關稅同盟を結んでベルギーはまるで自國の如く、物質の出入も何等關稅なんといふ關係無しに出入が出來ますから、誠にそれも都合がよろしいのであります。

此のルクセンブルグの工業を、ドイツ或はベルギーと比較致しましても、種々なる點に於て、ルクセンブルグの方が優つて居るやう思ふのであります。（此の事は又後に申上げます）さういふ關係からアメリカの鐵鋼協會が昨年視察團隊をルクセンブルグに出しました時も、將來東半球に於ける鐵の供給は此の地方から最も多くされるであらうといふ理想を抱いたといふことであります。そんなやうな工合で、どうしてもルクセンブルグを視ない譯には行きませぬから參りました。

（以下略）（大正十二年二月十六日日本工業俱樂部の歸朝歡迎晩餐會に於ける演說の一節）。

——（目次終り）——

第三章　製鐵所當初十二年の苦心に就て

（註―本文は大正五年一月發行「鐵と鋼」誌上に掲載した博士の所感である。歐洲大戰中所謂鐵飢謹時代に博士が世の參考に供されたものである）

製鐵所の過去及現在の狀況に關し、本誌第一號に於ける服部博士の報告、及本誌第十號に於ける野呂博士の講說は、斯業研究者に向つて、極めて有益なる參考資料を與へられたり。予は今製鐵所創業當初十二年間に於ける技術上、經營上の各種困難に關して、聊か予の觀察を述べ、以て兩博士の有益なる報文に對し、蛇足を添へんとす。

明治二十九年、勅令を以て製鐵所官制を定められ、玆に朝野多年の渴望に係る一製鐵所の設立は、官業として其實施を見るに至れり乃ち地を福岡縣遠賀郡八幡村に卜し、諸般の準備を整へ、三十年創立工事に着手し、三十四年略其豫定の竣工を告ぐるに及びて、製造作業を開始するに至りたるも、爾來年々尙多少の擴張をなさざる事なく、最初より四十一年迄、政府の支出したる資金の合計約五千拾五萬圓にして、其內一切の事務費參百參拾四萬圓、八幡工場設備に關せし費用參千四拾四萬圓、原料鑛山買收に關せし費用四百六拾七萬圓、其他に屬するもの合計千參百六拾八萬圓なり、此千參百六拾八萬圓より四百五拾萬圓の運轉資金、五拾萬圓の若松築港補助金を除きたる殘八百六拾八萬餘圓は運轉資本の補塡にして、卽ち作業の損失額なりとす。尙其後二十五議會以降に於て、協贊を歷たる資本補塡合計は約參百萬圓にして、之を前額に加算するときは、當初以來損失額の合計約千百餘萬圓となる。此外四十一年に於て、製鐵所は原料、製品、諸材料等の貯藏及債權、現金を合し八百萬圓內外を有せしと雖、同時に又略々同額の大藏省債券を融通せしを以て、之を相殺する時は、結局前揭四百五拾萬の運轉資金は、實際缺損の姿なるが故に、之をも損失額に加算するときは、損失額の總計約千六百萬圓に達するが如し、是卽ち世間に有名なる所謂製鐵所の損失なるものなり。順境の今日に於てこそ。斯る金額は一ケ年の純益にも及ばざる小額なるべしと雖、十ケ年間に、此損失を計上するに隨伴せし、當局者の慘憺たる苦辛經營は、殆ど門外者の想像し能はざる所のものありしなり。

抑々製鐵事業の如き、各種生產事業中最も難澁にして、而かも全く本邦に經驗なき新事業に對し、未成の新設備を用ひて、數百人の技術者と、約一萬人の職工とを習練せしめつゝ、官業とは云へ極めて不自然なる管理の下に、營利事業を行ふことを强ひられたるは、卽ち當局者苦辛の胚胎せし所にして、十年の歲月は是が改良、修繕、擴張、習練及不自然の調和に、日も亦足らざりし期間に外ならざりしなり。

然るに當局者の刻苦精勵は、漸次其效果を現はし、技術及經營の熟練は、工場設備の改善と相俟つて、作業の狀態著しく其緖に就くに至り、加ふるに明治四十三年より施行せられたる關稅改正は、製鐵所に對し、年々百萬圓乃至二百萬圓の保護を加へたる結果となり經濟上の關係頓に改善せられ、特に大正四年下半期より、外品輸入の杜絕と共に、鐵價の昻騰空前の現象を呈し、遂に今日の隆盛を見るに至れり。製品の市場再び當時の如く低廉なる時期ありと假想し、其場合に於ても尙、製鐵所が其既に投下したる資金に相當する、十分なる利益を擧げ得べきや否やは、官業の性質上、容易に樂觀を許し難きものありと雖、兎も角も作業狀態の改良、發展、是を當初に比して、隔世の感なくんばあらず。

予は明治二十五年より製鐵所創立準備事務に從事した者であるが、明治二十九年製鐵所創立の年より、明治四十三年迄所員の一席を汚し、細さに創業の苦を味ひたる一人なる緣故に依り、今聊か創立當時より明治四十一年迄、全く利益を計上し得ざりし十二年間に於ける、當局者苦辛の一斑を左に紹介すべし。若し之を以て、世の斯業研究者に對し、何等かの參考となすを得ば幸なりとす。

一、一定の規模に止りて事業の整理及技術の熟達を遂ぐるの遑なかりしこと

製鐵所は元四百九萬圓の資金を以て創立に着手したるも、爾來十二年間に於て、遂に五千萬圓までの出資となりたるが故に、卽ち此期間に於て、約十倍の擴張をなしたるものと云ふべし。此擴張工事なるや、既設工場に於ける不完全の點を補足し、又は勞力節減裝置を增加する如き改善主義に依るものと、新たに工場を起し、新規の生產物を目的とする製品種類增加主義に基げるものとに、兩分することを得可く、何れも後日に於ける事業上の便利、經濟を目的とせるものに外ならずと雖、元來一定構內に於て複雜せる各種機關が相連絡して、已に作業を開始しつゝある場合に於て、更に擴張工事を施行することが、極めて作業に害あることは、苟も工場管理に從事

せるものの、等しく知る所なり。製鐵所は當初以來、殆ど年として斯かる擴張工事を施行せざることなかりしを以て、此期間にありては、殆ど作業專門に、其整理及熟練を努むるの遑なかりしなり、今之がために受けたる實際の影響を逃ぶれば左の如し。

（一）擴張に關する工事材料の運搬頗る頻繁なりしため、作業用品の運搬に要する汽罐車、及貨車に不足を生じ、作業を妨げたること。

（二）構内一定の線路に於て、前項の如く臨時用材料の運搬頻繁なりしため、作業は其唯一重要なる連絡機關なる線路を杜塞せらるる場合多かりしこと。

（三）線路の使用盛なるため、其破損を生ずること多きも、之が修繕亦遲滯すること多く、作業は常に其害を受けしこと。

（四）元來作業のため設けたる機械修理工場は、此臨時工事のために、多く使用せられしを以て、日常作業用の修繕遲滯に陷り、作業は之がために一層故障及破損を生ぜしこと。

（五）臨時工事に向つて、多數の臨時人夫を吸收せるため、作業用の職工供給に不足を生ぜしこと、殊に日露戰爭中最も其害を受けしこと。

（六）作業に常務を有する職員にして、臨時工事に兼ね使用せらるゝもの多きため、工場の監督事務に故障を生ぜしこと。

（七）日常に要する作業用諸材料にして、重量容積共に大なるため、一定の置場に貯藏するの必要ある物も、臨時工事のために、常に其移動を餘儀なくせられ、前揭運搬機關の故障と相俟つて、益々作業の不便を生ぜしこと、又其移動に少からざる費用を要せしこと。

（八）臨時工事のため、多數の臨時人夫を使用せしを以て、作業常雇の職工迄も、十分なる規律を保ち難かりしこと。

（九）作業常雇職工中、臨時人夫（請負工事用）の高給に誘惑せらるゝもの多く、職工使役上困難多かりしこと。

（十）臨時工事中作業部に委託して、作業の傍ら工事を監督せしめたること多かりしが、是は作業機關に密接の關係ある部分の改造等には、便宜なる方法なりしなれども、作業監督上の妨害たりしこと。

（十一）電力線、給水、排水道、架空汽管、瓦斯道、煙道、鐵道等の既設線が、臨時工事のために常に其位置變動を要することゝなり、其間常に連絡工場に於ける作業の停止又は故障を生ぜしこと。

（十二）作業に要する一定の準備材料、器械等にして、臨時急設工事に轉用せらるゝもの多く、作業は之がために屢々故障を生じたりしこと。

（十三）一般の器械修繕を掌る機械修理工場の如きも、亦屢々自己の增築工事のために、運轉不十分なりしを以て、一層作業修理物の遲滯を來せしこと。

（十四）前各項は、主として工場以外に臨時工事を施せし場合なるも、同一工場内に於ても、亦擴張工事を施せしこと甚だ多し。是等の場合には、其工場に於ける作業の一部、又は全部は運轉を停止し、以て工事の終るを待たざる可らざりしこと。

以上は卽ち一般に擴張工事が作業に及ぼせし故障を列擧したるものなるが、擴張工事中所謂製品種類增加主義に基きたる新規工場は其一旦落成の後にありても、短きは數ケ月、長きは數年に亙り、事業緒に就かざること勿論なるが故に、其間失費せしこと尠からず。

明治三十四年作業開始以來、當初の豫定の外に、各種の新工場を起せり。卽ち坩堝工場、外輪工場、波板工場、ボールト工場、平鋼工場、線材工場等は其主なるものにして、何れも多少年月の整理と修練を要したり。此期間の終りに至りては、略々豫定の技術的習練を了り、殊に線材、外輪、波板の如きは、優良の製品を得るに至りたれども、原料不足其他種々の事情に依りて、未だ完全なる作業を與ふるに至らざりし。

以上の事實なるを以て、製鐵所は作業開始當時に豫定したる一定規模に止まりて、漸次其整理改善を遂げ、技術の熟達を果すこと能はずして、創立以來十二年間、殆ど常時斯かる臨時的大工事の爲に、如上の故障を受けつゝありしものにして、之がため、作業上にも亦、材料、勞役及時間の徒消を生ぜしこと少からず。單に是のみに因るも、歐米諸國の同種事業の成績に對比して、遜色なからんと欲するも能はざる所なりとす。一面、前揭各種の新工場に在りても、工事完成の後るゝため、着手以來五年に至るも、尙工場の豫定生産力に比して、五分一乃至二分一に過ぎざる作業工程に止まるものあり、是等部分に於ける作業の損失も亦、止むを得ざる結果なりとす。

二、會計法の束縛に依りて物品購入上及工事施行上不利なりしこと

同所は官業なるが爲、會計法の制裁を受くること勿論なりし。會計法は、其精神に於ては物品の購入、工事の施行に對し、最も公平に廉價なる供給を得せしむるを目的とするものなれども、元來入札法を以て、物件の供給を求むるものなるが故に、實際事業上、却つて頗る不利益なるを忍ばざる可からざる場合あり、一、二の例を擧ぐれば左の如し。

（一）一般公入札法に依つて、物品の購入、若くは工事の施行を決するときは、其價格たる必ずしも市場に見出し得べき最廉のものにあらずして、反つて高價なるを感ずる如き場合少からざること。

（二）入札者は一片の仕樣書に對して、最小限の責任を認めんとするが故に、所謂常得意者が其顧客に對する如き、德義上の觀念に乏しきこと自然の勢なるを以て、物品の選擇、工事の施行に於て、不熱心不親切なる場合多く、監督上一層の困難を感ず。特に急用物件の場合の如き、一片の仕樣書、素より一切の微を悉す能はざるに乘じ、容易に紛擾を生じ、契約の遂行上事務の澁滯を來し、實際の事業に差支を生ずること。

（三）入札法は入札者に對して、一定の資格を制限すと雖、二年間營業稅を納めたる者と云ふ如き漠然たる表面上の制限に外ならずして、深く其人の信用能力に立入り、採擇をなすものにあらざるが故に、落札者にして、途中解約の已むを得ざるものを生じ、日限を徒消して、事業の進行を害すること。

（四）一朝要求に適する物品の存在を認めて、速に之を得んとするも、所有者の入札を好まざるか、又は入札の結果、他人に落札せし爲、之を得る能はざることあり。假令落札は、より廉價に他人に歸したるとするも、仕樣書に明記し難き微細の點に於て、品質の要なるものを供給せられ、或は入札者の誤解に依りて最低價を算出し、遂に其落札の實行を見る能はざる場合あること。

（五）信用ある一定の個人に信賴して、多年に亘れる特約をなし、是をして相當の準備をなすを得せしめ、其結果市價以內の廉價を以て、常に一定品質の優良品を供給し、或は迅速に請負工事を果さしむる如きは、相互の便利にして、歐米に於ても、盛に行はるゝ方法なりとす。特に製鐵所の如き、年々多量に一定の物品を使用する所にありては、一定の對手に向つて、常得意關係を結び、其者をして、相當設備の下に供給をなさしむるに於ては、年間の經濟に於て、又手數を省略する點に於て、蓋し計る可らざるものあるべきも、會計法制裁の下にありては　其實行困難なりとす。會計法二十四條には、或特種の場合に限り、指名を評せる條項あれども、是等の條

項は、常に狹義に解釋せらるゝを以て、實際に於ては、其應用の場合極めて少かりしこと。

（六）一般に會計法の規定は、普通行政官廳に於ける、需用物件の處理法としては或は可ならんも、其手續極めて複雜に亘り、且一度手續を誤らんか、當局者は不測の煩累を蒙らざる可からざるが故に、事業の實際に必要なき幾多の手數を要し、隨つて又時日を空過すること多大にして、製鐵所の如き工事の施行、物品の賣買常に頻繁にして、事業の性質も亦頗る事務處辨の敏活を要する營業的大事業に對しては、非常の不便ありしこと。

之を要するに製鐵所は、政府が營業的に經營したる最初の大事業なるが故に、會計法の運用に就きて、當局者も監督者も、共に頗る圓熟を缺き、特に當初經濟上の困難甚だしき際にありては、財政紊亂を云云するものさへありて、一層監督諸官廳の注意を促がし、是が爲會計法の如き、出來得る限り狹義に解釋せらるゝを常とせり。されば製鐵所が創立以來、此不便なる束縛の下に營々として生產事業を遂行し、是がため日子勞力及資金を徒消せしことも、蓋し止むを得ざる所なりしなり。

三、職員及職工に對する奬勵慰安の二途確立せざりしこと

製鐵事業の如き晝夜業にして、且習練に困難なる作業に在りては、之に從事する職員、職工の身神共に勞苦多きこと、他に其例を見ざる所なり。且凡て連絡作業なるが故に、個人の注意及勤勉の如何によりて、一般の作業に測る可らざる影響を生ずるものなれば、作業全般の成績如何は、偏に各個人の熱心と、忠實とに依賴するの外なきなり。されば歐米諸國に於ても、職員職工をして「是我業なり」との觀念を有せしむるためには、凡ゆる方法を講じ、之を以て成功第一の祕訣となせり。然るに八幡製鐵所の職員は、凡て是官吏にして、一般行政官吏と何等差別なき給俸制度により使役せられ、而して職工は、出勤日數に應じて日給を受くる日雇人夫なり。當局者は其弊に堪えず、苦辛研究の結果、作業開始より數年の後に至りて、漸く一部の職工に對し、生產噸數に應じて、多少の割增を與ふる所謂生產奬勵割增給法を實行する事となり、其結果の稍々見るべきものあるに至りしと雖も、種々の理由に依り、未だ歐米の如く完全なる請負法を實施し能はざるを以て、十分なる奬勵をなすことを得ざりし。

職工慰安法に就ては、官役人夫死傷手當あれども、支給少額にして、殆ど效力なきが故に、遂に共濟會を設定したれども、是亦素よ

り完全なる慰藉となすを得ず、特に職工の採用解雇に關しては、到底歐米の如く、十分なる契約的の處置を執り難き理由ありしを以て解雇の如きは容易に行はれ、多年勤續の職工も、一朝殆ど豫告を用ひずして決行する場合を生じ、到底各人をして、其職に死するの決心と安心とを有せしむる能はざりし。職員に關しては、更に甚だしきものあり。職員は主として出勤簿によりて其勤怠を點檢せられ、數年間に於ける一回の昇級と、各年末賞與とに關し、多少の斟酌を受くるに止り、擔當作業上故障損害を生じ、若くは成績優良にして相當の利益を表はすことあるも、是等事業經濟上の關係に對して、物質的の賞罰を實行すること容易ならず。而かも一朝官規なるものに關し、些細の手續を誤らんか、其結果の事業に有益無益に論なく、必ず相當の制裁を加へざる可からず。隨つて各人皆法文官親の解釋に汲々として、復た作業の經濟をのみ顧慮する遑なきの憾なきにあらず。是亦官吏事業の幼稚なる時代にありては、誠に已むを得ざりしなり。

職員中殊に技術關係者は、職工と同じく又は其以上に、習練の爲に多大の費用と年月とを費したるものにして、而かも作業の成績は主として技術者の行動に依るべきものなるが故に、製鐵所を本位としても、亦之に對して、相當の待遇を加ふるの必要なきにあらざりしも、技術者は凡て官吏なるが故に、俸給其他の點に於て、一般行政官吏と格別差等ある待遇をなすことを得ず、隨つて其監督上に就ても、官規本位にして、成績本位なるを得ず。されば歐米製鐵所の職員職工が、其勤怠に就て、殆ど何等監督を要せず、各其成績を擧ぐるに餘念なきに反し、我は監督を要し、其監督も亦監督を要するに至り、人益々多くして、責任愈々分明ならざるが如き遺憾なきにあらざりし。

職員の奬勵に就て歐米の例を見るに、各自分擔の經濟成績を審査し、之に相當せる賞罰を加ふるを常とす。其慰安法の如きも頗る整頓し、就中養老法の如きは、最も完備せるを見る。されば解雇の如きも、當人の意旨に反して契約期間中突然決行するが如きは、特別の場合の外之を見ることなし。是各人に對して、最も有效なる慰安法なればなり。

之を要するに、行政官吏をして事業を管理せしめ、日雇人夫の取扱を以て職工を使役し、以て製鐵所の如き日夜間斷なき困難なる製造作業を經營し、相當の利益を擧げんことは、固より容易の問題にあらず。此間に處して、徐々に事物の調節を圖り、經營の功を擧げんがためには、多大の年月と苦辛とを要するは當然なりとす。

四、工場原設計に不完全の點ありしこと

製鐵所の位置を八幡に撰定したるは、其當を得たることなるも、最初に於ける工場の設計に關しては、遺憾の點少からざりし。今其の一、二の要點を擧ぐれば左の如し。

（一）地均し工事費其他の關係より、工場地盤の水準を、平均海水面より僅に四、五メートルの上に定めたるため、地盤低きに過ぎ製鐵用諸器械の基礎築造、其他各種地中工事の地水の爲に困難を感ぜしこと甚だしかりし。又平日の作業に於ても瓦斯道、烟道、ロール機の如き、常に地水の侵入によりて妨害を受くること多く、其排水のために、日常少なからざる經費を要せり。

（二）工場配置の面白からざる結果、密接の關係の下に、連絡作業をなすべき各種工場は、其連絡を維持するために、凡て鐵道運搬に依らざる可からずして、時間、場所、運搬費を空費せしこと少からず。理想としては、歐米に於て見る如く、密接關係の諸工場を、出來得る限り一所に連絡し、能ふ可くんば是等を一大家屋中に納め、專ら起重機に依つて連絡を通ぜしめ、鐵道運搬の如きは、出來得る限り、單に外部、若くは貯藏場に對する原料製品の送入送出に止め度きものなれども、製鐵所は、其生產額の割合に比し、製品の種類頗る多きを要望せられるにより、多數工場の分立となり、遂に不便なる鐵道連絡のみを主とすることゝなれり。

（三）熔鑛爐工場の位置面白からざること。熔鑛爐に用ゆる原料の主なるもの、卽ち鑛石及石灰石は、凡て船舶によりて八幡に輸送せらるゝものなるにより、熔鑛爐は之を海岸に設くるを以て、最も便利なりとすれども、敷地地盤の關係に依り、反つて構內の最も奥まりたる而も海水面五十尺の丘上に設けたるを以て、海岸に陸揚したる鑛石は、凡て延長一哩に達する急勾配の線路に依り、是亦一々汽罐車を以て輸送せざる可からず。一例を擧ぐれば、明治四十二年中熔鑛爐に於て製出したる銑鐵は十一萬六千餘噸にして、之に要せし鐵鑛十九萬七千噸、石灰石五萬一千噸、滿俺鑛八千噸、此合計二十五萬六千噸の原料は、各一哩の急坂を上りつゝ、輸送せられたるものにして、之に要せし運送費は、全く熔鑛爐位置面白からざりしに基く失費にして、製鐵所は今日に至るも尙、當時此不利を忍ばざる可らざるなり。

（四）工場の一般配置の面白からざりしこと。

製鐵所の敷地は、購入の際約三十萬坪なりしも、其大半は丘陵起伏せり。土工に依りて、之を海面上五十呎及十五呎の二段に大別せるものとなし、五十呎地段上に銑鐵部を、十五呎地段上に製鋼部及製品部各工場を、分配することゝなしたれども、五十呎地段の一角深く敷地の中央に突出し、主要なる敷地面を狹窄せるを以て、創立の當初に於ても、工場の配列線は著しく細長のものとなれり。其後數年に亘りて、幾多工場の擴張新設をなしたるを以て、之が連絡に益々困難を感ずると共に、鐵道の延長は益々增加し、各工場間の空地面は、概ね鐵道線路によりて占有せられ、敷地面の徒消を嘆ずるに至れり。明治四十二年に至りては、敷地の面積三十九萬坪に增加せるも、構內鐵道の延長五十二哩に達し、內部に於ける連絡運搬のみに要せし機關車五十八臺、貨車五百臺を算する如き、工場の規模に比して、驚くべき數となれり。歐米の例に徵すれば、各種鋼材一年間十八萬噸の工場として、熔鑛爐敷地を合するも、面積十萬坪、鐵道三哩、機關車十臺以內にて、能く其用を辨ずるを普通とす。若し製鐵所の元設計にして、歐米の好例に倣ひ、一段の平地面を撰び且熔鑛爐を海岸に設け、關係諸工場の連結主義を執り、互に之を密接せしめ、多く廉價なる起重機運搬を以て、其連絡を助くるに於ては、敷地の面積を節約すること頗る大なるのみならず、年々製鐵所に於て要したりし約三拾萬圓の構內鐵道運搬費の如きは、其大部分を節約することを得たりしならん。工場敷地漫大の結果として、尙幾多の不便を生ぜり、卽ち蒸汽管、水道、電線の如きも、徒らに其延長を增大し、之がため工事費を增し、作業に於ても亦之が保存費を增加せり。特に蒸汽管の如きは、幹線のみにて、三千メートルの延長に達するがため、蒸汽は汽管より其使用場所に至る迄の間に於て、一氣壓內外の壓力を消失し、尙多量の凝結を生じ、之がため日日凝結のため徒消する蒸汽量は、同所の大汽鑵二十箇の力に相當するに至れり。蓋し製鐵所に於ける製品一噸制蒸汽費用の頗る高價なりしは、一は之に原因せしこと明かなり。

五、熔鑛爐及平爐（シーメンスマルチン）製鋼爐の原設計不良なりしこと

銑鐵部に屬する熔鑛爐は、獨逸技師リュールマン氏に其設計を依賴したるものなれども、同氏に於て、日本の原料を如何に誤解せしものにや、爐底の內徑、送風羽口の內徑、及其突出寸法其他重要なる諸點に於て、頗る不適當なるものを成案したること、本紙第十號に記載せる野呂博士の詳細なる報告に於て見るが如し。之がため、銑鐵部は殆ど其活動を妨げられ、明治三十七年熔鑛爐の改造を見るに至る迄は、銑鐵製造費頗る多大なりしは勿論、其品質數量とも、製鋼部の活動を許さざる狀態にありし。

製鋼部に屬する平爐は、ダーレン氏の設計に基くものなりしが、是亦缺點少からず。而して其方式が、未だ何れの處にも實驗せられたることなかりしこと、明治三十六年予が獨逸に於て、親しくダーレン氏より確かめ得たりし所なりし。最も重大なる缺點の內、噴出口の配置は、實驗の後之を改正することを得しも、噴出口の短かきに過ぐるを改むること、及鎔滓室を設くること等は、場所の關係上遂に之を實行することを得ずしも止みたり。

銑鐵部、製鋼部共に、其重要機關に此の如き設計上の缺點ありし爲、幼稚なる當時の作業は、一層其困難を加へ、數年に亘りて、十分なる活動を爲し得ざりし。

六、構外運搬に要せし費用も亦大なりしこと

製鐵所が創立以來十二年間に、歐米より輸入せし器械、其他の價額は、合計約二千萬圓に達せしも、內三割五分は、其運賃及輸入稅等に仕拂たるが故に、歐米の製鐵所に比し、夫だけ我製鐵所創立費の高價なりしなれども、作業の困難は之にあらず、寧ろ內地運搬の不廉なるにありし。製鐵所は外國品との競爭上、內地諸港に送致する迄の運賃を自ら負擔したるを以て、製品一噸に付、是等諸港迄の運賃平均五圓を要し、外國輸入品に對して當時受け得たりし、小額の輸入稅の保護は、此の如き內地運賃のために、殆ど之を亡失せしものなり。

七、補助設備の缺乏せしこと

製鐵所創立の當時、八幡町は一箇僻陬の漁村に過ぎず、之がため歐米の諸工場に比して、意外の創立費を要したり、卽ち港灣設備費に參百萬圓を投じ、尙若松築港會社にも五拾萬圓の補助金を與へ、若くは水道工事に前後百五拾萬圓を要し、又附近に補助工場なきため、自から修繕工場を建設し、之に三百五拾萬圓を要し、尙自ら耐火煉瓦工場を設くる等、萬般の事自ら之を設備せざるを得ざりし。而して是等の諸工事は單に創立費及作業費の膨脹を來せしに止まらずして、其工事は常に平日の作業の間に行はれるを以て、其間作業

は常に其妨害を受けたること既述の如し。

又平日の各種需用品に於ても、多くは大阪其他遠隔市場より供給せらるゝを以て、供給は遲引して且つ不廉のものたるを免れざりしなり。特に官業として、專ら公入札法に依りたるため、遇ま附近に於て用ひ得たき工場あるも之と相頼りて相互の便利を謀り、若くは將來を約して附近に工場を新設せしむるが如きことは爲し能はざりし。

八、工場の便利を本位として製造註文を引受くるを得ざりしこと

軍器獨立を標榜し、且官業として創立せられたる製鐵所は、製造註文を受くるに當りても亦營業上の利害をのみ顧慮する遑なきは當然の結果にして、之がため陸海軍よりの註文中には、損失を忍ぶも、尚之を製造したる場合少からず。特に製造の技術尚幼稚なる時代にありて、嚴酷なる一片の仕樣書を手にせる檢査官も亦、實地の經驗に乏しき場合に在りては、其結果の如何に慘憺たるものありしやを想見すべし。彼外國製鐵所が、其共同販賣組合事務所より分配せる、一ケ年の製造指定量に準據し、殆ど無規格なる普通市場鋼材のみを、種類少く量多く製造するを普通となすに反し、我製鐵所の註文中には、陸海軍を始め、鐵道院、各造船所等の嚴重なる規格物大部を占め、而かも種類の多き割合に、各種の數量極めて少きを常とせしを以て、之が爲作業の不便を感すること頗る大なりし。今之を例示せば左の如し。

（一）ロール機の變換頻繁にして、其間常に作業を中止せしこと。

（二）一定の鋼塊を使用して、區々なる寸法の註文品を製するがため、切端を生ずる多く、隨つて鋼塊に對する製品の歩止り惡かりしこと。

（三）日々材質區々なる鋼塊を製出せしむるため、熔鋼職工の過失を生じ易く、隨つて材質不合格を生ずる場合多かりしこと。

（四）鋼片の材質、及寸法の區々なるため、其貯藏又は運搬中混誤を生じ易く、是亦多くの不合格及切端を生ずるの原因たりしこと

（五）註文は噸數の割合に、口數の頗る多きのみならず、各口皆區々の引渡期限を有するを以て、一層製造に不便なりしこと。

（六）材質及寸法の甚だしく區々なるため、檢査を要する多きこと、即ち當時監査課の費用年々拾萬圓内外にして、其大部分は製品

の檢査費に關するものなりしこと。

之を要するに、一旦ロールを組換たるときは、同時に成るべく多量の製造をなし、以て材料勞力の節約を遂げ、工場の豫定工程を達し、茲に初めて廉價製造の目的を遂ぐるものなり。然るに製鐵所に於ては、寸法、材質及期限の極めて區々たる無數の小口註文に應ぜざるを得ざりしより、工場は常に、此人爲的故障の犧牲となりて、十分の工程を發揮すること能はず。又は軍用材の如き規格物は、多少高價に販賣し得るものなれども、前揭の如き種々なる原因により、不合格を生ずること多く、而して其不合格品は、容易に他に販賣することを得ざるため、永く倉庫に貯藏するか、又は極めて低價に賣却するの外なきが故に、單に此點のみに於ても、殆ど利益なきのみならず、工場一般の工程を展ぶること能はざるより生ずる不經濟は、意想外に大なるものありしも、十分に此點を考へ、本所經濟のみを本位として、註文の諾否を決することは、官業製鐵所の當時決行し得ざりし所なりし。

九、骸炭の不良なりしこと

製鐵所に於て當初使用せし如き不良なる骸炭を用ゆる製鐵所は、世界中多く其例なき所なり。本誌第十號に於ける野呂博士の報告の如く、之がため熔鑛爐の作業に故障を生ぜしこと多かりしのみならず、製鋼工場に於て希望する鹽基性製鋼用の銑鐵としては、餘りに珪素含有量の大なるものか、然らざれば余りに硫黄分の多き劣等銑鐵の産出に傾き、而かも産額に於ても十分なるを得ず、熔鑛爐設計の缺點と相挨つて、製銑及製鋼の作業に、甚大なる障害を與へたり。是實に製鐵所初期に於ける銑鐵及鋼鐵製造費の頗る多大なりし一大原因なりとす。

十、官業の結果として多數の不生産員を要せしこと

製鐵所に於て、直接製造に關する一切の費用（技師以下の俸給をも含む）を控除し、全く製造に直接の關係なき一般的の費用のみにても、年々百貳拾萬圓に達せり。其内俸給雜給の合計約參拾萬圓を占めたり、蓋し所謂不生産的人員の少なからざりしに因るべし。元來製鐵所の如き、多數の人員を使役し各種の作業を行ふ工場に在りては、適當なる幾多の部課を分割し、各部課に於て更に幾多

分科階級を備ふるは、實際已むを得ざる所にして、殊に事務の鞏頓を重んずる官廳の事業としては、敢て怪むに足らざる所なれども、餘りに階級の多きと、事務費の多きは事業上却つて障害を醸す場合あるを免れず。例へば一箇の決定を行ふために、實際殆ど必要なき多數吏員の認印を要し、冗員益々多くして冗務愈々生じ、處務常に遲緩に流れ、意旨屢々疏通を缺き、決議に參ずる人益々多くして、各人是非の考量愈々粗となり、責任の分劃益々多くして、遂に何人も責任なからんとする如き姿となり、下級者は多數の上官を戴きて往々區々の命令を受け、或は一朝事あるも、責任者の何人なるやを判定するに苦しまんとす。之等は皆畢竟複雜なる分擔制度の弊害にして、何れの官廳にも免れざる所なり。畢竟事業其物を本位とせず、事務を本位とするに因る、製鐵所の如きは、此弊害稍々少かりしと雖、亦全く免かるゝこと能はざりし。

十一、官業の結果資金融通の途に乏しかりしこと

僅かの金額を要するに過ぎざる工事と雖、苟も新造を意味するの費用は、翌年の豫算に編成し、議會の協賛を經たる後に於て、翌年四月より初めて工事に着手するの外なく、之がため目前に迫れる改良工事も、常に其時機を誤らざるを得ず。殊に事業不振の時代として、議會との關係頗る困難にして、意旨疏通を缺くの結果、技術上、經營上種々臨機の改善的良案あるも、容易に其決行を見ることを得ざりし。

此の如く外に議會との關係困難なる場合に於て、內に亦營業上殆ど堪え難き法規の束縛あり。殊に金錢の貸借及物品の賣買に關しては、民業に比し、活動の範圍極めて狹隘にして事業幼稚の時代に於て、常に其必要を訴ふる資金の融通に對して最も困難なりし運轉資金の現金に缺乏を來せる場合の如きは、一に大藏證券の發行を待つて、融通を受くるの外なかりを以て、或年の如きは、倉庫に製品原料等の有價物壹千貳百萬圓を有せしにも拘らず、僅に八拾萬圓に足らざる一ケ月の仕拂金に窮したること往々之あり。斯る場合に於て、常に犧牲となるは工場にして、製造に都合宜しからざる無理なる製品にても、速かに現金に代へ得べき望あるものは、作業の經濟を顧るの遑なく、强て之を急製せしめし等の事なきにあらず。斯かる事情は一般民業の、殆ど夢想せざる困難なりとす。

結言

予は今、前各章に於て、製鐵所が其創立以來、漸く多少の利益を擧げ得る迄に至りたる、當初十二年間の各種の困難を述べたり。梗概に過ぎずと雖も又其一斑を知るに足らん。十二年の歲月、固より短かしと云ふを得ざれども、是等の困難の下にありて、能く事物の調節を圖り、遂に能く經營の緖に就くに至るは、是亦決して容易の業にあらず。此間幸にして、和田氏中村氏の如き良長官あり、又た阪谷氏の如き事業に諒解深き良大藏大臣が長く其局に在られたる外、一面には多數從業員の長年の精勤も在りたる爲、事業の幼齡時代を無事に保育し了ることを得たり。兎も角も之に依て、歐米の斯業先進國が數百年の苦辛を嘗めたる結果を、完全に我國に移植し得たるより考ふれば、必ずしも不當の長年とは見難きならん。而して此困難の時代を經ずんば、又後日發展の時代なし。蓋し事業の成るは成るの日に成るに非ざればなり。

註—以上の記事に依り、各長官以下の苦心努力がよくわかる、難航の製鐵所が世論を沸騰させたのも、所謂大樹風多しの感がある。（第一編參照）

第四章　衆議員立候補宣言

（註―本文は大正九年五月、衆議院總選擧に際し、博士が其郷里群馬縣より議員候補に立つことになつたに付選擧區の民衆に向つて自己の立場並に將來の抱負を示されたる宣言書である）

今回衆議院議員の總選擧に當り、私は不肖を省みず、當選擧區の議員候補者たることを承認致しました。依て、玆に各位の前に自己の政見を發表する光榮を有します。

私は諸君と同じく、此の山水明媚、人情純朴なる本縣下の出生にして、十五歳迄其出生地たる勢多郡東村に小學教育を受け、次で前橋中學校に遊び、夫より東京に上り、明治二十五年帝國工科大學を卒業し、二十七年獨逸に留學し、同國のフライベルグ鑛山大學及び伯林鑛山大學に於て製鐵學を專攻し、次で同國ウエストフアリア州なるヘールデー製鐵會社に入り、一年餘の間實地を專修し、三十年歸朝と共に、九州に於ける官立製鐵所の創立の任に當り、苦辛十餘年略々其獨立經營の成功を見るに及び、官を辭して民業に入り、日本鋼管會社を初め、製鐵事業關係の種々なる工業を創設致しまして、目下是等六會社の重役として、實業に從事してをる者であります。

私の父は、昔の代官の手代位の格のものであつたさうでありますが、私の幼年中に歿しまして、私は母の手一つにて、小學より中學及大學卒業迄の仕送りを受けたるものであります。母は江戸の淺田宗伯の門に學んだもので、漢法醫でありましたが、親一人子一人の淋しき家庭なるに拘らず、私を其膝下より離して、中學及大學に送りましたのは、私を自分以上の相當の醫者にする積であつたのであります。私も其積りにて、初めは東京大學豫備門の獨逸部を了りたるものでありますが、個人の病氣を相手とするよりも、國の病を相手として、働いて見ようといふ或る動機の感化を受けまして、母に相談の上、醫科に入るを止めて工科に入つたのであります。此の如く醫科に入る可き豫備門獨逸部の卒業生が、工科に轉ずることになつたのは、私が始めての例であつたと申す事であります。此時分より私は、富國强兵策と云ふことが、非常に我國民の重要なる問題であると云ふことを感じまして、工科大學に入りましても、採鑛冶金學科に入り、殊に鐵の製造冶金を專修したものであります。大學卒業後、幸に時の農商務大臣で、而も工業に非常の趣味を持つて居られた故榎本武揚氏の知遇を受けましたので、此機會に於て同氏の腦中に、製鐵事業の國家經濟上及軍備上、最も重要なることを充分に了解せしむる事を得ました。榎本氏の非常の盡力によりて、明治二十九年の議會に於て、八幡製鐵所の官立を見るに至るや、當時已に獨逸に留學中なりし私に對して、眞先に技師の電報辭令が送られました樣な次第であります。此樣の事情のために、自分の責任の重大なることを感じまして、農商務省、殊に八幡製鐵所に官吏として十六年間も仕へましたが、官業經營の衝に當りて苦辛したる當時も、爾來民間に入り民業としての製鐵事業に盡しつゝある今日も、其精神に於ては何等變ることなく、一身を捧げて、富國强兵の基を開きたいと云ふ考であつたのであります。而して富國强兵の策にも色々あるが、一人の腦力を以て、而かも不敏の身を以て、多くを望み難いことでありますから、自分の選擇したる製鐵事業の一本槍を以て、國家に盡さんとしたのであります。

我立憲政友會の綱領第五に於て、余等同志は國防の充實を必要と認め、以て國權國利の防護を完全ならしむることを望んで居り、又第七に於て、農商百工を奬め以て國家經濟基礎を鞏からしめんことを望んで居りますが、此兵を强くすること及び國を富ますことに就ては、製鐵事業は最も有力なる働きをなすものであります。彼英雄ナポレオンが、佛國民に對して、西曆一千八百年三月四日に與へた敎訓中にも、「鐵と金とは平和を命令するに必要なり」とあり、又當時ナポレオンの文部大臣たりしフールクロアは、「凡そ一國の製鐵事業の進歩如何は、其國の文明に對する最も正確な尺度である。」と云つて居ますが、一國の軍備、卽ち兵器軍艦は殆ど鐵を以て造るものであり、又戰爭中に使用する砲彈、その他軍需品の最も重要なる部分は皆鐵で造らるること申す迄もなく、殊に近年の戰爭は鐵の戰爭であると申されます。我々が先般の歐洲戰爭の初めに當つて、その勝敗を豫想するに苦んだ譯も、敵味方の每年の製鐵能力が、相比敵することが一つの理由であつた。卽ち敵の獨逸、墺太利（獨二千萬噸、墺二百萬噸）と、味方の英吉利、佛蘭西、露西亞、白耳義（英一千二百萬噸、佛四百萬噸、露四百萬噸、白二百萬噸）の製鐵能力が、各二千二百萬噸內外で、相均しき事が夫であつた。鐵は此の如く、軍備上必要なると共に、經濟上にも亦之に劣らざる重要性があります、彼の、英、米、獨の各國が、其富を成した主なる原因は製鐵事業の賜である。又其反證として、我日本の富が、不幸にもこれまで、充分發達し得なかつたことは、國內に製鐵事業の起らなかつたことが確かに原因の一つであると思ひます。明治の初年以來、外國貿易に於て常に輸入超過を續けつゝあつたことも、鐵類の輸入が重なる原因である。八幡の製鐵所が漸く其作業を始めて、日本に於ても幾分か鐵の出來ることとなつたのは明治三十四年のことで、それから

大正六年末迄の十七年間にも鐵の輸入高は九億七百萬圓を超え、又鐵工品機械等四億八千萬圓を超え、兩方合計すれば十三億八千七百萬圓餘である。大正六年の如きは、鐵及鐵加工品の輸入合計で二億六千萬圓であつた。是でも決して日本人の鐵の使用が多いと云ふのではない。之を英米獨等に比すれば、尚遙かに少ないのである。明治四十四年より大正二年迄の三年間に於ける人口一人當り銑鐵の消費高は、米七十九貫、獨三十九貫、英三十七貫、日本は僅に五貫。故に將來文化の發達するに從ひまして、我國の鐵の使用量と云ふものは、今後尚大に增進するものと見なければならぬのであります。

此の如く我國の貧乏の元は、主として鐵の爲である。卽ち輸入品の最大高價物は鐵であります。紡績事業の勃興と共に、綿の輸入と云ふものが始まり、是が又鐵と相並んで輸入の最大金額を示して來ましたが、然し綿は紡績品となつて再び輸出さるゝものもありますから良いが、鐵は全部國內に於て消費されて了ふ機械其他の加工品となつて、輸出されるものは云ふに足らぬ少量であります。此年々莫大なる輸入を見る鐵に對して、之が對抗をなす所の輸出品は、實に我縣下の產出品たる生絲であります。若しも我日本に於て、生絲の輸出がなかつたならば、鐵の輸入と云ふ事が、我國の外國貿易に於て、如何に慘憺たる結果を來したでありませう。

私共が日本で鐵を造ると云ふ事に協力しまして以來、從來外國からのみ取つた鐵を、漸次自分で造ることになり、歐洲戰爭前迄に、我國の需用總額の三分の一位迄、自分で造ることになつた、戰爭が初まつて外國の鐵も來難くなつた機會に乘じて、一大勃興をなし、大正八年に至つては、稍々見る可き製鐵所が四十個所餘（投資總額五億圓）になつて、是等の製鐵能力を合計するときは、日本の需要の大部分を、自ら造ることになつた。國家のため誠に喜ぶべき現象であつたには相違ない。然るに平和囘復と共に一大打擊を受け、事業沈衰し、中止又は半中止の悲境に陷り、此儘に推移するときは、是等の事業も再び逆戻りの有樣となり、我國家經濟の上に容易ならぬ事となるのであります。元來何事に拘らず、市價の變動によりて、景氣の浮沈あるは普通のことでありますが、製鐵事業が殊に甚だしき盛衰を來す譯は、我國に對する外國品の壓迫、卽ち競爭が此事業に對して最も甚だしいからである。殊に米國品の壓迫甚だしきが爲である。而して各國共多くは輸入稅に依りて其事業を保護し、合同經營等の方法によりて事業の安全を計るに對し、我國の製鐵事業に對しては、政府未だ是等に關する國策を定むるに至りません。又當業者自身に於きましても、自衞の方法を講ずるに至りません。其玆に至らざるは種々の障害あるがためであります。如何にして能く是等の障害を排除し、我國製鐵事業の國策を定め益々同業を發展せ

しめて、富國强兵の機關たる威力を發揮せしむるやと云ふ事は、我々專門業者に於て相當の意見を有する所である。然し是は政治に關係ある重要問題である。既に財政經濟調査會に對する政府の諮問案となり、私も同會の一委員として、會議の席末を汚して居るのではあるが、兎も角一大問題でありますから、私は及ばず乍ら、寧ろ自ら議院に起つて之を國民代表の前に提議したいのであります。

我立憲政友會の綱領は諸君の知らるる通りである。其九ケ條の綱領全部に就て、私は滿腔の誠意を以て、是に贊同を表すること勿論である。唯其內に就て行政、外交、教育等に關しては、我黨自ら達識の士に乏しくありませんから、假令私一個として多少の意見がありましても、私は靜に他の先輩諸氏の教を聞き、互に相研究して、是が改善を圖ることにしたいのでありますが、第五項及第七項に對する富國强兵の策に就ては、私は私の專門とする製鐵事業の振興を計ることに依て、此目的に貢獻する所あらんと考へまするは勿論で更に其方針を擴張して、一の技術者としての立場から、各專門科學の應用に依て、我が國の農業、商業並に工業の進步發達を計りまして我同胞の衣食住に必要なる、汎ゆる物資の廉價供給を完全ならしむると同時に、國家文明の發達に必要なる各般の施設を完成することに盡力致したいと存じます。一例を擧げて申しますれば、農產物の增進を計るために、或は肥料の充足又は機械の應用を計るの外、水力電氣の利用を奬勵して、我國の天惠たる此天然動力を充分に活用したいのであります。既に調査濟である五百萬キロワットの水力電氣は、全部之を用ゆるときは、是がため年々數千萬噸の石炭を節約し得るのであります。元來埋藏量少い永續性の乏しい石炭を、年々三千萬噸も掘り出して、使つて居る我國に、天は永久に之に代るべきものを惠んでをるのであります。是等を巧に利用して、我々の事業に夫々利用して行くことも、皆我學術卽ち科學の應用に待つべきものであります。夫から又私の申上げた製鐵事業は我國ではまだ幼稚であつて、私共は是非之を振興して、一日も早く、年々莫大の金を外國に出して居る輸入鐵を防遏し、自給自足の域に達したいと思ふ。我縣下の養蠶事業の如きは盛に其產物を外國に輸出して、實に積極的に國富の增進をなしつゝあるのであります。此重要なる日本の二大事業は、國家將來の運命を荷ふべき、車の兩輪と云ふべきである。而してこの養蠶事業の產物たる生絲の如きも、科學の應用卽ち織物事業及染色事業の進步に依りて、一層高價なる加工品として、然る後之を海外に輸出することを得たならば、國家のため一層有利なることは勿論であらうと思ふ。或る程度迄は別に日本人が發明せんでも、外國に知れて居る科學應用を、日本に輸入すれば足る位でありますが、今日未だ世間に知れてをらぬ科學の應用が、學問の進步と共に、何處迄發達するか、計る可からざる事であります。

歐洲戰爭中四方を封鎖されて、智利硝石の輸入に絶望した獨逸が、空氣より窒素を取つて火藥を造り、何等の苦痛を感じなかつた様な例は、戰爭中各國共數限りなくあります。タンクとか、飛行機とか申す様な戰爭道具が、明治三十七年にあつたならば、彼の旅順の攻撃にも、彼の如き慘酷なる戰爭はせんでも、落城させることが出來たでありませう。

此様に平和事業のみならず、戰爭に對しても科學應用の大切なる事に就いては、私は一の科學者と云ふ立場より、一層深く感じて居る次第であります。乃ち私はかゝる見地より、科學の應用を奬勵することに依つて、富國强兵に貢獻したいと存じます。

諸君の内に、自然御經驗の方も御有りであらうと思ひますが、誰人も足一たび我國を離れて歐米に向ひまするときは、諸外國に於ける盛大なる文明の有樣に驚嘆すると共に、日本人として肩身の狹きを感ずる事であります。私の如き米國にも、歐洲にも、前後五回程留學、又は視察のため參つたのでありますが、何時も此の如き感慨を持ちました。我等は優秀なる我が國の精神教育の御蔭を以て、腦中には愛國心あり、武士道あり、大和魂あり、此點に於て、より以上のものを見出すことはないのでありますが、物質文明即ち科學の應用の發達により、施設せられたる富國强兵の現實を見るに至つては、如何に我國の夫が貧弱なるかを思ひ出して憤慨に耐へんのであります。

右の外目下差當りたる問題として、物價調節問題、勞働問題、尙將來の問題として、外に諸種の國際問題、內に人口增加に對する問題等多々有ることでありますが、是等の問題は、前に述べた富國强兵の實を擧ぐることに依つて、自然に解決せらる可きもの歟からざる可しと考ふるのであります。例へば農、商、百工の事業を振興して、衣食住を完全に充足するを得ば、物價低落は自然の數である。又此事業の振興に依り國家の富力を增進するに於ては、假令物價にして今日より低落することなしとするも、亦憂ふるに及ばざる事と存じます。徒らに一時の小策を弄して、强て物價を低落せしむる如きは、チブス患者に、下熱劑を與ふるに等しかる可しと信ずるのであります。

終りに臨んで一言致します。私は政治を職業とする者では御座いません。只前申した通りの私の所信を實行して、聊か國家に貢獻致したい爲に、立憲政治の下に於て採るべき、唯一有效の手段と信じまして、玆に衆議院議員候補に立つた次第であります。決して自分一個の名譽とか、又は利益とかを慾望するものでないことを玆に斷言致して置きます。然し乍ら幸に諸君の推選を得て、議會の一員となりしましたならば、事の成敗は別と致しまして、自己の盡し得る限り、必ずや充分に之を盡し、誓て諸君の代表たる地位を辱かしめざるを期するのであります。

「今泉博士が國寶になつた話」　鐵鋼協議會某氏談

（昭和二年一月工業所載）

鐵鋼協議會の某氏今度歐洲の鐵鋼業視察から歸つて來た今泉嘉一郎博士を「あの人は正に國寶だ」と口を極めて激賞してゐる。其國寶の所以を玆にかい摘んで記すと、博士は今回の視察の爲め彼の地に滯在すること七十餘日、その間豫め定めて置いた調査のプログラムに從つて（一）製鐵鋼業の現況（二）現在の鐵鋼生產費如何（三）將來の輸出政策の變遷豫想（四）將來の輸出能力如何（五）最近の企業經營法並に生產施設及び進步の狀況如何の五大項目を標準として、更に之を六十細目に分ち文字通り寢食を忘れての調査研究したものだ。而して努力の結晶たる調査報告書は實に三千ページを超ゆる尨大なるもので、今迄の粗漫な調査を以てしては殆ど知るに由なかつた歐洲鐵鋼業の狀態は之に依つて一目瞭然たるものがあると云ふにある。此の調査報告書は近く政府當局に上申すると共に一般にも配布するとの事であるが、某氏は更に「斯る偉勳ある人こそ眞に國家最高の勳章に値するものだらうねエ」は其通り〳〵。

第五章　鋼管製造の話

（註―本文は大正九年十月日本鐵鋼協會に於ける博士の講演の速記で、當時我が國に於ける鋼管製造の概況を述べられたものである）

今晩は本會に於きまして、亜米利加のナショナル鋼管會社の活動寫眞もあると云ふので、其前に於て鋼管製造に關する話をする様にと云ふ相談を本會から受けまして、終に私が御受けした次第でございます。亜米利加の鋼管製造と云ふことを、茲に活動寫眞まで提供して、日本に於て廣告しようと云ふのは、亜米利加の鋼鐵トラストの販賣部長である所の世界に有名なるファーレル氏の政略である。ファーレル氏が、亜米利加合衆國の大藏大臣以上なる方略を以て、ユー・エス・エス・シー販賣部長として世界的に非常なる活動をなし、其一つのプロパガンダとして、斯様の事を日本でもするのではないかと私は信ずる。で我國は此世界の就中亜米利加の鐵の侵入に對して、我國の製鐵業を如何にして擁立しようかと云ふ、今日一大問題に遭遇して居るのである。此時に當つて此敵のプロパガンダに對して、私が今日申さば活動寫眞の辯士を務める譯である。私の從來の持論とは、全く正反對の立場に立つたのであります。併し乍ら本會は決して一つの商賣機關ではないので、是は御互に此製鐵事業の研究をするのであつて、學問に國境無しと云ふ譯で、此仕事を研究するが爲に、言はば他山の石又以て執つて我々の參考としなければならぬと考へるのであります。さて私の演題は、「鋼管製造の話」と申しまするが、今日は左様な譯で、後に此活動寫眞がありますから、詳しくそれ專門に長く御話する時間もございませぬ。故に極く大體のほんの素人に御話をするやうな積りで、此處で鋼管製造とは如何なるものであるかと云ふことを、簡單に申上げる考へでございます。

鋼管即ち鋼のパイプと云ふものを、人間が何れの時代から使ひ始めたかと云ふことは、格別記錄も何もございませぬが、一八一五年英吉利に於きまして、初めて石炭から瓦斯を造つて燈火とした。即ち瓦斯燈と云ふものが出來た時分に、此細いパイプが必要であると云ふ關係から致しまして、兵卒の使つた古い小銃を蒐めまして、それに螺旋を切つて、接ぎ合はしたと云ふのが、鋼管の使ひ初めであ

ると云ふことを申して居る者もございます。夫で一八二四年乃至二五年頃に至りまして、稍々鋼パイプを製造すると云ふ事が、具體的の工業になりました。即ち一八二五年には、初めて例のバッド・ウエルドと申して、平鐵を縱に斯うまるめて、さうして其まるめた先が、突き合はせに鍛接するパイプのパテントを得た位の譯であります。其後暫く致しまして、其突き合はせのパイプではどうも完全に内壓に耐へないと云ふので、蒸氣パイプに使ひます爲に、色々の工夫を致しまして、遂にラップ・ウエルド即ち重ね合はせ鍛接が發明されました。是は其時分に、パテント・パイプと稱して大變に幅をきかせたものであります。其後に至りまして、シームレス即ち引拔鋼管と今日申して居りますが、接ぎ目なしの……即ち圓周の何處にも接ぎ目のない所のパイプを發明する者が出るやうになりました。併し此發明は初めは格別際立つた發明ではなかつた。何となれば誰でも圓棒を少し注意して、旋盤で眞中に穴を明ければ接ぎ目無しパイプが出來るのであります。さう云ふ接ぎ目無しパイプと云ふものが、始めて出來たのでありますが、その穴を明けたパイプを、更に中に棒を通して、ハンマーかプレス、或はロールにかけて長く伸ばしまして、さうして周壁を薄くして行くと云ふやうな方法で、段々と接ぎ目なしパイプと云ふものゝ製造が進んで參りつゝあつたのでありましたが、遂に一八九〇年に至りまして、獨逸のマンネスマン兄弟が、是は兄弟で……兄の方がラインハルト・マンネスマン、弟の方がマックス・マンネスマンと申しました。其二人は鍛冶屋であります。けれどもそれが當時は勿論、今日に至るまで大發明と云ふことになつて居ります。故に當時歐羅巴一般を驚かした所の發明でありまして、その發明權を八百萬馬克に賣つた。即ち獨逸墺太利鋼管會社と云ふ、資本金一千七百萬馬克の會社が出來て、其株の半分をば、マンネスマン兄弟に交換に提供したのである。而して是が引拔鋼管の初めであります。其發明の偶然に起つたと云ふことはどう云ふ譯であるかと申しますと、其二人は鍛冶屋でありましたが、自分の顧客の中に、大變八ケ釜しい御客樣があつて、註文品たる圓い鐵棒の表面を、非常に綺麗にして欲しいと云ふ、特別の要求でありました。マ氏兄弟は色々工夫しまして、初めは鐵板と鐵板との間に圓棒を入れ、壓しながら轉がしてゴロ〳〵やつたのであります。然るに板の間で、唯だ轉がしては大變骨が折れるから、鐵のロールを二本重ねて同じ方向に回轉し、其間に彼の圓棒を通してゴロ〳〵やつた。さうすると詰り圓棒が眞中で壓されながら、之も亦廻つ

て居るために、表面が非常に綺麗に磨かれました。磨かれたばかりでなく眞直になつた。是は今日でも棒を眞直にする時などに使ふ方法であります。斯う云ふやうな機械を發明して、非常に表面の綺麗な棒を拵へて、註文者に提供した所が、其註文者が受け取つて、良く、吟味して見ましたら、成程外面は非常に緻密に綺麗に出來て居るが、此棒の斷面を良く調べて見ると、穴が明いて居る。倘よくしらべると、其穴から四方に枝が出て居る。さうして大體に於て、棒の中心が大變穴だらけの粗質になつて居ると云ふことを云はれました。それからさう云ふものであるかと云ふので、段々之を研究して見ると云ふと、斯うして自然に圓棒の眞ん中に穴の明くと云ふことを發見して、遂に所謂マンネスマン穿孔機と云ふものを發明しました。此機械で穴が明くと云ふ原理は、殆ど圖面でも、理窟でも、一寸說明し悪いのであります。一八九〇年伯林の建築學會に於て、「プロフエツサー・レニヨー氏が說明を試みたことがありますが、兎に角學理上から、多少說明の困難なる力學の問題であります。總てロールとロールが重つて、同じ方向に廻つて居る間へ、一つの圓い物體を入れて、壓し轉がすやうにすると、其物體の中心が、ルーズになり、穴が明いて來る。斯う云ふ具合になつて居る。そこに圓棒が後から這入りますと、それが又廻りながら、前の方へ進んで來る。進んで來ると同時に、穴が明いて仕舞ふと云ふ、極めて不可思議な現象が起ります。是は當時此引拔鋼管の最も良い輕便なる方法と看做されて居つたのであります。それで、「マンネスマンは單にパイプ製造のみならず、或は之を以て中空のトランスミツション・シヤフト卽ち傳導軸を考へました。傳軸導の中心に穴が明いて居れば、それだけ輕いものが出來る。或は大砲の砲車の車軸なども、斯樣に中空の物で造ることなどを、考へたのであります。中空のレールを造りました。斯樣に種々の事に、之が應用を考へましたのでありますが、其後に第二の發明が出來ました。卽ちマンネスマンの其後の發明と云ふのは、一遍穴の明きましたパイプを、更に長く引き延ばす爲に、所謂ピルジヤー・ロールと云ふ機械を發明致しました。是は穴の明いた鐵棒卽ち荒造りの鋼管を、今度は此機械を使つて長く引延すのであります。其ロールの名のピルジヤーと申すは、昔宗教信者が、エルサレムの聖地に參詣することがあつた。その參詣をする人間を、獨逸語でピルゲルと云ふことから取つたのであります。其宮詣りをする人が、前に二足歩いては又後に一足歸へる、其歩き方と同じく、前に一尺品物が進めば、次には後に五寸戻るので、其運動が似て居る所から名づけたものださうでありますが、それは偖て措き、兎も角ピルジヤー・ロールと云ふものを發明致しまして、遂に「マンネスマン」の鋼管製造法を完成いたしました。是以外に仕上げ機械、補助機械に屬する色々なものがありますが、夫

は何れの方法でも、同じでありますから玆に略します。

一方には、一八二五年に發明いたしましたパット・ウエルド卽ち突き合せパイプ、又其後發明されました重ね接ぎのラツプ・ウエルドパイプ、斯う云ふやうなものは、英吉利に於て盛に製造を始められまして、次に亞米利加に其方法が流行しました。原料鐵は初め英吉利では、專ら鍊鐵を用ゐました。亞米利加ではベツセマーの極く軟いスチールを使ひまして、初めは隨分困難しましたが、遂に完全なる發達を致しました。獨逸は專ら平爐軟鋼を使つて、バツトもラツプも盛んに造つて居りました。斯樣に鍛接鋼管は英吉利が本尊でありますけれども、遂に亞米利加に於て非常なる發達を致したのであります。殊に此パイプ製造に關しましては頗る多くの機械作業を要するのでありますから、亞米利加の獨特なる機械裝置の應用に依りまして、英吉利以上盛なる發達を來したのであります。

再び接ぎ目無しパイプ……俗に引き拔き鋼管と申して、周邊に於て接ぎ目の無いパイプのことを申上げます。之は前述の如く、マンネスマンと云ふ獨逸人に依つて發明された方法で、獨逸の專賣として一大工業となり、總ての鋼パイプをこの方法によつて接ぎ目なしで造ると云ふことを、獨逸は考へたのであります。でマンネスマンが、一八九〇年頃初めて此パテントを得てから、直ぐに斯の如く世間で尊重された所以のものは何であるかと申すと、當時世界一般にこの接ぎ目無しパイプと云ふものは得難いものであつた。舊來の方法では、非常に製造に困難なので、頗る高價なものでありました。所がこのマンネスマンの方法によつて、それが極めて簡單に、何方かと云ふと、勞賃などの關係から申すと、鍛接鋼管に比して、餘り違はない勞力で出來ると云ふことが、其特長であるのであります。それ故に前に申したからに、高い專賣を評價された次第であります。で此機に乘じて、獨逸は一生懸命に、接ぎ目無しのパイプに努力を致し、漸次其方向にて改良法も案出されまして、遂にチーセンといふ製造方法も出來ました此方法は、今のピルジヤーによつて、細長く壓延し、且つ其周壁を薄くするのであります。斯う云ふ風なことで……今を去ること十年ばかり前になりましては、一方に歐羅巴の獨逸で接目無しパイプ、卽ちマンネスマン專門の製造法及マンネスマンに加ふるに、チーセンの改造法を以てした製造法があつて、接ぎ目無しパイプが盛に造られ、一方に亞米利加に於て、最も發達を致しました、接ぎ目の有るパイプ卽ち英吉利で初まり、亞米利加で發達したる、前申した鍛接鋼管があつて、とう〳〵この世界に於て、二つの鋼製パイプの、何れが良くして、何れが利であるかと云ふ所の問題が生じた譯で、需要者にも製造者にも、この二つの重要品の、比較擇別と云ふこと

が重要のことになつたのであります。

此場合に於きまして、即ち明治四十二年頃、日本に於ても鋼管の製造を始めたいと云ふものが出來て參りました。丁度、私が政府の命によりまして、歐羅巴に參る際に、日本人と英吉利の有名なスチュアード・ロイド鋼管會社の機械裝置を移植し、技師並に場合に依つては職工までも派遣して、鋼管製造を創めたいと云ふことが計畫され、儲か時の大藏大臣阪谷男爵の盡力になりまして、私の洋行を幸にその筋より調査を囑託されました。玆で私に英吉利のスチュアード・ロイドの會社に就いて十分の研究を致しまして、更に獨逸に渡りまして、一方の競爭者たるマンネスマンの製法を研究致して見ましたところ、ふと接ぎ目を有する所のパイプと云ふものは、當時の日本では困難であらう。當時の情況では接ぎ目無しのパイプの方が、原料の關係上、却つて製造費が安く出來るのみならず、練習も早く且つ將來世界のパイプと云ふものは、どういふ方面に進歩するかと云ふと、接ぎ目を有するパイプと云ふものは、段々死滅して行くパイプであるから、接ぎ目無しパイプと云ふものが、將來必ず世界の用途に向つて、專ら使はれる所のものになる。斯う云ふ考にて、出來得るならば接ぎ目無しパイプの方をやれと云ふことを、計畫者に勸誘したのであります。併し乍ら兎に角スチュアード・ロイドと話が進んで居るのでありますから、相當の條件に依つて直ぐ出來ると云ふのならば、其方も宜しからうと云ふて、其方の話も夫々進めさせました。幸か不幸かスチュアード・ロイドは、日本の樣な輸入關稅が少い處では、其仕事は創められぬ。將來輸入關稅を上げると云ふ條件なら共同してもよい、左もなければ見込がないと申しました。處が政府としては、勿論左樣なことは今から約束は出來ぬと云ふことになりました。從つて日本とスチュアード・ロイドとの交涉は打切りになりました。私が明治四十五年に官を辭すると共に、早速着手致したのが只今の川崎に建つて居ります日本鋼管株式會社で、即ち接ぎ目無しパイプの製造を主とするのであります。

それから、パイプ製造と云ふことに就て、簡單に古來如何なる材料からパイプを造ると云ふことを、人がやつたかを御話し致したいと思ひます。扨昔から此「パイプ」製造の材料に關しまして、第一に申したいのは、ソリレドの物即ち穴も何もない鋼塊、又は鋼片を使つて、パイプを造ると云ふことであります。圓棒或は圓い鋼片を使つて、パイプを造るのであります。是は一番幼稚の時代には、單に圓い棒へ持つて行つて、之に穴を明けた丈のことで、次は此穴の中に鋼の丸棒を通して、鎚又はロール機にかけて壓延し、長さを增

し、肉を薄くすると云ふことが少し進歩した時代で、其次には今日鋼製砲彈體を造る樣な水壓機を使つて、角又は丸鋼からパイプを押し出して造ると云ふこと、最後に進化したのが、前に申したマンネスマン式及其改良法に屬する方法で、穴の無い圓い形の鋼塊、或は鋼體から、特殊の穿孔機で、先づ穴を穿ち、之を特殊のロールにかけて、パイプに造り上げると云ふ方法なのであります。

第二は半圓鋼からパイプを造る方法であります。此法は餘り行はれて居るのではないが、ベリンの方法と云ふのである。是は半月形の斷面を有する棒鋼を、(一)形に四枚重ね合はせて、之を纏めて一寸パイプの形になし、全體を加熱した處で、中の空處に硬い冷たい鋼の心棒を通して、此全體をロールにかけ、四片の鍛接されると同時に、肉も薄く長さも延びる樣になし、終りに心棒を引伸いて、眞のパイプに造ると云ふことになつてゐる。此心棒の外徑が即ちパイプの內徑に相當するのであります。心棒は極く硬い鋼を以て致します。先づ恁んなものが、半圓鋼からパイプを造る方法であります。餘り實行されて居りません。

第三は板鋼からパイプを造る方法でありますが、是は一つの板鋼を熱して、水壓機にかけて、初めに植木鉢のやうな恰好にする。夫から何遍も熱しては壓して遂にパイプの形にして仕舞ふのであります。今日では多く壓搾瓦斯のボットルに使つて居るのであります。即ち酸素壜などと云ふものは、米國では之を用ひて居ります。是は底のある大徑のパイプに都合が宜しい、普通のパイプの樣に長く細くするにはドローベンチ即ち牽延機を使ひまして、何べんも繰返すことになります。これが板から造る方法で、其外にも極く徑の大なるものになると、まだ板から造る方法がありますが、是は御承知の通り、圓く板を曲げて鋲付けにするか、又は近頃一般に水力電氣工事で、落水パイプに用ふる大形のパイプなどの樣に、酸素、水素瓦斯に依つて鎔接するのであります。

第四は平鐵からパイプを造る方法です。此平鐵からパイプを造る方法は、先程申しましたバットウエルドや、又はラップ・ウエルド方法に依るパイプであります。それでこのことに就きまして、皆樣大概御承知のことと思ひますけれども、チヨツト說明をして置きますが、この平鐵の長いものを、初め充分に加熱し、其一端を捕まへて、圓い穴を持つたダイスの中を引張り廻すのであります。之をやると平鐵の縱の緣が圓く曲つて、且つ壓力で鍛接されて仕舞ふのであります。バツトウエルドの方は、二吋以下の徑のものが出來ますが、專ら壓力の少さい瓦斯、或は水を通ずる細いパイプに使ふのであります。それからラツプ・ウエルド即ち重ね接ぎの方は、平鐵の縱の緣が少し重なつて鍛接されるのであります。平鐵製の鋼管では、平鐵の厚さが、出來たパイプの厚さになるのであります。徑にな

りますとバットの方では、平鐵の幅が出來たパイプの外周になり、ラップの方では重なつて居る部分だけが引かれてあとが外周になるのであります。

先づ以上の各原料で、パイプは大體出來るのでありますけれども、それから後に、尚ほ夫々加工法を行つて、完全のものにするのであります。今日のパイプの加工法と云ふものは、頗る進歩致しまして、一旦形をなしたパイプを大きくすることは少し困難だが、小さくすることは幾らでも小さく出來ます。更に又其厚さも目的に對して厚過ぎると思ひますれば、幾らでも加工の方法に依つては薄くなります。長さに至りましても、段々延ばすことが出來ます。是は平鐵を渦巻形に曲げて、而してパイプの形になるやうに致し、其曲つた緣と緣とを鍛接するので、其鍛接の部分は、大概瓦斯を使つて加熱し、其上をハンマーでトン〳〵叩き附けると云ふ具合にするので、自働的に働らく巧妙の機械もあります。此方法では徑が二尺位までも出來まして、壓力の大なるを要しない鑛山の通風管等に使はれるのであります。是は壓力の高い所には餘り宜しくないのでありますが、唯その鐵の縱織維の方向が、グル〳〵と渦巻形に、パイプの周壁を成して居ります爲に、內部から起ることのある爆發瓦斯の壓力などに對して、抵抗が強いだらうと云ふ考へから、昔アームストロング會社で、大砲を造る場合に、此方法に似たことをやつたと申すことであります。是は平鐵ではない、角鋼を巻いて、只今の鐵道スプリングの樣に曲げ、之を加熱して、鎚で鍛接して、造つたさうですが、今は大砲を造るに、そんなことは致しませぬ。併し只今でもやつて居りますのは、我々の鳥打に使ふ、小銃の場合であります。是は薄い鐵材を巻いて、之を加熱し、そして中に心棒を入れて鎚で鍛へたものであります。是は磨くといふと、大變に美しい渦巻の紋模樣が出ますが、其美しい色々な模樣が廣告の種子になるのであります。それで先程申しましたマンネスマンの方法で、鋼管の製造をなす時に、第一の作業に屬する穴を明ける方法の現象でありますが、是も丁度鐵の周壓の纖維は、渦巻形になつて居るのであります。

それで大概鋼管の製造方法に關することは、是だけに致しまして、一寸附加へて置きますが、元來日本の此鋼管の需要と云ふものがどの位あるかと云ふことを申しますると、大正四年より以前五ケ年間、卽ち明治四十四年から大正四年に至るまでの平均が、一ケ年三萬三千六百六十噸であります。而して今日は我國に於て半分は自給し、半分は輸入されて居るのでございます。

製造所の主なるものは、現在の川崎に於ける日本鋼管會社、モウ一つは住友伸銅所內にある所のパイプ製造所であります。其外によ

く市中に鋼管製造所などと稱へて居るものがございますが、多くは是は、鋼管會社などの粗製パイプを買受け、それを以て更に加工して或は自轉車のパイプとか、其他色々の物にする工場である。精巧の物に至りましては、川崎の鋼管會社で造りました。短尺管などを購入致しまして、寫眞機械の三本足や、其他軍器などの用品を造るものもあります。パイプを製品として市場に出す迄には、鋼管製造の工場に於ても、却々容易ならぬ加工を要するのである。初めに申した製造法と云ふは、只單にどう風にして鋼片に穴を明けるか、又それを如何にして細長いパイプの形にするかと云ふことに就て、唯種別を示したのでありますが、之を愈々市場に出せる製品に仕上げるには、曲つたパイプを直すとか、或は肉厚のパイプを薄くするとか、面の粗なるものを鏡の如く平滑にするとか、或は外形の楕圓形のものを圓くするとか、寸法の不正確のものを正確にするとか、鋼管の硬過ぎるものを軟かくするとか、斯う云ふやうな總ての加工作業は、皆附屬機械と云ふものに依つてやるのでありますが、斯く違つた目的の爲に、夫々違つた機械を備へ付けて置くのであります。而して每日製造を要するパイプの種類や、寸法が異る每に、何れの機械と、何れの機械とを如何に組合せて、一作業として使ふのが、一番經濟的で、一番精巧に、且つ一番早く出來るかと云ふのを其時々決めて行くといふことが、此鋼管を製造する技師の苦心もあり興味もある所であります。

そこで先程日本の需要額を申しましたが、亞米利加の製造能力はどうであるかと申しますと、只今私の持つて居る統計は、一九一八年ですから一昨年であります。一昨年のパイプの製造高は二百二十九萬噸で、其中引拔鋼管が二十九萬二千噸であります。そこで日本の製造能力はどうであるかといふと、私の日本鋼管會社が若し自分の好む所の寸法や品種のものにのみ全力を盡してやりますと、一ケ年に三萬六千噸位の製品を造り得るのであります。故に日本の需要額が一ケ年三萬六千噸でありますれば、同工場だけで以て完全に供給出來る譯であります。所が註文が自分の好む通りには行くものでない。卽ち世間の要求する鋼管は、多種多樣でありまして、寸法や品種に於て、悉く應じ得ることが出來ない。夫がため該會社に於きましても、只今の所は全能力の六割餘しか發揮出來ないのであります。其他大阪の住友伸銅所に於きましては、專ら海軍用等の特殊パイプを造つて居ります。製造能力に於ては、判然いたしませぬけれども、專ら海軍用の特殊管を、主として造つて居ります。夫以外に眞の鋼管製造所はないのであります。玆に於きまして、パイプの方に於ても、自給自足の途を全くせむ事を期して、鋼管會社は將來十六吋までの鋼管を造ることを計畫致しまして、それ〴〵準備を致し

既に設備の註文や、擔當技師の選定等も、外國に於て着手したのでありますが、何しろ御承知の通りの經濟界不況の障碍に依つて、其事が一時中止されたのであります。それで亞米利加では前にも申した通り、現今に至りましても、鋼管と申せば舊式のバット式又はラップ式の接ぎ目パイプを主として造つて居りまして、引拔鋼管即ち繼目無しの方は、割合に進歩して居りませぬ。故に引拔鋼管の技術に關しては、日本は左まで亞米利加に劣つては居りませぬ。寧ろ日本の方が、或る點は進歩して居ると言つても差支へない位でありますが、其生産能力に至つては、僅に亞米利加の六分の一位に過ぎません。是は需要の點から制限されて居るのであります。引拔鋼管は米國も日本も、又英國も、その製造法を近來は獨逸から學んだのであります。而して、どつちかと云ひますと、日本の方が獨逸最新の技術を輸入したのであります。

それから最後に一言致しますが、御承知の通り我國では、鐵の自給自足と云ふことが、當面の一大問題になつて居ります。即ち如何にすれば、内地の生産を振興させることが出來るかと云ふことに就ては、各方面に色々の研究もございまするが、最も必要なることは矢張り關稅保護政策かと私は考へます。でこのパイプの一例に於きましても、亞米利加は如何なる關稅保護政策を採つて居るかと云ふに、米國では凡て關稅も從價で取つて居りますが、鋼管輸入稅は從價二割と云ふことになつて居ります。之に對して日本ではどうであるかと云ふと、今日に於て從價に換算して見ると、輸入稅は一割位にしか當つて居らぬのであります。其外の國に於てはどうかと云ふと、各國の多くは從量稅であります。即ち一噸何程と云ふことになつて居ります。勿論今日は各國の貨幣の値段が、平常の時と大に違つて居りますから、マークなりフランなり、凡ての貨幣を、其金貨の純粹度から價値計算を致して、それから之を日本の百斤何圓にあたるかと言ふことの計算を致して見ますると云ふと、獨逸輸入稅は鋼管百斤に對して二圓二十九錢を課し、佛蘭西は二圓三十二錢を課し、伊太利は二圓七十八錢を課し、墺地利は三圓四十九錢を課し、加奈陀に至つては驚く勿れ六圓二十錢を課して居ります。飜つて日本はどうであるかと申せば僅に一圓十錢と云ふ御話しにならぬ低額であります。今晩私の御話しようと云ふことは此位のことに止めます。是から亞米利加のナショナル鋼管會社の作業を見せる活動寫眞があると云ふことでございますが、同會社は初めから原料自給策に依つて、自分で銑鐵を造り、夫から自分で鋼を捔へ、夫からパイプを造ると云ふ樣に總て自分でやると云ふことになつて居ります。定め し我々の參考になる活動寫眞でありませうと思ひますから、諸君と共に拜見致しませう。では是で……長時間御淸聽を煩はしました。

第六章　鐵の話

（註―本文は大正六年五月龍門社の第五十七回春季總會に際し、博士の爲したる通俗的講演の筆記である）

閣下並に諸君、今日の御會に於きまして、何か鐵に關して皆樣方の御參考になる講演をせよとのことを、阪谷會長閣下から八十島幹事を以て御依頼がございました。本會の美しい御趣旨に付きましては、私は平素より深く御賛同申上げて居りますので、取敢へず御請は致しましたが、何にせよ目下俗務に忙殺されて居りまして、寔に時間の餘裕がございませぬがために、何等面白い御話をする準備が出來ませぬのでございます。尤も私は鐵と云ふことを專門と致して、及ばずながら其業に從事いたして居りまするので、多少の材料はないではございませぬが、之を一つのものに組立ててお話するための組立の時間、加工の時間が乏しいので困りました。併し何なりとも、鐵と云ふことに就て大體の觀念を附けると云ふ位の程度でも宜しいから、話をするやうにと云ふことでございますので、題の如きも唯其儘鐵の話と云ふことに致して、通俗的の御話を致し、最後に時局問題に關して、二、三の心づきましたことを申上げます次第でございます。貴重の御時間を暫くの間淸聽を汚します。

第一　鐵と人間との關係

鐵と云ふ物の觀念を得るが爲に、先づ第一に知らなければならぬのは、鐵と云ふものと人間との關係でございます。吾々が棲んで居るこの地球と云ふものが何で出來て居るか、これを突然問はれたのでは地質學者でも一寸返事に困るのでありますが、この地球を計算的に分析した人がある。是は亞米利加のエフ・ガブルユー・クラークと云ふ人であります。其結果に依りますと、地球の成分は地球の外皮に、それを取卷いてゐる所の雰圍氣並に海の水を加へた總體を分析して見ますと、一番多いのは矢張り酸素、是が五〇％を占めてゐる。其次に多いのは珪素と云ふものであります。珪素と云ふのは、酸素や鐵などと結付いて、岩や石になつて居ります。其珪素と云ふものが一六％ある。其次に來るのが驚くべし、アルミニウムと云ふ金屬が、前の酸素や珪素と結付いて

地球の大なる部分を占めて居る。是が七・四%ある。其第四位に來るのが鐵であります。鐵は卽ち金屬と致しましては、アルミニウムに次で來る所の地球の大成分であります。是が四・二%ある。其次に來るものは、多くは非金屬或は瓦斯體のものでありまして、カルシウムが三・二%、マグネシウムが二・三%、ナトリームが二・四%、ポツタシウムが二・三%。次は水素で、非常に多い樣でありますけれども、是は〇・九%しかない。其他チタニウムが〇・三、炭素が〇・三、鹽素が〇・一位しかない。夫から燐素と云ふものが、是は〇・〇八%ほかございませぬ。其他硝黃などは〇・〇六位で、後は幾ら讀んで見ましても、金屬で大して多いものはない。ニツケルの如きは、ズツト絡の方の〇・〇〇五一と云ふ小量であり、それから先にはもう金屬で、量の數字で表はせる程の物は無いのであります。卽ち金、銀、銅、鉛などと云ふものは、分析表の中には入れる事が出來ないのであります。さうして見ますと、此地球外皮を構成して居る所の金屬の大部分は鐵、アルミニウムであると云ことが判ります。成る程吾々が今一個の石を取り、一塊の土を握つて見ましても、其中には殆んど鐵とアルミニウムの這入つて居らぬものはありませぬのみならず、植物や動物の組織の中にも、鐵と云ふものが這入つて居る。それから又地球の內部の熔けて居る中心は何であるかと云ふと、天文學者は之を鐵であると云ふ人もあります。それは地球の比重が八內外で、鐵の比重と同じと云ふ事からと、他の天體を鐵である物が多いからであります。卽ち天から隕ちて來る所の石、是が亦多くは鐵でありまして、今日まで地球上に隕ちて來た隕石で全く鐵から出來て居るものが凡そ二百噸に達して居ります。此二百噸と云ふのは我々が知つて居る石だけの計算で、吾々の知らない間に、鐵の石が、昔からどの位天から降つて居るか判りませぬが、兎に角この廣い宇宙間にも、鐵と云ふものが、餘程澤山存在して居るものであると云ことが判ります。併しながら此位擴がつて居る鐵でありますが、此鐵と云ふものが、自然鐵として發見することはない。金などは自然金として發見されるのでありますが、鐵と云ふものは、自然鐵の狀態にて發見すると云ふことは、殆ど隕石の外にありませぬ。何かに結付いて居る、主に酸素に結付いてゐる、酸素だけならば、未だ結構でありますが、多くは珪素とか、硫黃とか、色々な厄介物が雜つて、色々の化合物を爲して居るのであります。其色々な鐵の化合物の中で、鐵が今日吾々の技術に依つて、最も分離し易い所の化合狀態にあるものを、吾々は稱して鐵鑛と名づける。此鐵鑛と云ふものは、世界各國何れの國でも、最も多い鑛石でございまして、何處でも無い所はない。日本であらうが、朝鮮であらうが、或は又どんな小さな島でも必ず多少鐵鑛が無い所はないのでございます。其位分の多い鐵鑛であるから、若しも其他の條件

が許したならば、各國民が皆、自ら其國產の鑛石を精錬して、鐵を製することが出來るであらう。さうしたならば人間になくてはならぬ、大事な鐵と云ふものを、外國から供給を仰ぐなどと云ふ馬鹿なことをせぬであらうと思はれる。併しながら先程申した「其他の條件」が許さない、所謂「其他の條件」とは何かと申しますと、第一に此鐵鑛なるものは、澤山一箇所に集つて居らなければならぬ。卽ち或る採れるだけの數量に集つて居らなければならぬ。第二には地質的關係、卽ち鐵が其處に在る狀態が採掘に便利でなければならぬ。鐵鑛と云ふものは成るべく太陽の光で採掘の出來るやうな、極めて便利な狀態に在る事を希望するので、是が石炭を掘るやうに、或は銅山の仕事のやうに、小さな深い坑を掘つて掘出すやうなことでは、卸々高價に附いて物にならない。それから又第三には鐵鑛の在る場所に、鐵道が聯絡して居るとか、或は水運の便があるとか云ふことがなければならぬ。それから第四には精錬に必要である所の燃料卽ち石炭などゝ便利の聯絡がとれなくてはいけない。第五には市場卽ち需用地と、相當に近くあるか、或は便利な聯絡がなければならぬ。假令鐵鑛があつても阿弗利加內地では、製鐵所は出來ない、斯う云ふ風な關係が、總て具備して居らなければ、是は鐵鑛であつて鐵鑛でない。卽ち鑛物學者の鐵鑛と謂ふものは、多量にございましても、事業家の鐵鑛と謂ふものは世間に寔に少いのであります。さてその鐵鑛が見付かりましたところで、それを吾々の仕事に使ふと云ふことに付きまして、又卸々困難がある。卽ち實業家の所謂鐵鑛と云ふものが揃つた所で、夫から吾々が鐵を取るには色々の手數が掛るのであります。先づ一手近の例が、九州の八幡の製鐵所を見ても判る通り、鐵鑛を燃解して、一の相當なる事業に致しますには、第一に鐵山を買つて自分が持つと云ふ位のことをしなければならぬ。さもなければ永年に亘つて、不斷の供給を受けられるやうな契約を、他の鑛山としなければならぬ。その次には燃料も其通り、石炭を多量に使ふ仕事でありますから、石炭の供給と云ふものが非常に能く確保されねばならぬ。第三には假令石炭が如何に多くありましても、其成分が製鐵事業に最も能く適して居なければならぬ。その次には運搬すべき品物が多く、一萬噸の製品を得るに、六、七萬噸の原料や製品の、運搬を要するのでありますから、成るべくは自分で船舶を持たなければならぬと云ふ關係になります。次には鐵道を持たなければならぬ。本線との聯絡のみならず自分の工場內でも、相當の設備を要するのである。例へば八幡の製鐵所の如きは數十哩の鐵道を布設し、數十臺の機關車を動かして、堂々たる一の鐵道會社のやうなことを、自分の構內でやつて行くのである。その次には船着が便利でなければならぬ。例へば、一噸の價値も八圓位の鑛石であるから、少しでも安く陸揚しなければならぬ。その結果、自分で港灣

の設備をして、大きな機械で、一日に何百噸でも陸揚の出來るやうに、且極めて經費の掛からぬやうに、相當の大仕掛にする必要がある。其次にはコークスの副産物を造ると云ふやうな、鐵冶金學の範圍を超えた仕事をしなければならぬ。其次には耐火煉瓦を自分で造らなければならぬ。鐵事業には最も大切なる消耗品の一つでありますから、出來るならそれを自分で造らなければならぬ。其次にはスラツグセメントと云ふやうなものを、自分で造ることも必要になつてくる。熔鑛爐の仕事をすると、鐵の熔滓が自然に溜つて仕方がないものであるが、之を以てセメントを拵へると、可なり役に立つ良いセメントが出來る。夫で厄介物を轉じて一種の副産物にするのであります。其次には多量の電氣を使ひますから、自分で電力を起すか、或は近所の水力電氣から確かな供給を受けると云ふことにしなければならぬ。その次には機械の修繕工場を持たなければならぬ。八幡にても初め三千萬圓位の計畫の時分、既に二百萬圓以上を費した機械修繕工場を自分で持つて居つた。何れ日本などで、新たに製鐵所の建てられるやうな場所には、多くは近所に補助機械工場が缺乏して居るから、自分で或る程度までは、諸機械迄製造もし、又は壞はれたものを修繕すると云ふやうな、大仕掛の修繕工場が要るのであります。それから自分で水道を持たなければならぬ。鐵事業には、非常に水を使ひます。尤も場所によりましては、海水でも一部分の間に合ふのでありますが、兎に角、淡水も澤山使ひますから、水道を持たねばならぬ。その次には廣大な土地を持たねばならぬ。或は多數の使用人の住宅を造つてやらなければならぬ。その他病院を造るとか、學校を造るとか、或は共濟會、購買會と云やうな種々雜多の施設を要するのでございます。斯う云ふ風に原料の自給から製品の販賣まで一切の仕事を自分で遣つて、申さば縱に獨立の出來るやうにすると云ふことが、日本のやうな製鐵事業の幼稚な國では必要でありまして、之を私は「縱列式經營法」と申して居ります。製鐵事業が分業的に能く發達した外國では、原料の供給と云ふやうなことは、容易に他に依ることが出來ます。時には隨分際どい原料の供給を受けるのでありまして、例へば鋼塊を他の工場から供給されて、それを軌條に引延すだけの仕事をして居るものもあり、鋼片を購入して板を壓延する工場もある。それから自分で造つたものを自分で賣らないで、一種の販賣機關があつて、共同でそれを賣ると云ふやうなこともある。卽ち西獨逸の製鐵所は殆ど自分で自分の品物を賣らない。ジュツセルドルフ市に、スタールフエルバンドと云ふ共同販賣會社が組織されて居りまして、それが西獨逸各製鐵所の鐵を、大方纏めて賣つて居ると云ふやうな譯であります。其代り資本家が自分等の資本、自分等の營業を保護する爲に、或は同志連合して、或はトラスト、或はシンジケートを組織する。獨逸では

カルテルと申しますが、之を私は「橫列式經營法」と名づけます。國内の産業幼稚の内は、先づ縱列式の方で初めて、各自が自分で獨立的にやらなければならぬが、産業が追々進歩するに從つて、橫列式合同に移り行くことになるのであります。

そこで此位製造に面倒なものでありますが、鐵と云ふものが果して値段の好いものであるかと云ふと、金屬として馬鹿々々しく安いものであります。昨今鐵の値段が恐ろしく暴騰したと云つて世間では驚いて居りますが、之を一圓に勘定して見ると、僅に一厘にしかならない。金に比して五千分の一、銀に比して百分の一、銅に比して六分の一、鉛に比してさへも二分の一であります。さう云ふ鐵が今日世界にどの位出來るかと申しますと、合計八千萬噸も每年出來るやうになりました。外の金屬を殘らず合計した數量よりも、尙遙かに多い計りでなく、金額の合計に較べても亦大きいのであります。八千萬、と云ふ額は餘り大きいので、御想像が附き兼ねるかと思ひますから、之を解り易く譬へて見ますと、丁度百尺の徑ある鐵の圓柱を拵へたと思召すと、其圓柱の高さ四里で、八千萬噸になるのであります。それが每年一本づゝ出來る譯であります。それで百年前にはどうであつたかといふと、世界の鐵の産出額が合計僅に七十五萬噸であつた。それが今日は丁度百倍の八千萬噸になつたのであります。鐵は人間の必要物で、殊に文明開發の爲に無くてならぬ物であるから、斯樣に盛んになつたので、最近百年間の人間文明の驚くべき進歩も、全く製鐵事業が進歩した結果で、斯う云ふ風に大きくなつて見ますと、此製鐵事業と云ふものは人間の仕事として農業に比すべきもので、農業と相並んで人間の二大事業と云つて宜からうと思ひます。農業はどうしてもなければならぬ。吾々の生活上穀物がなければならぬ。農業は何時でも變らざる必要の事業でありますが、鐵業はどうであるかと申しますと、是も亦人間に必要である事決して農業に劣りませぬ。卽ち穀物は生きるに必要なもので、鐵は働くに必要なものであります。

第二　鐵とは何ぞや

鐵は一體何であるかと云ふに、是は八十何種と有る元素の一でありますが、この純粹の鐵、化學者の所謂鐵と云ふものは、非常に製造の六ケ敷いものであつて、且つ出來た所でグニヤ〳〵のもので到底役に立たない。人間が工業に使ふもの、卽ち吾々が鐵と稱して使つて居る品物は、必ずか多少の加合物を含んだ强靱なるものでありまして、卽ち炭素、珪素、滿俺など云ふやうな、種々雜多な物を含

んで居ります。其含んで居る物の種類と分量に依つて、工業上使用の目的に色々な變化がございます。從つて鐵にも何十種か譯の分らぬ程種類が出來るのであります。次に能く皆樣から、鐵と鋼の區別が、素人には解り惡くて困ると云ふ話を始終承はるのでありますが事門の人の方では左程困つてゐないのです。それは言葉でも、文章でも、前後の關係等に依つて考へると、鐵と呼ぶとも、鋼と呼ぶとも、夫は一體何物を意味するのであるかと云ふことは大概分ります。然し隨分種々雜多の名前を、書物にも又一般にも使つて居るので誠に混雜し易いことであります。大體之を學術的に分けますと「銑鐵」と「可鍛鐵」との二つに大別します。銑鐵は二以上の炭素を含んで居る物であつて、夫が又「黑ヅク」と「白ヅク」と、大體二つに分れて居り、「可鍛鐵」には四種ございまして、其四種を又製法に依つて二つに別けるのであります。卽ち鍊鐵爐で捏へたものを「鍊製鐵」、「鍊製鋼」と云ひ、鋼を熔かす爐で捏へましたものを「爐製鐵」、「爐製鋼」と云ひます。斯う云ふ風に、學術的にはちやんと別けてございますが、是が實際には、滅茶々々の名前を附けられて居ります。夫で略して云ふ時などには、どれも是も鐵とか鋼とか呼ぶのでありますから、隨分混雜する事になります。獨逸語での名稱は、餘り間違のないやうになつて居りますが、英語の方は頗る不都合で、夫を直譯して使つて居る日本語は矢張りいけないのであります。日本も英國も昔はこんなに亂脈ではなかつた。鐵と鋼と能く判つて居つた。卽ち「鋼と云ふものは鐵よりも堅いもので、燒を入れると一層堅くなつて、研げば刃物になる。是が鋼である」と斯う云ふ區別が附いて居つたのでありますが、それが段々技術が進歩して遂には鋼を造るのに、熔して造るやうなことになつて來た。熔して造るやうなことになりましても、初めの間は實際鋼しか、熔けなかつたのでありますから、熔して造つたものを、英國の樣に凡てスチール（日本譯語で鋼）と云つて居りましても、夫で實際には差支へは無かつたのであります。然るに技術が一層進歩致しまして、卽ち十九世紀の半ば過ぎに、ベスマーやマルチンなどの發明があつて、隨分軟い鐵でも人間が熔し得るやうになつた。其時に名前を變へれば宜かつたのだが、名前を變へずに軟いものでも矢張りスチールと云つたのが抑も間違の元である。元來軟かく出來たものなら、夫はスチールではない、鋼ではない、熔製鐵であるけれども、製造爐が同じだからスチールで通した。スチール卽ち鋼と云ふものを、學問上鐵から區別するのには、強さで云ふ時は、「平方粍に對して五十瓲以上の抗張力を持つて居るもの、又成分から云ふ時は、萬分の二十五以上の炭素を含んで居るもの」と云ふ區別があります。兎に角、十八世紀頃迄は、技術も未だ開けて居らぬため、鐵とか鋼とか申すものが、共製造の方法で區別された。例へば鍊鐵爐で造つたものは皆鐵

である、坩堝爐などで熔したものは皆鋼であるとして、實際にも夫で差支はなかつたが、段々人間の知慧が進んで變つた物を同じ方法で造り、又は同じ物を變つた爐で造るやうになつた爲に、色々名前が混亂してしまつたのであります。今日俗用の鐵と云ふ字には三つの別々な意味がある。卽ち他の金屬に對して云ふときと、銑鐵を略して云ふ時と、それから鋼に對して、軟かい鐵を指す場合とである。例へば何々製鐵所など云ふ時は、是は銅も造らなければ、鉛も造らないで鐵を造る、鐵の類なら銑鐵でも、鋼鐵でも、何でも造る工場であると云ふので、鐵を他の金屬から區別した言葉である。夫から英語で、Iron and Steel Works（鐵及鋼及鋼工場）など云ふ時の鐵は、銑鐵の意味である。何々製鋼所など云ふ時の鋼の意味は、是は銑鐵を造る熔鑛爐は無くともスチールファーネス卽ち製鋼爐を持つて居ると云ふ意味である。其品物が堅いの軟いのと云ふことを論ずるのではない。又熔製鐵、熔製鋼など云ふ時の鐵は、軟かな鐵を指すことになるのであります。其外學術上に、色々區別した名稱もあり、又商買人の用ゆる俗稱などには、隨分と解釋に骨の折れるのがある。要するに鐵の區分名稱等は、將來何人にも簡單に了解出來る樣に一定して行きたいのであります。

第三　鐵と歷史

それから鐵の歷史と云ふことに就て、御話をいたしますが、鐵は遠く有史以前の發見である。卽ち最初石器時代、其次が青銅時代、それに次で來たのが、鐵器時代であらうと思ひます。そこで今日では、まだ鐵器時代の最中でありますが、先程申しました通り、鐵に代る品物は一寸無いのでありますから、或は今後永久に鐵器時代かも知れないのであります。アルミニウムと云ふのが、吾々の地球上に鐵よりも少し餘計あると云ふことを申しましたが、此アルミニウムと云ふものは、どうも鐵に代る程の形力がない。鐵に代る程の便利もない、鐵に比すると工業用としては、寔に範圍の狹い用途しかなくて、そして、冶金學上から云ひますと、非常に製煉上の困難がある。鐵以上に困難があるのであります。次に誰が鐵を發見したかと云ふことは、寔に古いことであるが爲、吾々の先祖は鐵の發見當時の事は皆忘れてしまつて、神樣が鐵を發見したと云つて居る。希臘では何の某と云ふ神樣が鐵の發見者である。羅馬では誰れ、埃及では誰れと、各國にあります。日本にもあります。總て鐵を使ふことを人間が覺えましたのは、果して、或る人が鐵鑛より製煉する事を發明したのが元であるか、或は天から落ちて來た隕石を用ゐたのが、始めであるか分りませぬ。それで製鐵事業の歷史はどうである

かと云ひますと、十七世紀までは殆ど鐵を造ると云ふことが、大した工業と申す程に、なつて居りませぬのでありますが、十八世紀に至りまして、木炭を盛に使ふ様になつて、所謂木炭製鐵の隆盛を極めた時代となりました。十九世紀に至つて、今度は石炭を用ゐることが始りました。石炭を用ゆるため木炭よりも一層餘計に都合よく鐵が出來る様になりました。さうして十九世紀にはゼームスワツトが蒸汽機關を發明したとか、或はステブンソンが鐵道を發明したとか云ふ大きな發明が出來て、鐵を造る方の助けともなり、又鐵を需要する方の大きな道が開けました。製鐵界自身に於てもベツセマー又はジーメンスの製鐵法の大發明などがありまして、昔の人の熔かすことの出來なかつた鋼や鐵を、極めて輕便に熔することが出來ると云ふ様になつた。夫が爲に、製鐵事業は器械力を應用して、大規模に經營する事が出來る様になり、非常なる進歩を致しました。それから二十世紀に至りまして、遂に農業と並んで人間の二大事業となつたのでございます。

石炭を使ひ始めたのは蘇格蘭であります。蘇格蘭の石炭はその儘鐵石と一緒に熔かして鐵を造ることが出來るので、他國のやうに「コークスにする必要がない。そこでドン〳〵大きな熔鑛爐を拵へて、盛んに今日でも、石炭の儘鐵を熔かして居ります。コークスの不便なる日本から見ると、寔に羨しい譯である。さうして石炭の量が餘計要るかと云ふと、餘り餘計要らない、銑鐵一噸に對して二噸半位しか要らない。さうして熔鑛爐の上から出て來る瓦斯は、副産物を採ることが出來るのであります。熔鑛爐の側らに副産物を造る工場を備へて、銑鐵と同時に副産物を造る設備が蘇格蘭では出來て居ります。蘇格蘭の發明に連れて、獨逸或は英蘭で眞似して見ましたが獨逸その他の石炭を、其儘熔鑛爐に入れると、爐の中で塊つてしまつて、熔鑛爐が仕事にならぬ。それがため一旦之を焚いてコークスにしてから、鑛石を燃す事に使つて見ました所が非常に旨く行く、初めは困るのでコークスにしたのでありますが、其困るのが却つて幸福になつて、コークスでやつた方が、生の石炭を用ゆるよりも、却つて優れた成績を得ましたから、それで、亞米利加とか、獨逸とか、今日世界の最も鐵を多く造ります國は、何れも蘇格蘭のやうに生で使はずに、コークスにして使ふ様になりまして、石炭時代と、コークス時代と云ふものが、此鐵の歴史の方から申すと在るのでございます。さて今度は何の時代になるか、段々吾々の待つて居る所のコークス用の石炭も無くなつてしまふ。殊に日本の如きは初からコークス用の石炭と云ふものが、寔に少いので、一部支那から持つて來て補充しなければならぬ。伊太利の如きも矢張り英吉利から石炭を取つてコークスを造り、さうして熔鑛爐をやつて居るやうな始

末であります。亞米利加や獨逸は、隨分大きなコークス用石炭の山を持つて居りますが、是等も必ずやある年限の先には、何世紀かの先には、必ず使ひ盡される性質のものに違ひない。盡きないまでも、採掘が困難になつて安くは使へぬことになるであらう。さうして見ればこのコークス時代に次いで起るべきものは、將來何であらうか、コークス炭の天惠を享くることの薄かりし我日本などは、殊更に是が一大問題であります。人間が永久に使はなければならぬ鐵に配する永久の燃料の無いと云ふことは、寔に困つたことである。地球は隨分多くの鐵の原料を含んで居りますから、鐵鑛としては、將來隨分長く供給されるものと見られますけれども、燃料としてはどうであらうかと云ふことは、吾々の最も苦心致して居る所であります。然るに近頃電氣製鐵法が始まりました。今までのところでは、石炭が安いから電氣で鐵を造ると云ふことは、或る特殊の場合の外は、普通のコークス作業と競爭することは、隨分困難の事であります。併しながら絶對に出來ないのではない、技術上出來ないのでなくて、相場の爲に出來ぬのでありますから、若しも今日のやうに、石炭の値段が高うございましたら、電氣も無論石炭も競爭が出來るのであります。一寸私の計算に依りますと、一キロワット時間が七厘九毛と云ふ電氣を使つて拵へた銑鐵と、一噸十圓の石炭を以て拵へた銑鐵と、製造費が略相等しくなります。今日のやうに石炭の値段が非常に上りまして、一噸十圓どころではない二十圓も致します。斯うなれば最早電氣製鐵の方が、餘程安く上る。石炭一噸二十圓で出來たコークス銑鐵は、丁度電氣一キロワット一錢五厘三毛で出來た電氣銑鐵と、製造費が略相同じと云ふ結果になります。それならば電氣の供給は幾らでもあるかと申しますと、幸に日本などには可なりある。即ち今日迄の調査に依るも、約五百萬キロワット位あるやうであります。若し假に吾々が、此電氣熔爐のために百萬キロワットの水力電氣を製鐵に使ふことが出來るとしたならば、どの位鐵が出來るかと申しますと、一キロワットの電氣が一箇年に、少くとも三噸の鐵を造ることが出來ますから、百萬キロワットなら一箇年に三百萬噸の銑鐵が出來るのであります。併し河川の水力も段々使つて行けば、何百年の後には矢張り不足を告げるかも知れないがその時はどうするかと云ふと、夫は問題であります。何人も想像だけは爲し得ることですが、世界文明が今日の有樣で進んで參りましたならば、今世紀の內か遲くも次の二十一世紀中位には、必ず人間が發明するのであらふと思はるゝ大きな電氣の本源が茲に一つある夫は卽ち海水の運動であります。海水の運動は、將來極めて有望なる水力電氣の本源で、今後吾々の子孫が、是非共研究をしなければならぬものだらうと思ひます。

斯様にコークス時代の次には、電氣時代が來るものと感じますけれども、追々と鐵冶金學の進歩に連れてコークスも電氣も使はないで、さうして、鑛石から直に鐵を採る事も行はれて參りませう。それも私共が只今研究致して居ります仕事で、目下日本鋼管會社で、相當な大規模の試驗工場を建築中でありますが、夫が成功致しますれば、是亦將來最も有力なる製鐵法の一つと申しても宜しいのであります。斯う云ふ風に詰り冶金學の進歩に依つて、コークスに代用さるべき他の燃料を使ふか、又は大に燃料を節約する、他の製鐵法を發明すると云ふ事も必然に起つて參ることゝ思ひます。

第四　鐵と國との關係

初めに鐵と人間との關係を御話申しましたが、今度は鐵と國との關係と云ふことに就て申したいと思ひます。諺に「鐵を多く造る國は富み、鐵を多く使ふ國は強し」と申しますが、今玆に世界列強の產鐵額を調べて見ますと、先づ一番鐵を餘計造るのは亞米利加であつて、是は一箇年三千萬噸、次は獨逸で二千萬噸、英吉利が一千二百萬噸、白耳義が二百萬噸、伊太利は數十萬噸で話にならぬ。是は戰爭前の產出額を大略數字で表したものであります。

是等列強は、產鐵國であると同時に、鐵消費國でありますから、此鐵の年產額を以て、各國富強の標準と見る事が出來ます。今度の戰爭に從事した聯合軍と、同盟軍とを對照して見ると、一方は獨逸、墺太利の鐵の生產額が二千二百萬噸、他方の聯合軍即ち佛蘭西、英吉利、白耳義、露西亞の生產額が矢張二千二百萬噸、さうすると聯合軍も同盟軍も、每年二千二百萬噸內外の鐵の生產力を以て、相對して居るのでありますから、富強の程度は寔に相匹敵して居るのであります。それでありますから、此戰爭の勝負が、此樣に長引くのでもあらうかと思はれますが、我日本は鐵消費國でありまして、未だ鐵の產出國にはならぬ。兵は强くも國は富まぬのであります。吾々は一日も早く、日本を產鐵國となして富力を增進せなければならぬ。英雄奈破翁が西曆千八百年三月四日に、佛蘭西人に示した訓令の一節に、「金と鐵とは、平和を命令するに必要なり」と云ふことがありました。そこで斯樣に奈破翁が佛蘭西に出て來て、從來佛蘭西が受けて居た四圍の壓迫を排除して、名譽赫々たる佛蘭西と云ふ强國を立てる事の出來ましたのは、少からず鐵の力である。卽ち佛蘭西で掘つて、佛蘭西で熔して、佛蘭西で加工した所の武器、卽ち鐵の力であると云ふことを知つた。同時に此鐵を造ると云ふこと

に付ては、全く佛蘭西の科學の働きであると云ふことは、炯眼なる奈破翁は勿論、國民一般が感知する所となりまして、それが爲に奈破翁は事定るや否や、博物學者、理化學者、又は數學者などを非常に重く用ひて、內閣其他の樞要の地位に据えたのであります。其時文部大臣になつたフールクロアと云ふ人は、斯く云ふことを云つた、「凡そ一國の製鐵事業の進歩如何は、其國に於ける總ての文明に對する、最も正確なる尺度である」と、文部大臣としてさう云ふことまでも云つて居る。さうして此人は、奈破翁の命を受けて、從來の佛蘭西の教育法を總て改正致しまして、理化學及數學を以て、國民教育の基礎とすることに致しました。さうして奈破翁は、自ら一の數學者を以て任じた。冶金學、殊に鐵冶金學などゝ云ふものは、殆ど國民一般に最も愛好さるる學問となりました。奈破翁は又冶金學者のハツセン・フラツツに命じて、鐵冶金學の教科書さへ書かせた。是は鐵冶金學の最も古い教科書の一つと認められて居ります。兎も角も奈破翁の名譽心に對しましては、實に此武器卽ち鐵と云ふものが必要であつて、それが爲に奈破翁は獨逸を征服致しましても第一着にライン河の左岸を取つて、彼の邊に榮えて居つた所の（今日でもありますが）ゾーリンゲンとか、或はレムシヤイト地方の製鐵所は、非常に能く之を愛護した。それのみならず奈破翁は、熱心に製鐵事業の改良に骨を折り、木炭の代りに、石炭で鐵を造るなどゝ云ふことを、盛んに研究させたのであります。さう云ふ風に骨を折りましたが、何さま間斷なき戰爭のために、間斷なく壯丁が徵發されたり致しますので、どうも佛國の製鐵事業といふものを、充分に振はす遑がないのでありました。其中に英吉利の方では、奈破翁の壓迫を受けながらも、依然として其隆盛なる機械工業に據り、又豐富なる鐵鑛や石炭を利用して、盛に製鐵事業を經營致しましたから、それでなくても、既に始から歐羅巴の鐵の先生でありました所の英吉利は、是に於てか殆ど戰爭に疲れた大陸諸國が到底對抗が出來ぬ程の技術及事業の發達を來したのであります。それで英吉利は、富も益々出來るやうになり、所謂金力に於ても優勢となつて、到頭最後の一戰に於て、奈破翁を打破つて、奈破翁の口から出でた、「金と鐵は平和を命令するに必要なものである」と云ふ言葉の、極めて正確なることを、奈破翁に代つて英吉利が之を證明したと云ふ次第であります。今回の戰爭に於きましても、勝敗を決する爲に、武器の外に尙必要なものは、金力であると致しましたら、金力に於て何程か優つて居る所の聯合國軍の方が、勝利の見込の多いことも想像されるのでありますが、尙晩近に至りまして、更に米國と云ふ非常なる金力が、聯合軍に加つたのでありますから、今日は最早勝敗の決は頗る明かであります。

そこで今世界製鐵國と云はるゝ、各國百年以來の鐵の製造高を一寸御參考に供します。我日本は今日製鐵力が少くて、殆ど是等外國の製鐵事業に比しては御話にならぬ。百年前などは、未だ工業的の物になつて居らない、漸く今世紀に生れた樣なものである。吾々はスタートが遲かつた。實に遲く仕事を始めたから、さう云ふ風な譯になつたので、もう少し經つと、日本も今日の勢を以て急進する結果、必ず其國勢に相當するだけの或る順位を占めることが出來るだらうと思ひます。

今世界各製鐵國の過去百年以前の、製鐵力の進歩を調べて見ますと次の表になります。尤も之は西曆千八百七年と千八百五十七年と千九百七年と、五十年毎に於ける產額を、噸にて示したものであります。

	一八〇七年	一八五七年	一九〇七年
米國	二四、〇〇〇噸	二六、一九四、〇〇〇噸	七九八、一五七噸
獨逸	三五、〇〇〇	一三、〇四六、〇〇〇	五三六、〇六八
英國	二五〇、〇〇〇	一〇、〇八三、〇〇〇	二、六五九、四四七
佛國	二二五、〇〇〇	三、五八九、〇〇〇	六九二、三三二
露國	八四、〇〇〇	二、八一七、〇〇〇	二一三、九三〇
墺國	五〇、〇〇〇	一、八二四、〇〇〇	三一七、八〇二
瑞典	七五、〇〇〇	五六三、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇

今五十年毎の各國製鐵力の進歩の率を比較すると、左の如くであります。

	最初の五十年間に	次の五十年間に
米國	三三・二倍	二六・七倍
獨逸	一五・三倍	二四・三倍
英國	一四・六倍	二・七倍
佛國	四・四倍	三・六倍

露國		二・五倍
墺國		六・三倍
瑞典		二・六倍

此表に依ると、亞米利加では百年前は、僅かに二萬四千噸しか出來なかつた。獨逸は三萬五千噸、英吉利はどうかと云ふと、此時既に技術に於ては、世界の先生であつたが、それでも二十五萬噸に過ぎなかつた。佛蘭西は先程申しました通り、一生懸命に英吉利に拮抗して、之を凌駕せんとし、奈破翁が歐洲大陸と英國との貿易を禁止したりなどして、色々骨を折つたが、夫でも佛蘭西は廿二萬五千噸しか造れない、其廿二萬五千噸も、當時佛領であつた白耳義全部と、獨逸の一部とが、加算されてあるのであります。それから露西亞は八萬四千噸、墺太利は五萬噸、瑞典は七萬五千噸でございます。そして其進歩の程度は、前に申した通り、初めの五十年間に、亞米利加の製造力が三十三倍に進歩致しました次の五十年間に於ては二十六倍になつた。獨逸は初めの五十年間に十五倍、次の五十年間に二十四倍になつた。英吉利はどうかと云ふと、初めの五十年間には僅かに二倍餘にしかならぬ。日本は今日五十萬噸の鐵を造るのでございますから、若し此中亞米利加或は獨逸の比例で進歩して參りますれば、必ずや近き將來に於て、日本自國の需要が立派に充されるのみならず、世界に於ける製鐵順位も、國勢に相當した位置が占められるでありませうから、必ずしも悲觀すべきものでなからうと思ふのであります。

露國		一三・一倍
墺國		五・七倍
瑞典		二・八倍

第五　戰後の豫想

其次には、世間一般に皆心配して居る所の、戰後日本に來るべき外國品の壓迫等等に就ての豫想を申上げます。此戰爭の後で外國の鐵が日本の幼稚なる製鐵事業に對してどんな壓迫を加へるであらうか。之に對して二つの相反した說があります。樂觀說と悲觀說。其樂觀說の方は、決して心配に及ばぬ、戰爭の爲に各國共非常に勞力が不足して居る、又重稅を負擔しなければならぬ、又壞れた所の船艦や、軍器の補充新造に、大に自國の鐵を使はなければならぬ。斯う云ふことの爲に、却々安い鐵を東洋の市場まで持出して來るだけの力はないのである。卽ち製造力も鈍くなつて居れば、一方には自分の國に使ふ量も殖えて來るから、態々日本などに對して、放賣商

策を執る氣遣ひはあるまいと云ふのである。又悲觀説は、是と全く反對で、「さうではない、今度の戰爭後　歐羅巴の各種工業の恢復と云ふことが、必ず迅速なるべきのみならず、國家經濟上、外國から金貨を取つて來ると云ふことが必要であるからして、歐洲諸國の製品は、滔々としてダンピングの勢を以て、殺到して來るであらう。獨逸の如きは、平和の當時にさへ、盛にダンピングをやつて居たのであるから、戰後には一層其商策を應用し來るであらう」と云ふのであります。斯う云ふ風に、二つの議論があつて、どちらにも相當の道理があるから、私の考では眞理は其中央にありて、兩説を平均した中間が眞理であらうと思ふ。卽ち戰爭の前と變つたことが無い　見て置けば、大きな誤はないと思ひます。歐洲の交戰國は是で良いとして、玆に亞米利加のこと　付きましては、それと違つてどうも悲觀説が強い。「亞米利加と云ふ國が、此戰爭中の鐵の產出を增したことは一千萬噸である。戰爭前には、一年三千萬噸の製造力であつたけれども、戰爭中に四千萬噸になつたから、一千萬噸は、戰爭の爲に增して居る。それは勿論自國の需要が殖へたのでありますが、直接間接歐羅巴戰爭に、鐵の供給をした高が甚だ多いやうである。若し戰爭が熄んだならば、其餘つた鐵を日本へ持つて來はしないか」と、斯う云ふことは、寔に誰しも心配して居る所であつて是は却々一大事である。何で一大事であるかと云ふと、若し其一千萬噸の產額の一部分たりとも、日本にダンピングの勢を以、値段に構はず侵入して來るやうなことがございますれば、日本の幼稚なる製鐵事業は粉碎されてしまふ。何故かと云ふと、日本の製鐵事業を粉碎するには、五十萬噸乃至百萬噸の品物を持つて來て、ダンピングをやりさへすれば、譯はないのである。亞米利加が日本の製鐵事業を潰さうと思つて、儲けないで損をする覺悟で持つて來たならば、忽ち日本の製鐵と云ふものは、粉碎されてしまふであらう。尤も米國のやうな國の常でありますから、獨り今回のみ特別に心配するにも當らない事と思ふが、兎も角も亞米利加市場の勢は、一の大きな浪の樣なものである。大きな浪を眞向に被ることは、日本市場のやうな小船に取つては大變である。又例へば亞米利加の市場は、天空中の雷みたやうなものである。天空には何百萬ボルトの電氣があつて雷をなしてゐる。其雷が眞向に落ちて來ては大變、何物でも破壞するけれども、此海の浪を防ぐには、矢張防波堤を高くして、之を防ぐ事が出來る。又雷の如きも、避雷針を以て容易に防ぐ法があるのであるから、吾々は此亞米利加のダンピングに對して、如何なる避雷針、或は防波堤を造つたら宜いかと云ふことを、一つ考へて見たいと思ふのである。

第六　製鐵事業保護斷行說

斯くの如き抵抗すべからざる大勢力に對して、吾々の製鐵事業を維持し、又是を維持する計りでなく、益々發達せしむるには、どうしたら宜いか、今日は之を考へなければならぬ時である。否今日は其方法の實行に着手しなければならぬ最終の時期であらうと思ふ。そんなら今、どう云ふ策があるかと申しますと、色々其策はありませうが、詮じ詰めて申しますと、私の考では保護政策、殊に輸入稅に依つての保護政策と云ふものが一番有力であらうと思ふ。輸入稅を高くして、それを以て產業を保護するのが、果して國家の爲に利益であるか、或は損であるかと云うて、アダムスミスやフリードリツヒリストの議論を今更繰返した所が仕方がありませぬ。私は只各國の鐵の歷史に徵して、判斷をして見たいと思ふのであります。先づ自由貿易論者の崇拜してゐる所の英吉利はどうか、英吉利は今日こそ自由貿易で濟まして居るが、昔は却々甚だしい保護國であつて、夫で以て人先に基礎を造り、愈々輸出專門の時代となつてから、自由貿易策を取つたのである。されば製鐵事業などは、十七世紀或は十八世紀に亙つて盛なる保護をしたものである。卽ち鐵の輸入稅の如きは、市價の十割乃至二十割を課した。さうして銑鐵などに對しては、千八百二十三年まで、全く輸入禁止をしたのである。其結果英吉利の製鐵事業といふものは、非常な勢を以て進步し、千八百二十三年頃は、五十萬噸の年產額になつた。世界各國の生產額を合計しても、英吉利に較べて、殆ど相匹敵する位であつた。其位になりましてから、千八百二十五年に大藏大臣ハスキスソンが、到頭一大決心を以て大に鐵の輸入稅を輕減する事を主張して、遂に約六分の一に遞減した。其理由は「英吉利の機械工業が高い鐵を使つてはどうも機械の輸出に困る。バーミンガスムやシエツフヒールドが、外國から機械の註文を受けても、內地の原料鐵材が高いから、出來た機械も高く付いて輸出が出來ない。徒らに他外國の競爭者の爲に、漁夫の利を占められるから英吉利の損である。鐵を安くした方が宜い。それには鐵輸入稅を輕減して、機械の輸出を奬勵する方が宜い」と云ふので、此ハスキスソンの議論が本となりまして、英吉利では遂に前申した通り保護稅を輕減し、漸次進んで總ての他の物と同樣に、鐵も全く無稅になつたのであります。保護稅輕減の當年卽ち千八百二十五年の如きは、流石の英吉利の製鐵事業も、非常なる恐慌を來して大騷ぎをしました。併し元々當時世界に比類なき迄進步し、且輸出を本位とする迄發達した英吉利の製鐵事業のことでありますから、此輸入稅を幾ら下げても、夫等の影響を受けて、著し

く惡くもならない。矢張り世界一般の進歩に連れて、年と共に相當に盛になつて來た。夫のみならず機械工業の如きは、今度は鐵の輸入稅が撤廢されて、原料が安くなつたから、一層盛に製品の輸出を見るやうになつた。鐵と並んで英吉利の二大工業であつた紡績事業も亦同樣に、自由貿易にしても益隆盛となつた。これに於てか是等の現象を以て、皆自由貿易の結果なるかの如く誤り認める者もあつた。此英吉利の有樣が、非常に他國の政治家の心を動かしました。誰も彼も、みな自由貿易策を取らうと云ふ考を起した。然るに各國とも、英吉利だけの發達をせぬのに、無理に模倣したのであるから散々に失敗して、皆之を止めてしまつた。英國の大藏大臣ハスキスンが千八百二十五年稅の改正の時に、「英國で固く此主義を守つて變らざれば、遂には他國もこれに倣ふであらふ」と豫言したのでありますが、是は全くはづれました。さて此英吉利が、自由貿易になりました後に、製鐵事業の成績はどうであるかと云ふと、各國は英吉利の眞似をすることを止してしまつて、反對に英吉利の品物に遠慮なく稅を課して、國の事業を奬勵致しました。元々外國輸出を目當にして居る所の、英吉利のことでありますから、段々と生產額を減さなければならぬ樣になり、次第にお得意は減り、自分の品物が門前拂を喰ふ事は、殖えるばかりになつて、年々の製造額の增加も、是迄の樣に行かなくなり、詰り各國と比較的に云ふと、漸々と退歩の姿となつた。其結果製鐵界に於ける、英吉利の世界的第一位と云ふものが、千八百九十年に第二位に下り、千九百三年には第三位に下つた。今日では尙世界第三位であるが、而も第二位との開きは非常で、其二分の一の力しかないのであります。卽ち獨逸の二千萬噸に對して、英吉利の生產額は一千二百萬噸しかないことになつたのであります。若しも吾々が今日英吉利の新しい工場へ參りまして、詳しく內容を視察したならば、必ず其處には重要の場所に獨逸の機械、或は亞米利加の機械が、運轉して居るを認める事でありませう。日本では到る所の工場に、まだ外國の機械が動いて居りますが、英吉利の如き古來機械工業の本場と云はれた國に於て、獨逸の機械などが最も好い位地を占めて働く樣になつたのは、寔に今昔の感に堪へぬ事であります。是は獨りチヤンバーレンのみならず、多くの英吉利人の慷慨して居る所であらうと思ひます。佛蘭西はどうかと云ひますと、佛蘭西は奈破翁戰爭の後に、矢張り鐵に對して自由貿易をやつて見ましたが、滅茶々々に失敗して、到頭保護政策を取つて、危ふく頽廢を免れ今日でも續いて居ります。獨逸はどうかと云ふと、是亦面白い歷史を持つて居る。是は千八百七十年の普佛戰爭に勝ちました結果、大分自惚れまして、最早世界恐るるに足らぬと云ふ風の感を持ちました一つのものでございませうが、大に自由貿易宗が盛になつて、それに對抗する說がありましたが、遂に自由

貿易派の方が勝を占めました。千八百七十三年から七十五年までの間、殆ど間斷なく帝國議會の紛擾の本になつたのでありますが、到頭千八百七十三年には、銑鐵の輸入稅を廢止し、千八百七十七年には、鐵全體の輸入稅を撤廢することになつた。ところが其結果ほどうであるかと云ふと、獨逸の製鐵事業は殆ど根底から覆ることになり、實に慘憺たる有樣を呈し、獨逸の鐵の歷史に於ける、最大の厄年とも云はれる程の哀れな狀態となつた。其情けない有樣は、時の皇帝ウヰルヘルム第一世の千八百七十六年六月二十一日附で、ビスマークに宛てた手紙を見ても其一班を知る事が出來ます。卽ち當時皇帝は田舍へ行幸されて居つて、其處から手紙をビスマークにやつたのでありますが、之を讀んで見ますると、實に其時の自由貿易の結果製鐵事業の蒙れる慘憺たる有樣が想像されるのであります。夫から議會に對するビスマークの活動となり、到頭千八百七十九年でございましたか、全く自由貿易政策を打破つて、斷然鐵の輸入稅を回復致しました結果、獨逸製鐵事業は翻然として甦生したのみならず、益々隆盛になつて、以來今日迄少しも其主義を改めない。卽ちフリードリツヒ・リストが、獨逸人を戒めた言葉にも、「自由貿易も宜いけれども、自國產業の狀態が、其時期に達しない先に、自由貿易などをしてはいけない。卽ち政治家の最後目的は、自由貿易でも宜からうけれども、自國產業の基である」と云うたことがあるが、其時期が果して何時であるか、各國共皆夫々進歩して行くのであるから、此安心の出來る時機といふものが、最早永久に達しないかも知れぬ。一度ひどく懲りた獨逸は少くとも此位の考を持つて居る樣であります。兎に角今日でも、獨逸の製鐵所では、記念祭とか祝賀會とか云ふ場合などには、必ずウヰルヘルム第一世の像と、ビスマークの像とを正堵に飾つて、此二人を恰も製鐵事業の救世主であるかの如く崇拜して居ります。又鐵に關する人の傳を讀み、或は工場の記念祭に讀み上げる祭文の如きものを見ましても、必ず千八百七十七年の製鐵事業の厄年の事が言及されて居る位でありまして、之を見ても如何に彼の時分の自由貿易主義が、獨逸の製鐵事業に對して、危害を加へたかと云ふことが解るのであります。偖ビスマークなどの盡力に依りまして、千八百七十九年に、輸入稅を恢復した結果は著しいものである。當時獨逸の鐵產額二百萬噸に對して、英吉利は六百萬噸、卽ち英吉利の產額は獨逸の三倍であつたのが、鐵の保護稅を實行して、僅々十五年後には、獨逸の年產額が八百萬噸になり、英吉利も矢張り八百萬噸にはなりましたが、少し獨逸の方が多くなつた。英吉利も此十五年中には、六百萬噸より八百萬噸になつて居るのでありますけれども、それにも拘らず、獨逸は英吉利を凌駕してしまつたのは、全く政治家の施設宜しきを得た結果であらうと思ひます。それ

から英吉利の屬國でも、加奈陀は保護政策である。加奈陀は面白い國でありまして、千九百年卽ち明治三十三年には、僅かに八萬八千噸の鐵しか出來なかつたのであります。此八萬八千噸と云ふ數は、其時分の日本と、餘り大した差はないところが輸入稅を以て、大に製鐵事業を保護する外に、尙鐵一噸に對して、何弗かの産額奬勵金を與へました結果、僅か十年の後には七十五萬噸になつた。夫で今日はどうかと云ふと、目下自國の需要高が、百萬噸でありますが、其九割五分を自分で造つて居る。日本では未だ自國の需用の半分も自給出來ないで困つて居るのに、加奈陀は僅かの年月の間に、到頭鐵の獨立を爲したのである。元來此國は日本と同じく山嶽起伏して鐵道の便が悪い。卽ち鐵道と鑛石の聯絡が旨く附かない、それがため鑛石は自分の國にあるけれども、之を他國から輸入しなければならぬと云ふやうなこともある。さうして商賣上の關係はどうかと云ふと、直ぐ隣が合衆國であるから、夫から間斷なき壓迫を受けざるを得ない。さう云ふ不便の國で製鐵事業をやつて居つてさうして僅々十五年の間に、鐵の獨立をしたと云ふことは、全く鐵の政策宜しきを得たが爲で、我日本としては大に學ぶべき點であらうと思ふのであります。

北米合衆國はどうであるかと云ふと、是は千八百六十一年の戰爭の結果、國庫の窮乏を救ふと云ふ目的と、一は又從來英吉利製鐵の壓迫に苦んだ關係から、輸入稅を取り始めましたが、其結果段々に自國の生産力が強くなつて、ピツツブルグの如き、却々盛な製鐵になつた。其後稅を撤廢しようといふ說もありましたが、ピツツブルグ地方の製鐵事業者の反抗が甚だしいので、遂に其儘の保護稅に致して置きましたのが、却つて合衆國の今日あるを致した原因であります。亞米利加では最早稅はどうしても下げない。勿論大統領が代る毎に、多少の變化はありましたが、保護政策と云ふことを常に努めて居るのみならず、亞米利加の人々は、何か自國の一事業を物にしなければならぬと云ふときには、臨時的にも突飛な保護をする。例へばブリキ板製造の如き、從來英國獨得の技術と稱せられた工業でも、之を米國で初め樣と云ふときには、臨時的臨時的と云つても最早二十年も續くのでありますが、恐ろしい輸入禁止的の稅を課して、自國の幼稚なる事業を保護すると云ふやうな政策を取つたのであります。

最後に日本はどうであつたか。日本は今や每年百三十萬噸の鐵材を必要とするに拘らず、自分の製品は僅に五十萬噸、卽ち四割弱の製造力しかない。一體日本の製鐵事業は、大部分の器械を外國より輸入するのであるから、外國に比して、工場の設備に五割乃至十割の高價を支拂はねばならぬ。又作業上の費用としても、第一、石炭が日本程高價な國は他の製鐵國にはないのである。コークスの如き

先づ米國の二倍位の高價に當るのである。唯日本では勞銀が安いと云ふことはあれど、職工の體力は劣等で、技術も不熟練であるから能率から云ふ時には、安い勞銀とは云ひ難いのであります。又運搬費なども、汽車汽船共頗る不廉で、同じ日本國內の運搬費が、歐洲又は米國から、日本に來る運賃程かゝる場合も珍しくない。其外諸材料の費用でも、資金の利子でも、何でもかでも日本の方が高價である。其處に持つて來て、日本の鐵市場は如何であるかと云ふと、是は外國品のための市場と云てもよい位である。そして其外國品は何れも多少輸出奬勵の爲、特殊原價、特別運賃等の保護を受けて居る品物で、ダンピングの性質を持つたものが多いのであるから、日本の市場は取りも直さず、外國品の餘物の捌き場所である。斯う云ふ困難の位置にある日本でありながら、國家は大した保護をして居らぬ。否日本では是迄製鐵事業と云ふものが、國家の生存上何程必要のものか、又是が保護すべき價値のあるものかと云ふ事さへ、一部の識者の外には餘り解つて居らなかつた。漸く昨今になつて、多少解つて參りました樣でありますが、夫でも尙染料や紡績の少し大きい一箇の營業である位の觀念しか持つて居らない樣であります。製鐵事業と云ふものか、國家の軍備及經濟上、極めて重要なる國家事業であると云ふ觀念さへ起らば、之を守り立てゝ相當の發達をさせると云ふが爲には、國民一般が多少の犧牲を拂はなければならぬ位の事は諒解される譯である。多年外國の鐵を輸入して、儲けて來た輸入商人共が、輸入稅引上げに反對するなどは、唾棄すべきであるが、需要者としての心配に對しては、相當に耳を傾けなければなりませぬ。併し元來我國には、鐵の輸入稅と云ふものはあつても、これは保護としては寔に微々たるものである。獨逸や亞米利加に劣り、露西亞、墺地利、伊太利等に比べては、お話にならぬ程の貧弱なるものであります。私の覺えて居る所では、今日の稅率を定めたのは、たしか十年も前のことであると思ひますが、其時分に政府ではもう少し有力なる保護をする考らしかつた。然るに造船家の方から、大變反對が出まして、さうして其反對が强かつた爲に、到頭骨抜のもの、なつてしまつた。十年後の今日に至り、鐵材がなくて、此千載一遇の好機に、充分な活動が出來ないと云ふ、情けない有樣を最も强く感じて居るのは誰であるかと云ふと、矢張り造船家である。「保護稅の結果、內地の鐵が高くなる。さうすると造船費が高くなるから、外國の造船と競爭が出來ない。需用者は皆外國に註文してしまふ。詰り稅を上げた爲に、製鐵業者は利するかも知れぬが、造船業は犧牲になつて、他國の競爭者に、漁夫の利を占められる」斯う云ふことが第一の理由であつた。第二の理由と致しましては、「旣に造船奬勵金を與へて奬勵をして居る、其奬勵をやる一方に於て、高